

# 高島 A 遺跡発掘調査報告書

-鏡宮高島土地区画整理事業に伴う発掘調査-

2006年3月

富山県射水市教育委員会









調査区遠景（南から富山湾を望む）



調査区周辺（昭和22年米軍撮影）



特殊石製品（弥生時代後期）

# 高島A遺跡発掘調査報告書

-鏡宮高島土地区画整理事業に伴う発掘調査-

2006年3月

富山県射水市教育委員会





## 序

富山県射水市は、平成 17 年 11 月 1 日に新湊市、射水郡小杉町、大門町、大島町、下村の 1 市 3 町 1 村が合併して誕生しました。

射水市は、北は富山湾に面し、南に射水丘陵、中央部には肥沃な射水平野が広がっています。当市は、古くから日本海交易や放生津潟に流れ込む河川を利用した水運の交通網が発達し、旧石器時代以来の遺跡が密集する射水丘陵、万葉集にも詠まれた三島野や奈呉の浦、古代の神事を今に伝える下村の加茂神社、中世期に越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた放生津など、市内各所に先人たちの足跡が残されています。

先人が残した歴史・文化は、現代に生きる私たちが未来へ引き継ぐべき貴重な財産であります。市内に残る数々の遺跡も、地域に根ざした歴史を語り継いでくれる重要な郷土資料といえるでしょう。

本報告書は、射水市（旧新湊市）鏡宮地区で計画されている土地区画整理事業に先立ち実施した、高島 A 遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

調査では、弥生時代中期から古墳時代前期を中心とする多くの遺構や土器・石器などが見つかりました。また、全国的にも類例の無い特殊な形状をした石製品の出土により多くの注目を集め、現地説明会の開催とあわせて、地域の方々に遺跡の存在や重要性を直接伝えることができたことが、本調査の大きな成果であったと思われれます。

今後、これらの遺跡を保護し、また、地域の歴史を広く一般に紹介することに本報告書が多少なりとも役立つことができれば幸いに存じます。

最後に現地調査から報告書作成まで多大なご協力・ご助言を賜った関係諸氏に感謝申し上げますとともに、今後とも文化財保護に変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 18 年 3 月

射水市教育委員会

教育長 竹内伸一



## 例 言

1. 本書は平成 17 年度に実施した富山県射水市（旧新湊市）鏡宮地内に所在する、高島 A 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、射水市鏡宮地区で計画された土地区画整理事業に先立ち、新湊市鏡宮高島土地区画整理組合の委託を受け、新湊市教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査事務局は平成 17 年 10 月 31 日までは新湊市教育委員会生涯学習課に置き、生涯学習課長 川口泰子が調査事務を総括した。同年 11 月 1 日以降は、調査事務を射水市教育委員会文化課が引き継ぎ、文化課長 川口武治が調査事務を総括した。
4. 現地発掘調査及び出土品整理から調査報告書刊行に至る室内作業は新湊市教育委員会（平成 17 年 11 月 1 日より射水市教育委員会）の監理の下、株式会社エイ・テックが実施した。
5. 調査期間、面積及び調査担当者は以下の通りである。

【現地発掘調査】平成 17 年 5 月 17 日～9 月 12 日 3,212m<sup>2</sup>

調査担当者 新湊市教育委員会生涯学習課 文化財保護主事 金三津英則  
株式会社エイ・テック 堀井泰樹 藤井秀明 後藤浩之

【整理・報告書作成】平成 17 年 5 月 17 日～平成 18 年 3 月 31 日

担当者 新湊市教育委員会生涯学習課 文化財保護主事 金三津英則（平成 17 年 11 月 1 日より射水市教育委員会文化課 学芸員）  
株式会社エイ・テック 堀井泰樹

6. 本書の執筆はⅡ-1 を射水市教育委員会 金三津英則が、Ⅴをパリノ・サーヴェイ株式会社が、それ以外の執筆・編集は堀井が担当した。
7. 調査の実施から本書作成にあたっては、下記の方々から貴重な御教示・御指導をいただいた。記して謝意を表したい。（敬称略 五十音順）  
赤羽久忠 泉 拓良 上野 章 岡村秀典 岡本淳一郎 岸本雅敏 久々忠義 小山浩和 清水正明  
高梨清志 高橋浩二 高橋章司 田村昌宏 藤田慎一 松井 潔 水野正好 山本正敏
8. 遺物写真の内、特殊石製品は西大寺フォト（杉本和樹氏）に撮影を委託し、その成果品を使用した。
9. 現地発掘調査及び整理作業参加者は、下記の通りである。（敬称略）

【現地発掘調査】網谷勲二 伊藤信敬 井波睦紀 岩本勝国 海老伸悦 甲 輝夫 久郷平行

佐伯 登 近岡清三 永田 修 西野 彰 野口紀之 八田 弘 松木明男  
湊 敏之 宮田 豊 林恵美子 藤本百合子 松井コウ 山本田鶴子




（以上、（社）新湊市シルバー人材センター）

澤田雅志 宮脇 満（以上、金沢学院大学学生）

【整理作業】相佐啓子 上田恵子 三島幸代 渡辺悦子

10. 出土遺物、記録図面等は射水市教育委員会が一括して保存・公開している。

## 凡 例

1. 本書の挿図に用いた方位は座標北（真北は東偏 2' 58"）、標高基準は海拔高である。
2. 本書の土層及び出土遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2004年版）に準拠している。
3. 遺物実測図中のスクリーントーンの張り込みは次の通り表現した。なお、須恵器の断面は黒塗りとした。  
スス-  赤彩-  黒斑- 
4. 実測図・観察表・写真図版の遺物番号はそれぞれ対応している。

## 本文目次

巻頭カラー写真

序

例言

### I 遺跡の環境

1. 地理的環境…………… 1
2. 歴史的環境…………… 2

### II 調査に至る経緯及び経過

1. 調査の経緯…………… 4
2. 現地調査の経過…………… 5

### III 調査の方法及び基本層序

1. 調査の方法…………… 6
2. 基本層序…………… 8

### IV 調査の結果

1. 検出遺構…………… 9
2. 出土遺物…………… 46
3. その他の出土遺物…………… 89
4. 特殊石製品…………… 91

### V 理化学分析…………… 97

### VI 考察…………… 120

### 写真図版…………… 125

## 挿図目次

第 1 図	射水市位置図	1
第 2 図	高島 A 遺跡周辺遺跡位置図	3
第 3 図	高島 A 遺跡範囲	4
第 4 図	各調査区位置図	7
第 5 図	層位模式図	8
第 6 図	C-1 区遺構検出状況及び SP14 平面・層位図	10
第 7 図	C-1 区遺構層位図	11
第 8 図	C-1 区土器出土状況図	12
第 9 図	C-2 区遺構検出状況図	15
第 10 図	C-2 区 SK01 検出状況及び遺構層位図	15
第 11 図	C-2 区南側土器出土状況及び遺構層位図	17
第 12 図	C-3 区遺構検出状況及び遺構層位図	20
第 13 図	D-1・2 区遺構検出状況及び谷部層位図	21
第 14 図	D-1 区遺構検出状況及び遺構層位図	23
第 15 図	D-2 区遺構検出状況及び遺構層位図	25
第 16 図	E-1 区遺構検出状況及び遺構層位図	31
第 17 図	E-2 区遺構検出状況及び遺構層位図	34
第 18 図	E-3 区遺構検出状況図	36
第 19 図	E-3 区遺構層位図	37
第 20 図	E-4 区遺構検出状況図	39
第 21 図	E-4 区遺構層位図	39
第 22 図	E-4 区 SD01 土器出土状況図	39
第 23 図	出土遺物実測図 (土器 1～8 : C-1 区 土器溜まり SD06)	54
第 24 図	出土遺物実測図 (土器 9～24 : C-1 区 SD07 ① SD07 ②)	55
第 25 図	出土遺物実測図 (土器 25～34 : C-1 区 SD07 ② SX03 包含層 : C-2 区 土器溜まり SD02 SD03 SD05 SD08)	56
第 26 図	出土遺物実測図 (土器 35～43 : C-2 区 SD08)	57
第 27 図	出土遺物実測図 (土器 44～55 : C-2 区 SD08 SK01)	58
第 28 図	出土遺物実測図 (土器 56～65 : C-2 区 SK01 SK05)	59
第 29 図	出土遺物実測図 (土器 66～70 : C-2 区 SK05)	60
第 30 図	出土遺物実測図 (土器 71～81 : C-2 区 SP04 : D-1 区 土器溜まり)	61
第 31 図	出土遺物実測図 (土器 82～91 : D-1 区 土器溜まり SD14・SD15SX01)	62
第 32 図	出土遺物実測図 (土器 92～107 : D-1 区 包含層)	63
第 33 図	出土遺物実測図 (土器 108～121 : D-1 区 谷)	64
第 34 図	出土遺物実測図 (土器 122～127 : D-1 区 谷 128～132 : D-2 区 SD01SD02)	65
第 35 図	出土遺物実測図 (土器 133～137 : D-2 区 SK02 SK04 SK06 SK07)	66
第 36 図	出土遺物実測図 (土器 138～148 : D-2 区 SK08 SK11 SP43 SP58 SK01)	67
第 37 図	出土遺物実測図 (土器 149～153 : D-2 区 SX01)	68
第 38 図	出土遺物実測図 (土器 154～159 : D-2 区 包含層 : E-1 区 SD01)	69

第 39 図	出土遺物実測図 (土器 160 ~ 180 : E-1 区 SD02) .....	70
第 40 図	出土遺物実測図 (土器 181 ~ 192 : E-1 区 SD02 SD05 SD08 SD09 SD11 SK02) .....	71
第 41 図	出土遺物実測図 (土器 193 ~ 206 : E-1 区 包含層) .....	72
第 42 図	出土遺物実測図 (土器 207 ~ 227 : E-1 区 包含層) .....	73
第 43 図	出土遺物実測図 (土器 228 ~ 239 : E-2 区 SD01 SD02 SD03 SK01) .....	74
第 44 図	出土遺物実測図 (土器 240 ~ 256 : E-2 区 SK02 SP03 包含層) .....	75
第 45 図	出土遺物実測図 (土器 257 ~ 276 : E-3 区 SD06 SD07 SD10 SD11 SD12 SD13 包含層) ..	76
第 46 図	出土遺物実測図 (土器 277 ~ 286 : E-3 区 SK01 包含層) .....	77
第 47 図	出土遺物実測図 (土器 287 ~ 299 : E-4 区 SD01) .....	78
第 48 図	出土遺物実測図 (土器 300 ~ 307 : E-4 区 SD01) .....	79
第 49 図	出土遺物実測図 (土器 308 ~ 312 : E-4 区 SD01) .....	80
第 50 図	出土遺物実測図 (土器 313 ~ 327 : E-4 区 SD01) .....	81
第 51 図	出土遺物実測図 (土器 328 ~ 338 : E-4 区 SD01 SD02 SK02) .....	82
第 52 図	石製品 .....	93
第 53 図	石製品・土製品・木製品・古銭 .....	94
第 54 図	特殊石製品 .....	95
第 55 図	ボーリング調査地点 .....	106
第 56 図	ボーリング調査地点の柱状図 .....	107
第 57 図	主要珪藻化石群集の層位分布 .....	108
第 58 図	花粉化石群集層位分布 .....	112
第 59 図	植物珪酸体群集と珪化組織片の産状 .....	114
図版 1	ボーリング試料 .....	116
図版 2	珪藻化石・種実遺体 .....	117
図版 3	花粉化石 .....	118
図版 4	植物珪酸体 .....	119

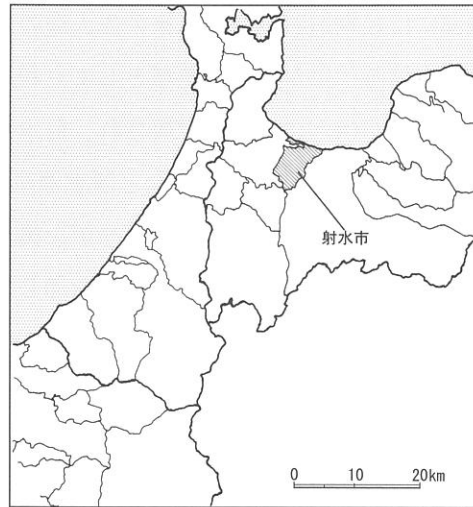
## 表目次

表 1.	検出遺構一覧 .....	41
表 2.	土器観察表 .....	83
表 3.	珪藻分析結果 .....	109
表 4.	珪藻化石の生態性区分および環境指標群 .....	111
表 5.	花粉分析・イネ属同定結果 .....	113
表 6.	植物珪酸体分析結果 .....	115
表 7.	微細物分析結果 .....	115

# I 遺跡の環境

## 1. 地理的環境

富山県射水市の市域は東西約 11km, 南北約 15km で総面積 109.18 km<sup>2</sup>である。東西を県下の二大都市である富山市、高岡市と隣接し、交通の便に恵まれていることから、高度経済成長期以降、住宅団地の造成が頻繁に行われ、ベッドタウン化が進んでいる。現在の人口は約 95,000 人余りである。市域内には、日本海側最大級の特定重要港湾である伏木富山港（新湊地区）や北陸自動車道小杉インターチェンジがあり、双方を南北に結ぶ国道 472 号と東西を走る国道 8 号が交差している。



第 1 図 射水市位置図

南に北アルプス、北に日本海を望む富山県は、北アルプスに端を発する黒部川・片貝川・早月川・常願寺川・神通川・庄川・小矢部川などの 7 大河川やこれらの支流によって

扇状地や自然堤防、潟埋積平野を形成し、広義の富山平野を成している。これに対し、常願寺川と神通川により形成された狭義の富山平野が県内のほぼ中央に位置し、その西側に射水平野が位置する。

射水平野は、西に庄川の新扇状地、東に神通川の旧扇状地が重なることで形成された、複合扇状地性三角州沖積平野で、標高は約 0 ～ 5m と県内で最も標高の低い地域である。最終氷期であった約 2 万年前には現在の海面よりも 100m 以上も海面が低下し、海岸汀線が現在よりもかなり沖合へ後退したが、気温の上昇に伴い海面が上昇してくる約 7 千年前のいわゆる縄文海進時には、かなり内陸まで海面が広がり、大きな遠浅の湾が形成された。縄文時代中期以降、気候の寒冷化による海水面の低下や、南部に位置する射水丘陵からの土砂の堆積が進展することで、海岸近くの放生津潟（現・富山新港）を残し周辺に広大な低湿地を形成した。標高差を殆ど持たない放生津潟周辺では河川の流れが滞留し沼沢池を形成、湿原の植物が枯れて泥炭が堆積し、平野部が開けていくことになる。乾田化の進んだ現在ではかつての面影を留めていないが、数十年前までは縦横に水路が走る水郷地帯として知られていた。

このような自然環境の中で、先人達は生活の場を求めながら集落を形成していった。平均気温が比較的高い縄文時代の前期から中期にかけての遺跡は射水平野においては殆どみられず、南太閤山 I 遺跡のように射水丘陵上に形成するか、蜷ヶ森貝塚のように呉羽山丘陵の麓付近に

形成していく。気候の寒冷化に伴い、海水面が低下していく縄文時代晩期から弥生時代になると平野部にかけて集落を形成していった。

## 2. 歴史的環境

地形的に丘陵部（射水丘陵）と平野部（射水平野）に分けられる射水市には、459箇所の遺跡が密集している。丘陵部には古墳や生産遺跡が、平野部には集落遺跡が多く確認されている。

丘陵部には後期旧石器時代以来の先人達の足跡が残されている。縄文時代には生活の場として、弥生から古墳時代にかけては墓域としても利用され、多数の方形周溝墓や古墳が確認されている。古代には高岡市伏木に国府が設置され、射水丘陵は国指定史跡の小杉丸山遺跡をはじめ、小杉流通業務団地内遺跡・上野南遺跡など須恵器窯跡 39 遺跡、製鉄遺跡 147 遺跡を数える県内最大規模の生産遺跡集中地帯となった。窯や炉を築くのに適した地形、粘土・薪・水等の原料供給源の豊富に加え、生産地と消費地が河川を通じて直結するなど、立地条件に恵まれていたためと考えられる。

平野部では、沖積平野の形成に伴い人々が生活圏を広めていった。水稻耕作が本格化した弥生時代以降には遺跡数が飛躍的に増加し、作道遺跡・北高木遺跡・二口油免遺跡・小杉伊勢領遺跡などの集落遺跡が、河川に近い自然堤防や微高地上に分布する。古代以降には、丘陵部と平野部及び日本海とを河川が結び、交通・輸送の要衝として多くの集落が営まれていたと考えられる。中世には現在の富山新港付近の放生津が発展し、守護所が設置されるなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

高島A遺跡は、国道8号北側に所在する弥生から古墳時代を中心とする遺跡である。遺跡範囲はかつての西神楽川の流路に沿うような形で、南北約750m、東西約170mにわたって広がっている。一帯の標高は約1.5～1.8mである。遺跡の存在は、昭和43年当時のほ場整備等の工事掘削土中に散布していた土器片等を、新湊市立南部中学校（当時）の生徒達が採集したことから認知されるようになった。採集した遺物は昭和46年に『古代遺跡中露出遺物拾得物内訳明細書』として小冊子にまとめられている。この小冊子には、ほぼ現在の高島A遺跡・津幡江遺跡・高木荒畑遺跡・松木中鹿遺跡・朴木A遺跡の範囲に当たる場所で採集された遺物が紹介されている。高島A遺跡は、「高島南部地先弥生遺跡」として紹介されており、「弥生中期貝殻施文土器片」が多数含まれていると報告されている。

過去の発掘調査では、国道472号南部中学校口交差点西側の平成9年度調査区で、弥生時代中期後半の円形周溝状遺構や方形周溝墓が確認されており、また、国道472号を挟んで東隣する作道遺跡では、平成16年度の発掘調査で、弥生時代中期中葉を中心とする集落跡を確認し、栗林式土器の搬入品を含む多数の弥生土器が出土した。

高島A遺跡の周辺は、弥生・古墳時代の遺跡が多く所在する地域である。東隣する作道遺跡をはじめ、西側には昭和40年の西部主幹排水路工事の際に弥生土器を主体とする土器やシジミ貝



が多数露出していたと伝えられている朴木A遺跡、南側には縄文時代後期から近世までの複合遺跡である高木・荒畑遺跡、北側の高岡市牧野地内には弥生から中世までの複合遺跡として著名な中曽根遺跡などがある。これらの遺跡はいずれもかつての神楽川流域に相当する地域であり、流域では上流に位置する北高木遺跡、小林遺跡、三ヶ・本開発遺跡、布目沢北・東遺跡、二口油免遺跡等の多くの遺跡が所在し、この神楽川が遺跡の立地に重要な役割を果たしていたことが指摘されている。



第2図 高島A遺跡周辺遺跡位置図 (S=1/50,000)

1. 高島A遺跡
2. 作道遺跡
3. 鏡宮遺跡
4. 鏡宮北遺跡
5. 朴木A遺跡
6. 中曽根館遺跡
7. 久々湊遺跡
8. 野村遺跡
9. 津幡江西遺跡
10. 今井西遺跡
11. 南浦遺跡
12. 高木・荒畑遺跡
13. 沖塚原東B遺跡
14. 朴木C遺跡
15. 中曽根遺跡
16. 東津幡江遺跡
17. 津幡江遺跡
18. 今井遺跡
19. 今井南遺跡
20. 今井二島遺跡
21. 小林遺跡
22. 北高木遺跡
23. 沖塚原東A遺跡
24. 沖塚原遺跡
25. 松木中鹿遺跡
26. 松木大ノ田遺跡
27. 松木遺跡
28. 中曽根西遺跡

## Ⅱ 調査に至る経緯及び経過

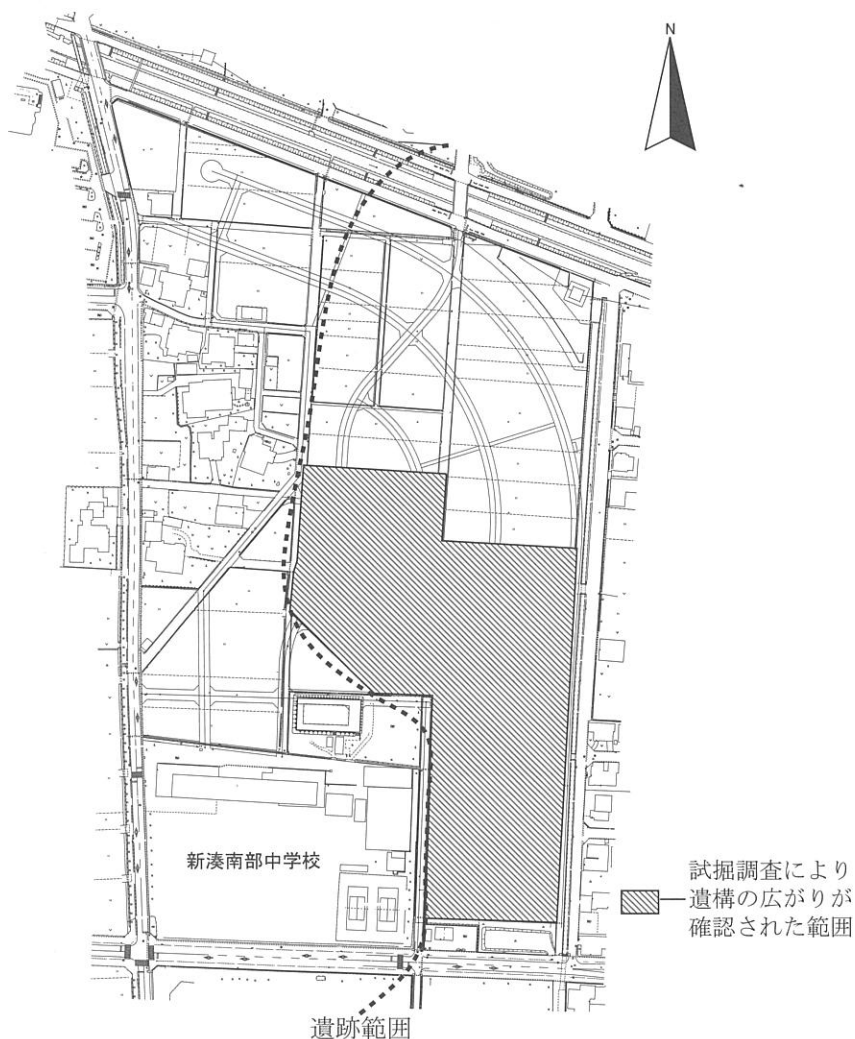
### 1. 調査の経緯

平成13年、新湊市（現射水市）鏡宮地区における土地区画整理事業計画の照会を受けた。新湊市（現射水市）教育委員会では、事業計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である高島A遺跡が所在し、また西側にも朴木A遺跡が隣接しているため、事業計画地全域を対象とした試掘調査が必要である旨回答し、市教育委員会が主体となって国庫補助金・県費補助金の交付を受けて実施することとなった。

試掘調査は、平成14年10月3日から11月7日にかけて事業計画地全域の54,120㎡を対象に実施した。調査の結果、事業計画地の南半分のおよそ25,000㎡を中心に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構の広がりを確認し、多数の弥生土器、土師器等が出土した。試掘調査の詳細については『市内遺跡試掘調査報告書』（新湊市教育委員会2003）を参照されたい。

上記の試掘調査の結果、埋蔵文化財の所在が確認された部分での工事施工に際して、その保護措置が必要となったため、新湊市鏡宮高島土地区画整理組合設立準備委員会と市教育委員会とで事業計画についての協議を重ねた。

協議の結果、計画道路部分及び宅地等、地下の埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合には、埋蔵文化財の記録保存を目的とする事前の発



第3図 高島A遺跡範囲

掘調査を実施することと、組合事業として行う計画道路部分の約 3,200 m<sup>2</sup>について、事業者である土地区画整理組合が発掘調査費用を負担すること。発掘調査は市教育委員会の監理の下、株式会社エイ・テックが実施すること。宅地部分は造成盛土のみに留めることで合意に達した。

平成 17 年 5 月 7 日に新湊市（現射水市）鏡宮高島土地区画整理組合が設立され、同日付で文化財保護法第 93 条の 2 第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の届出及び組合・市教育委員会・株式会社エイ・テックの三者間で埋蔵文化財の取り扱い及び調査方法に関する協定を締結し、5 月 17 日より現地における発掘調査を開始した。（金三津）

## 2. 現地調査の経過

現地における発掘調査経過は以下の通りである。

平成 17 年

- |           |                                                                 |
|-----------|-----------------------------------------------------------------|
| 5 月 17 日  | 作業初日。C-1 区より表土掘削後、遺構検出作業に入る。                                    |
| 5 月 20 日  | C-2 区、D-1 区表土掘削。C-2 区において土器が面的な広がりをもせつつあることから、重機掘削を中断し、人力掘削に変更。 |
| 6 月 1 日   | 土壌サンプル採取のため、パリノ・サーヴェイ株式会社辻本氏来跡。<br>C-3 区遺構掘削終了後、空中写真撮影。         |
| 6 月 18 日  | D-1 区部分的に空中写真撮影。                                                |
| 6 月 22 日  | D-1 区谷部の肩より特殊石製品出土。出土状況写真及び出土地点記録後取り上げ。                         |
| 6 月 27 日  | C-1・2 区、D-1 区空中写真撮影。                                            |
| 7 月 2～5 日 | C-1・2 区、D-1 区埋め戻し作業。                                            |
| 7 月 6 日   | D-2 区より表土掘削を開始。                                                 |
| 7 月 8 日   | E-4 区までの表土掘削をすべて終了。引き続き D 区及び E 区に分かれ作業に入る。                     |
| 7 月 22 日  | 土壌サンプル採取のため、パリノ・サーヴェイ株式会社千葉氏来跡。                                 |
| 8 月 5 日   | D-2 区遺構掘削終了。空中写真撮影後、埋め戻し作業。                                     |
| 8 月 11 日  | E-1 区空中写真撮影。                                                    |
| 9 月 4 日   | 午前 10 時より現地説明会。                                                 |
| 9 月 9 日   | E-2・3・4 区の空中写真撮影。                                               |
| 9 月 10 日  | 全ての現地作業終了。                                                      |
| 9 月 12 日  | 新湊市教育委員会完了検査。検査後、直ちに埋め戻し作業及び撤収作業。                               |
| 9 月 13 日  | 調査事務所撤収作業。                                                      |

### Ⅲ 調査の方法及び基本層序

#### 1. 調査の方法

調査区は、土地区画整理事業の工区に合わせ、C・D・Eの3区に大別し、調査区が分断されている場所や工程により細分した。

調査はC区よりバックホウを用いて表土掘削を行った。表土掘削後直ちに遺構検出作業を行い、作業終了後、検出状況の写真撮影、検出状況略図の作成後遺構掘削作業を行った。表土除去中に土器などが多量に出土した際には、直ちに重機を止め、人力により検出作業を行い取り上げ作業を行った。柱穴状遺構は半截、土坑状遺構は4分割を基本とし、溝状遺構はベルトを残し掘削を行った。土層確認後、それぞれ全掘し、写真撮影を行った。遺物の取り上げ方法については、包含層出土の遺物は順次グリッドごとに取り上げを行い、包含層掘削の際にある程度まとまって出土した土器に対しては、出土状況図を作成し、写真撮影後に番号を振り、取り上げを行った。C-2区において広範囲に出土した土器群に対しては、ラジコンヘリコプターを使用して写真撮影を行い、その後、1mごとの小グリッドを作成し、取り上げを行った。遺構内出土遺物については、出土状況写真を撮影後、図化し、それぞれ番号を振り取り上げを行った。脆弱化が激しく、取り上げが困難な遺物に関しては現地にて硬化処理を行い、土壌とともに取り上げ、整理室にて土壌を取り除き、接合作業を行った。

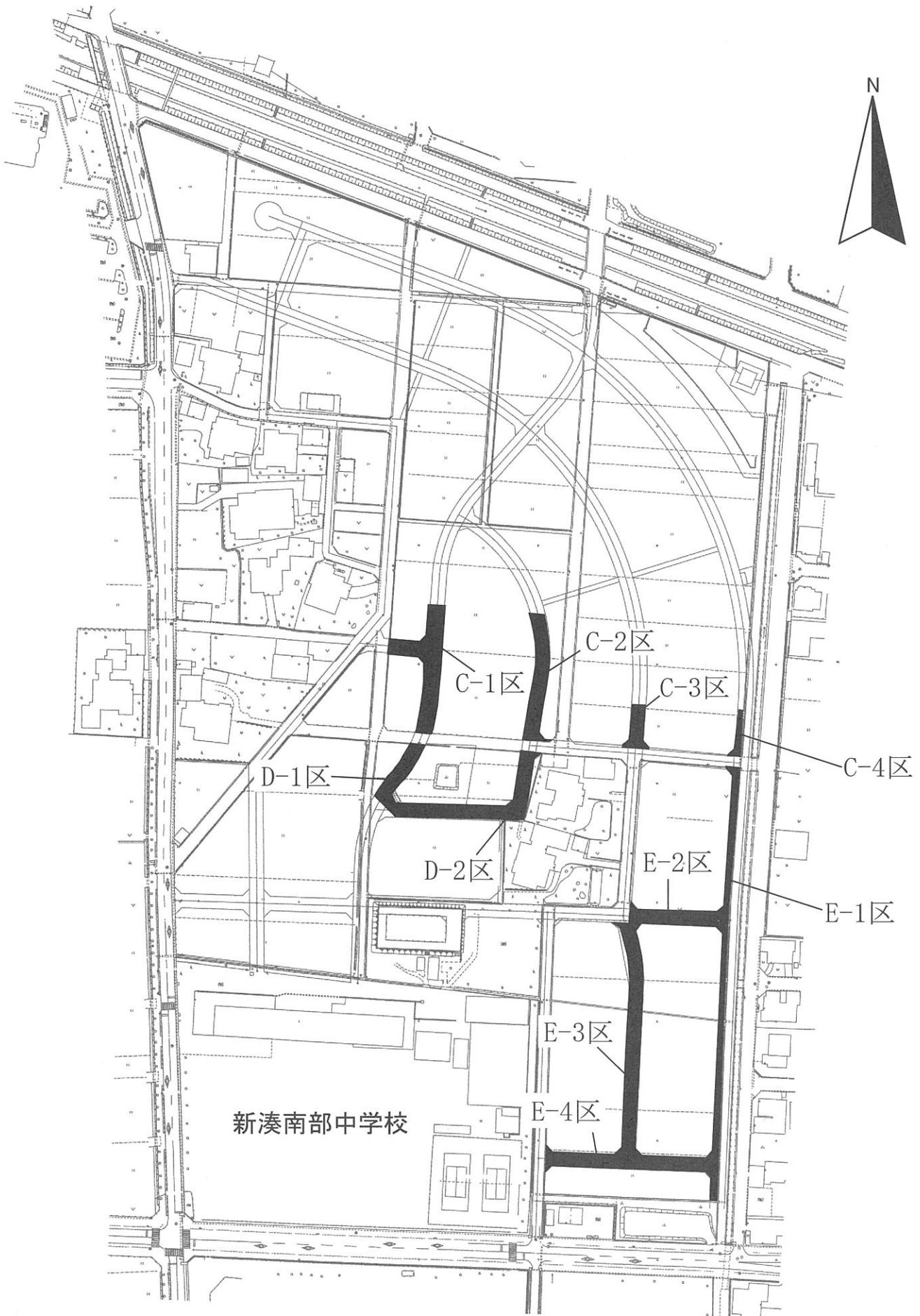
表土掘削と同時進行で、調査グリッドの設定を行った。各調査区がそれぞれ離れていること、また調査区の幅が狭いことから5mピッチで調査グリッドを設定した。公共座標値 X84125.000, Y-7420.000を原点とし、南北をX0～260、東西をY0～165とした。

遺構検出及び遺構掘削が終了した調査区より、順次遺構図作成のため、ラジコンヘリコプターにて空中写真撮影を行った。空中写真撮影は計6回を行い、その後図化作業を行った。

空中写真撮影終了後、市教育委員会の完了検査を受け、終了した調査区より順次埋め戻し作業を行った。

現地調査に目途がついた9月4日に現地説明会を行った。

出土した遺物は、現地にて出土地点などをラベルに記入後、整理室に持ち帰り、洗浄・硬化処理・注記作業などの諸作業を行った。



第4図 各調査区位置図

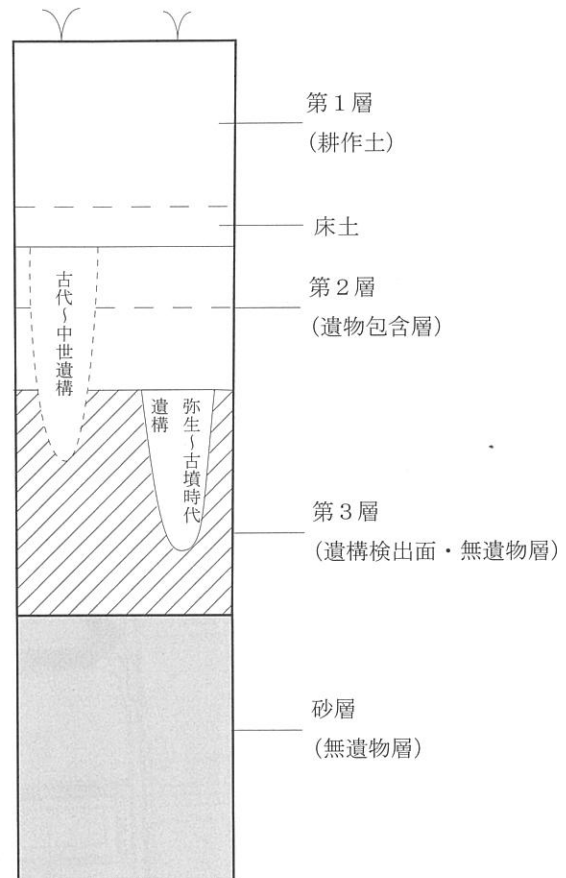
## 2. 基本層序

調査区の現況は水田・畑作地で、標高は約0.9～1.3mと標高差は少なく、基本土層は3層で形成されている。第1層は現在の水田耕作土で黒褐色粘土層で、遺物は弥生時代の土器から近世までの陶磁器類が出土した。第2層は遺物包含層の暗灰色粘土層であるが、若干の砂質を含んでいる。遺物は弥生時代後期から古墳時代前期が主体となって出土した。第3層は遺構検出面で、黄灰色粘土層、若干シルト質が混じる。

第2層の遺物包含層はほ場整備などにより削平されており、調査区全体において確認できる箇所と確認できない箇所がある。確認できる箇所においては、非常に薄く、出土する遺物は耕作などにより損壊を受けたために小片になって出土した。D-1・2区においては、土質はほぼ同じだが、砂質の混入割合などにより2分層できる。

第3層は射水平野一帯で確認されるグライ化土壌で調査地全域に広がる。土質は全域ほぼ同じだが、粘質の強弱及び砂質の含有量の差は確認できる。第3層も第2層と同様、ほ場整備などの際に削平を受けているものとみられる。C-1区で出土した第3層直上の遺物が損壊を受けていることから、この削平の状況を知ることができる。

第1層から第3層まで深度は約15～20cm程と浅い。その為、表土をはぎ取った段階で、すぐに遺構検出面の第3層が確認された。



第5図 層位模式図

## IV 調査の結果

### 1. 検出遺構

今回の発掘調査において検出した遺構は表1のとおりである。主な検出遺構は柱穴状遺構(SP)・土坑(SK)・井戸状遺構(SE)・溝状遺構(SD)である。性格が不明な遺構はSXと略称した。また、遺構に関係なく土器がまとまって出土した箇所は土器溜まり(PD)と略称し、一括遺物として取り上げた。遺構の名称については、調査時の混乱を避けるため、各調査区で完結させた。

なお、遺構の法量は検出面を基準に測定した数値である。

### C-1 区

#### 1) 柱穴状遺構

多数の柱穴状遺構が検出したが、大半が不整形で浅く、遺物はみられなかった。C-1区は表土から遺構検出面まで約0.2mと浅いことから、ほ場整備の際に削平されているものと考えられるが、SP13・14・15はしっかりとした柱穴状遺構となっている。調査区の幅が狭いためどのような広がりを見せるかは不明だが、SP13とSP15は大きさなどからセット関係になるものと考えられる。SP14では床面に比較的大きな石で構成された石組みを検出した。石組みを検出した柱穴状遺構はこのSP14のみである。SP13・14・15とも、時期比定できる遺物は出土しなかった。

#### 2) 土坑

検出した土坑は3基である。SK04では弥生土器と土師器が混在して出土したが、その他では時期比定できる遺物は出土しなかった。SK03は丁寧に掘削されており、掘り方が内湾するフラスコ状になっている。3基の関連性は明確にできなかった。

#### 3) 溝状遺構

##### ・SD01

東西に走る溝で、深度約0.1mと浅い。遺物は出土しなかった。

##### ・SD02 ①②

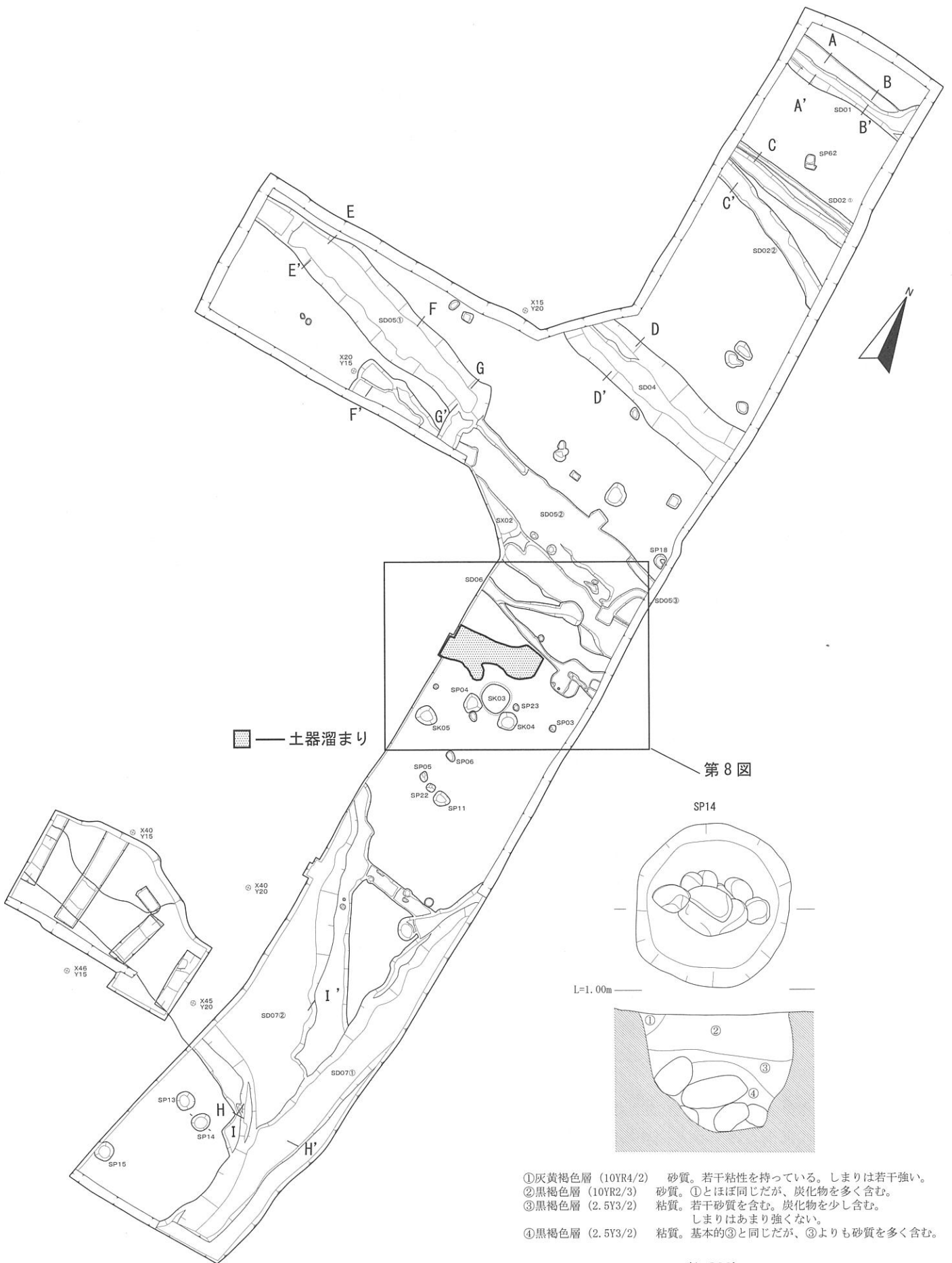
SD01と同様、東西に走る2股の溝で深度約0.1mと浅い。近世から近現代の陶磁器が出土した。

##### ・SD04

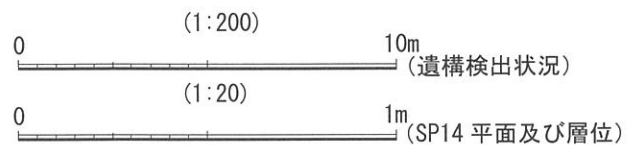
東西に走る溝で、深度約0.9m、V字型の断面を呈する。小片ではあるが、弥生時代後期から古墳時代前期とみられる高坏脚部等が出土した。

##### ・SD05 ①②③

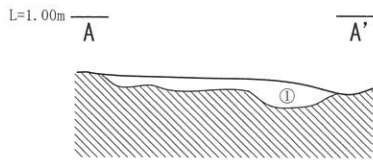
東西に走る溝である。検出段階では1本の溝とみられたが、掘削後複数の溝になったことから、3つに分類した。SD05②と③は深度約0.1mと浅い。東側に行くほど若干深くなる。遺物は弥生時代後期の甕口縁部や高坏の脚部が出土した。SD05①は西に行くに従って高低差約0.4mと急激に深くなっていき、一番深い箇所では約0.7mである。断面は逆台形を呈する。遺物は弥生時代後



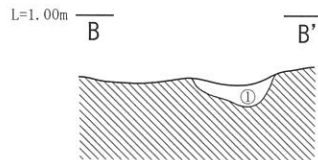
第6図 C-1区遺構検出状況及びSP14平面・層位図



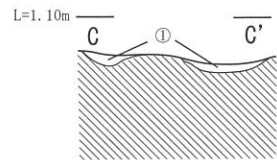




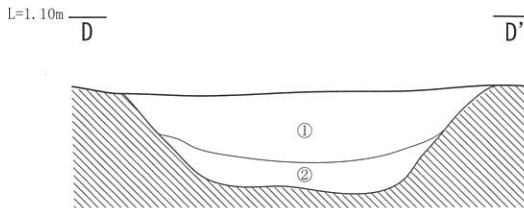
①黒褐色層(2.5Y3/2) シルト



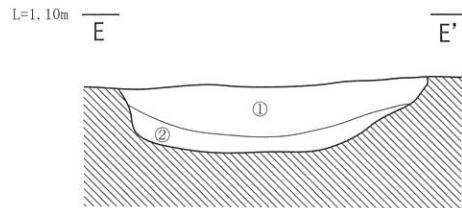
①灰オリーブ色層(5Y6/2) シルト



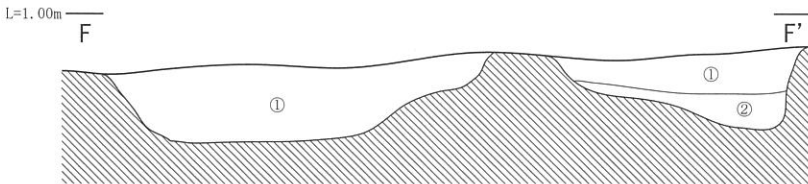
①黒褐色層(2.5Y3/2) 粘質。若干砂質をまじる。



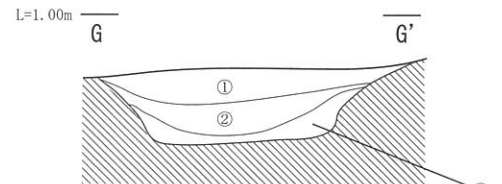
①黒褐色層(7.5YR3/2) 粘質。基本的に床土。しまり強く、粘質強い。  
②黒色層(7.5YR2/1) ①とほぼ同じ。



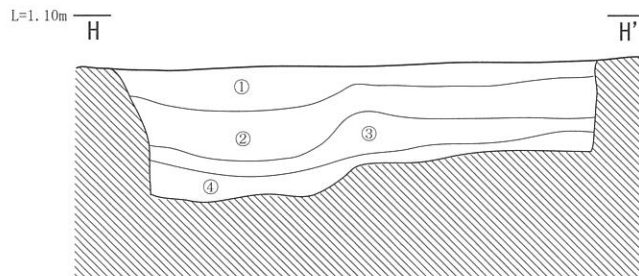
①黒褐色層(7.5YR3/2) 粘質。しまり強く、粘質強い。  
②褐灰色層(7.5YR4/1) 基本的に①と同じ。



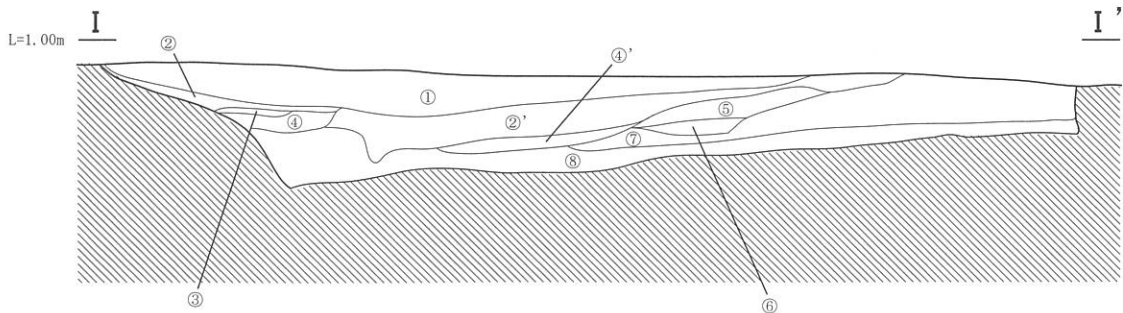
①黒褐色層(7.5YR3/2) 粘質。しまり強く、粘質強い。  
②褐灰色層(7.5YR4/1) 基本的に①と同じ。



①黒褐色層(7.5YR3/2) 粘質。しまり強く、粘質強い。  
②褐灰色層(7.5YR4/1) 基本的に①と同じ。  
③黒褐色層(10YR3/2) ブロック状に地山含む。粘質強し。



①黒褐色層(7.5YR3/2) 強粘質。砂質を若干含む。しまり強く炭化物を少し含む。基本的に耕土床土。  
②暗褐色層(7.5YR3/3) 弱粘質。①とほぼ同じだが、しまりは①ほど強くない。  
③黒色層(10YR2/1) 粘質。砂質はほとんどなし。グライ化した粘土層を部分的に含み、炭化物を多く含む。  
④黒色層(10Y2/1) ③とほぼ同じだが、砂質を多く含む。炭化物は③ほど多くない。



①にぶい黄褐色層(10YR4/3) シルト。しまり無し。炭化物含む。  
②①と同じ 粘質強くしまり強し。  
②' ①とほぼ同じ。  
③オリーブ黒色層(7.5Y3/2) 粘質。しまり強く炭化物を多く含む。  
④暗灰黄色層(2.5Y4/2) 粘質。しまり若干強く部分的に砂質を含む。  
④' オリーブ黒色層(7.5Y3/2) ④と同じ。若干しまりが④より強く炭化物を若干含む。  
⑤④' に同じ。④より砂質少ない。④より炭化物を多く含む。  
⑥暗褐色層(10YR3/3) 粘質。しまり強く地山をブロック状に含む。  
⑦⑤と同じ ⑤よりも炭化物を含まない。  
⑧灰黄褐色層(10YR4/2) しまり強く基本⑦と同じ。ただし⑦よりも砂質は少ない。

第7図 C-1区遺構層位図





第8図 C-1区土器出土状況図

期から古墳時代前期の土器と珠洲焼の甕胴部等が出土した。

・SD06

東西に走る幅の狭い2股の溝状遺構で、深度約0.2mである。溝の末端に溜とみられる部分が確認できたことから水路状の遺構の可能性がある。遺物は弥生時代後期の壺が出土した。

・SD07 ①②

南北に走るSD07 ①と東西に走るSD07 ②の2本の溝である。SD07 ①は②を切っている。SD07 ①は調査区外に展開しており、正確な幅は確認できない。深度約1.0m、断面はV字形となっている。遺物は弥生時代後期の土器が肩部でまとまって出土した。その他に埋土中から下駄等の木製品も出土した。SD07 ②は東から西にかけて展開する溝である。SD07 ①に切られている。断面

はV字形を呈し、深度約0.9mで①とさほど差はない。②の遺物は弥生時代後期の土器が中心である。

## C-2 区

### 1) 柱穴状遺構

多数の柱穴状遺構を検出したが、X50Y64～75より北側の柱穴状遺構群は不整形で浅く、遺物は出土しなかった。おそらく後世の耕作もしくはほ場整備の際の削平の影響を受けているものと考えられる。X50Y64～75より南側で検出した柱穴状遺構は、出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期である。遺構が比較的狭い範囲で検出したため、性格は不明である。

### 2) 土坑

#### ・SK01

長径約5.0m短径約2.0mの不整形の楕円形を呈する土坑である。東側の肩部に遺構を囲むように弥生時代中期末の土器が出土した。また、遺構の床面より環状石器などの石製品が出土した。床面より出土した土器と肩部より出土した土器には時期差はない。

#### ・SK02

SK01に隣接する土坑である。出土遺物から、SK01とSK02とは時期差はないものと考えられる。

#### ・SK05

長辺約3.0m短辺約1.8mで長方形を呈する多量に土器を含んだ土坑である。西側に展開するものとみられるが、SD03に切られているため確認できない。遺物は弥生時代中期から後期にかけてのものであり、後期の土器は小片が多く遺構上面からの出土が主で、中期の土器は遺構床面付近から出土した。

### 3) 溝状遺構

#### ・SD01

C-2区北側を東西に走る溝状遺構である。深度約0.2mと浅く、遺物は少量であるが、近世以降の陶磁器片が出土した。

#### ・SD02

C-2区中央付近を東西に走る溝状遺構である。深度約0.3mと浅く、遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。

#### ・SD03

C-2区西壁際で検出した溝状遺構である。前述したSK05を切るように南北に走る遺構である。深度約0.5mと深く、断面は逆台形になっている。遺物は弥生時代後期の壺が出土した。

#### ・SD04

SD03に隣接する南北に走る溝状遺構である。最大幅0.6mと狭く、深度約0.5mとSD03とほぼ同じである。断面は緩やかなV字形を呈す。肩部に乗るように弥生時代後期の土器が出土した。SD04を掘削する際にSK05の遺物が混入したものと考えられる。

・ SD05

南北に走る溝状遺構である。北側に行くほど浅くなり、南側に行くほど深くなっている。深度約 0.2～0.4m である。北側では浅いため掘り方は確認できなかった。断面はなだらかな逆台形を呈しており、後世の削平や柱穴状遺構などにより損壊を受けている。遺物は弥生時代中期後半から後期にかけての土器片が出土したが、まとまった状態での出土ではなかった。

・ SD08

北西から南東方向に走る溝状遺構である。深度約 0.2m と浅い。SD05 と同様になだらかな逆台形の断面を呈する。全体的に遺物は多いが、包含層からの混入と考えられる。東壁際で一段低くなっている箇所からは土器がまとまって出土した。壁を観察するに、調査区外に遺構は続き、土器も多量に含んでいる。遺構上面からは弥生時代後期の土器が、床面近くでは中期の土器がそれぞれ出土した。

・ SD09

C-2 区東壁際で検出した溝状遺構である。これまで検出した調査区を縦横断する溝状遺構ではなく、調査区途中で終わる溝状遺構である。全体的に遺物を含んでおり、弥生時代後期の土器群が大半である。

### C-3 区

#### 1) 溝状遺構

・ SD01

C-3 区南側で検出した北西から南東に走る溝状遺構である。深度約 0.3m で、断面は V 字形を呈する。遺物は、弥生時代中期から後期の土器や珠洲焼等が出土した。

### C-4 区

この調査区では、排水溝造成時に遺構の大半が破壊されたものとみられ、遺構は検出しなかった。遺物は小片ではあるが弥生時代後期以降から中世・近現代までの土器などが少量混在して出土した。

### D-1 区

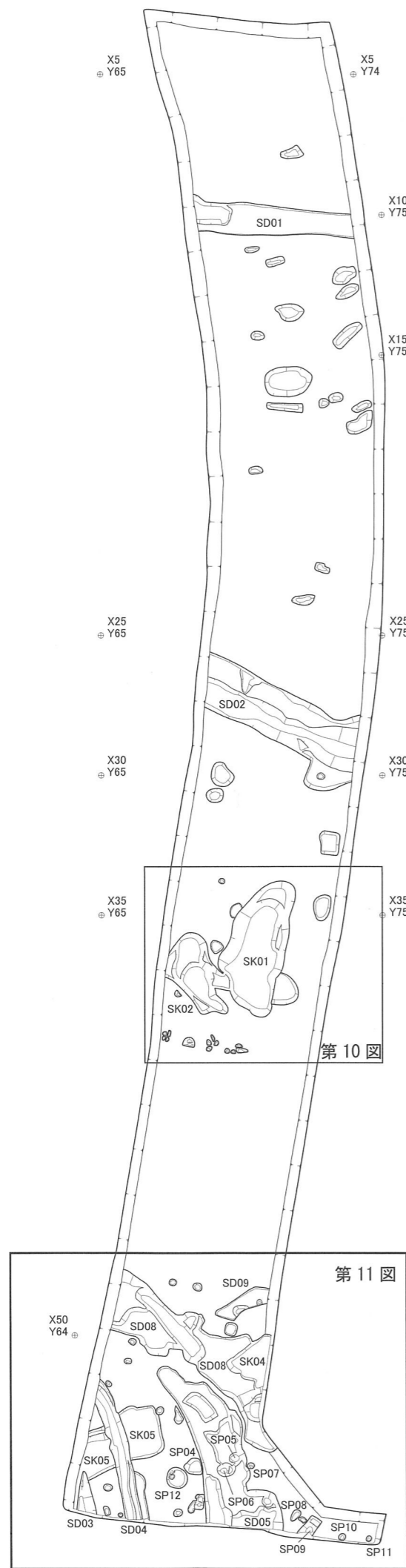
#### 1) 柱穴状遺構

検出した柱穴状遺構は不整形かつ、規則性がない。出土遺物もなく、帰属時期も不明である。近世以降の耕作時もしくはほ場整備の際に削平されたと考えられる。

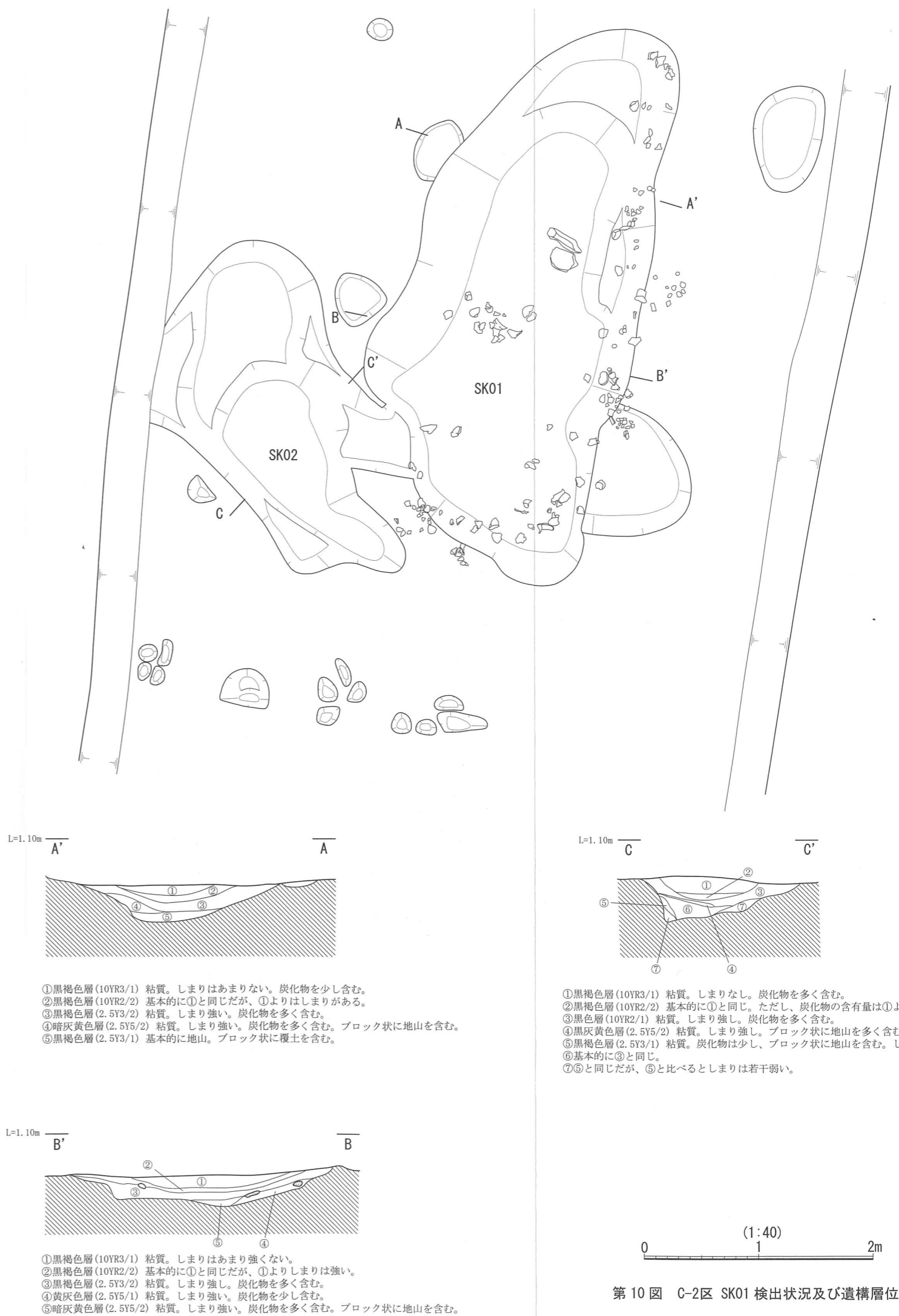
#### 2) 土坑

・ SK01

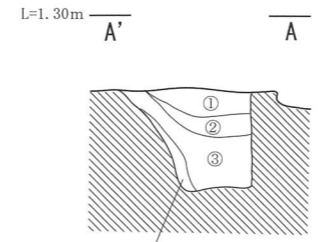
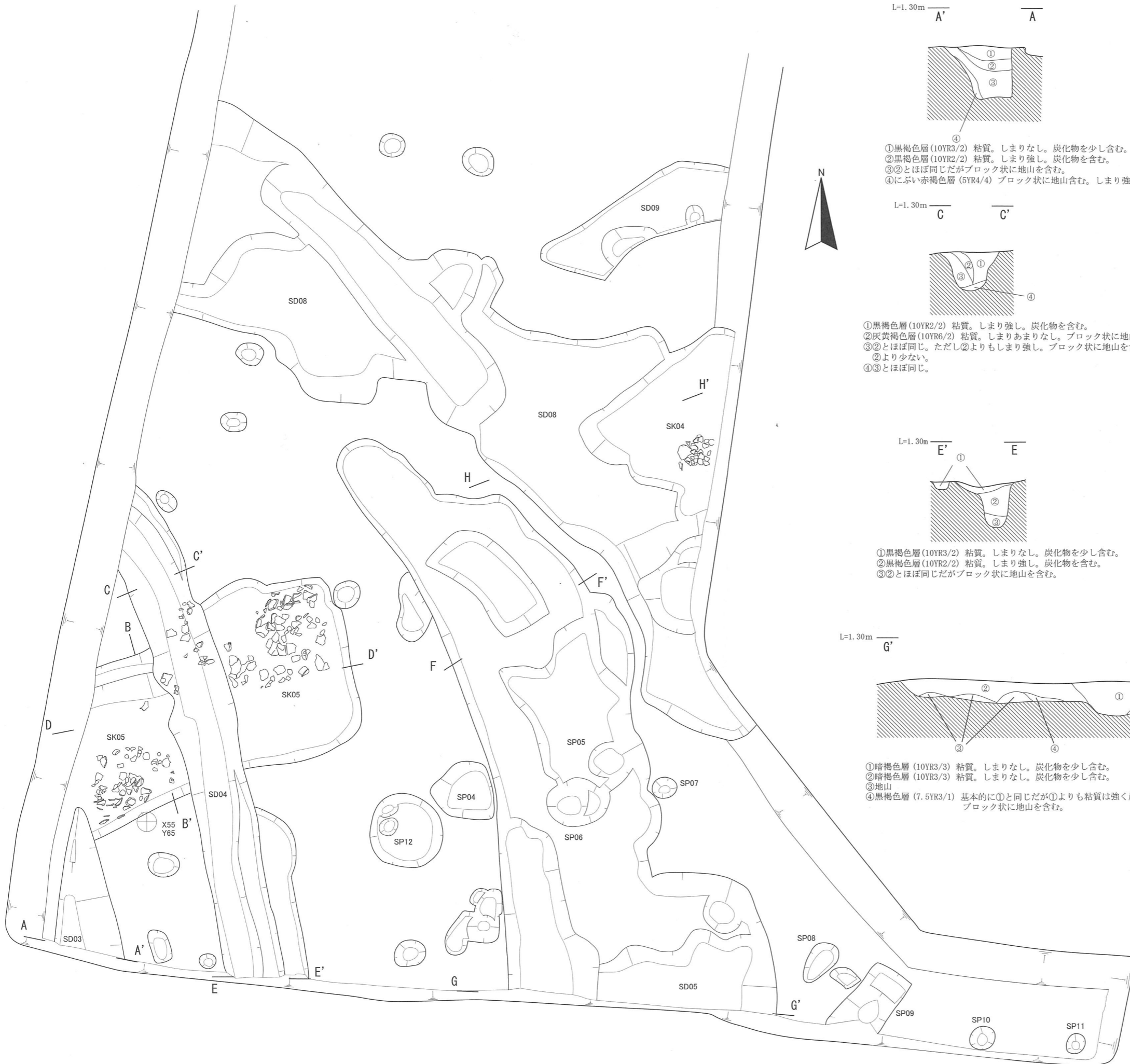
D-1 区北側で検出した SK04 を切る土坑である。深度は約 0.6m である。遺物は小片の土器とともに曲物の底板とみられる木製品が床面から出土した。



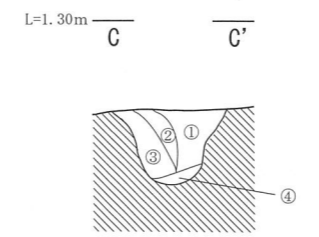
第9図 C-2区遺構検出状況図



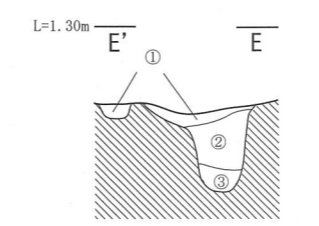
第10図 C-2区 SK01 検出状況及び遺構層位図



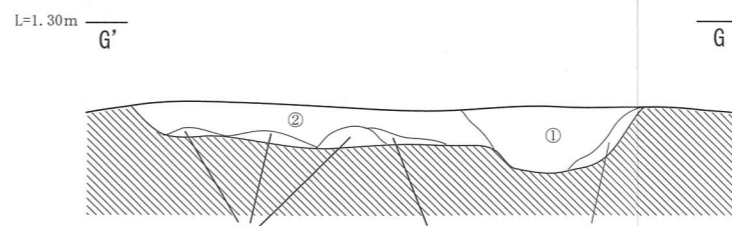
①黒褐色層(10YR3/2)粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。  
 ②黒褐色層(10YR2/2)粘質。しまり強し。炭化物を含む。  
 ③②とほぼ同じだがブロック状に地山を含む。  
 ④にぶい赤褐色層(5YR4/4)ブロック状に地山含む。しまり強い。



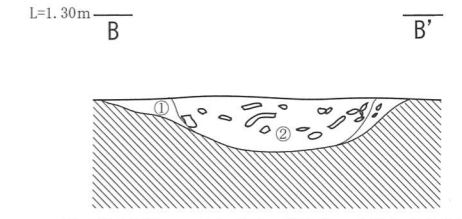
①黒褐色層(10YR2/2)粘質。しまり強し。炭化物を含む。  
 ②灰黄褐色層(10YR6/2)粘質。しまりあまりなし。ブロック状に地山を含む。  
 ③②とほぼ同じ。ただし②よりもしまり強し。ブロック状に地山を含むが②より少ない。  
 ④③とほぼ同じ。



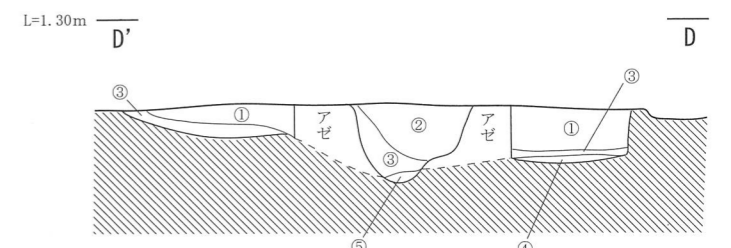
①黒褐色層(10YR3/2)粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。  
 ②黒褐色層(10YR2/2)粘質。しまり強し。炭化物を含む。  
 ③②とほぼ同じだがブロック状に地山を含む。



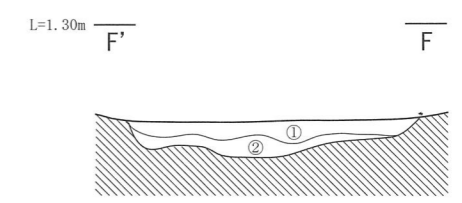
①暗褐色層(10YR3/3)粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。  
 ②暗褐色層(10YR3/3)粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。  
 ③地山  
 ④黒褐色層(7.5YR3/1)基本的に①と同じだが①よりも粘質は強く炭化物も多く含む。ブロック状に地山を含む。



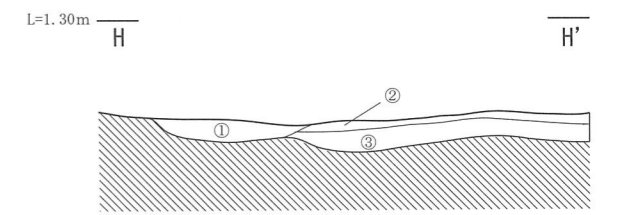
①暗褐色層(10YR3/3)粘質。炭化物・土器を多く含む。  
 ②黒褐色層(10YR3/2)粘質。ブロック状に地山を含む。



①黒褐色層(10YR3/1)粘質。しまり強し。炭化物を多く含む。  
 ②黒褐色層(10YR2/3)粘質。しまり強し。ブロック状に地山を含む。  
 ③黒褐色層(10YR2/2)粘質。しまり強し。炭化物を多く含む。  
 ④黄灰色層(2.5Y6/1)粘質。しまり強し。基本的に地山だがブロック状に③の覆土含む。  
 ⑤基本的に地山だがブロック状に③の覆土含む。炭化物を含む。

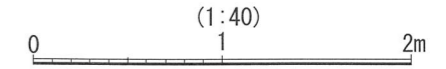


①黒褐色層(10YR3/2)粘質。しまりあまりなし。炭化物を少し含む。  
 ②灰黄褐色層(2.5Y6/2)粘質。しまり若干あり。ブロック状に①を含む。



①黒色層(10YR2/1)粘質。しまり強し。炭化物を多く含む。  
 ②灰黄褐色層(10YR4/2)粘質。しまり若干弱し。炭化物を少し含む。  
 ③灰白色層(7.5Y7/1)地山。ブロック状に②を含む。

第11図 C-2区南側土器出土状況及び遺構層位図



・ SK04

SE01・02 及び SK01 に切られる土坑である。長辺約 5.0m 短辺約 4.0m の長方形を呈し、深度約 0.5m である。遺物は出土しなかった。

・ SK05

D-1 区南西壁際で検出した直径約 1.0m の円形の土坑である。深度約 0.1m と浅い。

・ SK06

SK05 の隣で検出した D-1 区外に展開する長方形の土坑である。深度約 0.1m で SK05 と同様、浅い土坑である。

・ SK07

D-1 区南西壁際で検出した不整形の土坑である。調査区外に展開するものと考えられるが、深度約 0.1m と浅い。

・ SK08

D-1 区北壁際で検出した長辺約 1.5m、短辺約 0.8m の長方形の土坑である。深度約 0.1m と浅い。遺物は出土しなかった。

・ SK09

D-1 区中央北側で検出した円形の土坑である。最大幅約 0.9m、深度約 0.1m と広く浅い。遺物は出土しなかった。

3) 井戸状遺構

・ SE01

D-1 区北側で検出した井戸状遺構である。SK04 を切っている。最大幅約 0.9m の楕円形を呈し、深度約 0.7m と深い。遺物は土師器が少量出土し、その他に曲物の側板、箸類などの木製品が出土した。

・ SE02

SE01 に隣接する井戸状遺構である。長辺約 0.9m、短辺約 0.8m の長方形を呈し、深度約 0.8m と SE01 と同様、深い。遺物は少量の土師器片が出土した。

4) 溝状遺構

・ SD01

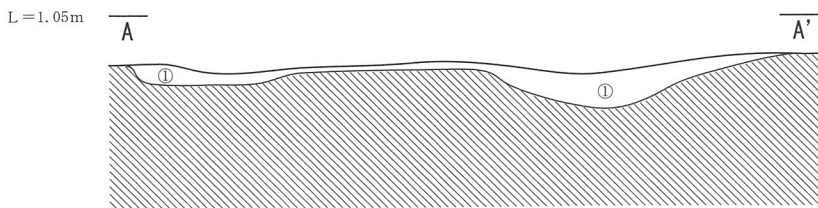
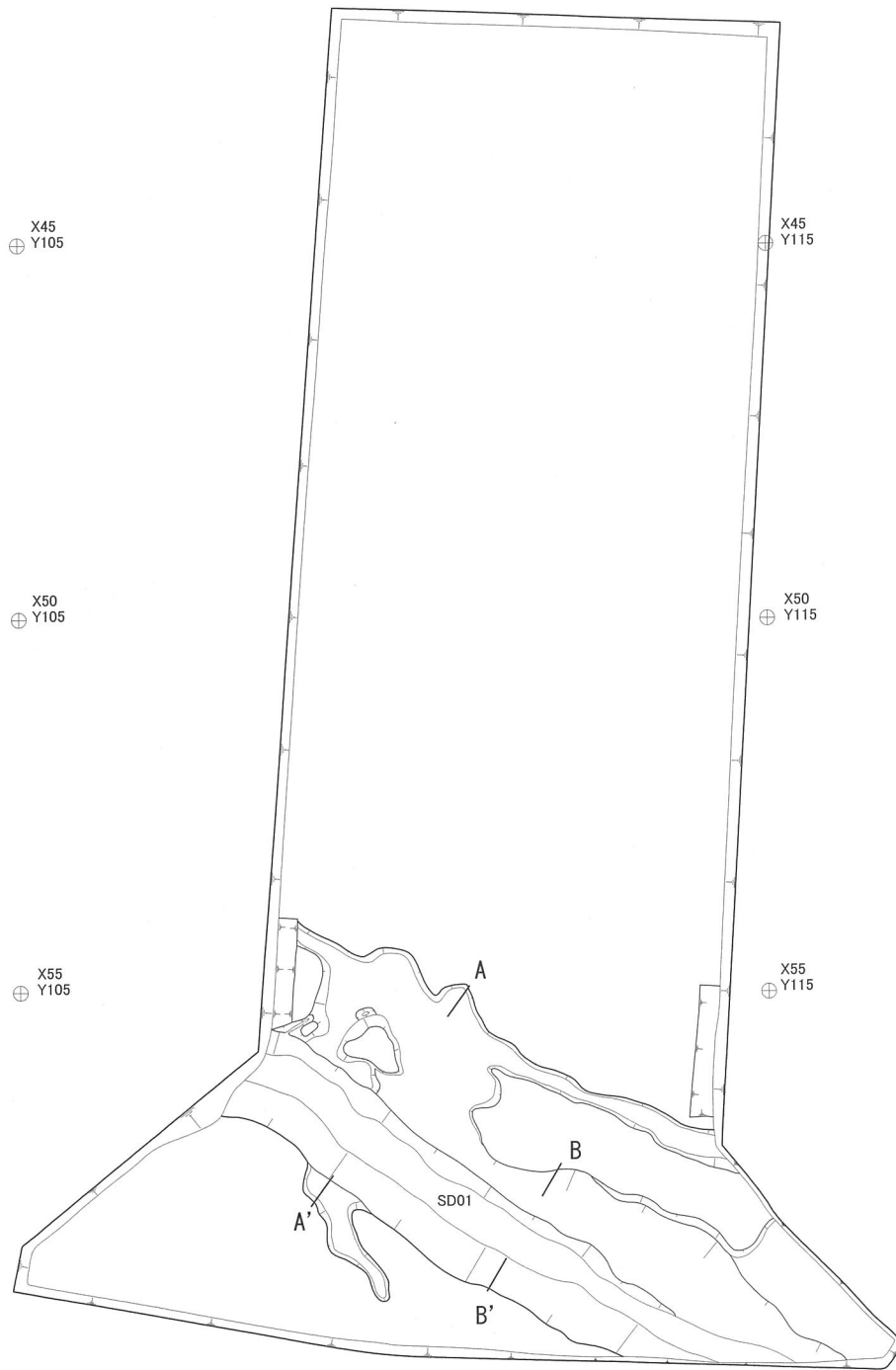
D-1 区北壁際で検出した東西に走る溝状遺構である。深度約 0.6m と深く、断面は V 字形を呈する。遺物は小片の土器が出土した。調査区北側に展開するが、道路により削平されている。

・ SD02

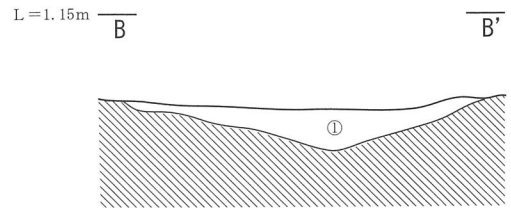
SD01 と SK04 を接合するようにある溝状遺構である。断面は緩やかな V 字形だが、深度約 0.2m と浅い。SE01 などがオーバーフローした時に、SD01 に流し込むための溝状遺構の可能性はある。

・ SD03・04

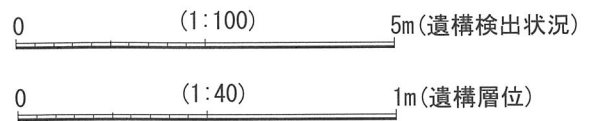
D-1 区北側を東西に走る溝状遺構である。2 本の溝状遺構は平行に走る。断面は緩やかな逆台形で、深度約 0.1m と浅い。表土から検出面まで浅いので、後世に削平されたと考えられる。遺



①黒褐色層(2.5Y3/2) かなり強い粘質。しまりは強く炭化物を少し含む。

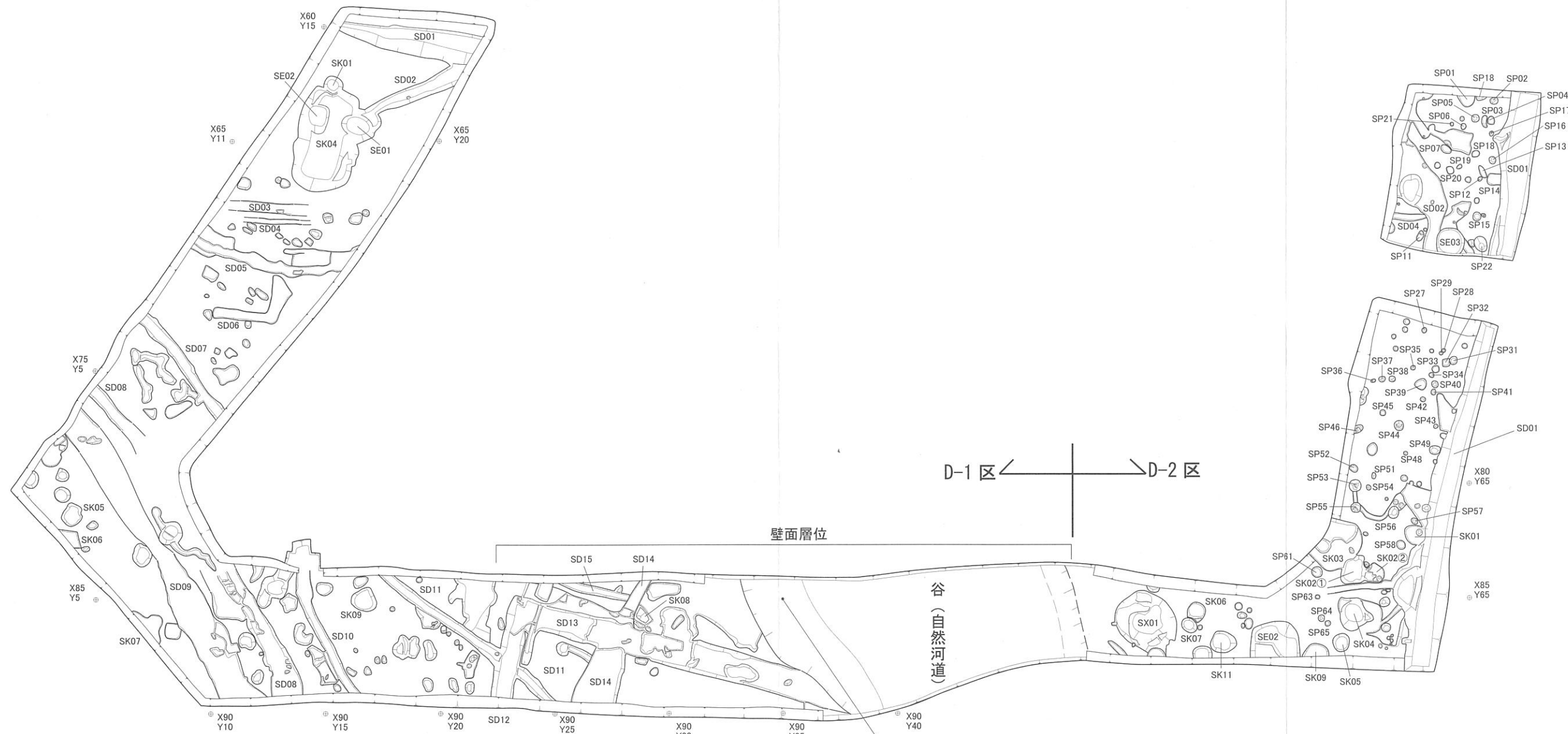


①黒褐色層(2.5Y3/2) かなり強い粘質。しまりは強い炭化物を少し含む。



第 12 図 C-3 区遺構検出状況及び遺構層位図





D-1区 ← → D-2区

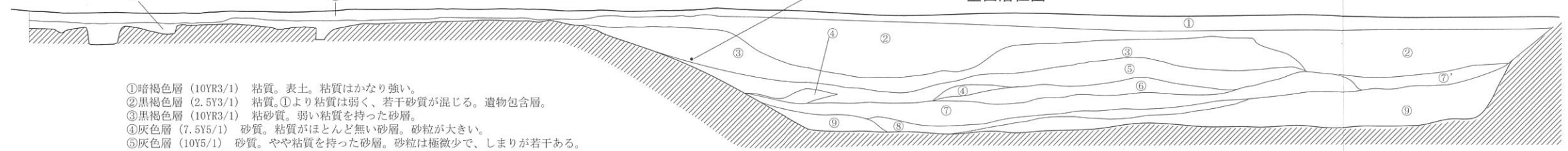
壁面層位

谷 (自然河道)

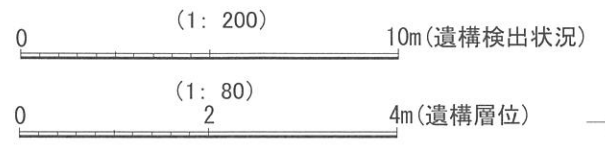


壁面層位図

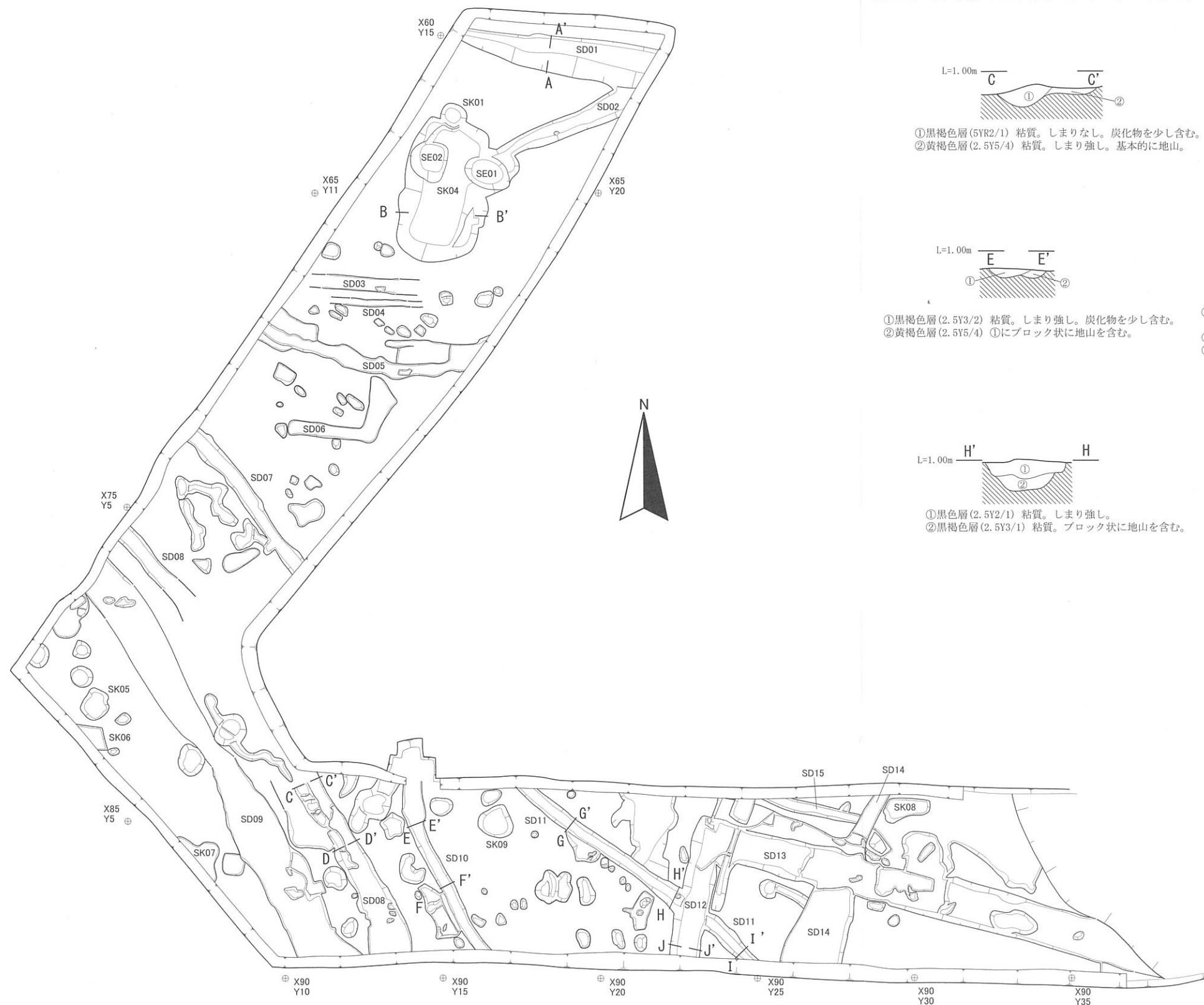
L=1.40m



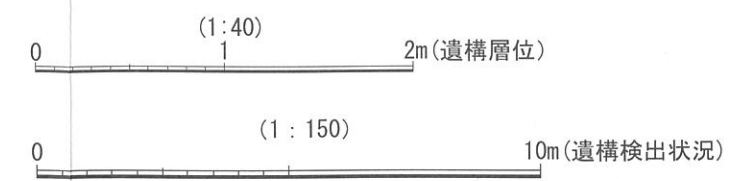
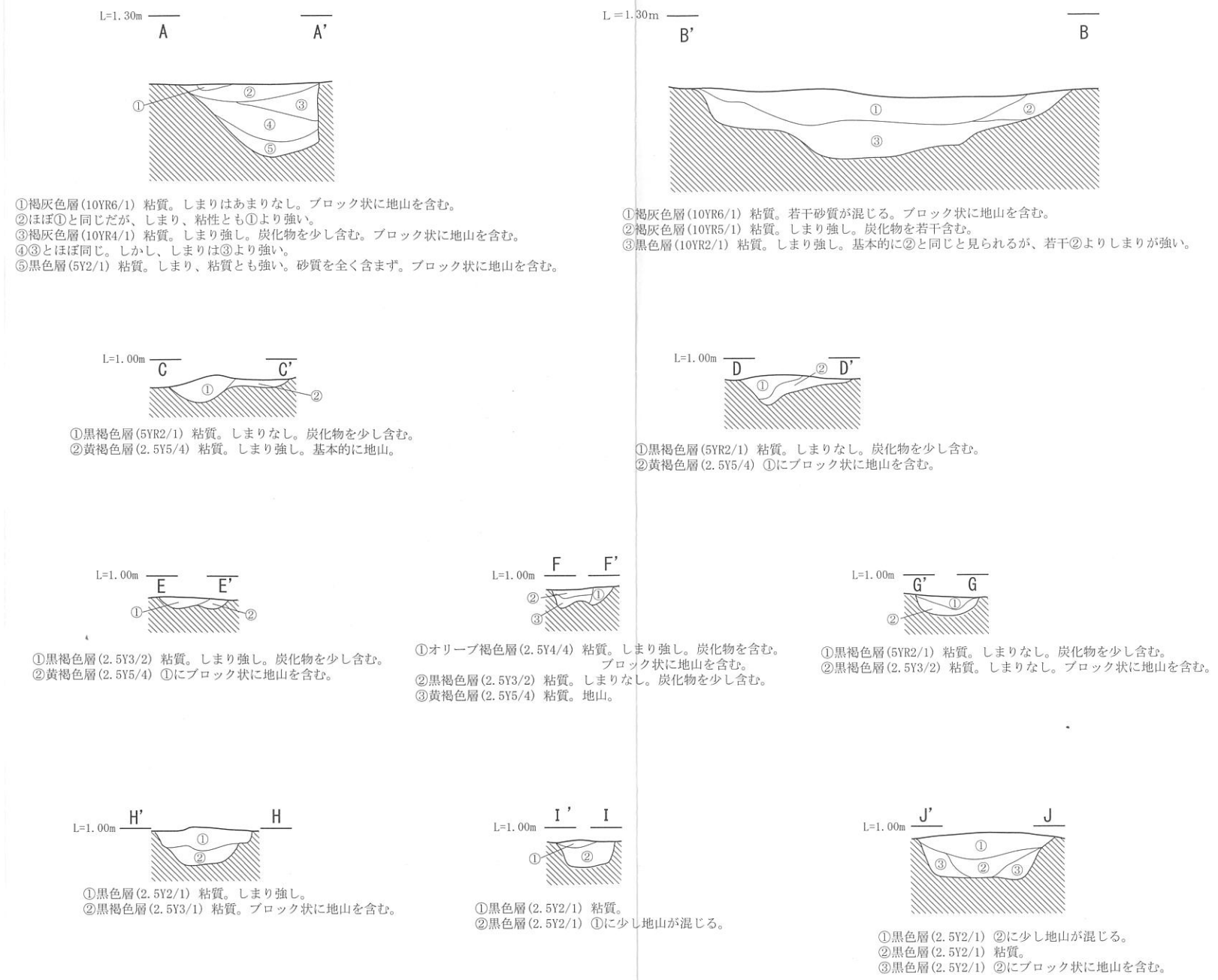
- ① 暗褐色層 (10YR3/1) 粘質。表土。粘質はかなり強い。
- ② 黒褐色層 (2.5Y3/1) 粘質。①より粘質は弱く、若干砂質が混じる。遺物包含層。
- ③ 黒褐色層 (10YR3/1) 粘砂質。弱い粘質を持った砂層。
- ④ 灰色層 (7.5Y5/1) 砂質。粘質がほとんど無い砂層。砂粒が大きい。
- ⑤ 灰色層 (10Y5/1) 砂質。やや粘質を持った砂層。砂粒は極微少で、しまりが若干ある。
- ⑥ 灰色層 (7.5Y5/1) 砂質。基本的に④と同じだが、④よりは砂粒が小さい。
- ⑦ オリーブ黒色層 (7.5Y3/1) 粘砂質。粘質はかなり強いが、しまりはあまり強くない。
- ⑦' ⑦と基本的に同じ。若干⑦よりしまりは強い。
- ⑧ 灰色層 (7.5Y5/1) 砂質。粘質は無く、砂粒は大きい。しまりなし。
- ⑨ オリーブ黒色層 (5Y3/1) 粘質。粘土層。腐食有機物を多量に含む。

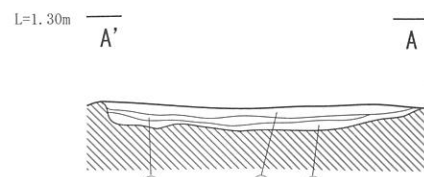
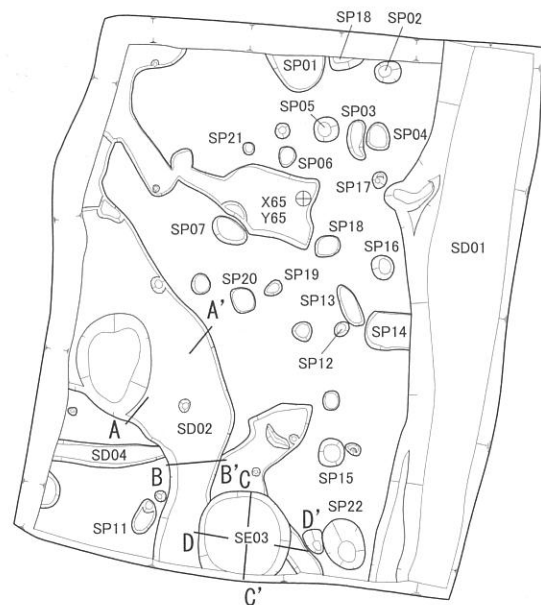


第13図 D-1・2区遺構検出状況及び谷部層位図

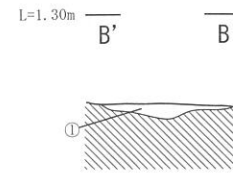


第14図 D-1区遺構検出状況及び遺構層位図

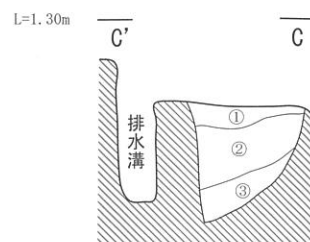




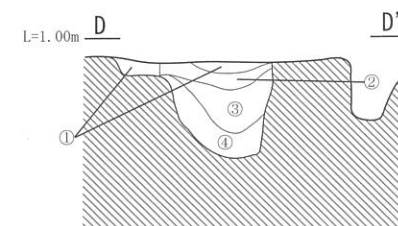
①黒褐色層(2.5Y3/1) 粘質。しまり若干あり。炭化物を少し含む。  
 ②①とほぼ同じだが、炭化物を筋状に多く含む。  
 ③黒褐色層(10YR3/1) ①とほぼ同じだが、若干砂質が強い。



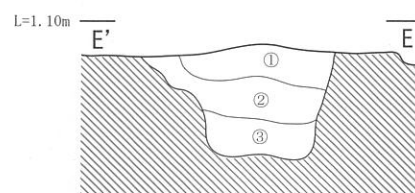
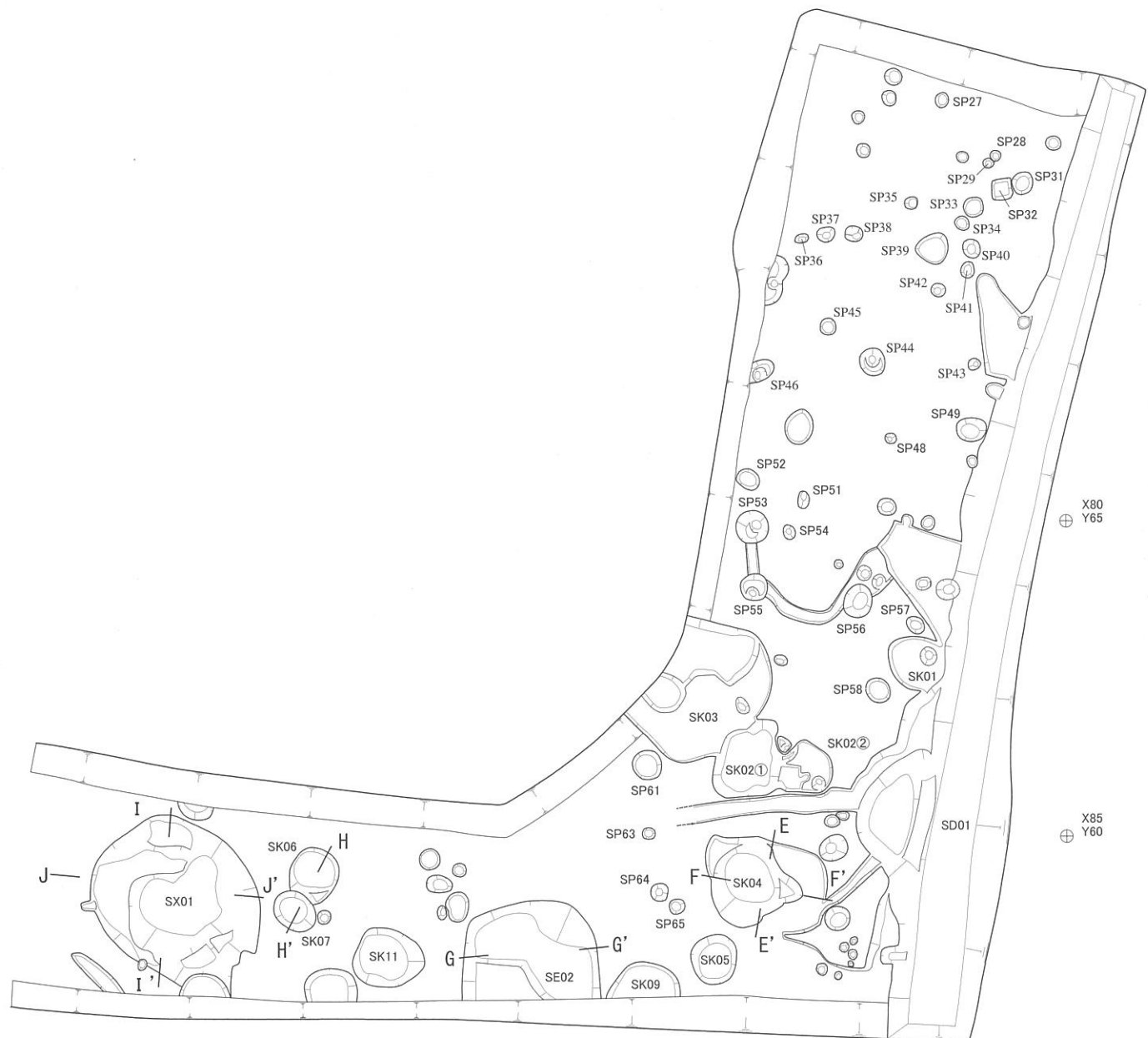
①黒褐色層(2.5Y3/1) 粘質。しまり若干あり。炭化物を少し含む。



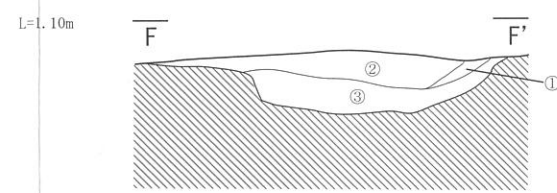
①暗褐色層(10YR3/3) 粘質。しまり強し。ブロック状に地山を含む。  
 ②黒色層(2.5Y2/1) 粘質。しまり若干強し。ブロック状に地山を含む。  
 ③灰色層(7.5Y6/1) 砂質。しまりなし。黒色土を部分的に含む。



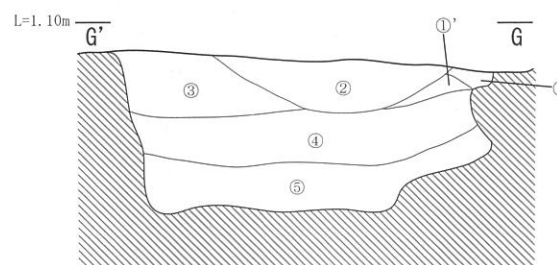
①暗褐色層(10YR3/3) 粘質。しまり強し。ブロック状に地山を含む。  
 ②明黄褐色層(10YR7/6) 粘質。砂質強し。しまりなし。基本的に地山。  
 ③黒色層(2.5Y2/1) 粘質。しまり若干強し。ブロック状に地山を含む。  
 ④灰色層(7.5Y6/1) 砂質。しまりなし。黒色土を部分的に含む。



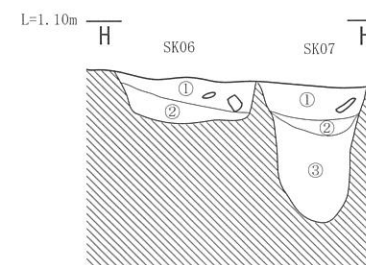
①黒褐色層(7.5YR3/1) 粘質。遺物を多く含む。  
 ②暗褐色層(7.5YR3/4) 粘質。しまりあり。  
 ③黒褐色層(5YR2/1) 粘質。しまり強く炭化物を含む。ブロック状に地山を含む。



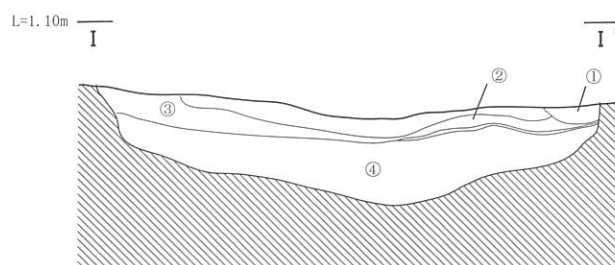
①黒褐色層(7.5YR3/1) 粘質。遺物を多く含む。  
 ②暗褐色層(7.5YR3/4) 粘質。しまりあり。  
 ③黒褐色層(5YR2/1) 粘質。しまり強く炭化物を含む。ブロック状に地山を含む。



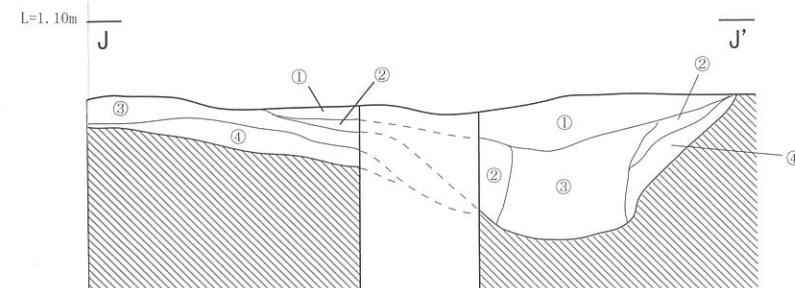
①にぶい褐色層(7.5YR5/4) 粘質。しまり強い。  
 ①' にぶい褐色層(7.5YR5/4) 粘質。しまり強い。  
 ②黒褐色層(7.5YR3/1) 砂質。  
 ③黒褐色層(7.5YR3/2) 粘質。砂混じり。  
 ④黒層(7.5YR2/1) 腐植土。  
 ⑤褐色灰色層(7.5YR6/1) 地山。黒色混じり。



①黒色層(7.5YR2/1) 粘質。しまりはあまり強くない。  
 ②黒色層(7.5YR2/1) 基本的に①と同じ。しまりは強い。  
 ③極暗褐色層(7.5YR3/1) 粘質。しまり強い。



①黒色層(7.5YR2/1) 粘質。炭化物を多く含む。  
 ②にぶい褐色層(7.5YR5/3) 粘質。地山をブロック状に含む。  
 ③基本的に①と同じ。①よりしまりは強い。  
 ④①・③と同じ。粘質しまりもかなり強い。



①黒色層(7.5YR2/1) 粘質。炭化物を多く含む。  
 ②にぶい褐色層(7.5YR5/3) 粘質。地山をブロック状に含む。  
 ③基本的に①と同じ。①よりしまりは強い。  
 ④①・③と同じ。粘質、しまりもかなり強い。

0 (1:100) 5m (遺構検出状況)

第15図 D-2区遺構検出状況及び遺構層位図

0 (1:40) 2m (遺構層位)

物は出土しなかった。

・SD05

SD03・04の隣で検出した東西に走る溝状遺構である。形が不整形なのは、SD03・04と同様、ほ場整備や耕作による影響が考えられる。深度約0.1mと浅い。遺物は出土しなかった。

・SD06

SD05の隣で検出したL字状に曲がる溝状遺構である。深度約0.1mと浅い。この溝状遺構も削平されているため、全容は明らかでない。

・SD07

北西から南東に向けて走る溝状遺構である。最大幅約0.5mと狭く、深度約0.1mと浅いことから後世に削平されたと考えられる。遺物は出土しなかった。

・SD08

SD07に平行するように北西から南東方向に走る溝状遺構である。最大幅約0.9m、深度約0.1mである。SD07と同様、ほ場整備などにより削平されたと考えられる。遺物は出土しなかった。

・SD09

SD08と平行するように北西から南東方向に走る溝状遺構である。最大幅約1.5mと広いが、深度約0.1mと浅い。ほ場整備や耕作により削平されたと考えられる。珠洲焼の底部が1点出土した。

・SD10

SD08・09に平行する溝状遺構である。最大幅約0.3m、深度約0.2mである。遺物は出土しなかった。

・SD11

SD10にほぼ平行する溝状遺構である。遺構の方向、幅からSD07の延長線になるものと考えられる。

・SD12

SD11を切るように南北方向に走る溝状遺構である。最大幅約0.9m、深度約0.2mである。遺物は小片の土器が出土したが、時期等については不明である。

・SD13

SD12に直交するように北西から南東方向に走る溝状遺構である。SD12との切り合いは不明確だが、SD12がSD13を切っているかと考えられる。幅約1.0mと広く、深度は南東方向に行くに従って深くなっていく。しかし、谷部（自然河道）にさしかかる箇所より明確な遺構の線は消滅している。遺構自体からの出土遺物は少なかったが、北側の肩部においては土器が一括で出土した（第28図）。土器以外にも、グリーン・タフのチップに混じって翡翠製石製品が出土した（第53図12）。

・SD14

SD13に切られるようにSD12とほぼ平行に南北に走る溝状遺構である。最大幅約1.6mだが、北方向に行くほど幅が狭くなっていく。深度約0.1mと浅い。遺物は小片の土器が出土した。

・SD15

SD14に切られるようにSD13に平行する溝状遺構である。最大幅約0.2mと狭く、深度約0.2mである。遺物は小片の土器が出土した。

5) その他の遺構

谷部もしくは自然河道と思われる落ち込みを検出した。深度約0.7mと深い。堆積層は砂層で構成されている。遺物は第33図(108～121)・第34図(122～126)の土器群が出土した。また、落ち込みが始まる西側の肩部からは特殊石製品(第54図)が出土した。しかし、この石製品に伴う遺構は確認できなかった。

D-2 区

1) 柱穴状遺構

多数の柱穴状遺構を検出した。しかし、削平を受けており浅く小さい。また遺物を伴う柱穴状遺構は少なく、遺物も小片で帰属時期はほとんどが不明である。

2) 土坑

・SK01

SD01の肩部にある土坑である。最大幅約0.9mで楕円形を呈し、深度約0.2mである。床面には柱穴状遺構が掘り込まれている。遺物は出土しなかった。

・SK02

SK03と隣接する土坑である。深度約0.1mと浅い。遺物は弥生時代後期の把手付土器が出土した(第30図134)。

・SK03

SK02に隣接する土坑である。切り合いは不明確だが、SK03がSK02に掘り込まれたと考えられる。調査区外にも展開し、深度は壁際付近で約0.3mと西に向けて深くなっている。

・SK04

D-2区中央付近で検出した円形の土坑である。直径約1.0m、深度約0.6mである。遺構上面より高坏の杯部が裏返し状態で埋土より出土した。時期は弥生時代後期後半とみられる。

・SK05

SK04と隣接するように検出した円形の土坑である。直径約0.9m、深度約0.4mである。遺物は出土しなかった。

・SK06

D-2区西側で検出した円形の土坑である。直径約0.9m、深度約0.3mとSK05とほぼ同じである。遺物は弥生時代後期の土器片と珠洲焼甕が遺構上面より出土した。

・SK07

SK06に隣接する土坑である。楕円形を呈し、最大幅約0.6m、深度約0.5mと大きさはSK06よりも小さい。出土遺物はSK06と同様、上面に珠洲焼甕の破片が出土した。

・ SK09

D-2 区南壁際で検出した SE02 と隣接する土坑である。調査区外に展開する。深度約 0.1m と浅いが、壁を見ると調査区外に向かって深くなっていく。遺物は出土しなかった。

・ SK11

SK06・07 南東で検出した楕円形の土坑である。最大幅約 1.0m、深度約 0.5m と大きめの土坑である。SK11 の周辺には土器が調査区南側に展開するようにまとまって出土した。SK11 の出土土器と周辺でまとまっている出土遺物との間には時期差はない。

3) 井戸状遺構

・ SE02

隅丸方形を呈する井戸状遺構である。最大幅約 2.5m、深度約 1.0m と大きく深い。地山を掘り込み、湧水層とみられる砂層まで掘り込んでいる。調査区外に展開するとみられる。遺物は小片の土器が出土した。

・ SE03

円形を呈し直径約 1.0m、深度約 0.8m と SE02 に比べて小さい。SE02 と同様、地山を掘り抜き湧水層とみられる砂層面まで達している。遺物は埋土中に小片の弥生土器が出土した。

4) 溝状遺構

・ SD01

D-1 区東側で検出した溝状遺構で、調査区に東隣する民家の敷地へ展開するとみられる。深度約 0.7m である。遺物は弥生土器や珠洲焼甕の破片などが混在して出土した。なお、当区と道路を挟んで北側に隣接する C-2 区では、この SD01 に対応する溝は確認できなかったことから、調査区北端部で東もしくは西方向に屈曲する可能性がある。

・ SD02

SE03 に隣接するように中央南から北西方向に屈曲する溝状遺構である。南側では深度約 0.1m と浅いが、調査区西壁付近では約 0.2m と深くなっていく。この溝状遺構は北西方向に広がっていくことも特徴的である。断面はややなだらかな摺鉢状となっており、遺構床面直上には炭化物が層序をなしていた。弥生時代中期後半とみられる土器や珠洲焼摺鉢が出土した。

5) その他の遺構

その他の遺構として、SX01 と呼称した遺構を検出した。最大幅約 2.4m のやや楕円形を呈し、深度約 1.0m と大きく深い。床面は、テラスを持ちながらオーバーハング気味に地山を掘り込み、砂層まで達している。遺物は弥生時代中期後半から中世にかけての土器が出土した。この遺構に関しては、土壌分析を行っており、常時水溜まりになっていたという結果が出ている。遺構の形状や遺物の出土状況などから中世の井戸状遺構の可能性はある。

E-1 区

調査区の幅が約 1m と大変狭く、すぐ隣を走る排水溝造成時の損壊を受けている。また、表土

から浅いため、ほ場整備や耕作などにより削平されたとみられる。その為、遺構の残存状況は悪い。

#### 1) 柱穴状遺構

複数の柱穴状遺構を検出した。大部分が削平を受けたとみられ、小さいものになっている。また、各遺構間の関係性については、調査区の幅が狭いことから限定されるが、SP17・18・19は遺構の形態や埋土がほぼ同じであることから関連性を持っているとみられる。2間の建物になるとみられるが、時期は不明である。また、SP04・05の様に溝状遺構に絡む柱穴状遺構も確認できた。

#### 2) 溝状遺構

##### ・SD01

E-1区中央付近で検出した北西から南東方向に向かう溝状遺構である。最大幅約0.8m、深度約0.1mと浅い。遺構の一部は近世の攪乱により損壊を受けている。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土した。

##### ・SD02

L字状に屈曲する溝状遺構で、SD01に切られる。最大幅約0.7m、深度約0.2mである。排水溝造成時により一部損壊を受け、さらに排水溝がある東側に展開するため、全容は明らかではない。弥生時代後期の土器が出土した。

##### ・SD03

東西に走る溝状遺構である。大部分が排水溝造成時に損壊を受けている。最大幅約1.0m、深度約0.1mと広く浅い。遺物は出土しなかった。

##### ・SD04

東西に走る溝状遺構である。SD03と同様、大部分が損壊を受けている。最大幅約0.4m、深度約0.1mである。遺物は出土しなかった。

##### ・SD05

北西から南東方向に走る溝状遺構である。最大幅約1.5m、深度約0.1mと広く浅い。弥生時代後期後半の土器が出土した。この溝より北側では遺構は検出しなかった。

##### ・SD06

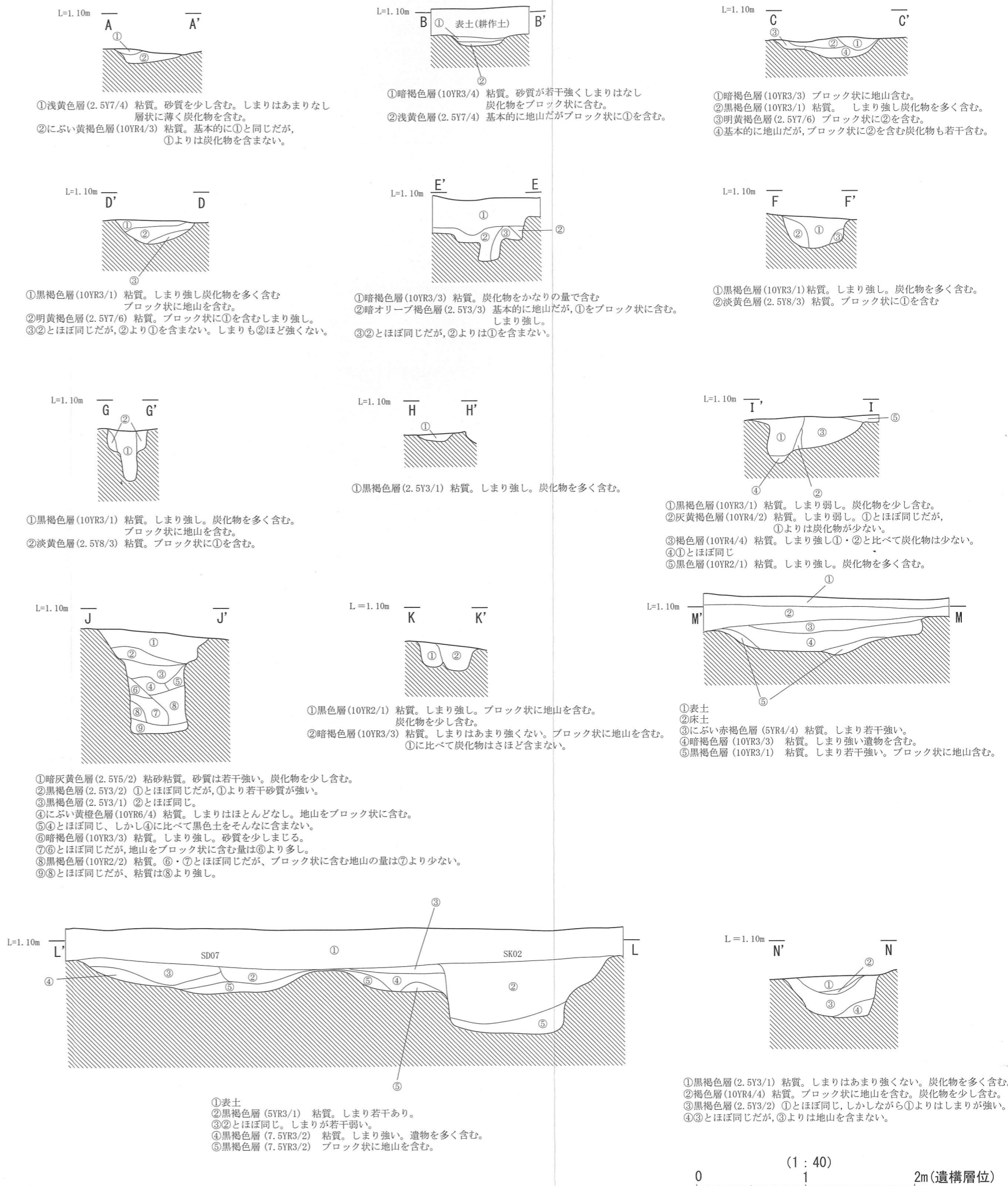
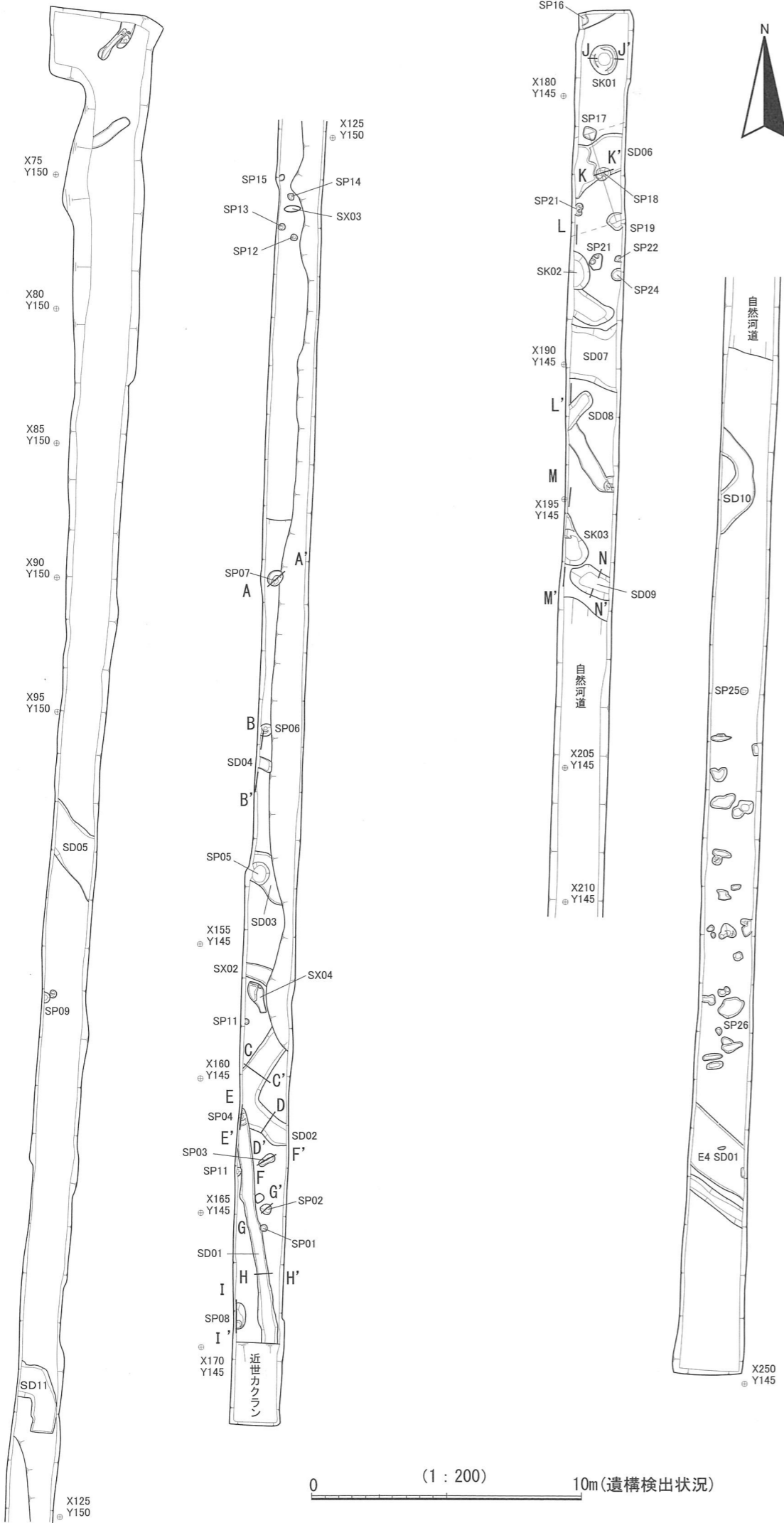
東西に走る溝状遺構である。最大幅約1.5m、深度約0.1mと広く浅い。弥生時代後期後半の土器が出土した。

##### ・SD07

東西に走る溝状遺構である。最大幅約2.0m、深度約0.2mと広く浅い。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土した。遺構の形状等からSD06と調査区外で繋がる可能性があり、その場合、周溝状の遺構になると考えられる。

##### ・SD08

SD07に隣接する溝状遺構である。調査区は横切らず、調査区中央付近にその先端があり、南西方向に展開する。西壁の状況から調査区外に続いているものと考えられる。最大幅約0.8m、



第16図 E-1区遺構検出状況及び遺構層位図



深度約 0.1m である。弥生時代中期後半の土器が出土した。

・ SD09

SK03 に隣接する溝状遺構である。最大幅約 1.0m、深度約 0.4m である。弥生時代中期後半の土器が出土した。

・ SD10

中央付近で屈曲する周溝状遺構である。最大幅約 1.0m、深度約 0.1m と広く浅い。遺物は出土しなかった。

この他、南側でも溝状遺構を検出したが、E-4 区で検出した溝状遺構と同一の遺構のため、E-4 区の項で取り扱うことにする。

3) 土坑

・ SK01

E-1 区中央付近で検出した円形の土坑である。直径約 1.0m、深度約 1.0m の大きな土坑で、検出面から下約 0.3m までは摺鉢状の断面を呈するが、それから下は壁面がほぼ垂直で円筒形を呈する。井戸状遺構には小さく、柱穴には大きい。この SK01 に対応する遺構は検出なかった。

・ SK02

E-1 区西壁にかかる円形とみられる土坑である。最大幅約 1.8m、深度約 0.7m と、SK01 よりは浅い。遺構内部より古墳時代前期のほぼ完形に近い甕が口縁を上に向けた状態で出土した。

・ SK03

SD09 に隣接する楕円形の土坑である。調査区西側に展開するものとみられる。最大幅約 2m、深度約 0.2m である。遺物は出土しなかった。SD09 の続きの部分の可能性も考えられる。

4) その他の遺構

その他性格不明の遺構や近現代の攪乱、自然河道などを検出した。

E-2 区

1) 柱穴状遺構

複数の柱穴状遺構を検出したが、削平を受けているとみられ、いずれも形が小さく浅い。セツト関係になるとみられる柱穴状遺構も確認できるが、展開方向などは不明である。

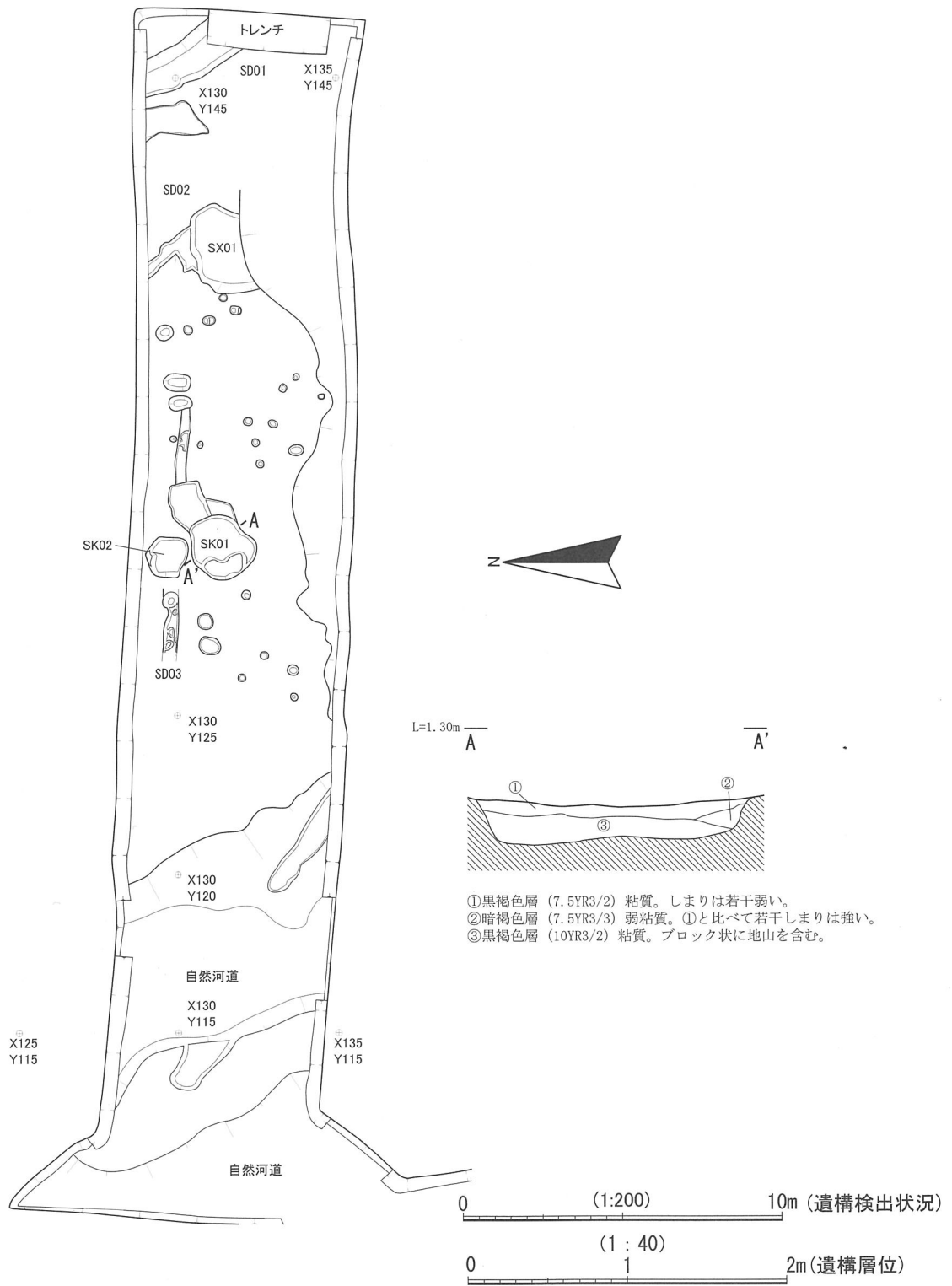
2) 土坑

・ SK01

E-2 区中央北壁付近で検出した長方形の土坑である。最大幅約 3.5m、深度約 0.3m と大きい。遺物は多く含んでおり、弥生時代中期後半から後期後半にかけての土器が出土した。

・ SK02

SK01 に隣接する方形の土坑である。最大幅約 1.3m、深度約 0.2m と SK01 に比べて浅い。遺物は SK01 と同時期の遺物が出土したことから、両者はほぼ同時期の遺構として捉えることができ



第 17 図 E-2 区遺構検出状況及び遺構層位図

る。

### 3) その他の遺構

自然河道とみられる落ち込みを検出した。埋土は基本的に砂層で、深度約 0.3m、弥生時代後期の土器片を多量に含んでいる。

## E-3 区

### 1) 溝状遺構

#### ・SD01

E-3 及び E-4 区をまたぐ北西から南東方向に走る溝状遺構である。最大幅約 1.8m、深度約 0.5m で、断面は V 字形を呈する。比較的大きな溝ではあるが、遺物はほとんど含まず、また、埋土も一度に埋められたような堆積をしている。

#### ・SD02

SD01 に隣接する溝状遺構である。E-3 区西壁ではこの SD02 の続きを確認することはできなかった。最大幅約 0.2m と狭い。遺物は出土しなかった。

#### ・SD03

SD02 に平行する溝状遺構である。遺構の規模は SD02 とほぼ同じである。E-3 区西壁・東壁では SD03 の続きを確認できなかった。遺物は出土しなかった。

#### ・SD04

SD02・03 に平行する溝状遺構である。遺構の規模は 02・03 とほぼ同じである。遺物は出土しなかった。

#### ・SD05

SD02・03・04 に切られ、北東から南西に向けて走る溝状遺構である。遺構の規模は 02・03 とほぼ同じである。遺物は出土しなかった。

#### ・SD06

北西方向から調査区西側で屈曲し、南東方向に向かう周溝とみられる溝状遺構である。なだらかに L 字状に屈曲しており最大幅約 3.0m、深度約 0.2m と広く浅い。遺構西・北側の肩部はなだらかだが、東・南側は角度をもっている。遺物はいずれも混入とみられるが、弥生時代後期の土器片、須恵器杯や壺口縁部などが出土した。調査区外に展開する。

#### ・SD07

SD06 に切られている、北西から南東に向けて走る溝状遺構である。遺構の規模は SD02 とほぼ同じである。古墳時代前期の土器が出土した。

#### ・SD08

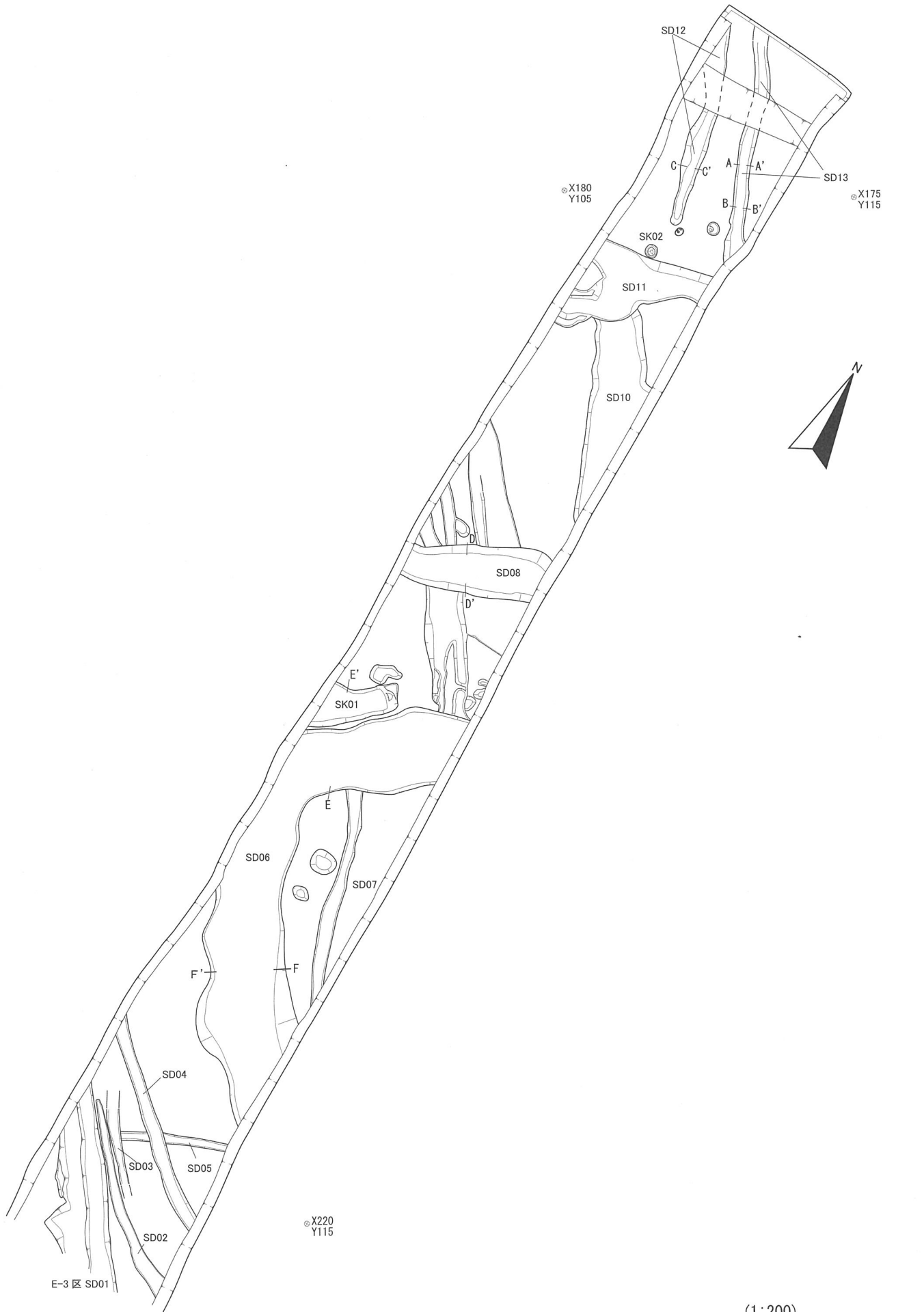
北東から南西に走る溝状遺構である。最大幅約 2.0m、深度約 0.3m である。遺物は弥生時代後期の土器が上面より出土した。

#### ・SD10

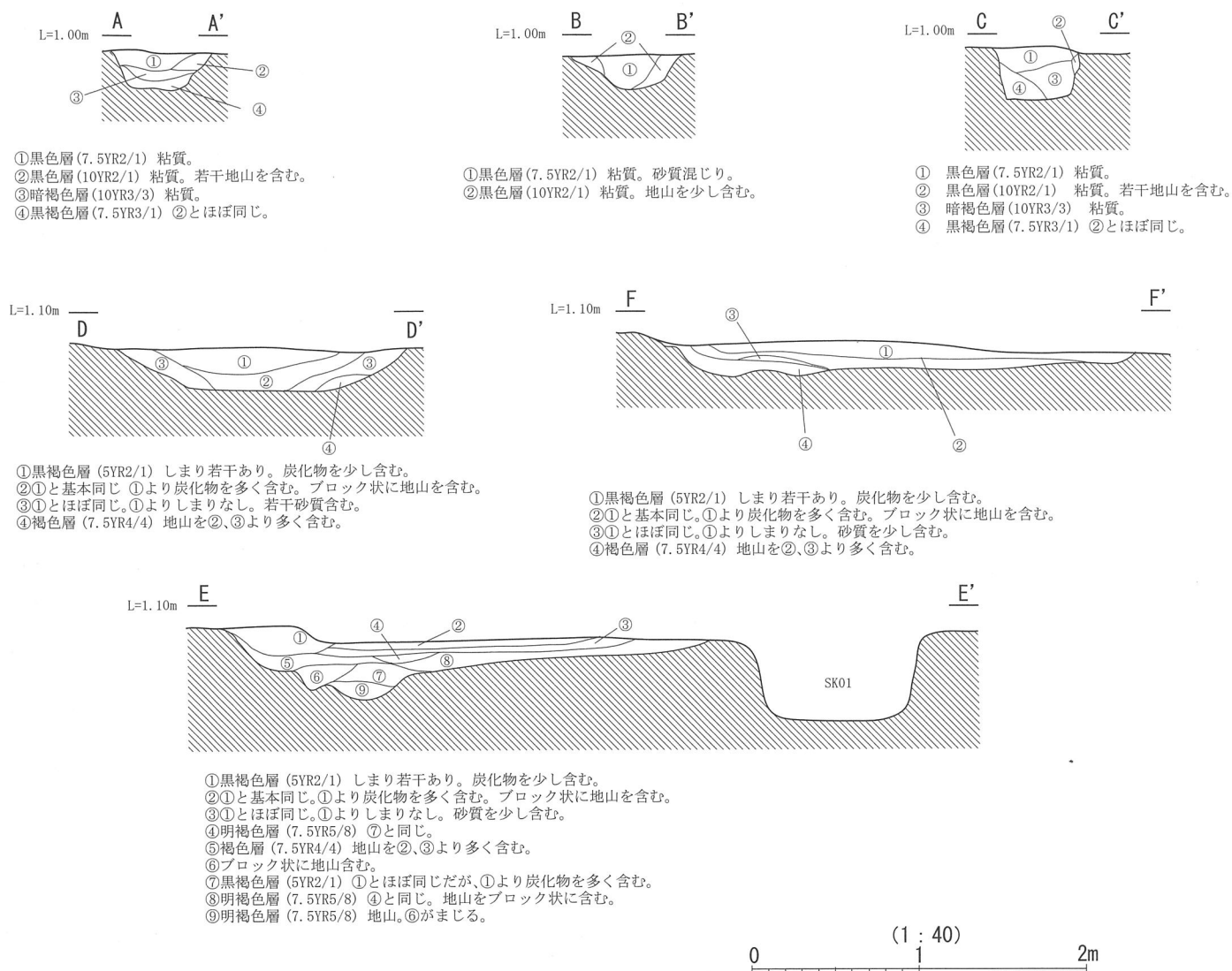
北西から南東に走る溝状遺構である。東壁では確認できるが、SD11 に切られているため、西壁では確認できない。南東方向に向けて広がっている。深度は約 0.4m である。

#### ・SD11

東西に走る溝状遺構である。SD10 を切っており、1 本の溝から 2 股の溝になっている。幅は最



第 18 图 E-3 区遺構検出状況图



第 19 図 E-3 区遺構層位図

大で約 2.0m 深度約 0.2m と若干浅い。北側の肩部がややなだらかになっているが、南側は角度がある。遺物は古墳時代前期の土器が出土した。

・ SD12

北西から調査区中央付近で終わる溝状遺構である。近現代の攪乱により損壊を受けている。最大幅約 0.7m、深度約 0.4m である。遺物は古墳時代前期の甕が完形品で横たわるように出土した。

・ SD13

SD12 に平行する溝状遺構である。途中、近現代の攪乱で損壊を受けている。遺構の規模は SD12 とほぼ同じである。遺物は少量だが、SD12 とほぼ同時期の土器が出土した。

2) 土坑

・ SK01

この区で土坑とみられる遺構は、この SK01 のみである。SD06 に隣接する土坑で、西壁を観察すると、調査区外に続くものとみられる。深度約 0.5m である。遺構床面直上で、木組みとみら

れる材を置き、その上から土器が出土した。土器は古墳時代前期の甕とみられる。口縁部のみが欠損しているが、保存状態は良好である。土器内部の土壌は遺構埋土と同質の土壌とみられる。

## E-4 区

### 1) 柱穴状遺構

#### ・ SP01

検出した柱穴状遺構はこの SP01 のみである。直径約 0.6m、深度約 0.4m の円形の柱穴状遺構である。この遺構に対応する遺構は E-4 区及び隣接する E-1 区でも検出していない。遺物は出土しなかった。

### 2) 溝状遺構

#### ・ SD01 ①

E-4 区北西から南東方向に向けて走る溝状遺構である。E-1 区南端部でもこの溝の続きが確認できた。最大幅約 1.7m、深度約 0.4m である。肩部は両方ともほぼ垂直である。遺物は床面一面に広がりを見せ、時期は弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての土器が出土したが、弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器群が主体である。

#### ・ SD01 ②

E-4 区南壁付近でほぼ直角に屈曲する溝状遺構である。①との切り合い関係は不明瞭である。最大幅約 1.0m で、肩部はほぼ垂直である。

#### ・ SD02

X235Y125 付近で L 字状に屈曲する溝状遺構であり、遺構の末端は調査区内で完結している。断面は南側の肩部がややなだらかで、北側がほぼ垂直になる。また、北側には地山を含んだ土壌が流れ込んでいる。遺物は底面に弥生時代中期後半の長頸壺と、同一個体とみられる胴部が出土した。

#### ・ SD05

E-4 区西側で北西から南東方向に向けて走る溝状遺構である。最大幅約 1.0m、深度約 0.2m と浅い。遺物は出土しなかった。この溝から西側部分及び E-3 区 SD01 との間では遺構は確認されない。

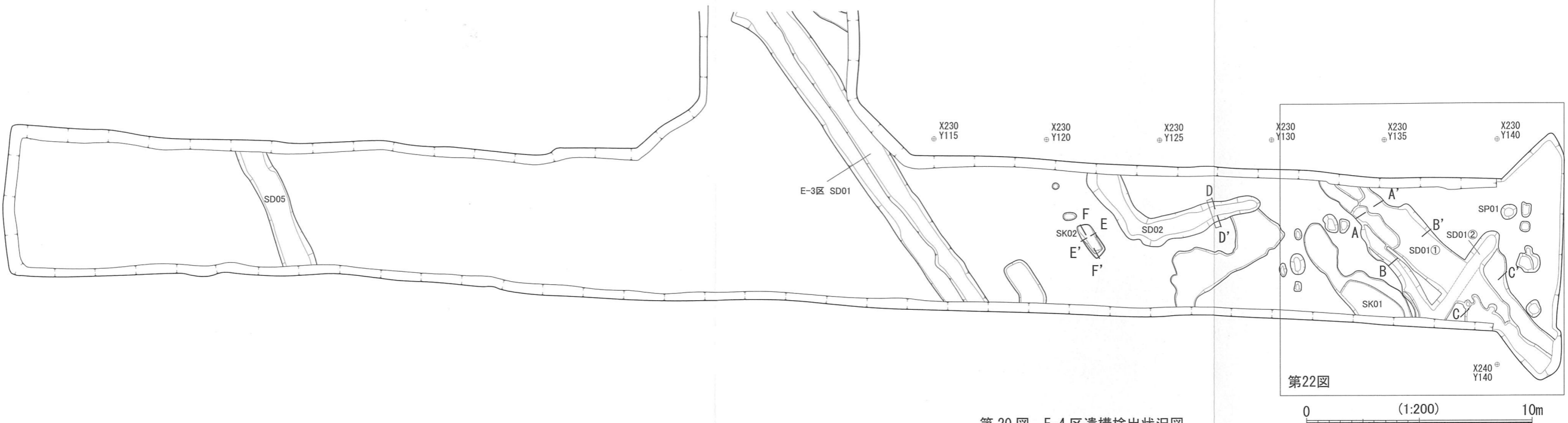
### 3) 土坑

#### ・ SK01

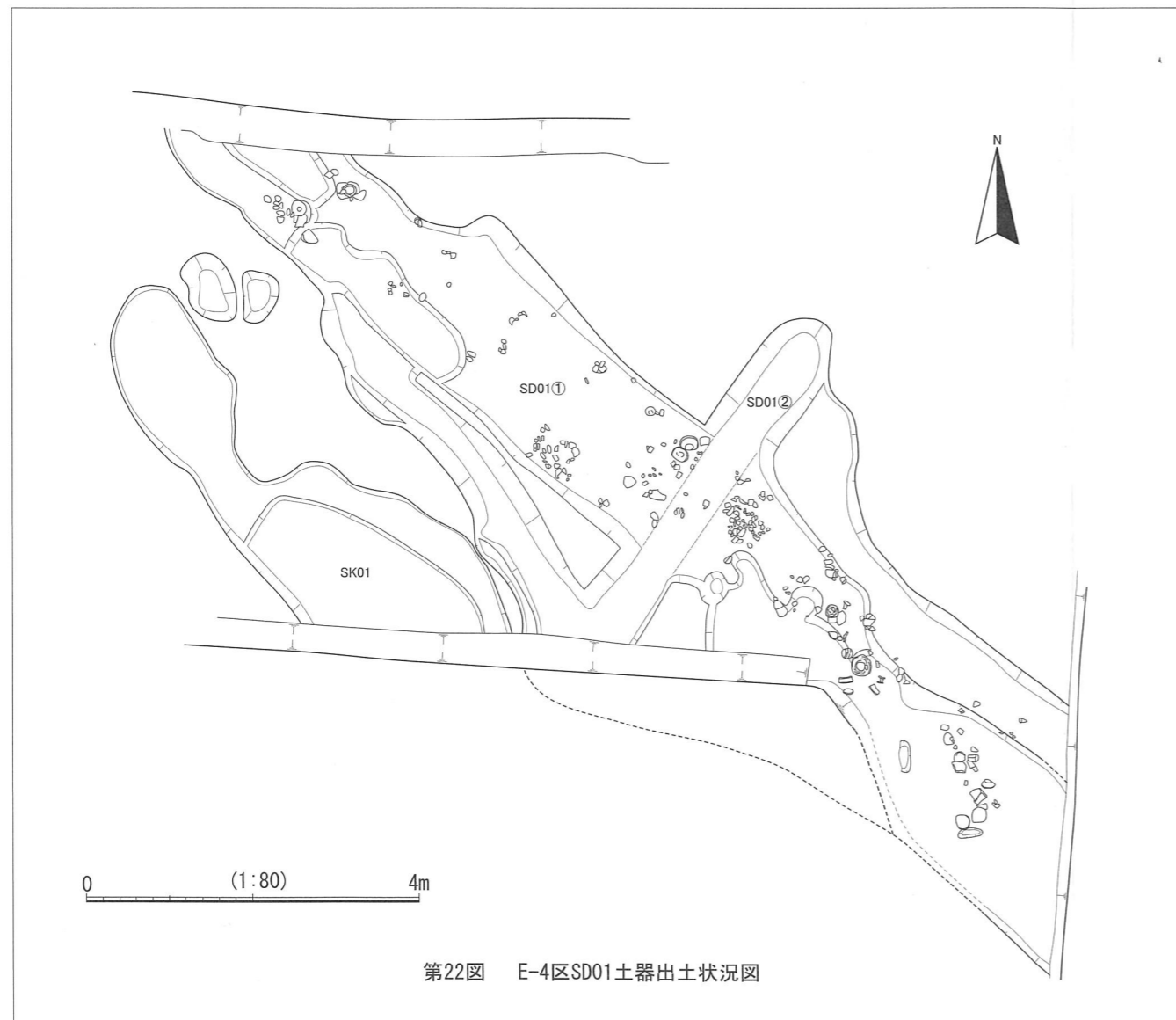
SD01 ②に隣接する土坑である。最大幅約 1.0m、深度約 0.2m と浅い。遺物は小片だが、弥生時代後期後半の土器が出土した。

#### ・ SK02

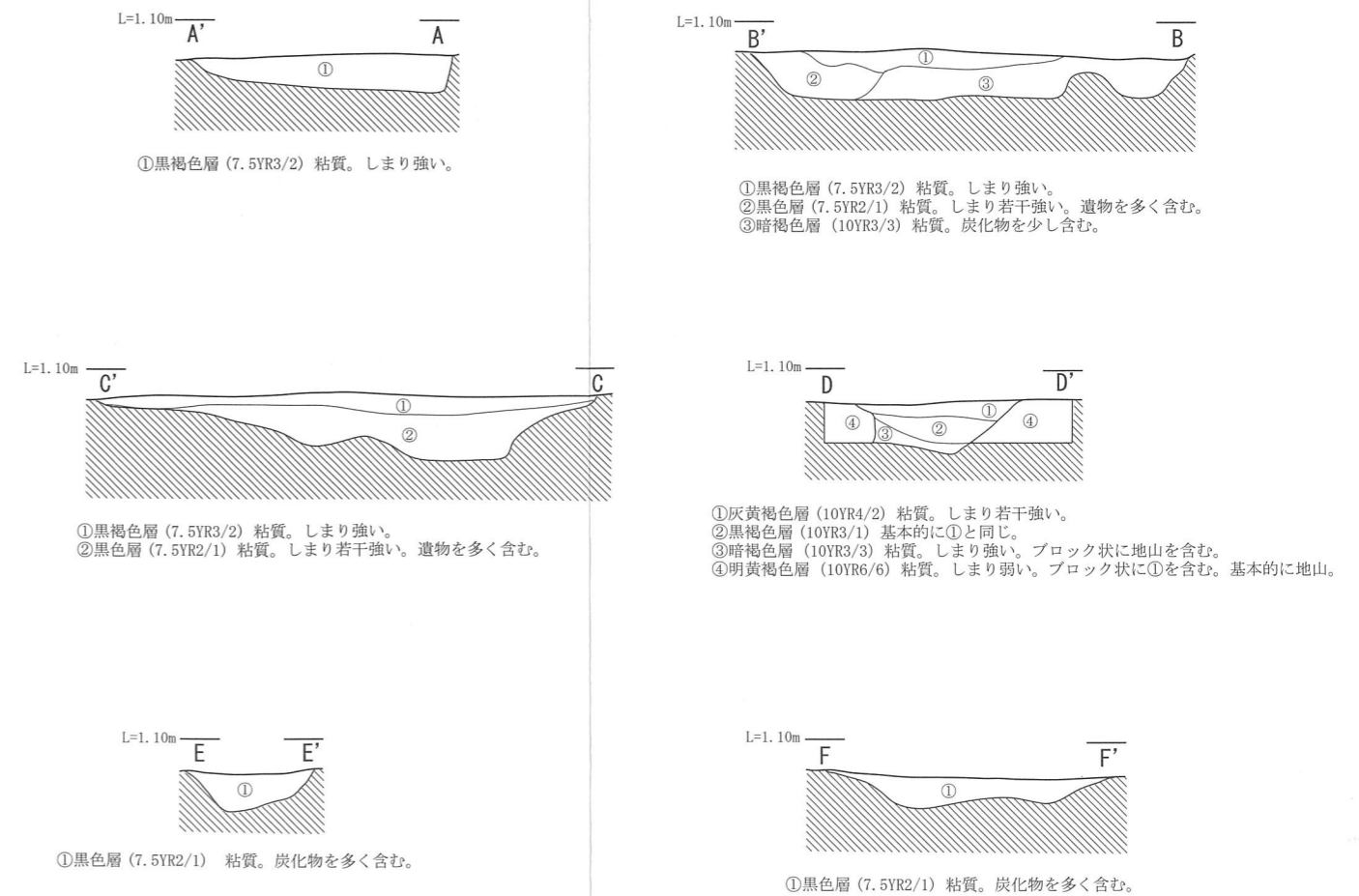
SD02 に隣接する長方形の土坑である。最大幅約 2.0m、深度約 0.2m と SK01 と同様に浅い。遺物は弥生時代中期後半の土器が横たわるように出土した。



第20図 E-4区遺構検出状況図



第22図 E-4区SD01土器出土状況図



第21図 E-4区遺構層位図

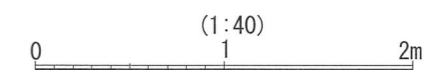


表 1. 検出遺構一覧①

地区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時期	備考
		X	Y			
C-1	SP03	29	28	無	不明	
	SP04	29	24	無	不明	
	SP05	33	24	無	不明	
	SP06	32	25	無	不明	
	SP11	34	25	無	不明	
	SP13	48	22	無	不明	
	SP14	49	23	無	不明	床面に石組みが検出。礎石?
	SP15	52	19	無	不明	
	SP18	22	29	無	不明	
	SP22	33	25	無	不明	
	SP23	29	27	無	不明	
	SP62	5	28	無	不明	
	SK03	29	26	無	不明	
	SK04	30	27	土器	弥生～中世?	中世の遺物は上からの流れ込み?
	SD01	2～3	25～30	無	不明	
	SD02①	6～7	25～30	陶磁器	近世～近現代	
	SD02②	6～10	25～30	陶磁器	近世～近現代	
	SD04	15～17	22～30	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	
	SD05①	16～20	9～20	土器・珠洲	弥生時代後期～古墳時代前期・中世	
	SD05②	20～23	20～29	土器	弥生時代後期	
	SD05③	23～24	29～28	土器	弥生時代後期	
SD06	26～27	23～29	土器	弥生時代後期	SD05に平行する。	
SD07①	48～53	28～25	土器・下駄	弥生時代後期～古墳時代前期・中世	①は②を切る。	
SD07②	42～46	22～25	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	①に切られる。	
SX03	23	23	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	SD07の堆積層?	
C-2	SP04	54	68	土器	中世	
	SP05	53	69	無	不明	SD05を掘り込む。
	SP06	55	69	無	不明	SD05を掘り込む。
	SP07	54	70	無	不明	SD05に近接。かなり小さい。
	SP08	57	72	無	不明	
	SP09	57	73	無	不明	調査区南側に展開する?
	SP10	57	74	無	不明	
	SP11	58	75	無	不明	
	SP12	55	68	無	不明	
	SK01	37	71	土器・石器	弥生時代中期	
	SK02	37	68	土器	弥生時代中期	
	SK05	54	65	土器	弥生時代中期後葉～後期	中期土器は床面、後期土器は上面より出土している。
	SD01	10～10	68～74	陶磁器	近世～近現代	
	SD02	27～29	69～74	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	C-1区SD04と結びつく?
	SD03	55～56	64～64	土器	弥生時代後期	SK05を切る。
SD04	52～57	65～66	土器	弥生時代後期		
SD05	52～57	67～70	土器	弥生時代中期後半～後期		
SD08	49～53	66～71	土器	弥生時代中期～後期		
SD09	48～49	71～69	土器	弥生時代後期	L字に屈曲する。	
C-3	SD01	56～60	108～115	土器・珠洲	弥生時代中期～後期・中世	C-1区SD04, C-2区SD02の延長?
D-1	SK01	63	15	土器・木製品	中世	SK04を掘り込む。
	SK04	65	15	無	不明	SE01・02・SK01に掘り込まれる。



表 1. 検出遺構一覧②

地 区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時 期	備 考
		X	Y			
D-1	SK05	81	4	無	不明	
	SK06	82	4	無	不明	
	SK07	87	7	無	不明	
	SK08	86	28	無	不明	周辺では土器が一括で出土している。
	SK09	85	17	無	不明	
	SE01	64	17	土師器・木製品	中世	SK04を掘り込む。
	SE02	64	14	土師器	中世	SK04を掘り込む。
	SD01	60～60	16～22	土師器？	古墳～古代？	C-1区SD07①とほぼ直交する。
	SD02	62～64	21～17	無	不明	SD01とSK04を接合させる。
	SD03	68～68	11～13	無	不明	耕作時の畝？
	SD04	68～68	12～14	無	不明	耕作時の畝？
	SD05	69～70	9～16	無	不明	耕作時の畝？
	SD06	71～73	13～10	無	不明	耕作時の畝？
	SD07	73～77	7～11	無	不明	
	SD08	76～89	5～13	無	不明	SD07に平行。
	SD09	77～89	4～11	珠洲焼	中世	
	SD10	84～89	14～16	無	不明	SD08に平行。
	SD11	84～90	17～25	無	不明	SD07の延長？
	SD12	84～89	24～23	土器	不明	SD11を切る。
	SD13	86～89	25～37	土器・石製品	弥生時代後期～古墳時代前期	SD12に直交。SD12を切る。
SD14	84～90	29～27	土器	不明	SD13に切られる。	
SD15	84～85	25～28	土器	不明	SD14に切られ、SD13と平行する。	
SX01	84～86	27～31	土器	弥生時代中期後半		
D-2	SP01	63	65	無	不明	
	SP02	63	66	無	不明	
	SP03	64	66	無	不明	
	SP04	64	66	無	不明	
	SP05	64	65	無	不明	
	SP06	64	65	無	不明	
	SP07	65	64	無	不明	
	SP08	66	65	無	不明	
	SP11	69	63	無	不明	
	SP12	67	66	無	不明	
	SP13	67	66	無	不明	
	SP14	67	67	無	不明	
	SP15	68	66	無	不明	
	SP16	66	66	無	不明	
	SP17	65	66	無	不明	
	SP18	63	66	無	不明	
	SP19	66	64	無	不明	
	SP20	66	63	無	不明	
	SP21	64	64	無	不明	
	SP22	69	66	無	不明	
SP27	73	63	無	不明		
SP28	74	63	無	不明		
SP29	74	63	無	不明		
SP31	74	64	無	不明		

表 1. 検出遺構一覧③

地 区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時 期	備 考
		X	Y			
D-2	SP32	75	64	無	不明	
	SP33	75	63	無	不明	
	SP34	75	63	無	不明	
	SP35	75	62	無	不明	
	SP36	76	61	無	不明	
	SP37	76	62	無	不明	
	SP38	76	62	無	不明	
	SP39	76	63	無	不明	
	SP40	76	63	無	不明	
	SP41	76	63	無	不明	
	SP42	76	63	無	不明	
	SP43	77	63	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	
	SP44	77	62	無	不明	
	SP45	77	61	無	不明	SP52とセット?
	SP46	77	60	無	不明	
	SP48	80	62	無	不明	
	SP49	79	64	無	不明	
	SP51	79	61	無	不明	
	SP52	79	60	無	不明	SP45とセット?
	SP53	80	60	無	不明	
	SP54	80	61	無	不明	
	SP55	81	60	無	不明	
	SP56	81	62	無	不明	
	SP57	82	63	無	不明	
	SP58	82	62	土器	弥生時代後期	
	SP61	84	58	無	不明	
	SP63	85	58	無	不明	
	SP64	86	58	無	不明	
	SP65	86	58	無	不明	
	SK01	82	63	無	不明	
	SK02	83	60	土器	弥生時代後期	
	SK03	83	59	無	不明	SK02を切る。
	SK04	86	60	土器	弥生時代後期後半	
SK05	87	59	無	不明	SK04に隣接。	
SK06	86	53	土器・珠洲	弥生時代後期・中世	SK07に切られる。	
SK07	86	53	土器・珠洲	弥生時代後期・中世	SK06に切られる。	
SK08	87	53	土器	弥生時代後期		
SK09	87	58	無	不明		
SK11	87	54	土器	弥生時代後期	地山層を掘り抜き、砂層まで達する。	
SE02	87	56	土器	古墳～中世?	地山層を掘り抜き、砂層まで達する。	
SE03	69	64	土器	弥生時代後期・中世	地山層を掘り抜き、砂層まで達する。	
SD01	63～87	68～63	土器・珠洲	弥生時代後期・中世	第28図128・129。損壊を受ける。	
SD02	66～70	66～63	土器・珠洲	弥生時代中期・中世	SE03に隣接。	
SD04	68～68	72～73	無	不明		
SX01	86	51	土器	弥生時代中期後半・中世		
E-1	SP01	166	147	無	不明	
	SP02	165	148	無	不明	

表 1. 検出遺構一覧④

地区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時期	備考
		X	Y			
E-1	SP03	163	148	無	不明	
	SP04	161	147	無	不明	
	SP05	152	147	無	不明	
	SP06	147	147	無	不明	
	SP07	141	148	無	不明	
	SP08	169	146	無	不明	
	SP09	106	149	無	不明	
	SP10	163	146	無	不明	
	SP11	157	146	無	不明	
	SP12	129	149	無	不明	
	SP13	128	148	無	不明	
	SP14	127	149	無	不明	
	SP15	126	148	無	不明	
	SP16	177	146	無	不明	
	SP17	181	146	無	不明	SP18・19とセット?
	SP18	183	146	無	不明	SP17・19とセット?
	SP19	184	147	無	不明	SP17・18とセット?
	SP20	186	146	無	不明	
	SP21	184	146	無	不明	
	SP22	187	147	無	不明	
	SP24	187	147	無	不明	
	SP25	224	145	無	不明	
	SP26	236	144	無	不明	
	SK01	179	146	土器	弥生時代後期	井戸もしくは柱穴。
	SK02	186	146	土器	古墳時代前期	土器を埋納する。
	SK03	196	146	無	不明	SD09の一部の可能性あり。
	SD01	162~170	147~148	土器	古墳時代前期	
	SD02	158~162	148~148	土器	弥生時代後期	
	SD03	151~152	147~148	無	不明	
	SD04	147	147	無	不明	
	SD05	99~100	150~102	土器	弥生時代後期後半	
	SD06	182~184	145~147	土器	弥生時代後期後半	
SD07	182~182	146~147	土器	弥生時代後期~古墳時代前期		
SD08	191~192	146~145	土器	弥生時代中期後半	SD07に隣接。	
SD09	198~198	146~147	土器	弥生時代中期後半	SK03に隣接。	
SD10	147~215	144~144	無	不明		
SD11	120~121	148~150	土器	弥生時代後期		
SX02	156	147	土器	古代~中世		
SX03	127	148	土器	古代~中世		
SX04	157	147	土器	古代~中世		
E-2	SK01	131	130	土器	弥生時代中期後半~後期後半	
	SK02	130	130	土器	弥生時代中期後半~後期後半	
	SD01	130	145	土器	古墳時代前期	
	SD02	130	140	土器	弥生時代中期後半~古墳時代前期	
	SD03	130	127	土器	弥生時代中期後半~古墳時代前期	
	SX01	131	139	無	不明	
E-3	SK01	201	107	土器	古墳時代前期	床面で木組みをし、土器を置く。溝状遺構の可能性あり。

表 1. 検出遺構一覧⑤

地 区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時 期	備 考
		X	Y			
E-3	SD01	220~237	105~116	土器	近世	E-4区にまたがる。
	SD02	220~225	106~111	無	不明	SD01に隣接。
	SD03	220~222	106~103	無	不明	
	SD04	216~222	105~111	無	不明	
	SD05	219~220	111~107	無	不明	SD02・03・04に切られる。
	SD06	201~215	111~111	土器・須恵器	弥生時代後期～古墳時代前期・古代	なだらかにL字に屈曲する。周溝?
	SD07	204~212	109~111	土器	古墳時代前期	SD06に切られる。
	SD08	194~195	111~106	土器	弥生時代後期	
	SD10	196~200	108~111	土器	弥生時代中期～古墳時代前期	SD11に切られる。
	SD11	181~182	111~107	土器	古墳時代前期	SD10を切る。
	SD12	172~179	107~109	土器	古墳時代前期	周溝?
	SD13	171~179	108~111	土器	古墳時代前期	SD12とセット?
	E-4	SP01	233	141	無	不明
SK01		237	134	土器	弥生時代後期後半	SD01に隣接。
SK02		234	119	土器	弥生時代中期後半	SD02に隣接。
SD01		232~242	134~145	土器	弥生時代中期後半～古墳時代前期	
SD02		232~234	123~129	土器	弥生時代中期後半	
SD05		231~236	85~86	無	不明	

※ “時期” 項目は出土遺物の時期について記載している。

## 2. 出土遺物

今回出土した遺物は、縄文時代、弥生時代中期から後期、古墳時代前期、中世から近世と幅広いが、弥生時代後期から古墳時代前期が主体である。包含層より出土した遺物もあるが、耕作土より浅いため大半が小片になっている。その為、今回図示した遺物は遺構より出土した土器群を主体としている。

### C-1 区

#### ・土器溜まり出土土器（第 23 図 1～6）

C-1 区中央部付近で検出した土器溜まりである。後世の耕作などにより損壊を受けた状態で出土した。1 は受口状の口縁で、口縁部に刻目文を施す甕である。2・4 は口縁に面を持つ甕である。3 は口縁に面を持ち、擬凹線文を施す鉢である。5・6 は高坏脚部である。

#### ・SD06 出土土器（第 23 図 7・8）

7・8 は頸部から口縁部にかけて直立する壺である。口縁端部に刻目文を施し、波状口縁を呈する。全面ハケメ調整だが、8 の頸部はハケメ調整の後、ミガキ調整を行っている。

#### ・SD07 ①出土土器（第 24 図 9～17）

9 は口縁部を肥厚させ、擬凹線文を施す壺である。10 は面を持つ器台口縁部で擬凹線文を施す。外面全体に赤彩を施す。11 は口縁部を受口状にして刻目文を施す甕である。12 から 15 は付加状口縁である。16 は高坏坏部で口縁端部及び屈曲部に漆を塗布し、口縁内面には赤彩を施す。17 は壺の胴部である。

#### ・SD07 ②出土土器（第 24 図 18～24・第 25 図 25）

18 は付加状口縁の壺である。19 は口縁部が外反する甕口縁部である。20 から 24 は壺口縁部である。20 は面を持つ口縁部で、21 は付加状口縁部、22 から 24 は直立する口縁部である。25 は口縁部が外反する器台である。外面は細かなミガキ調整を行っている。

#### ・SX03 出土土器（第 25 図 26）

遺構上面から出土した小型甕である。

#### ・包含層出土土器（第 25 図 27・28）

27 は口縁部に刺突文を施す。28 は頸部から胴部上半にかけて刻目文及び直線文を施す。

### C-2 区

#### ・土器溜まり出土土器（第 25 図 30・31）

南側の遺構検出時に多量に検出した土器群である。耕作等による削平で全て細かい破片であった。30 は小型壺の胴部である。31 は高坏脚部である。

#### ・SD02 出土土器（第 25 図 32）

口縁に段を持つ壺である。

・SD03 出土土器（第 25 図 34）

口縁に面を持つ壺である。外面はミガキ調整、内面はケズリ調整を行っている。

・SD05 出土土器（第 25 図 33）

小型の無頸台付鉢である。脚裾部に刻目文を施す。

・SD08 出土土器（第 25 図 29, 第 26 図 35～43, 第 27 図 44～48）

29 は口縁端部に刻目文を施し、小波状口縁を呈す甕である。頸部は縦方向のハケメ調整、胴部は横方向のハケメ調整を行う。35 は口縁端部から口縁内面にかけて刻目文を施す甕である。36 は口縁部径が胴部径に比べて極端に細い壺である。37 は外面にハケメ調整を行う壺の胴部である。外面全体に赤彩あり。38 はやや内側に屈曲する口縁部に擬凹線文を施す甕である。肩部に刻目文を施す。頸部と口縁部の接合帯が確認できる。39 は口縁端部に櫛による刻目文を施す。40 は口縁部に刺突文を施す壺で口縁内面には羽状文を施す。41 は口縁に面を持つ甕である。42 は付加状口縁部に 2 連の円形浮文を貼り付ける壺である。43 は全面ハケメ調整のやや小型の甕である。44 は器台、45 は高坏の坏部で、44 は粘土帯を貼り付けて稜をつくりだしている。46・47 は高坏の脚部で、それぞれ透孔を施している。48 は壺の底部で、穿孔している。

・SK01 出土土器（第 27 図 49～55, 第 28 図 56～64）

49 から 58 は SK01 の東側肩部より出土した土器群である。49 は三角形の刺突文を連続で刺突し、櫛描文を施す土器片である。49 から 62 までの土器群は弥生時代中期後半と考えられる。51・55 は口縁端部に刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。調整はハケメ調整である。58 は長頸壺で、口縁端部に刻目文を、頸部には列点文を施す。内外面とも赤彩を施す。59 から 64 は SK01 内部より出土した土器群である。59 は SK01 の埋土からの出土で、口縁端部に格子文を、口縁内面には羽状文を施す。60 から 62 は SK01 の床面より出土した土器である。60 は外反する口縁端部に刻目文を施す。61 はやや口縁端部を内湾させる甕である。62 は口縁内面に羽状文を施す。頸部から胴部にかけてはハケメ調整で、広範囲に炭化物が付着している。63 は口縁部にのみ赤彩を行う。64 は鉢で、口縁部に穿孔を行う。

・SK05 出土土器（第 28 図 65, 第 29 図 66～70）

65 は頸部に櫛描文を施す土器である。胎土に海綿骨針を多量に含むなど他の土器とは若干異なる。66 は口縁端部に刻目文を施し、口縁内面に羽状文及び斜行短線文を施す壺である。67 はやや内湾した口縁部に羽状文を施す。68 は口縁端部に刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。外面頸部は縦方向のハケメ調整、胴部は横方向のハケメ調整である。69 は 68 とほぼ同様の土器である。68 と比べるとハケメ調整痕が明瞭に残っている。70 は口縁端部に刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。頸部は縦方向のハケメ調整である。肩部にかけて、細い数条の櫛描文を施し、その間を連続刺突文で埋めている。土器はかなり歪んだ形をしている。

・SP04（第 30 図 71）

土師器の高坏である。

## D-1 区

### ・土器溜まり出土土器（第 30 図 72～81，第 31 図 82～89）

72 は胴部が膨らむ壺である。73 は口縁端部に面を持つ壺で、内外面はハケメ調整である。74 は甕である。外面はハケメ調整、内面はケズリを行う。75 は口縁に面を持つ小型甕である。口縁端部には刺突文を、頸部から胴部上部にかけて櫛描文を施す。76 は小型壺である。77 は面を持つ壺口縁で、2 連の円形浮文を貼り付ける。78 は柑胴部か。79 は小型甕とみられるが、底部に剥離痕がみられる。80 は長頸壺で、口縁部に凹線を施す。頸部から胴部にかけてはハケメ調整を行う。内面は胴部周辺に指頭圧痕がみられる。81 は長頸壺である。胴部下半分はかなり器壁が薄い。82 は口縁に面を持つ長細頸壺である。口縁端部に擬凹線文を施し、その上に円形浮文を貼り付けている。83 は平縁口縁の短頸壺である。口縁端部に刻目文を施している。口縁部下から頸部にかけては、稜線が確認できる程にしっかりとナデ調整が行われている。85 は頸部から口縁部が直立する壺である。口縁部はナデ調整を行い、頸部は縦方向のハケメ調整である。頸部には「W」字状の記号文が施されている。84・86 から 88 は高坏の脚部である。88 には透孔が施されている。89 は高坏である。保存状態が悪いため、調整などは明瞭ではない。

### ・SD14・15 出土土器（第 31 図 90）

SD14・15 が交差する箇所から出土した非ロクロ整形の土師器皿である。

### ・SX01 出土土器（第 31 図 91）

弥生時代中期後半の高坏脚部である。櫛描文を施す。外面はケズリ調整で、内面はハケメ調整である。

### ・包含層出土土器（第 32 図 92～107）

92 は非ロクロ整形の土師器皿である。93 は口縁部及び口縁端部に刺突文を施す壺口縁部である。94 は口縁に面を持ち、2 連の円形浮文を貼り付ける壺口縁部で、口縁内面にはスタンプ文を施す。95・96 は高坏の坏部で、95 は口縁に面を持つ甕で、口縁には擬凹線文を、屈曲部に刻目文を施す。97 から 100 は甕である。97 は口縁に面を持ち、口縁端部を内湾させる甕である。口縁には擬凹線文を、口縁内面には刺突文を施す。胴部外面はハケメ調整で、内面は斜め方向のケズリ調整である。98 は頸部が「く」の字状に屈曲する甕である。101・102 は頸部から口縁部が直立する壺である。101 は口縁端部に刻目文を施すが、102 は口縁部より若干下の部分で刻目文を施す。103 はつまみのある有紐蓋である。104 は台付鉢である。105・106 は高坏脚部である。107 は甕底部で、全面ハケメ調整、底部に穿孔を行っている。

### ・谷部出土土器（第 33 図 108～121，第 34 図 122～127）

108 は口縁に面を持つ壺で、口縁部に擬凹線文を巡らす。109 は壺で、108 と同じく付加状口縁部に擬凹線文を巡らす。胴部内外面はミガキ調整だが、口縁部付近はハケメ調整である。110 はやや口縁部が広がる小形の甕とみられる。111 は口縁に面を持ち擬凹線文を施す。112 は甕である。胴部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整である。113 は口縁に面を持つ壺で、口縁部に擬凹線文を施す。114 から 116 は面を持つ口縁部に擬凹線文を施す甕である。116 は胴部径に対

し口縁部径が大きい。117は口縁部が外反する甕である。118は口縁部が大きく広がる壺の口縁部とみられる。外面は縦方向のハケメ調整で、内面は横方向のハケメ調整の後、縦方向にケズリ調整を行っている。119は丁寧なハケメ調整を行っている台付鉢である。120は器台脚部、121は高坏脚部である。122・123はいわゆる布留系の甕とみられる。器壁がケズリ調整により5mm弱とかなり薄く成形されている。124は高坏の坏部である。125・126は壺の底部である。125は底部を凹ませている。127は口縁端部に面を持つ甕である。

## D-2 区

### ・SD01 出土土器 (第34図 128・129)

128は口縁に面を持つ甕である。胴部には横方向にほぼ直線的にハケメ調整が行われている。129は把手付の坏である。

### ・SD02 出土土器 (第34図 130～132)

130・131は口縁部が広がる甕である。130は口縁端部に刻目文を施すことにより波状口縁を呈する。131は口縁端部に刻目文を施す。132は珠洲焼の摺鉢底部である。

### ・SK02 出土土器 (第35図 134)

口縁部に擬凹線文を施し、赤彩を行う。肩部に把手を付ける。外面は縦方向のハケメ調整で、内面はケズリ調整や指頭圧痕がみられる。

### ・SK04 出土土器 (第35図 133・135)

133は面を持つ口縁部に、擬凹線文を施す甕である。135は高坏の坏部で、屈曲部には接合痕が確認される。

### ・SK06 出土土器 (第35図 136)

全面にハケメ調整を行う壺である。

### ・SK07 出土土器 (第35図 137)

同一個体とみられる珠洲焼大甕である。

### ・SK08 出土土器 (第36図 138～140)

いずれも口縁部に擬凹線文を施す甕である。

### ・SK11 出土土器 (第36図 141・142)

141は口縁部に擬凹線文を施す甕で、142は胴部が筒形の甕である。

### ・SP43 出土土器 (第36図 143)

口縁に面を持つ壺である。

### ・SP58 出土土器 (第36図 144～146)

144は口縁部が外反する甕である。145は台付鉢の脚部、146は頸部と胴部の境界に粘土帯を貼り付け、その上に刻目文を施す。器壁は約4cm弱とかなり厚く、大型の壺と考えられる。

### ・SX01 出土土器 (第36図 147・148, 第37図 149～153)

147は大きく外反する口縁端部に刻目文を、口縁内面に羽状文を施す壺である。頸部には隆帯



を巡らし、その上に格子状刻目文を施す。外面全体に赤彩を施すが、内面は口縁部にのみ赤彩を施す。148は口縁に面を持つ甕で、頸部から肩部にかけて炭化物が付着している。149は非クロク整形の土師器皿である。150・151は面を持つ口縁の甕であり、151は口縁に面を持ちに擬凹線文を施す。152は高坏坏部である。全体的に丁寧なミガキ調整を行っている。153は外反する口縁端部に刻目文を施す甕である。胴部外面中央部及び底部内面周辺に炭化物が付着している。

・包含層出土土器（第38図154～156）

154は胴部がやや張りを持ち、頸部から口縁部にかけて直立する甕である。口縁端部に稜を持つ。155は口縁部が強く外反する高坏坏部である。外面は保存状態が悪く明瞭ではないが、内面は横方向を基本としたハケメ調整が確認できる。156は透孔がある器台脚部で、外面はハケメ調整だが、内面はケズリ調整も行っている。

E-1区

・SD01 出土土器（第38図157～159）

157・158は甕で、157は口縁に面を持ち、158は口縁端部を屈曲させている。159は頸部から口縁部が直立する壺である。保存状態が悪く、調整などは明瞭ではない。

・SD02 出土土器（第39図160～180、第40図181）

160から162、164・166・169は甕である。162・164・166は面を持つ口縁に擬凹線文を施す。163・165・167・168は壺口縁部である。163は面を持つ口縁に擬凹線文と棒状浮文を貼り付ける。167は面を持つ口縁に擬凹線文を施す。170・171は高坏坏部で、171は口縁に面を持ち、外面横方向のミガキ調整を行う。172は長細頸壺の口縁部で、外面はミガキ調整、内面はハケメ調整を行う。173は開脚高坏の坏部とみられる。174は鉢で、特に施文はなくミガキ調整を行っている。176は壺の胴部で、把手が付いていたものとみられる。175・177はそれぞれ有紐蓋とみられる。178は高坏の脚部、179は有紐蓋、180は台付鉢の脚部である。181は古代の須恵器壺口縁部である。上層からの混入と考えられる。

・SD05 出土土器（第40図182～184）

182は有段口縁の甕もしくは壺で、口縁下端に刻目文を施す。184は有段口縁の壺で、擬凹線文を施す。内面には丁寧にハケメ調整を行っている。183は蓋か。

・SD08 出土土器（第40図185）

口縁端部から内面にかけて刻目文を施し、波状口縁を呈する甕である。内外面ハケメ調整であるが、内面はハケメ調整の後、ナデ調整を行っている。

・SD09 出土土器（第40図186・187）

186は甕または壺の、187は小型の壺底部である。

・SD11 出土土器（第40図188）

高坏の脚部である。脚裾端部に面を持ち2連の円形浮文を貼り付ける。

・SK02 出土土器 (第 40 図 189 ~ 192)

それぞれ甕になるかとみられる。189・192 は「く」の字状に屈曲する甕で、190・191 は口縁に面を持ち、擬凹線文を施す。192 は口縁部を上に向けた状態で出土した。頸部から胴部の中程と、内面の底部周辺に炭化物が付着している。

・包含層出土土器 (第 41 図 193 ~ 206, 第 42 図 207 ~ 227)

193・196・197・200・201・202・206・212 は甕である。197 と 212 は「く」の字状に屈曲する甕で、197 は口縁端部から内面にかけて刻目文を施し、波状口縁を呈す。193・196・200・206 は口縁に面を持つ甕で、193・201・202・206 は口縁部に擬凹線文を施す。203・205、207 から 211、214 は壺である。203 は口縁部に擬凹線文を巡らし、口縁端部及び内面に刺突文を施す。209 はやや内湾する口縁部に擬凹線文を、その下に刻目文を施す。211 は口縁部に擬凹線文を施す。205 は口縁にやや厚めの面を成形している。213 は把手付の坏である。215 は埴とみられる。216 は鉢で、口縁部に 2 連の穿孔を行う。204・217 は鉢とみられる。内外面ともハケメ調整。218 は埴の胴部である。内面ケズリ調整である。219 から 221 は高坏坏部である。222 は穿孔を行う甕の底部である。223 から 227 は高坏脚部である。223 は透孔がある。

E-2 区

・SD01 出土土器 (第 43 図 228)

228 は口縁部が直立する壺で、口縁端部に面を持つ。

・SD02 出土土器 (第 43 図 229 ~ 235)

229 は口縁部が大きく外反する壺である。口縁内面には格子状の刻目文を施す。230 は甕で口縁内面には羽状文を施す。頸部から胴部にかけては内外面ともハケメ調整である。231 は 230 と同様の施文及び調整である。232 は甕である。233 は口縁端部がやや内湾する甕である。234 は口縁に面を持ち、2 連の穿孔を行う台付鉢である。235 は高坏の坏部である。

・SD03 出土土器 (第 43 図 236 ~ 238)

236 は甕で、口縁部は無文、胴部内外面はハケメ調整である。237 は高坏脚部である。脚裾上部に沈線文及び刺突文を施し、透孔を施す。238 は鉢とみられ、外面はミガキ調整である。

・SK01 出土土器 (第 43 図 239)

大きく外反する口縁の壺である。口縁内面に羽状文を施す。

・SK02 出土土器 (第 44 図 240)

内外面ともハケメ調整の甕である。

・SP03 出土土器 (第 44 図 241・242)

241 は口縁頂部に面取りを行っている壺である。242 は口縁に面を持つ甕である。厚さ 5mm 弱と薄い。口縁部は無文である。

・包含層出土土器 (第 44 図 243 ~ 256)

243・247・249・251 は甕である。243・247・249 は口縁に面を持つ甕で、247・249 は擬凹線

文を施す。251は「く」の字状に屈曲する甕である。244・248・250は口縁に面を持つ壺である。250は口縁に刻目文を施している。245は台付鉢の脚部である。246は甕もしくは壺の底部で、底部周辺まで丁寧にハケメ調整を行っている。252は有紐蓋である。253は高坏である。坏部から脚部にかけて、丁寧なミガキ調整を行っている。254は高坏脚部で、透孔を施す。255・256はそれぞれ高坏の脚部である。

### E-3 区

#### ・SD06 出土土器 (第45図 257・258)

いずれも須恵器で257は壺口縁部で、口縁端部をやや肥厚させている。258は坏とみられる。

#### ・SD07 出土土器 (第45図 261・262)

261は口縁部がやや大きく外反する甕である。頸部はやや肥厚させている。262は鉢で、外面はミガキ調整、内面はハケメ調整の後、ミガキ調整を行っている。

#### ・SD10 出土土器 (第45図 259・260・263)

259は口縁部を外反させる甕である。260は口縁部に羽状文を施し、頸部から口縁部にかけて直立する壺である。口縁端部は内湾する。外面ハケメ調整である。263は口縁部をやや外反させる甕である。

#### ・SD11 出土土器 (第45図 264・265)

264は口縁端部をやや外反させる壺とみられる。外面はハケメ調整である。265は口縁に面を持つ壺とみられる。口縁部には格子状の刻目文を施す。

#### ・SD12 出土土器 (第45図 266～269, 272～276)

266は「く」の字状に屈曲させる甕である。267は床面より出土した口縁部が直立する壺である。外面はハケメ調整で、胴部内面は横方向のケズリ調整、底部にかけては指頭圧痕がみられる。268は「く」の字状に屈曲する壺である。269は頸部から口縁部にかけて外反する丸底埴で、胴部は横方向にケズリ調整である。272は高坏坏部である。273・275は口縁部が外反する甕である。273は頸部と口縁部に土器接合帯がみられる。274は口縁に面を持つ甕である。276は丸底埴で、内外面とも丁寧なミガキ調整を行っている。

#### ・SD13 出土土器 (第45図 270)

口縁部がやや外反する壺である。

#### ・SK01 出土土器 (第46図 277～279)

277は口縁部を上に向けた状態でSK01床面より出土した胴部の張る壺である。保存状態は良好で、胴部下半から底部にかけて黒斑がみられる。全体的にミガキ調整を行っている。278もやや胴部が張る壺とみられ、外面はハケメ調整である。277・278とも古墳時代前期になるか。279は口縁部がやや外反する壺である。内面は丁寧なハケメ調整である。

#### ・包含層出土土器 (第45図 271, 第46図 280～286)

271は全面ハケメ調整の小型壺である。280は有段口縁の甕口縁部で、擬凹線文を施す。282

は口縁部がやや肥厚する甕である。283 は口縁内面に炭化物が多量に付着している高坏もしくは器台である。281・284 は甕口縁部である。281 は面を持つ口縁で、口縁端部を内湾させ擬凹線を施す。284 は「く」の字状に屈曲する壺で、口縁内面には靱殻とみられる圧痕が確認できた。285 は高坏脚部で 286 は裾部を強く屈曲させ透孔を施す高坏脚部である。

#### E-4 区

・SD01 出土土器（第 47 図 287～299，第 48 図 300～307，第 49 図 308～312，第 50 図 313～327，第 51 図 328～335）

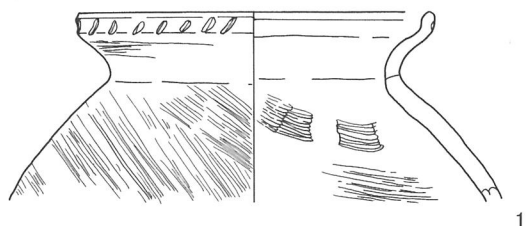
287 から 300 は「く」の字状に屈曲する甕の口縁部である。287 は口縁端部を面取りしている。290 から 292 は頸部と口縁部の接合帯が確認できる。300 は頸部から口縁部の屈曲が強い。調整は全てハケメ調整である。301 から 303、305・307 も同様に甕である。301 から 303、305 は 300 と同様、頸部から口縁部の屈曲が強い。303 は口縁部を若干屈曲させ、頸部の屈曲部分はその他の土器と比べて内面に大きくせり出している。305 は頸部外面から下部分と底部内面周辺に炭化物が多量に付着している。307 は口縁部を強く屈曲させる甕である。口縁端部に刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。頸部には櫛描文、その下に 2 列の刺突文を施す。施文原体は全て同じである。304 は口縁部を外反させる壺である。頸部はハケメ調整であるが、胴部はケズリ調整である。306 は 304 と同様、壺の口縁部であるが、口縁端部をやや外反させている。308 及び 309 は大型壺の口縁部である。308 は口縁部を直立させる壺である。胴部と口縁部には接合帯が確認できる。309 は頸部から口縁部をやや外反させる壺である。310 から 312 は大型壺の底部とみられる。310 は底部に穿孔を行っており、312 は底部を凹ませている。310 及び 311 はハケメとケズリ調整だが、312 はケズリ調整のみである。それぞれ、器壁も厚く、しっかりとした作りをしている。313 から 327 は高坏の坏部及び脚部である。全て、同時期の一括資料と考えられる。328 はやや成形の荒い小型甕である。調整はハケメ調整であるが、丁寧な調整ではない。329 は丸底柑の完形品で丁寧なミガキ調整を行っている。330 は小型壺の胴部である。331 は壺の口縁部であり、頸部に向かってやや広がっている。332 は有紐蓋である。333 は小形器台の脚部である。334 は鉢である。335 は長頸台付壺で、赤彩などは確認できなかった。

・SD02 出土土器（第 51 図 336・337）

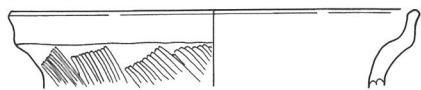
床面より出土した土器である。同一個体と思われるが、接合はできなかった。口縁部をやや外反させる壺で、口縁端部には刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。胴部はハケメ調整であるが、底部周辺になるとミガキ調整となる。

・SK02 出土土器（第 51 図 338）

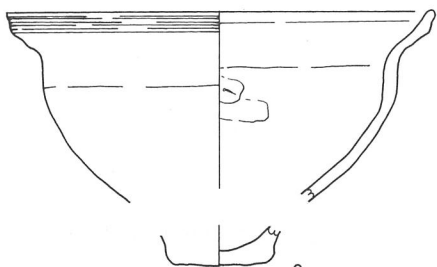
胴部にあまり膨らみを持たずに、頸部から屈曲するタイプの甕とみられる。全面ハケメ調整である。



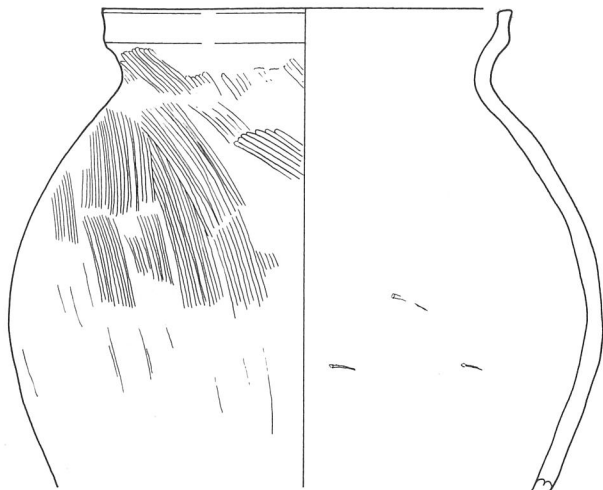
1



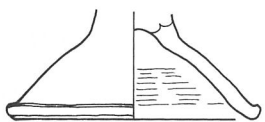
2



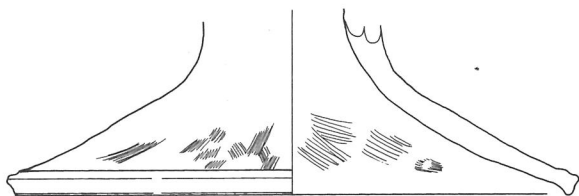
3



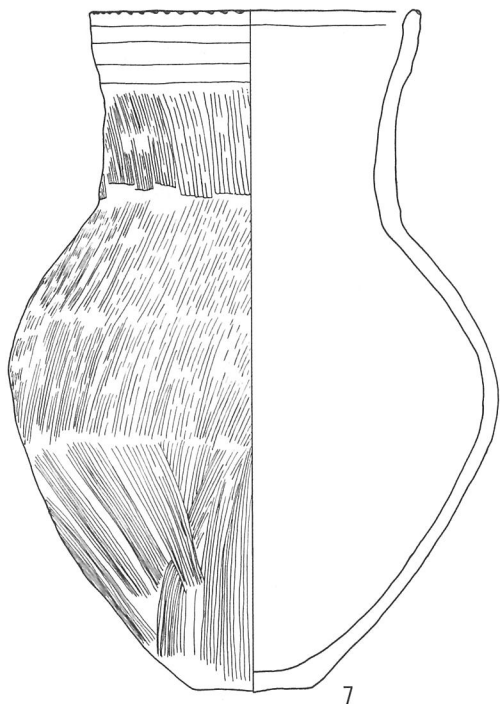
4



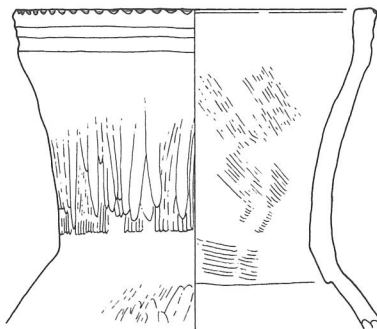
5



6

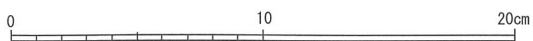


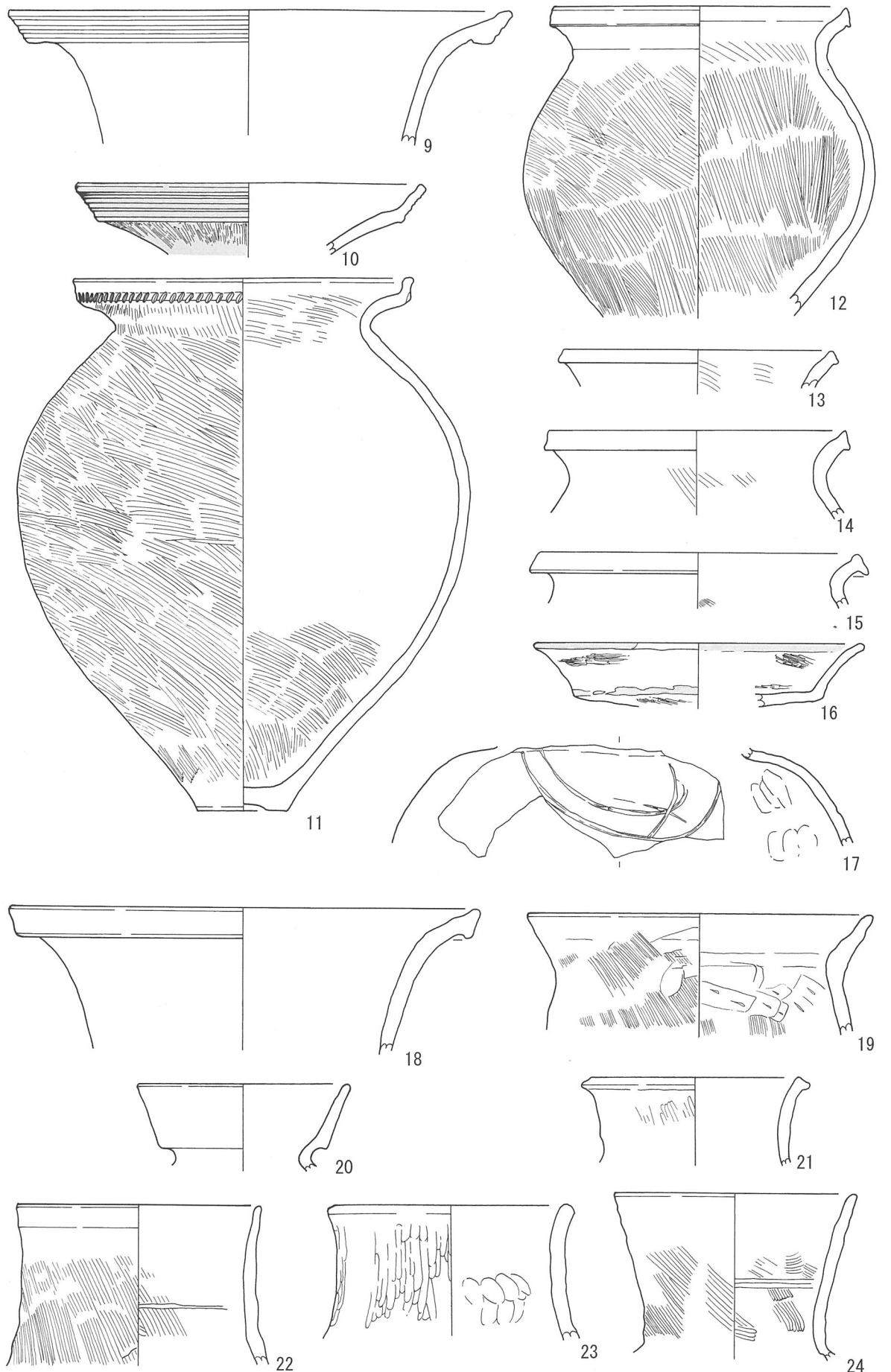
7



8

第 23 図 出土遺物実測図 (S=1/3)  
[C-1 区] 土器溜まり (1~6)・SD06 (7・8)

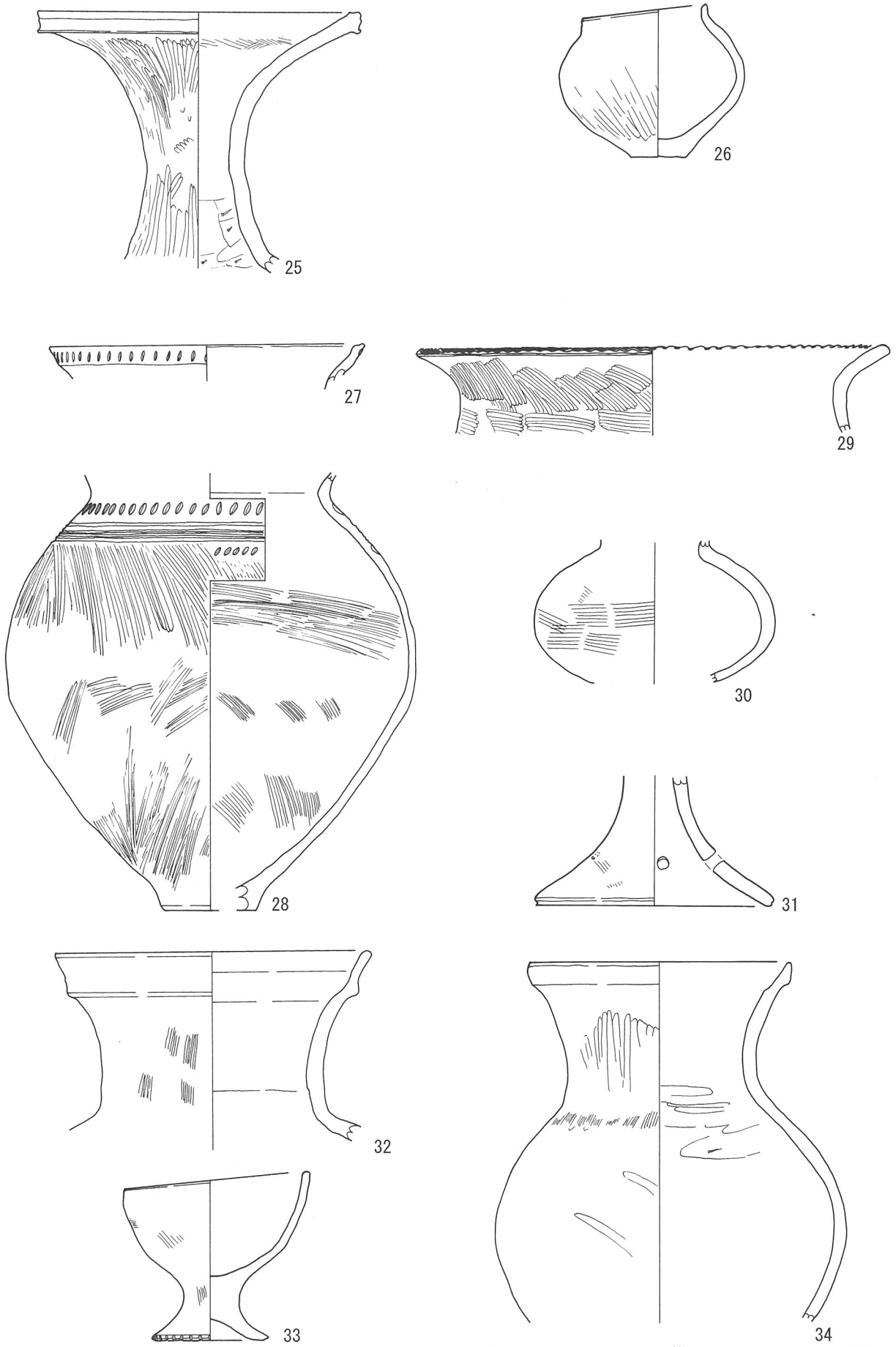




第24图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[C-1区] SD07 ① (9~17)・SD07 ② (18~24)

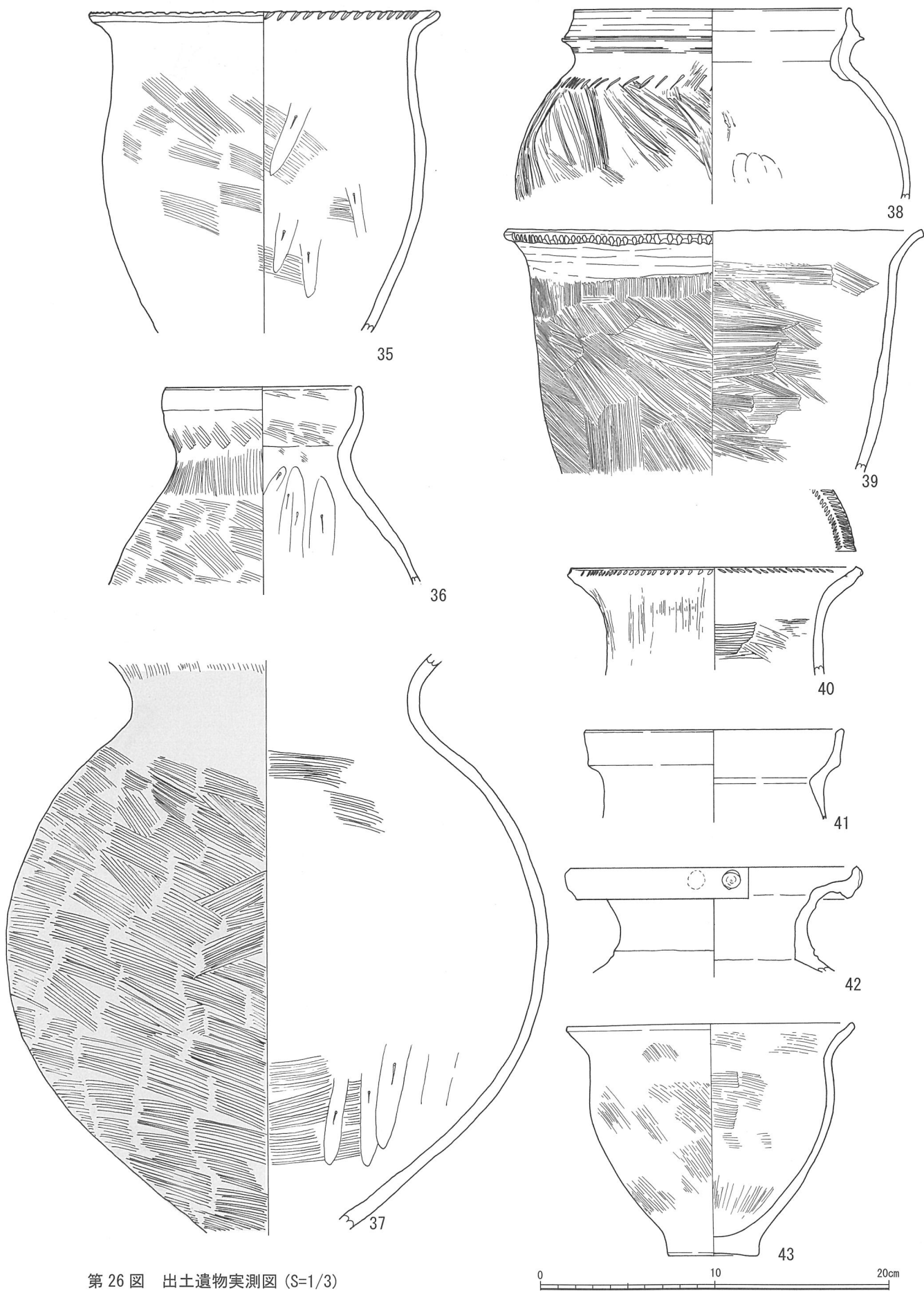
0 10 20cm



第 25 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

[C-1 区] SD07 ② (25)・SX03 (26)・包含層 (27・28)

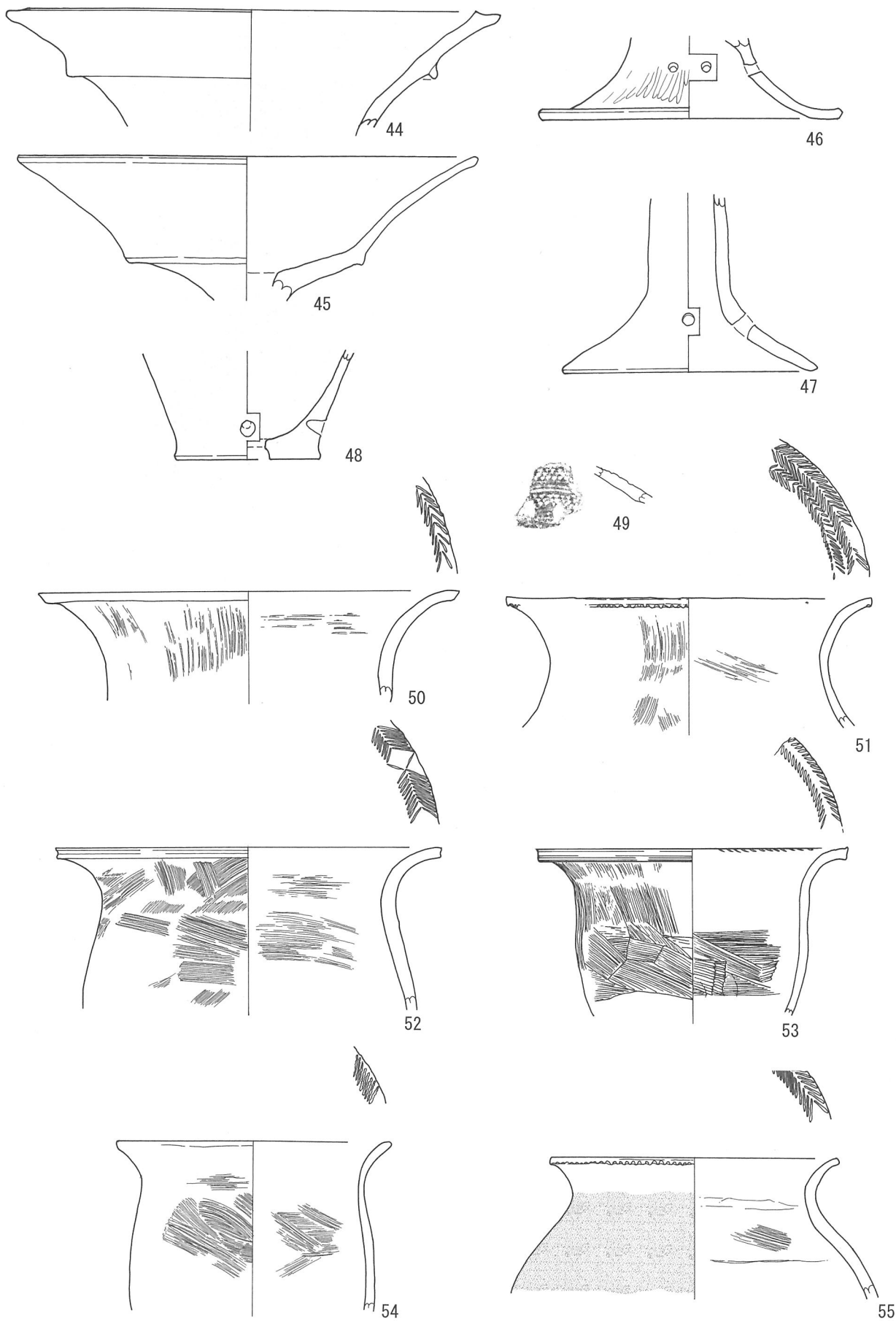
[C-2 区] 土器溜まり (30・31)・SD02 (32)・SD03 (34)・SD05 (33)・SD08 (29)



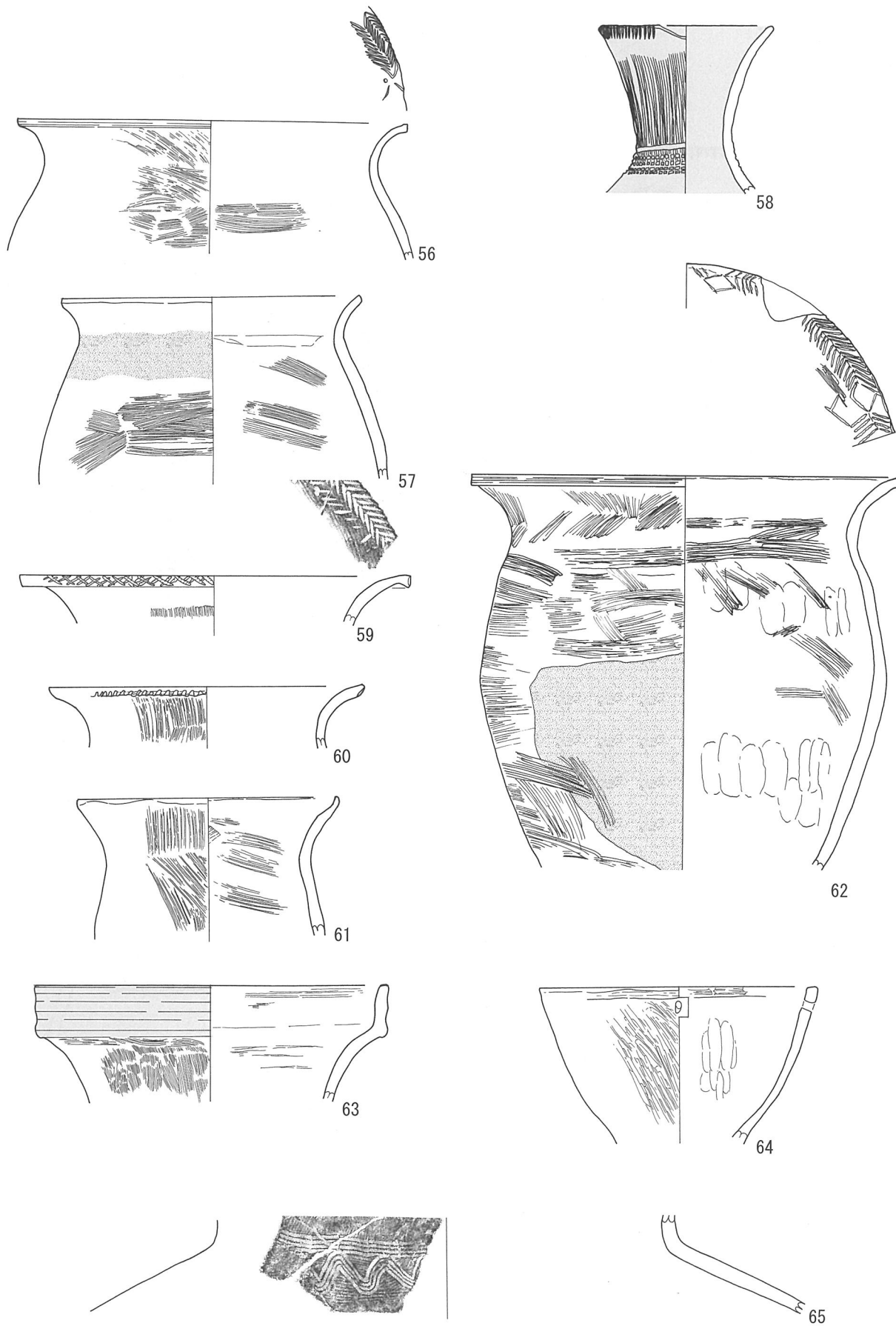
第 26 図 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [C-2 区] SD08 (35 ~ 43)

0 10 20cm



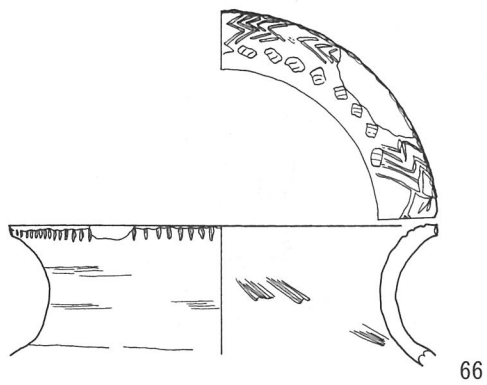


第 27 図 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [C-2 区] SD08 (44 ~ 48) ・ SK01 (49 ~ 55)

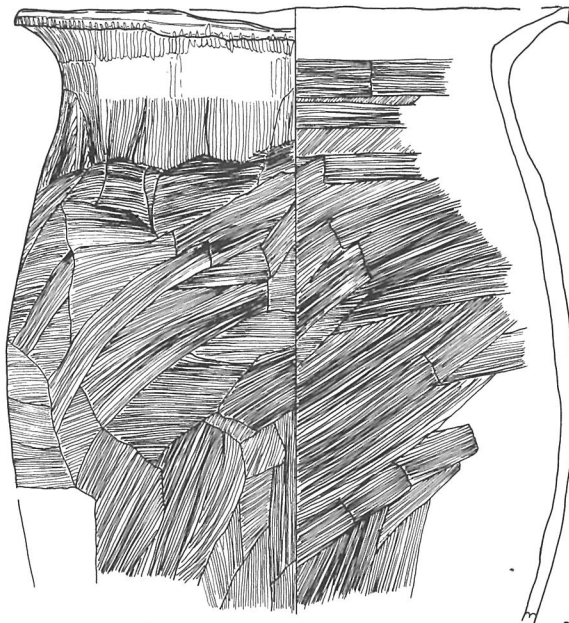
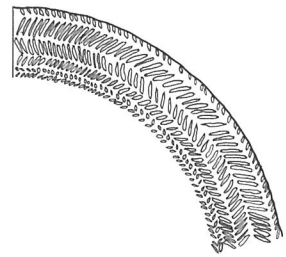


第28図 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [C-2区] SK01 (56~64)・SK05 (65)

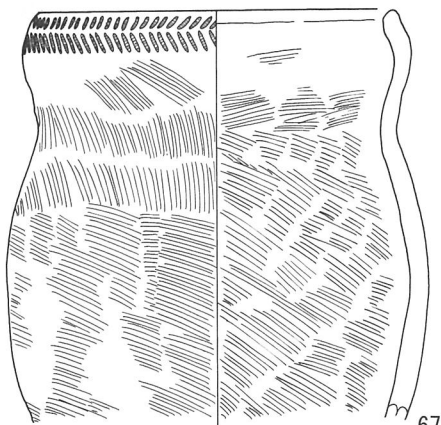
0 10 20cm



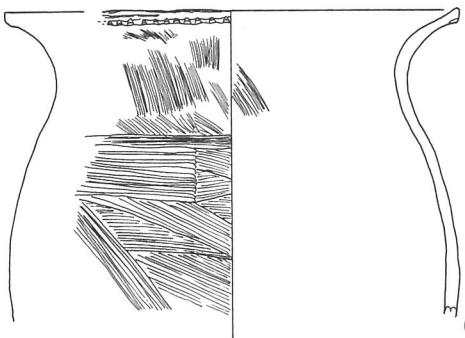
66



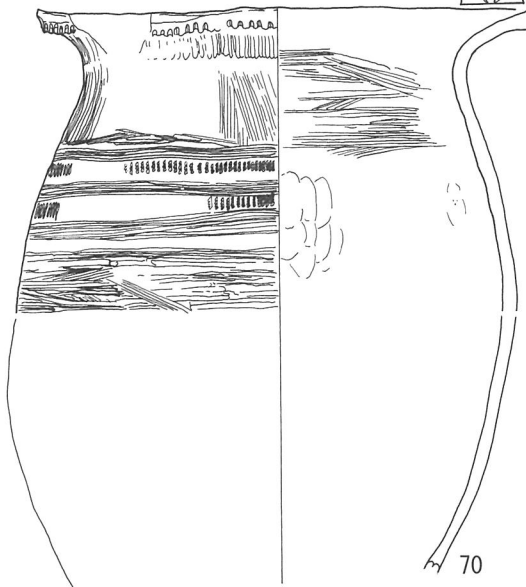
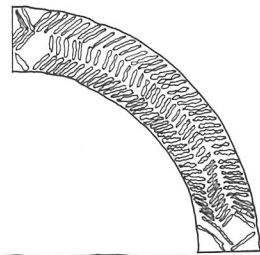
69



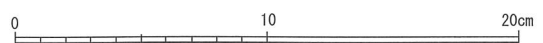
67



68

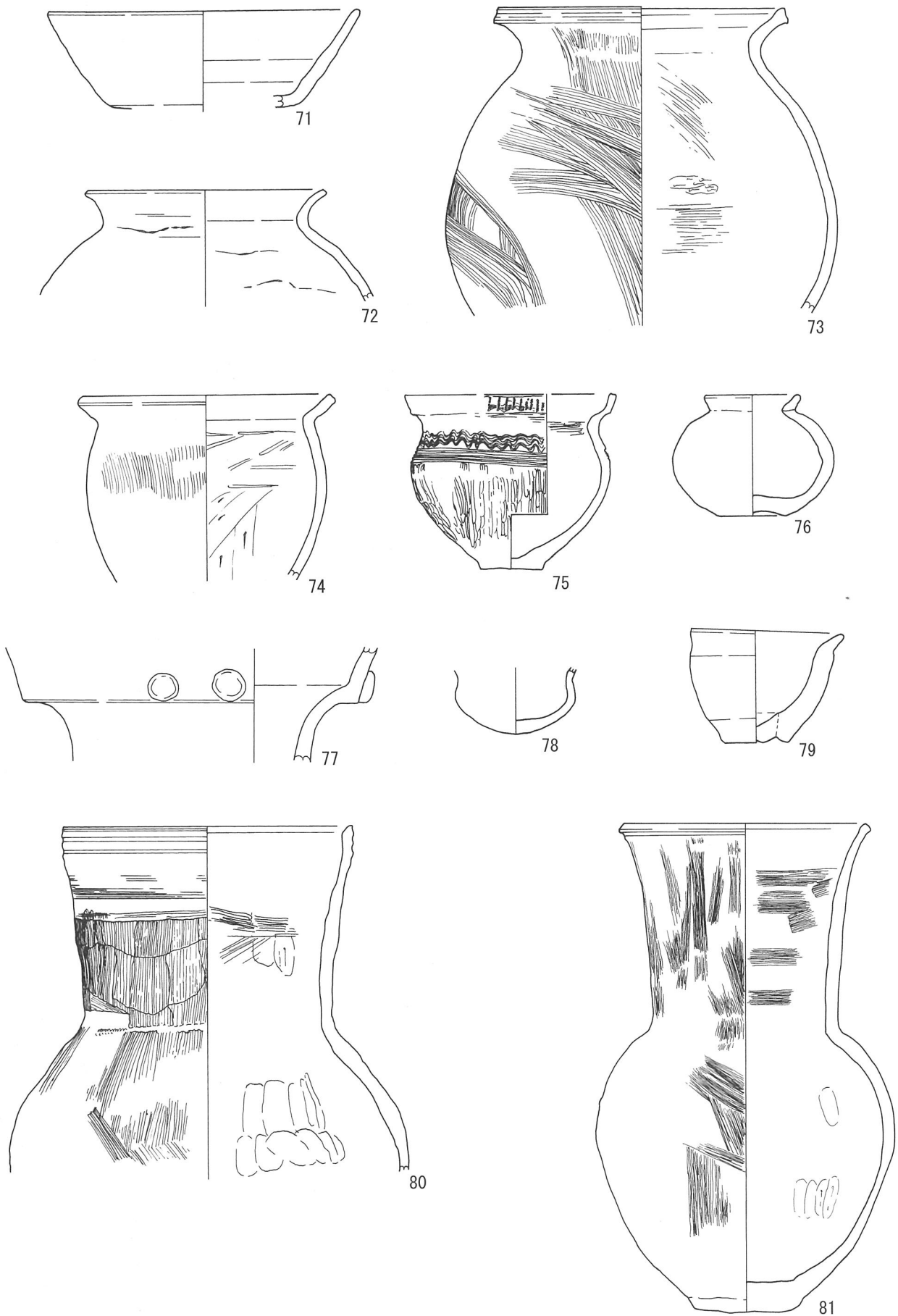


70



第 29 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

[C-2 区] SK05 (66 ~ 70)

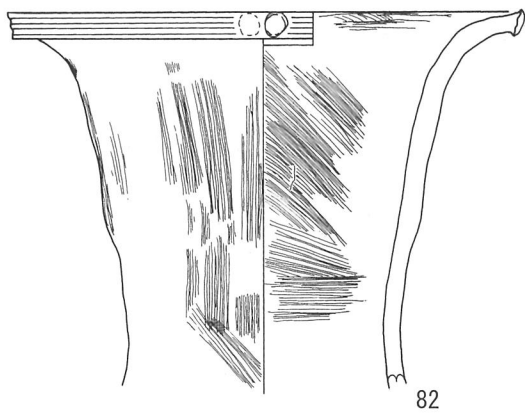


第30図 出土遺物実測図 (S=1/3)

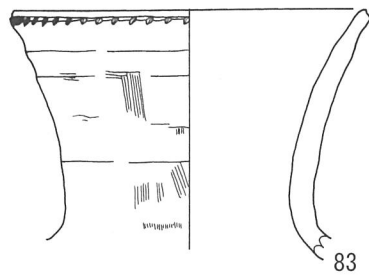
[C-2区] SP04 (71)

[D-1区] 土器溜まり (72~81)

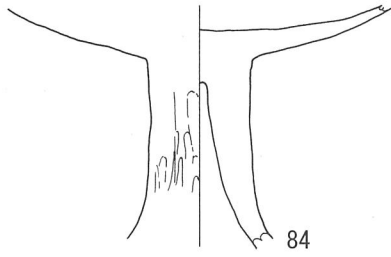
0 10 20cm



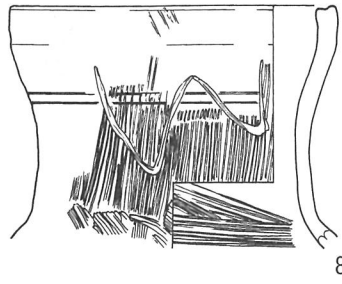
82



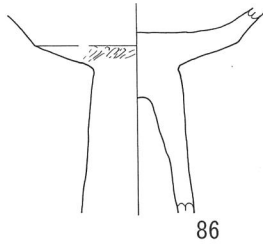
83



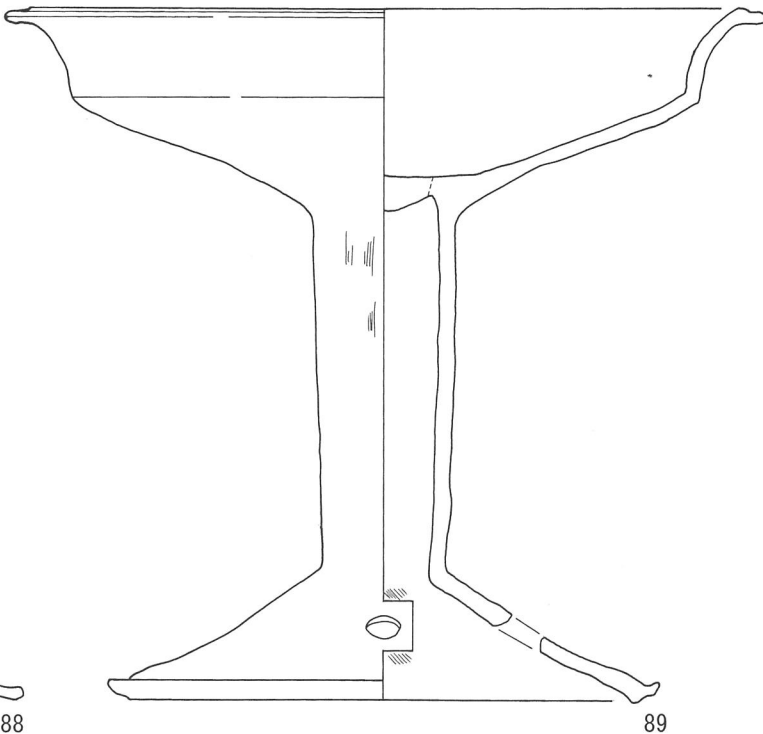
84



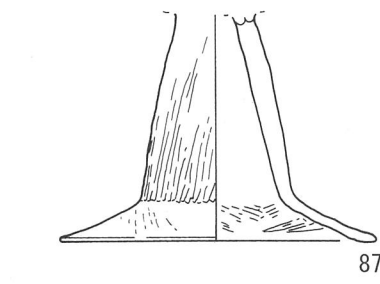
85



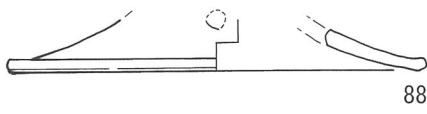
86



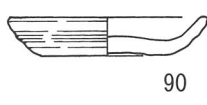
89



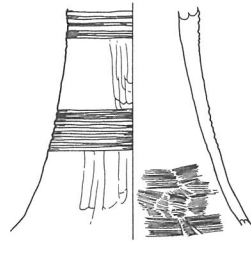
87



88



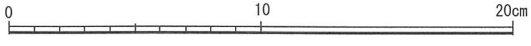
90

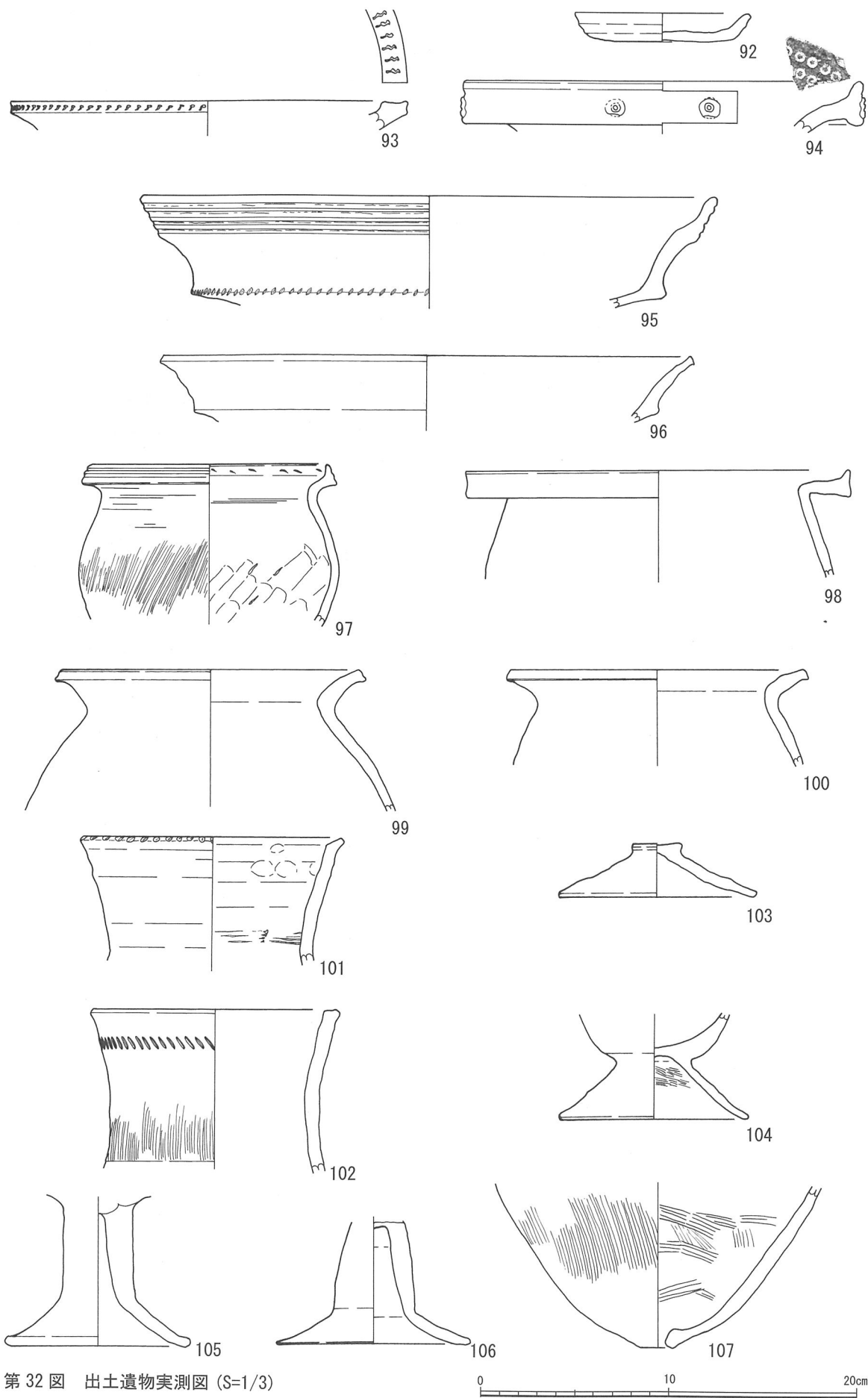


91

第 31 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

[D-1 区] 土器溜まり (82 ~ 89) ・SD14 ・15 (90) ・SX01 (91)

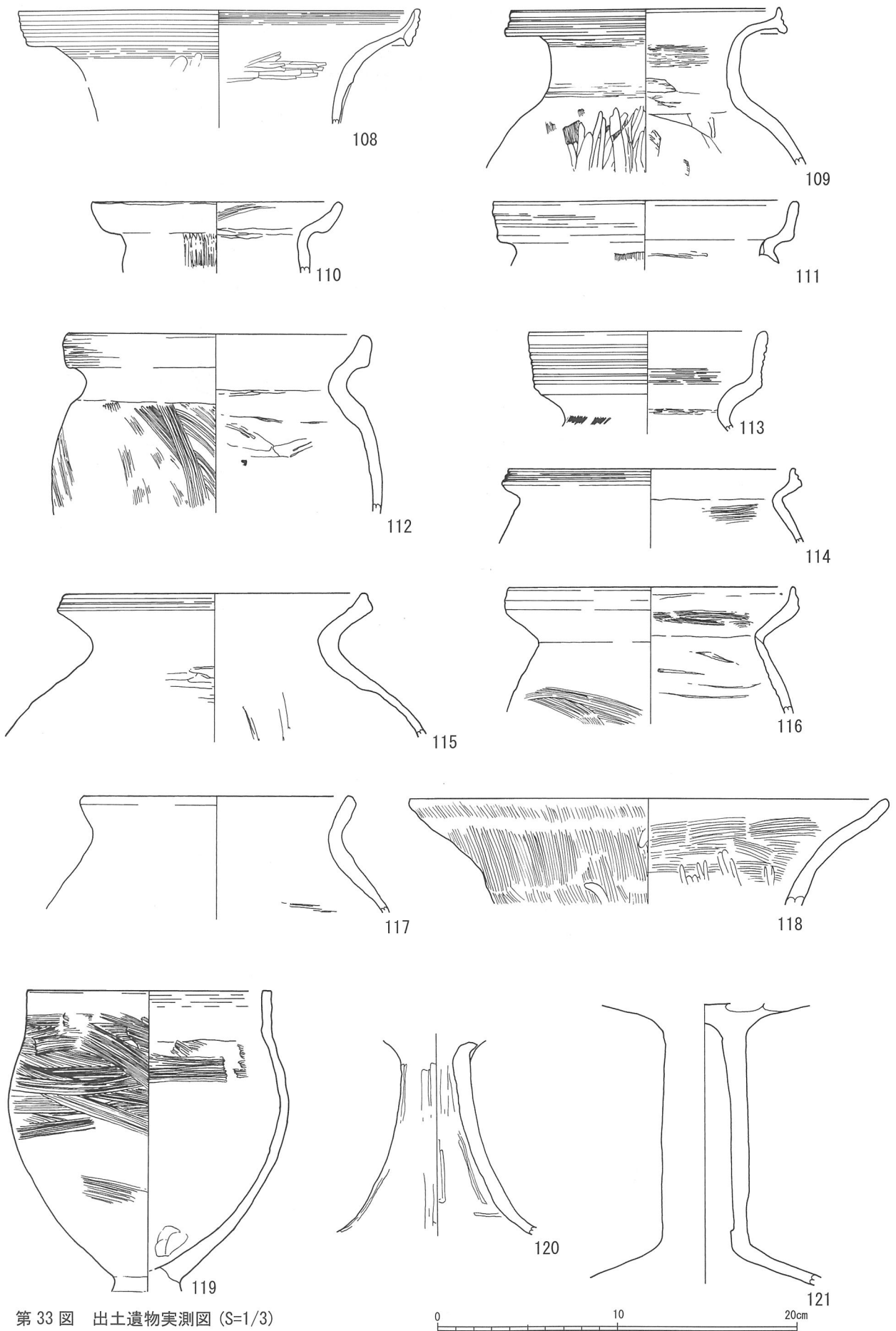




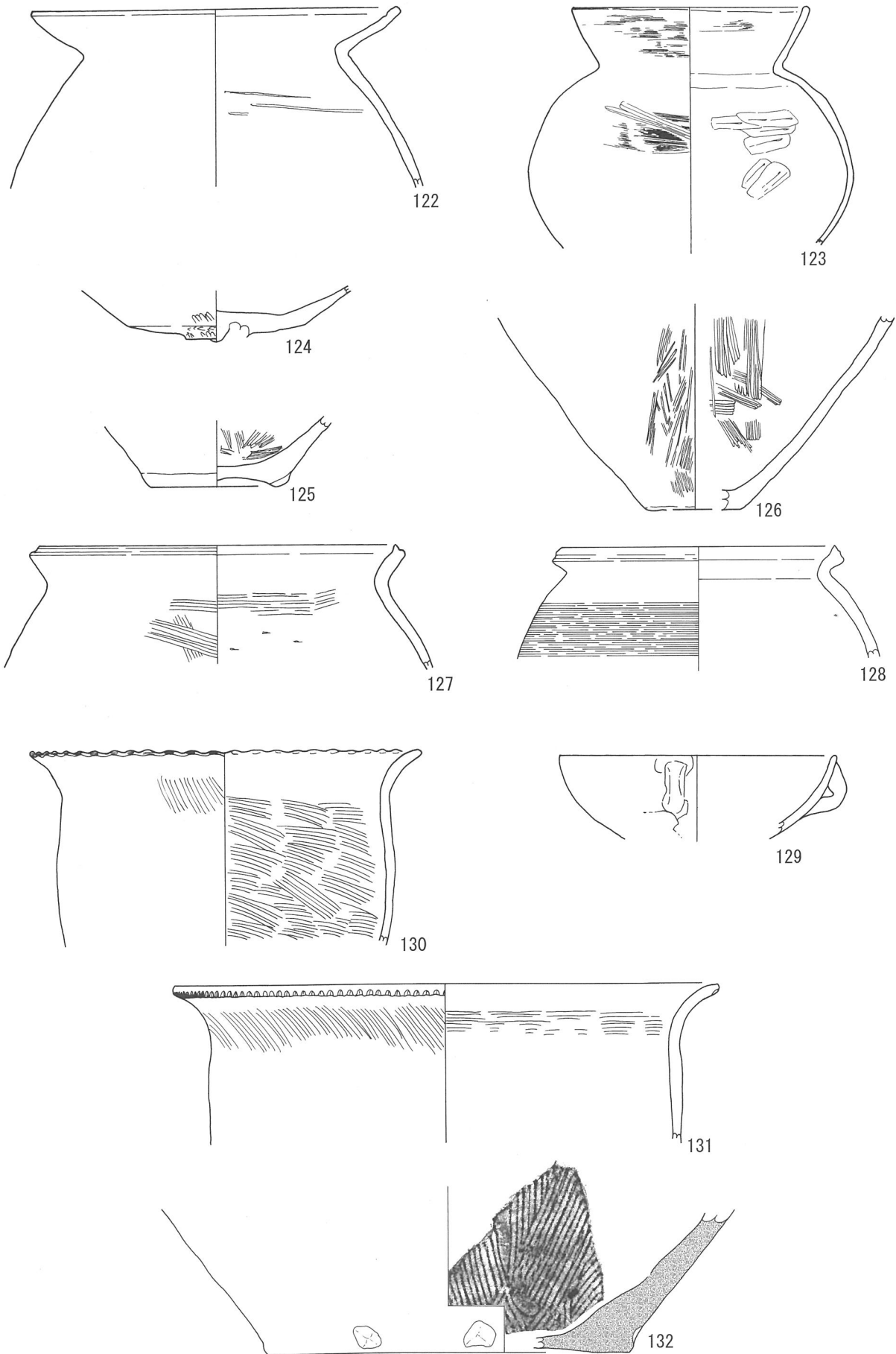
第 32 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

[D-1 区] 包含層 (92 ~ 107)

0 10 20cm



第 33 图 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [D-1 区] 谷 (108 ~ 121)

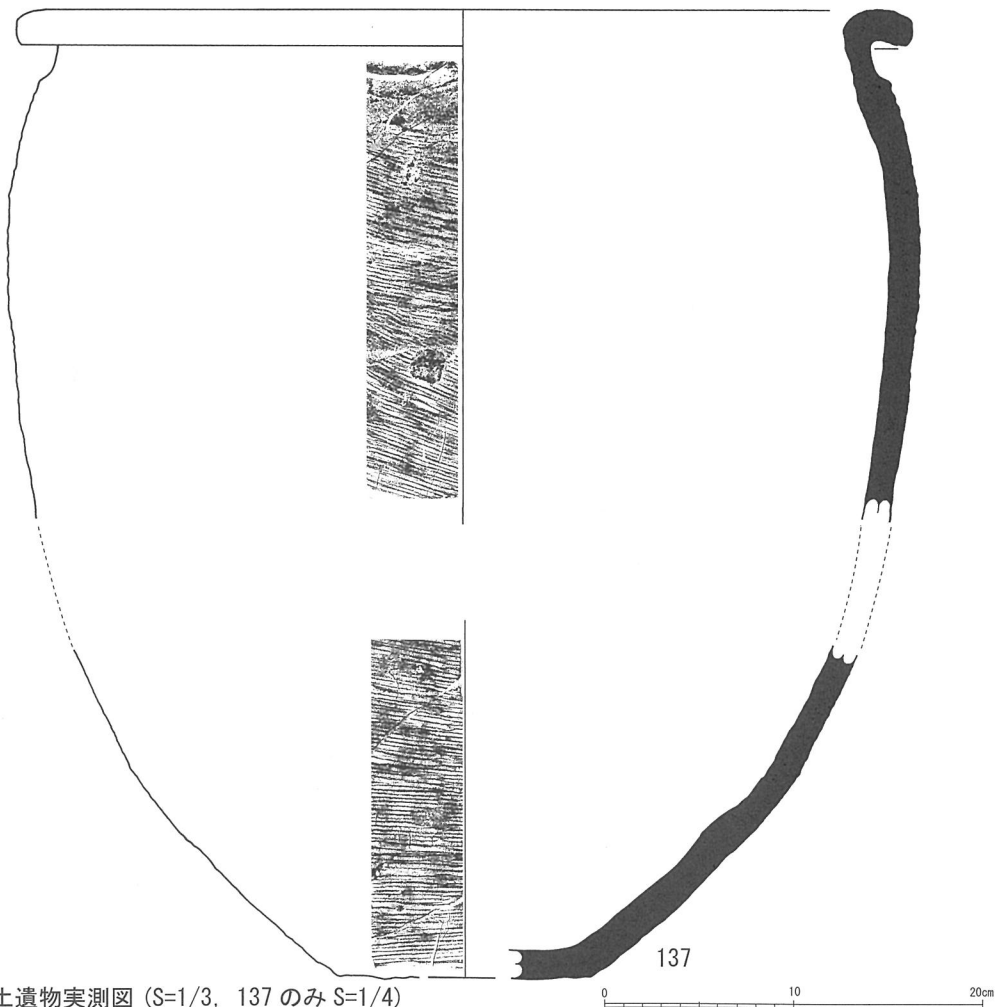
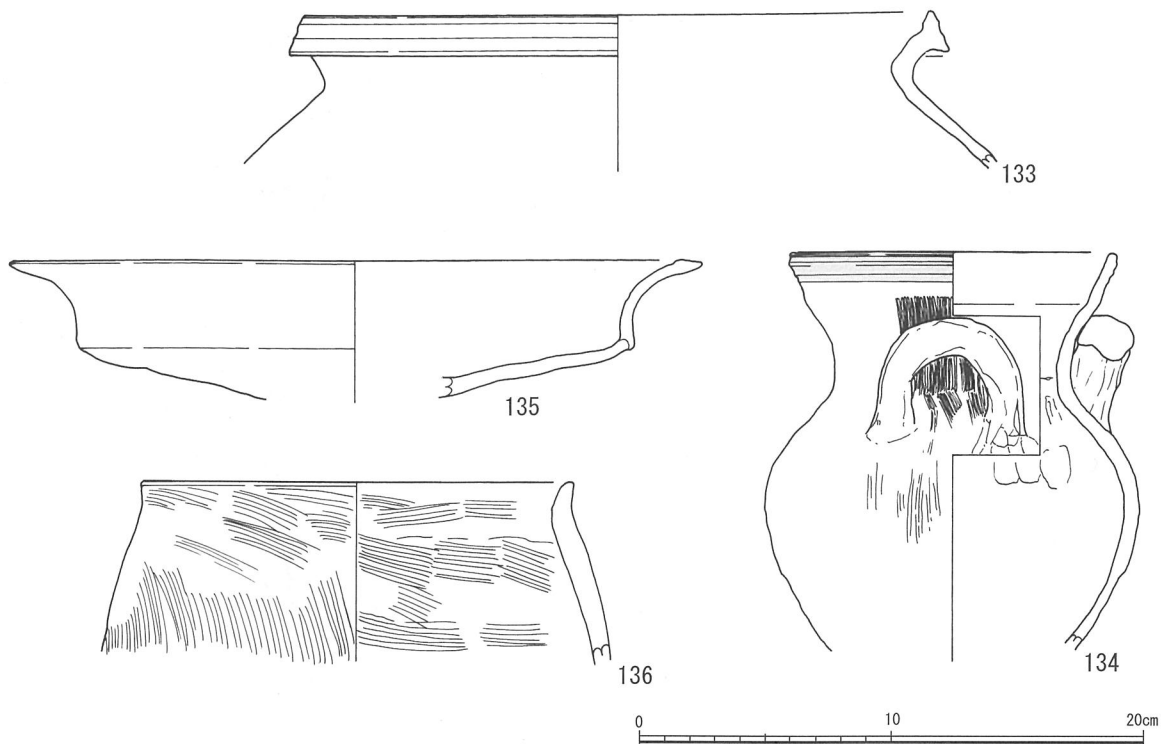


第 34 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

[D-1 区] 谷 (122 ~ 127)

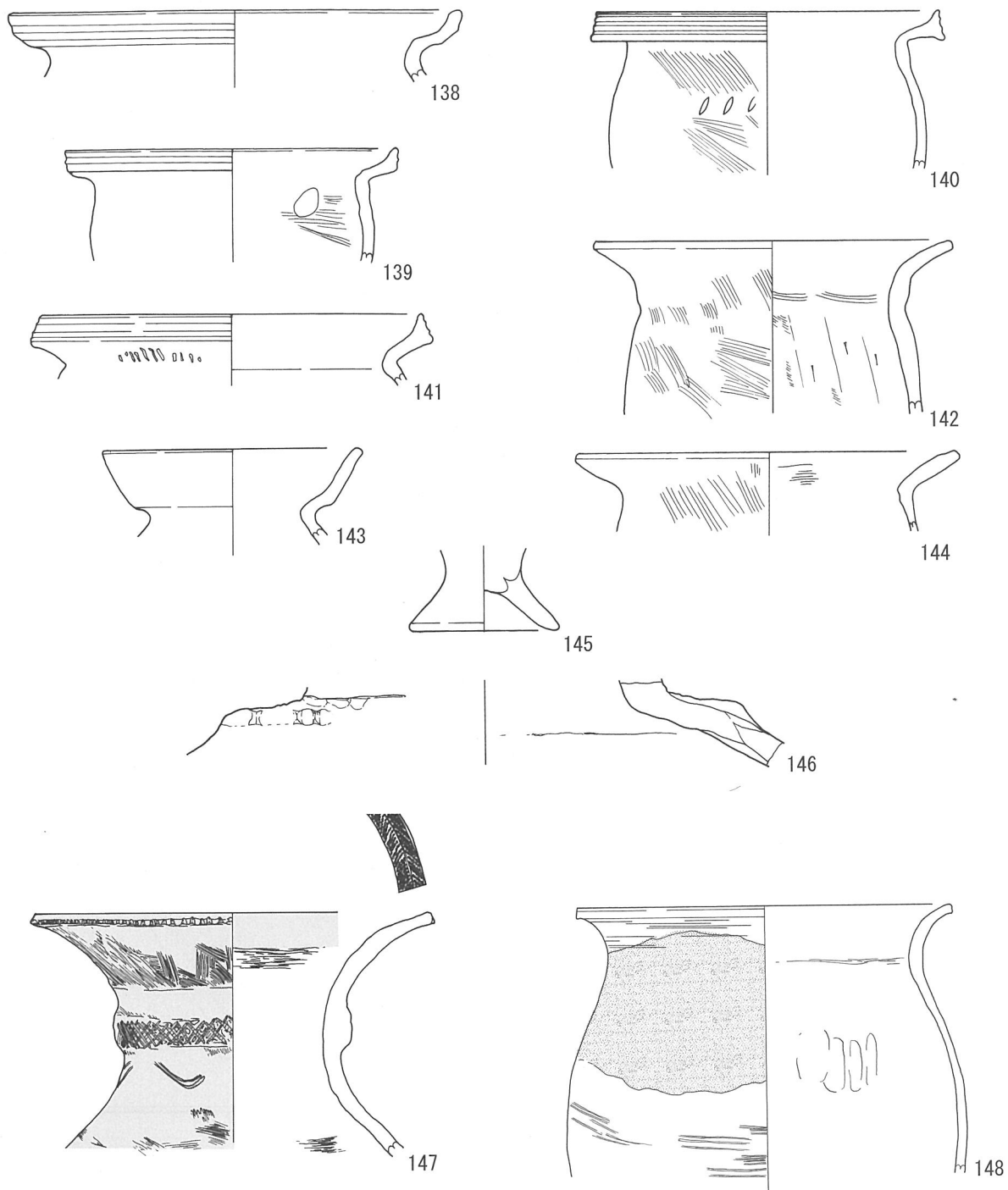
[D-2 区] SD01 (128・129)・SD02 (130 ~ 132)





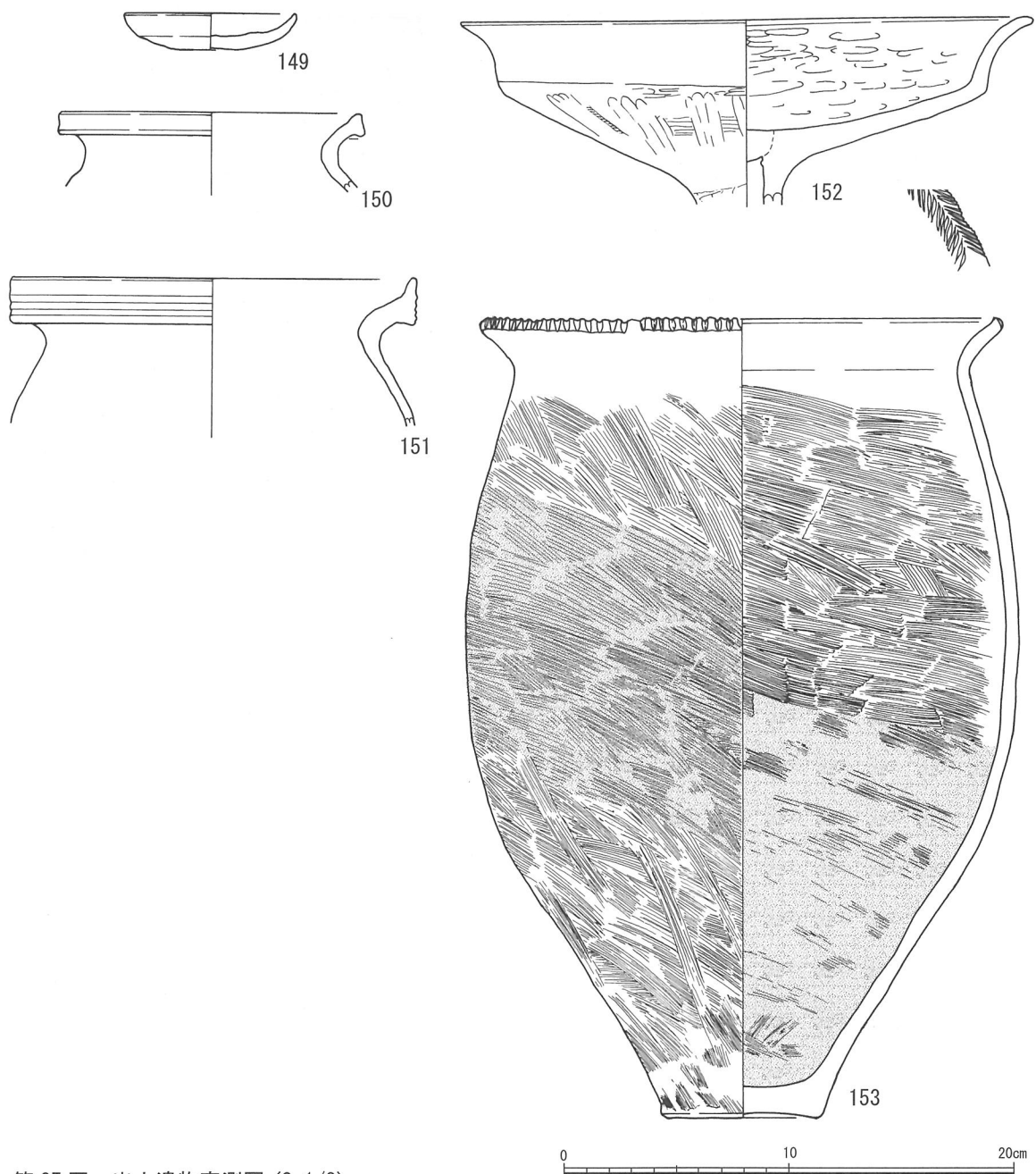
第 35 図 出土遺物実測図 (S=1/3, 137 のみ S=1/4)

[D-2 区] SK02 (134) ・ SK04 (133 ・ 135) ・ SK06 (136) ・ SK07 (137)



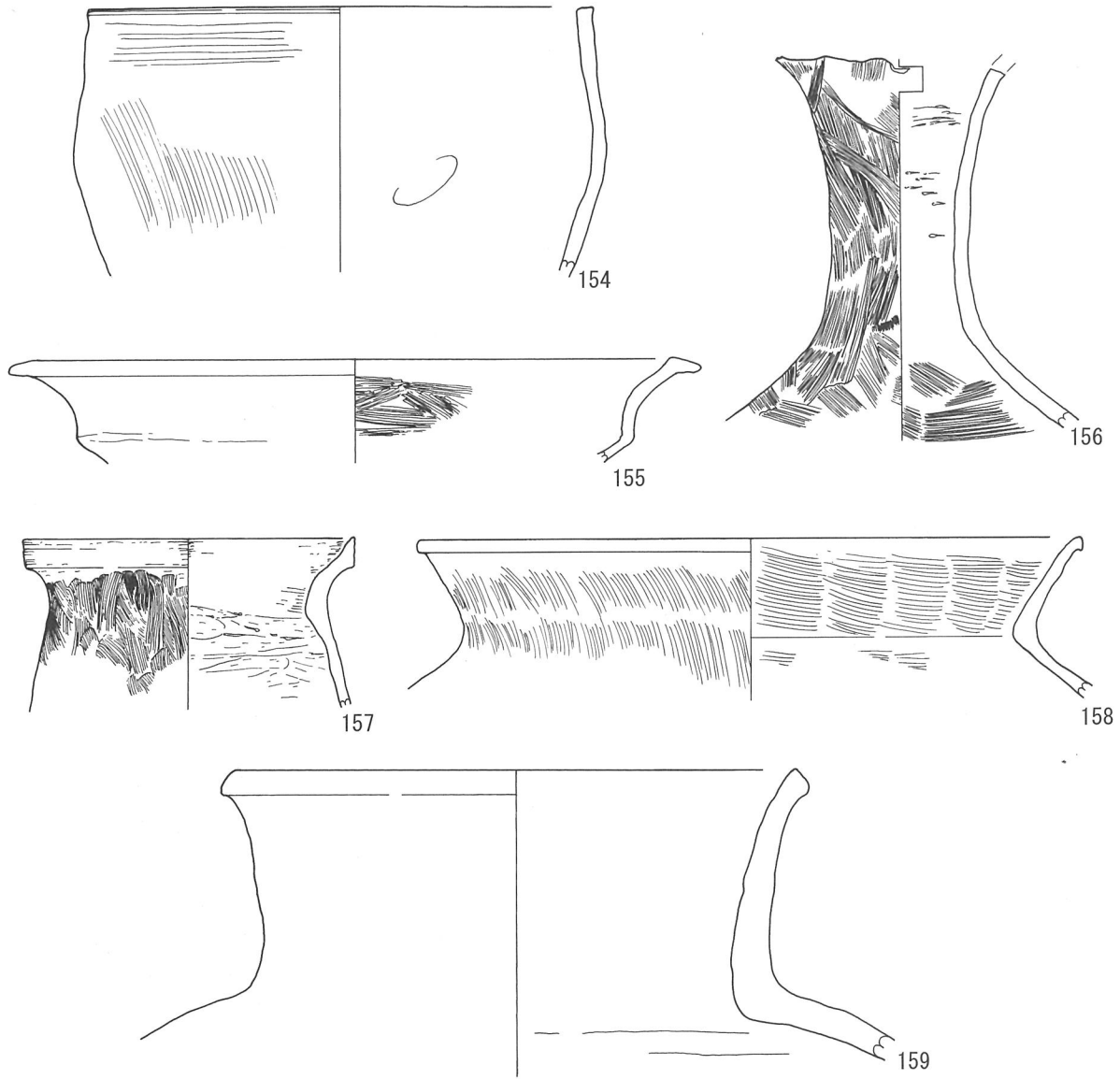
第 36 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

[D-2 区] SK08 (138 ~ 140) ・ SK11 (141 ・ 142) ・ SP43 (143) ・ SP58 (144 ~ 146) ・ SK01 (147 ・ 148)



第 37 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

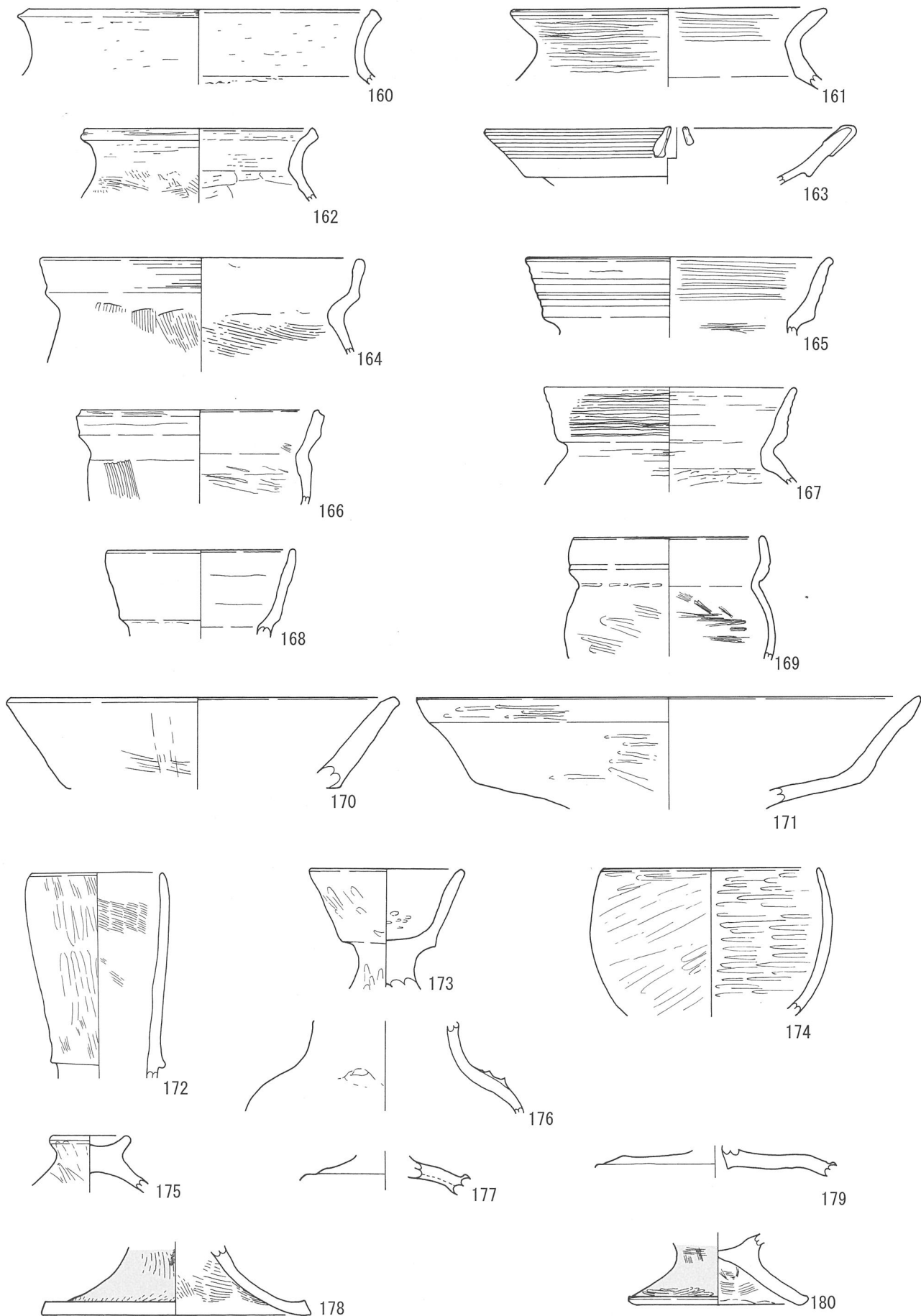
[D-2 区] SX01(149 ~ 153)



第 38 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

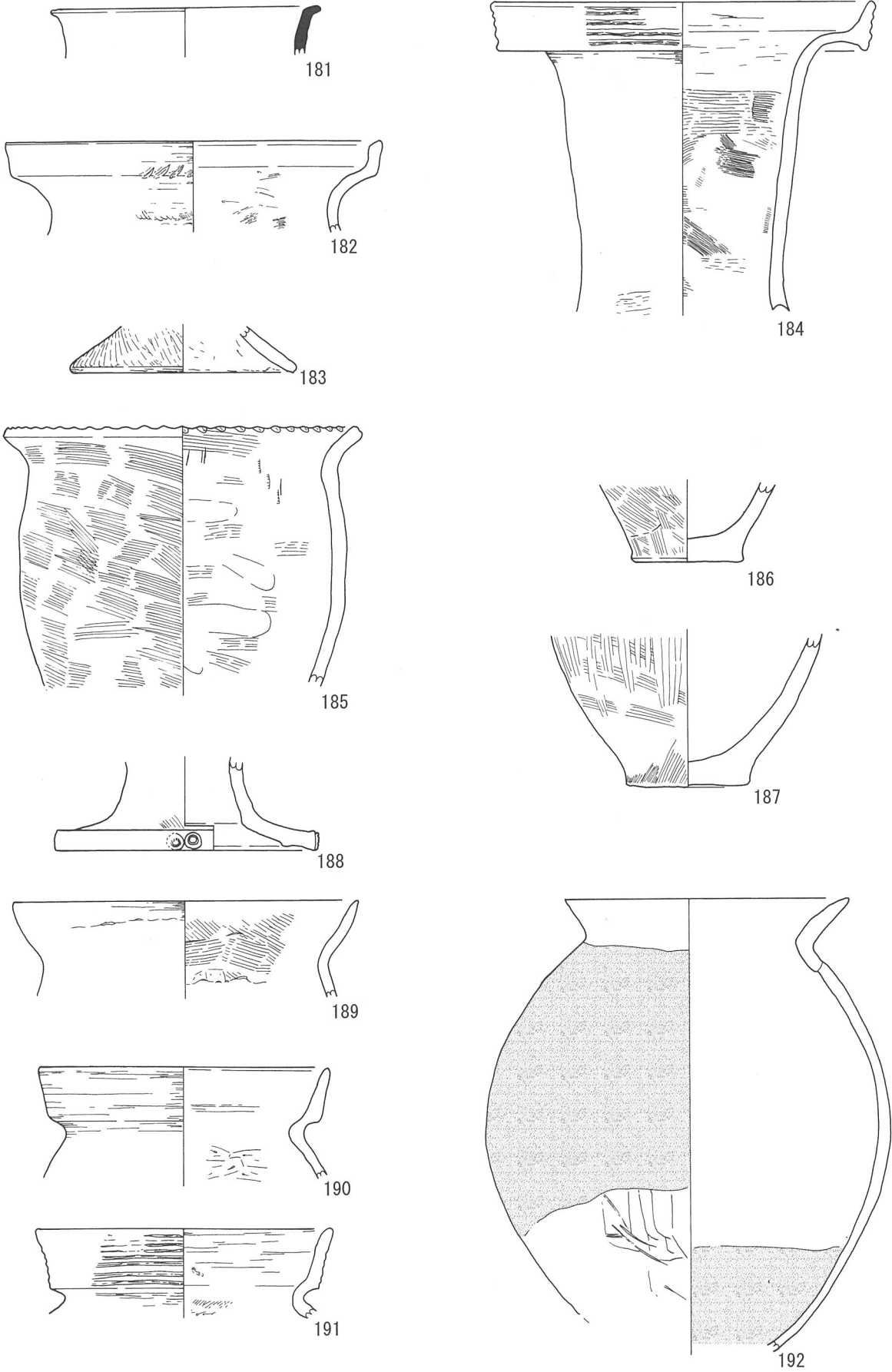
[D-2 区] 包含層 (154 ~ 156)

[E-1 区] SD01 (157 ~ 159)



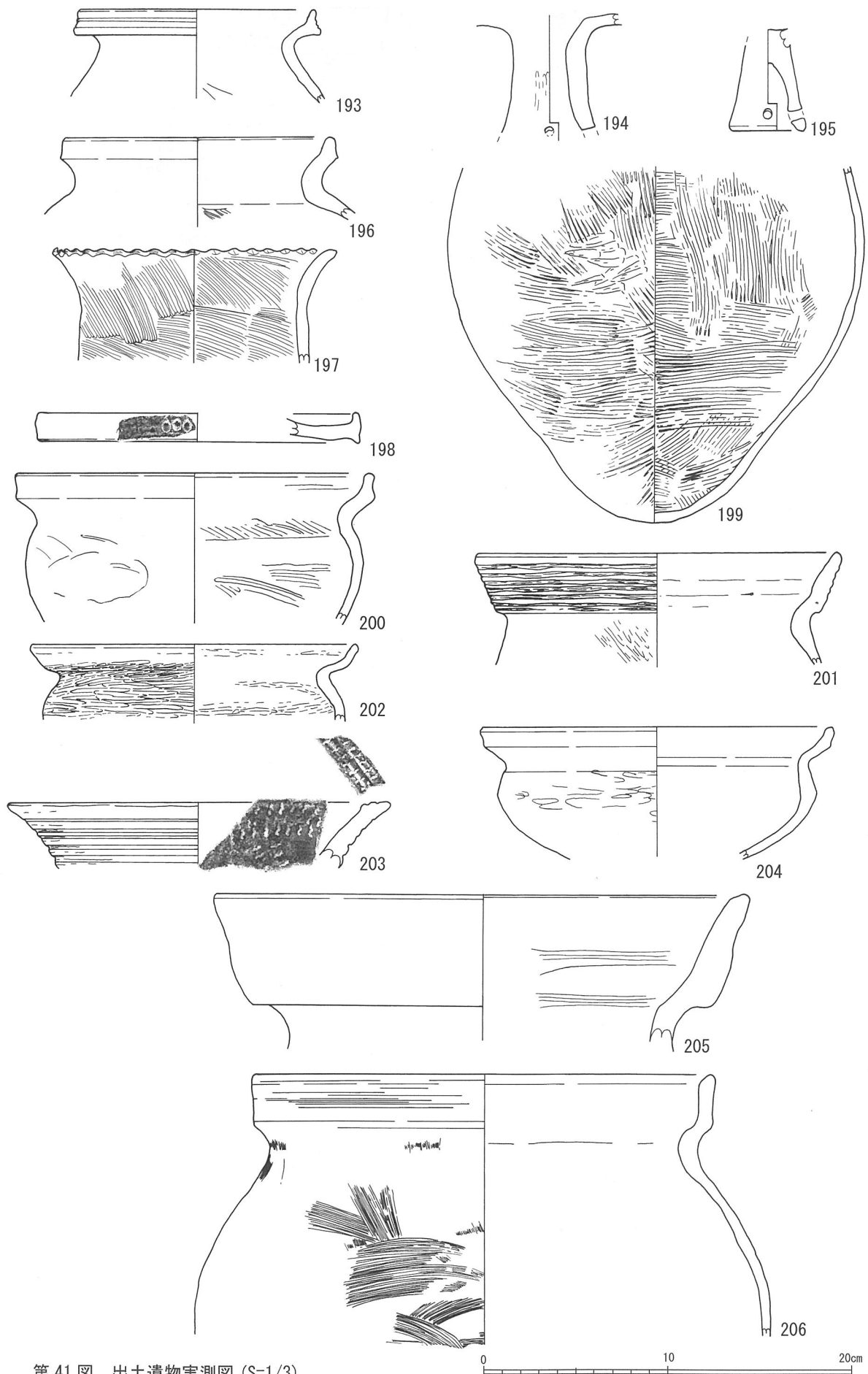
第 39 图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-1 区] SD02 (160 ~ 180)

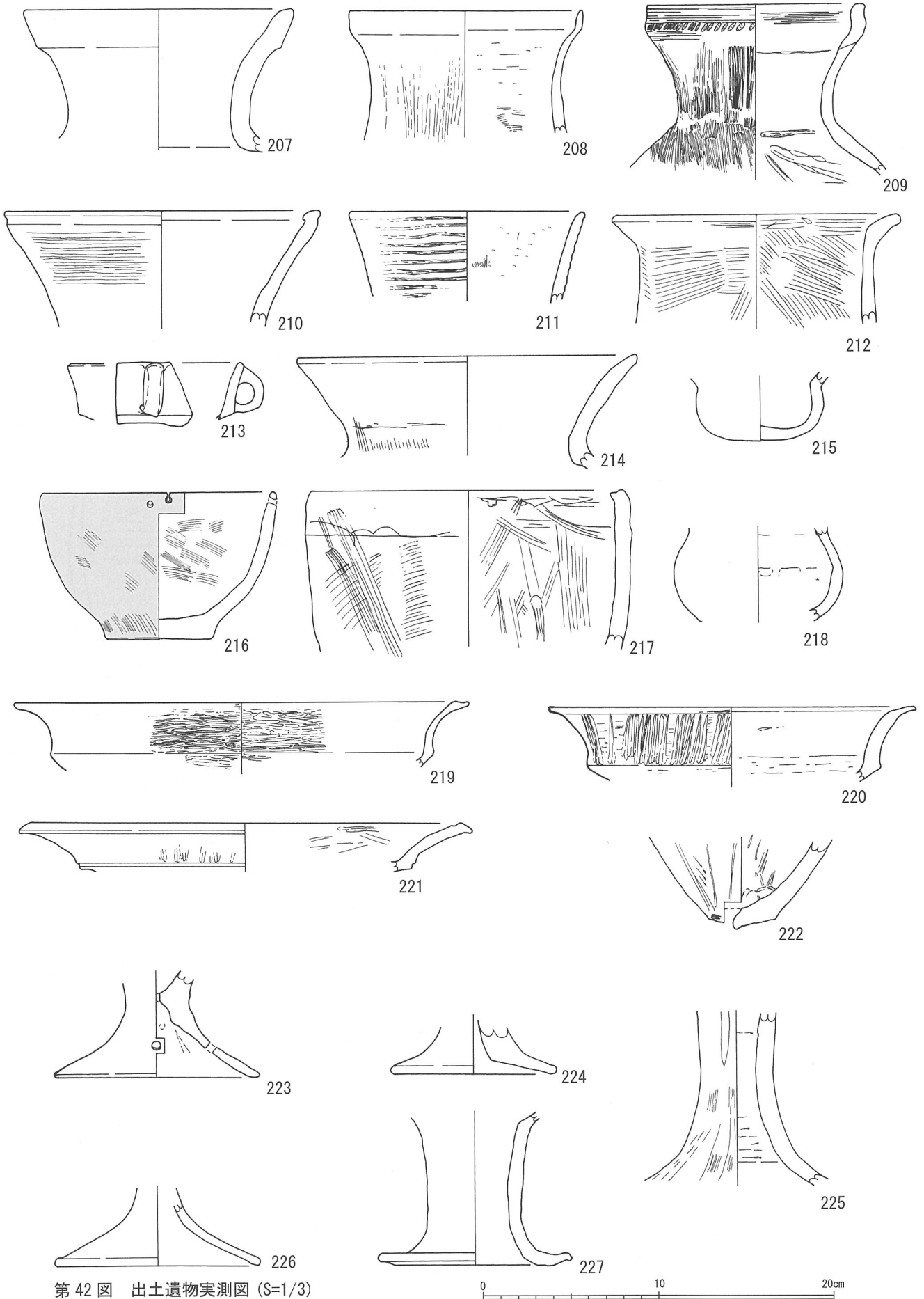


第40图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-1区] SD02 (181)・SD05 (182~184)・SD08 (185)・SD09 (186・187)・SD11 (188)・SK02(189~192)

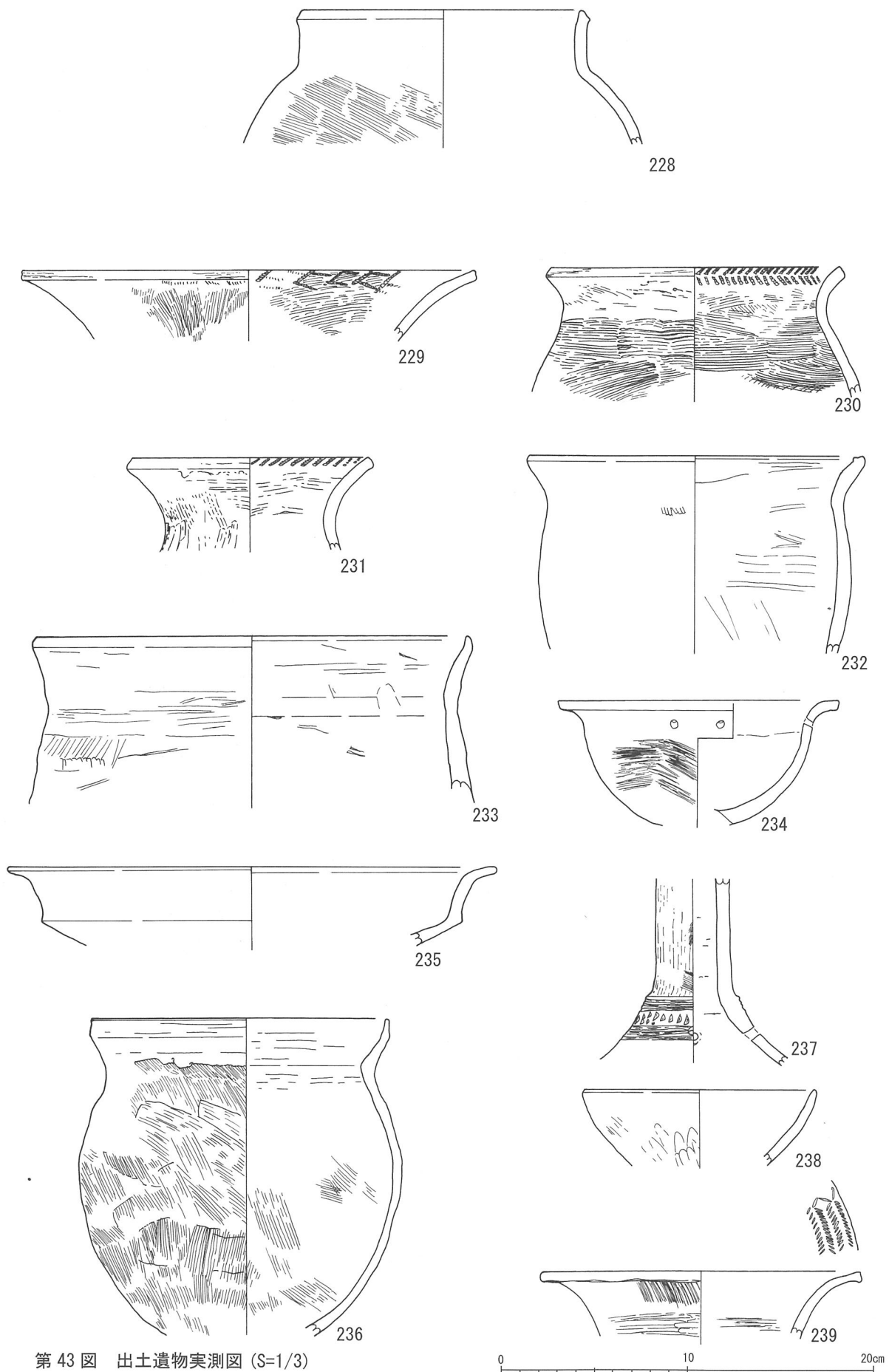


第 41 图 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [E-1 区] 包含層 (193 ~ 206)



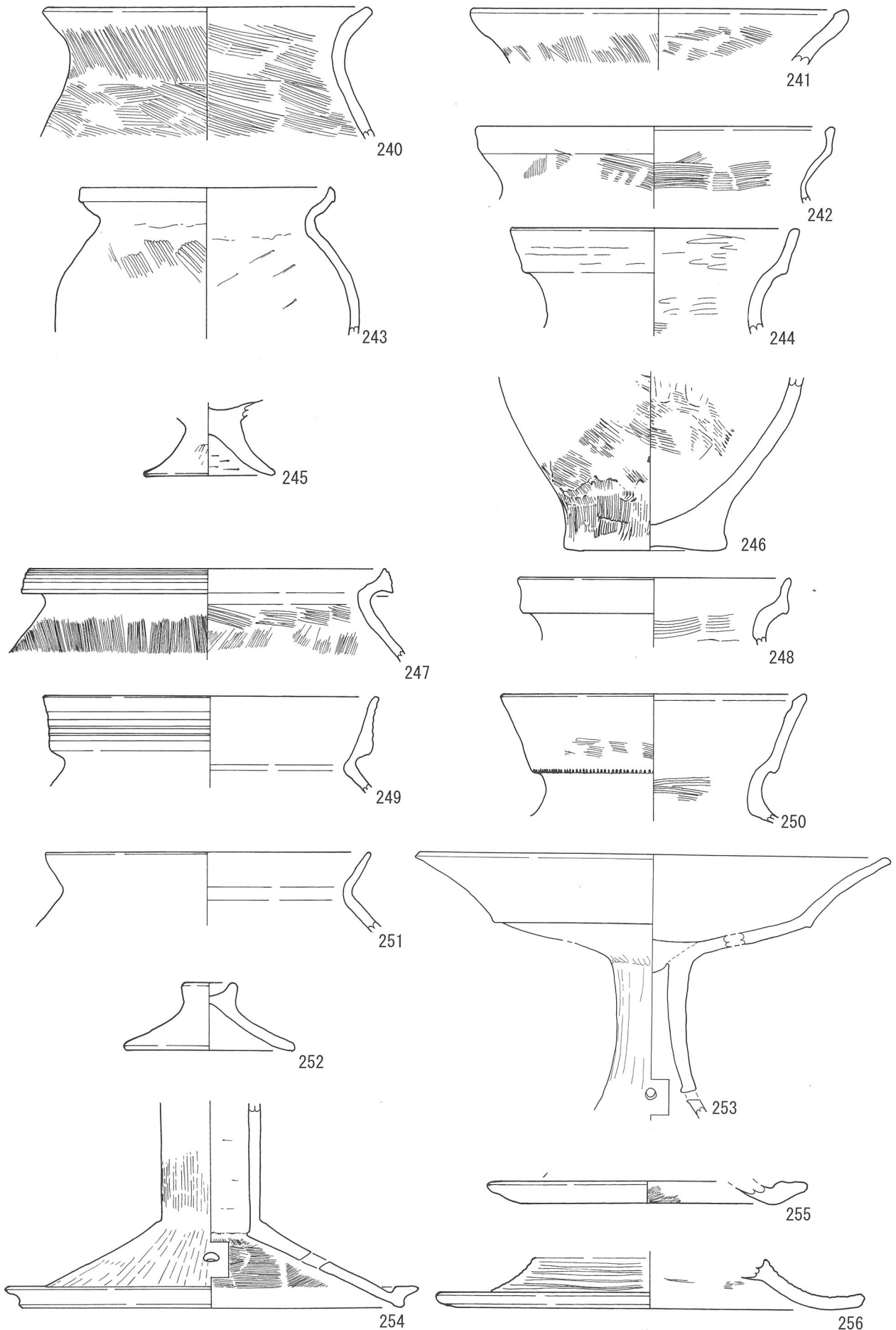
第42図 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [E-1区] 包含層 (207 ~ 227)





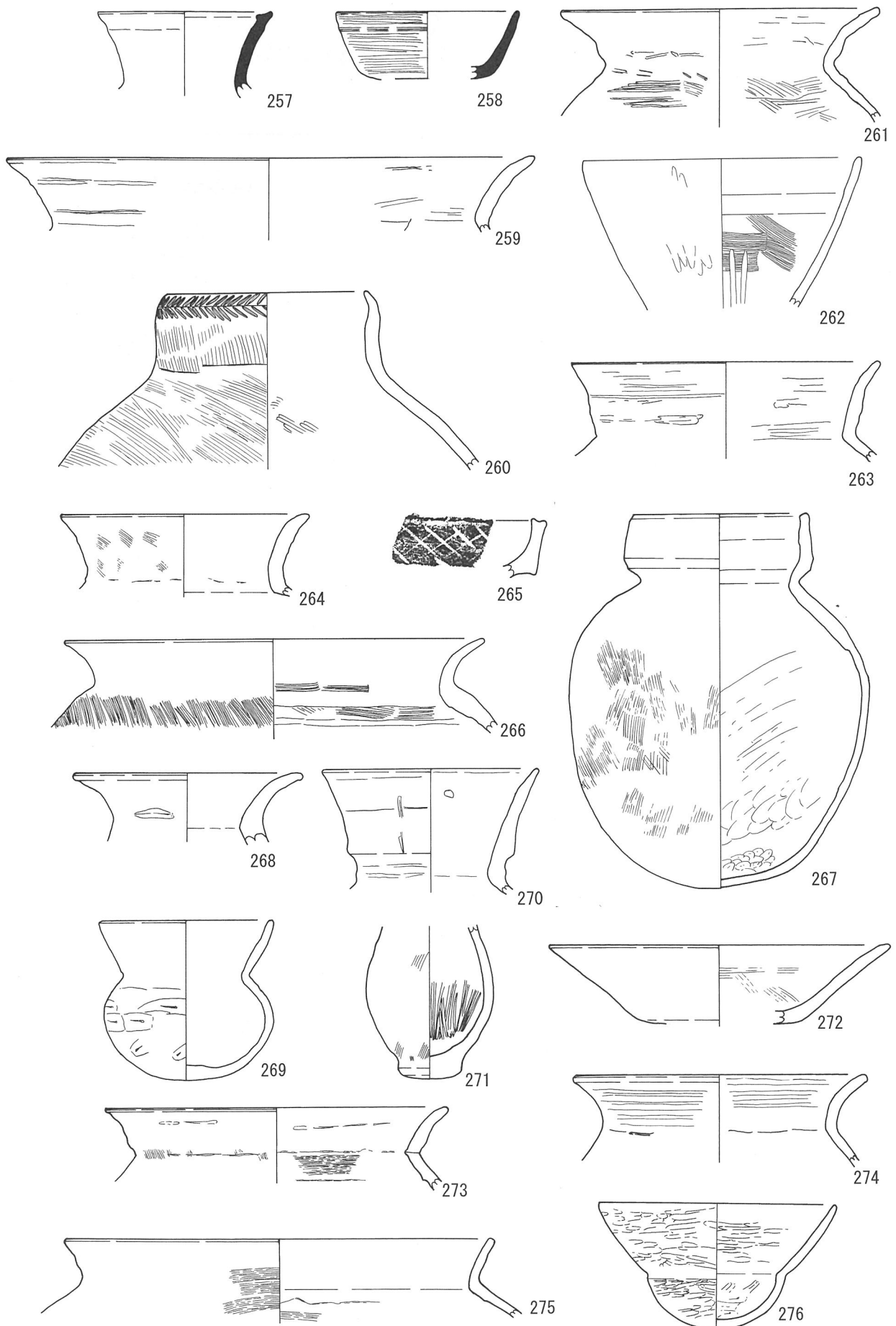
第 43 图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-2 区] SD01 (228) ・ SD02 (229 ~ 235) ・ SD03 (236 ~ 238) ・ SK01 (239)



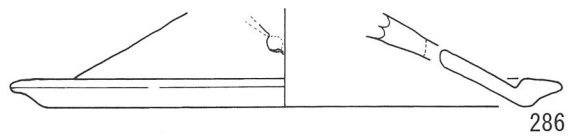
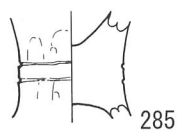
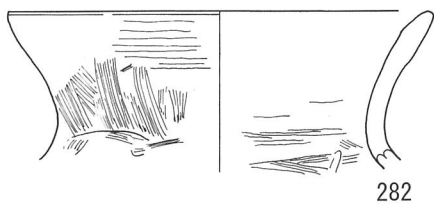
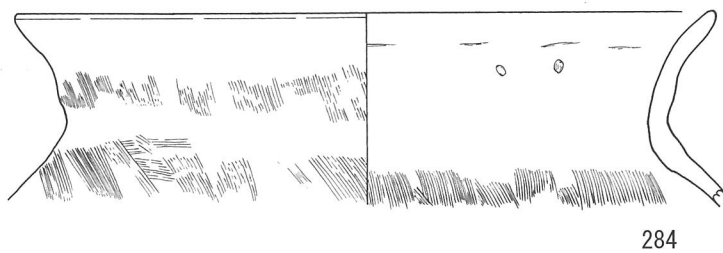
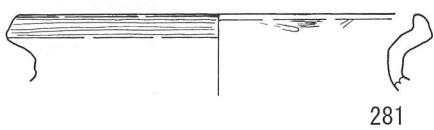
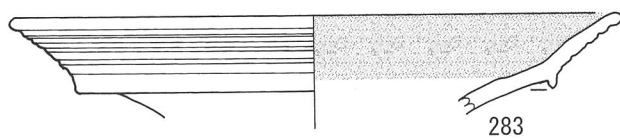
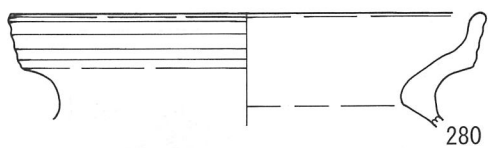
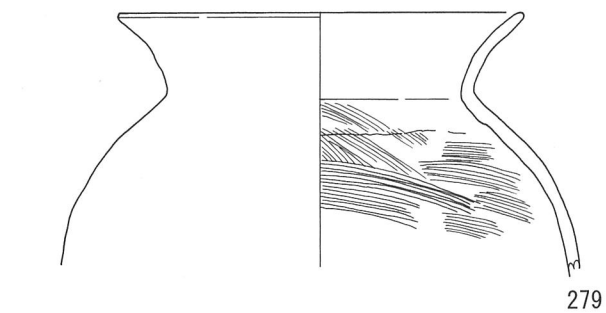
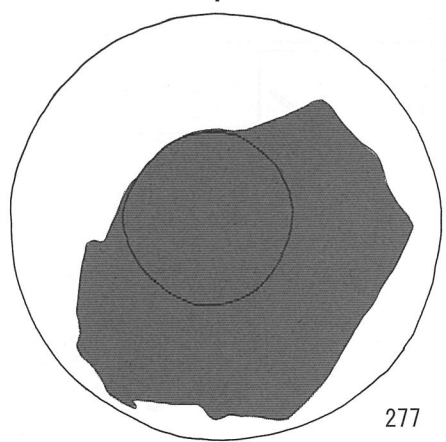
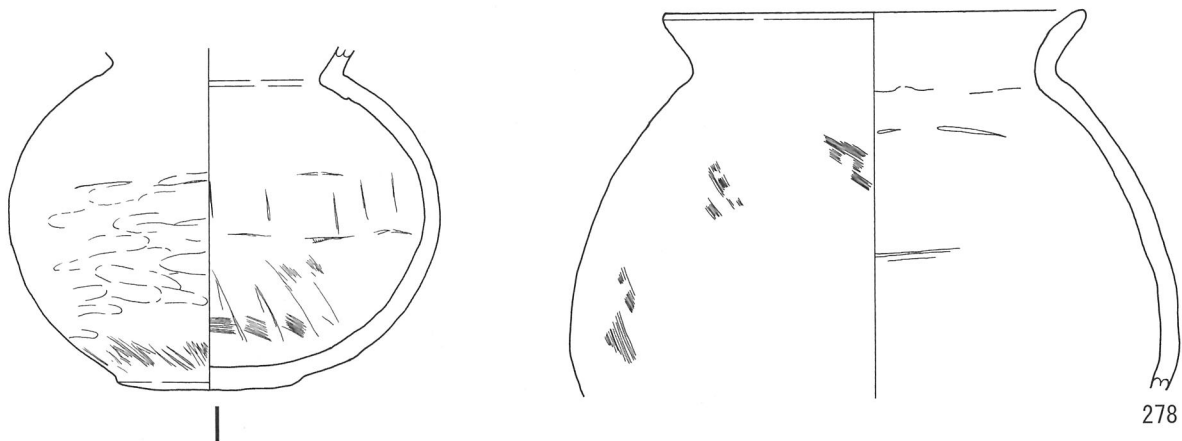
第44图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-2区] SK02 (240)・SP03 (241・242)・包含層 (243~256)



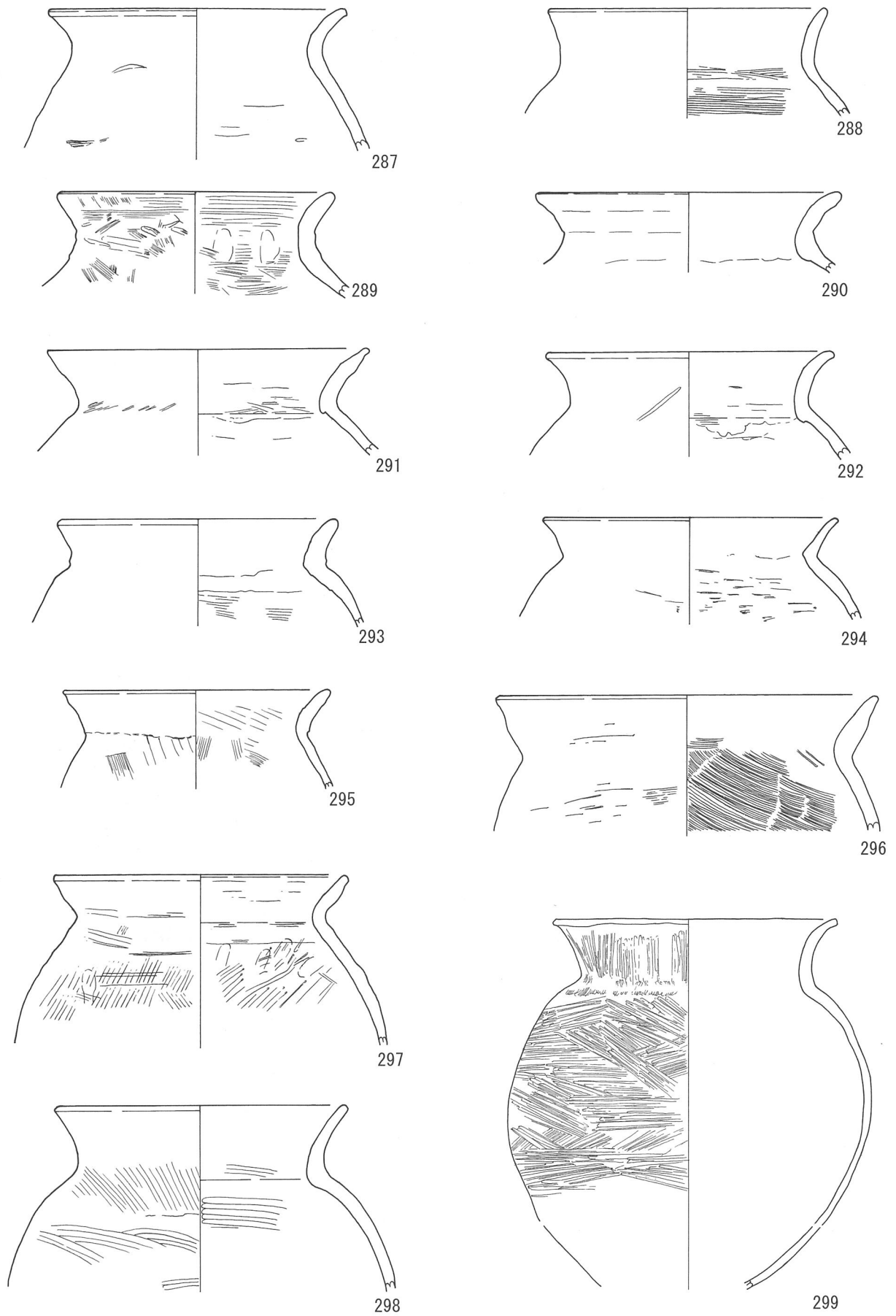
第 45 图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-3 区] SD06 (257・258)・SD07 (261・262)・SD10 (259・260・263)・SD11 (264・265)  
SD12 (266～269・272～276)・SD13 (270)・包含層 (271)

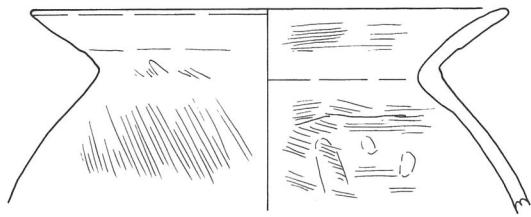


第46图 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [E-3区] SK01 (277 ~ 279)・包含層 (280 ~ 286)

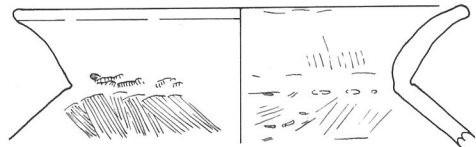
0 10 20cm



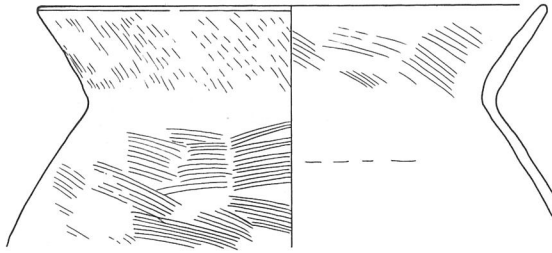
第 47 图 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [E-4 区] SD01 (287 ~ 299)



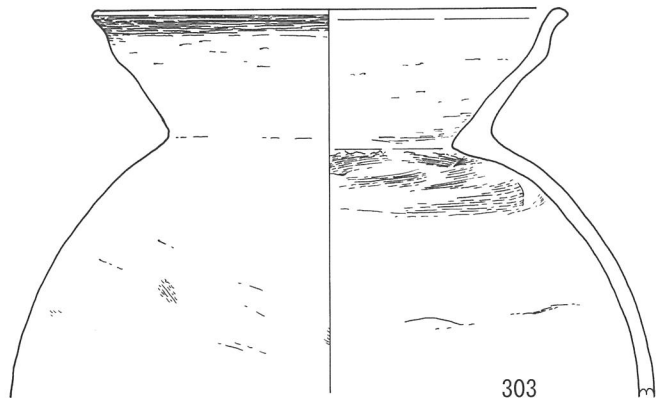
300



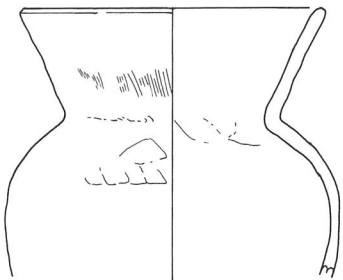
301



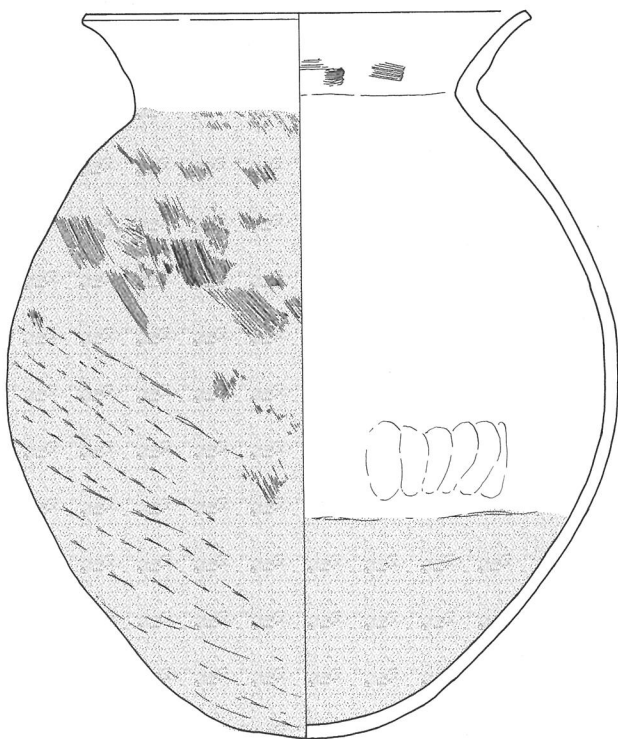
302



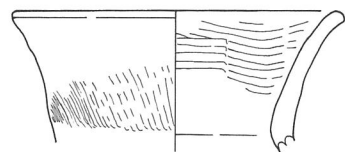
303



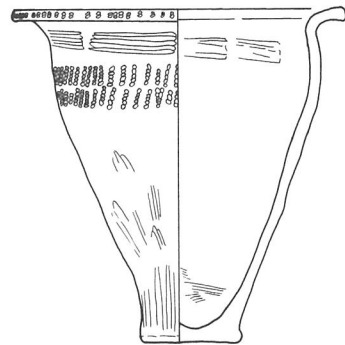
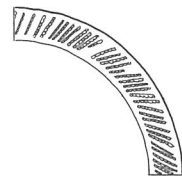
304



305



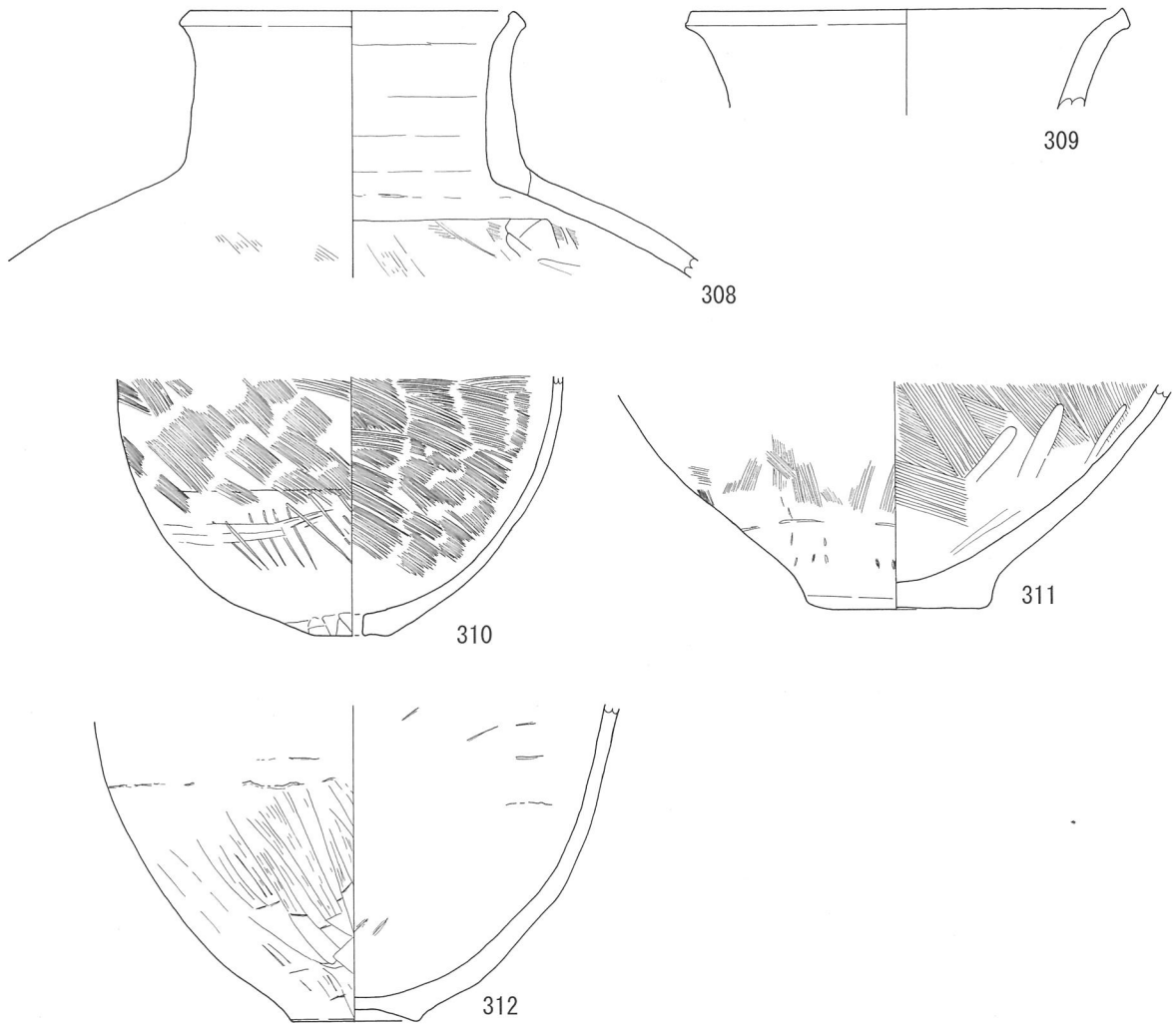
306



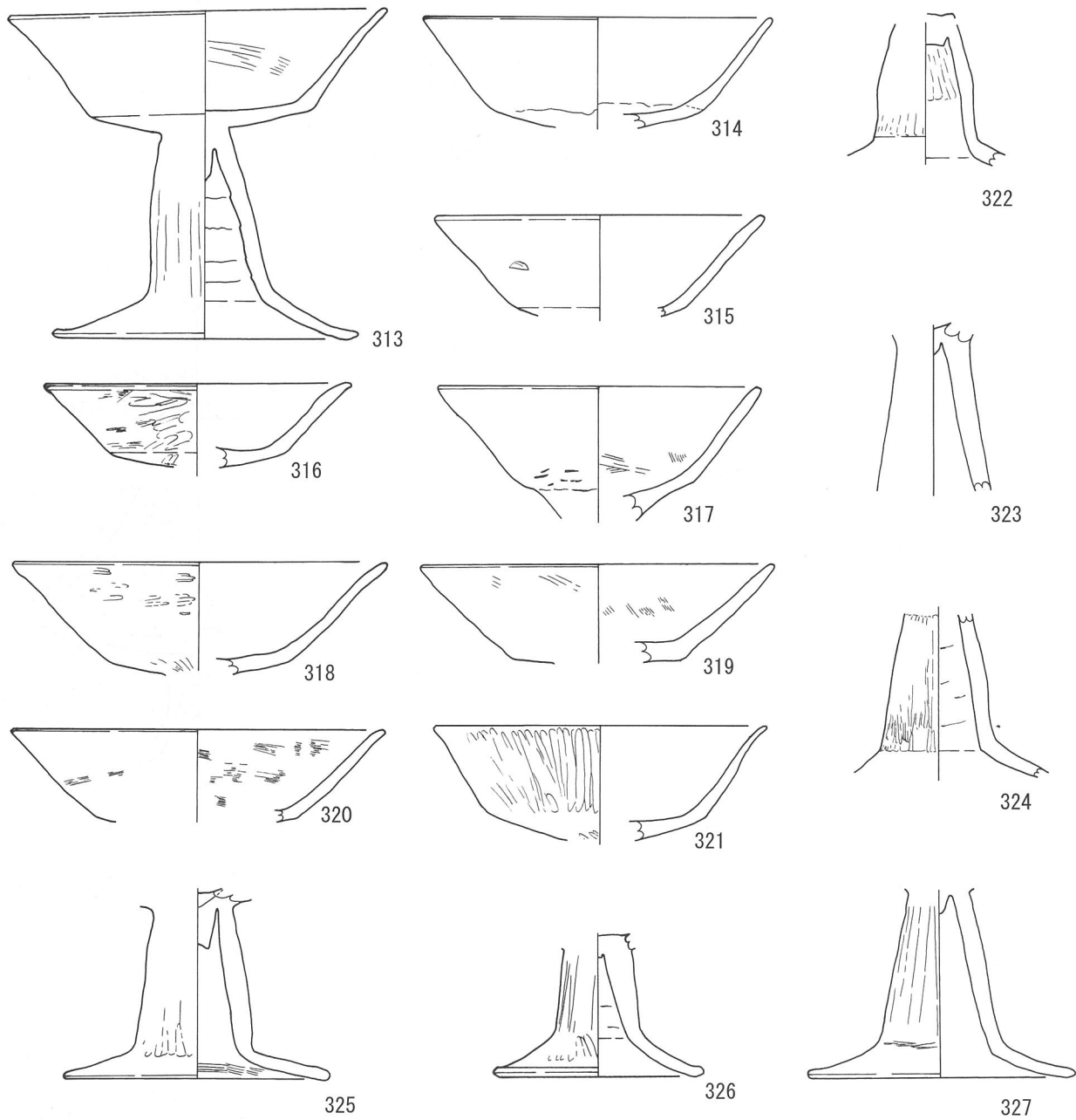
307

第 48 图 出土遺物実測図 (S=1/3)  
[E-4 区] SD01 (300 ~ 307)

0 10 20cm

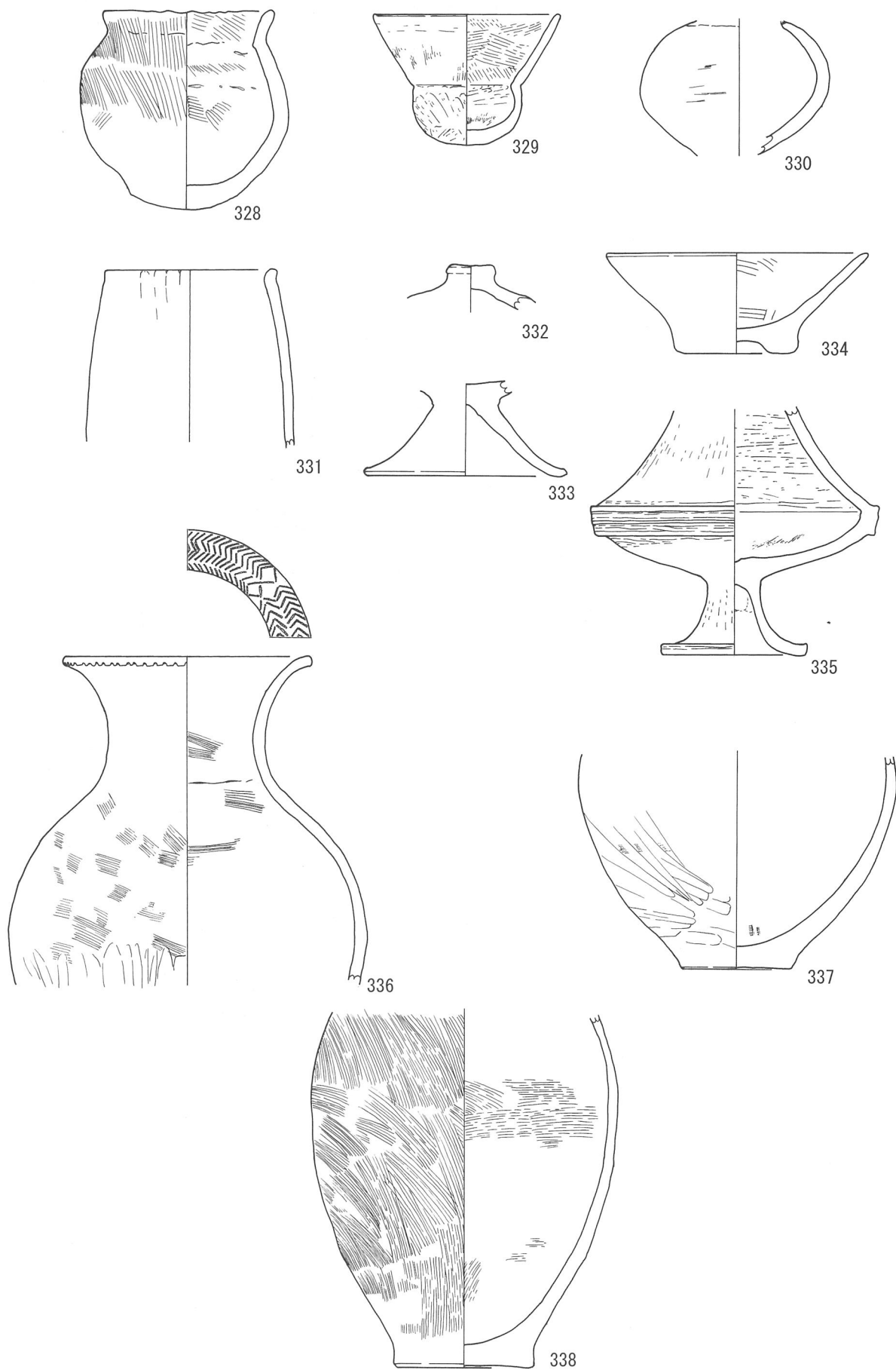


第 49 図 出土遺物実測図 (S=1/4)  
 [E-4 区] SD01 (308 ~ 312)



第 50 図 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 [E-4 区] SD01 (313 ~ 327)





第 51 图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-4 区] SD01 (328 ~ 335) · SD02 (336 · 337) · SK02 (338)

表 2. 土器観察表①

報告書番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)						色調		備考
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	器高	器厚		(内)	(外)	
									最小	最大			
第23図-1	C-1	土器溜まり	弥生土器	甕口縁部	14.2	-	-	-	0.4	0.75	10YR6/3	10YR6/3	
第23図-2		土器溜まり	弥生土器	甕口縁部	16.2	-	-	-	0.35	0.6	7.5YR5/4	10YR5/2	
第23図-3		土器溜まり	弥生土器	鉢	17.0	14.0	2.4	-	0.3	1.0	10YR5/3	7.5YR4/2	
第23図-4		土器溜まり	弥生土器	甕	16.0	23.5	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/3	10YR5/2	
第23図-5		土器溜まり	弥生土器	高坏脚部	-	-	9.4	-	0.5	1.0	10YR5/2	2.5Y6/3	
第23図-6		土器溜まり	弥生土器	高坏脚部	-	-	22.0	-	0.65	1.3	10YR7/3	2.5Y6/3	
第23図-7		SD06	弥生土器	壺	13.3	20.3	4.8	28.0	0.55	1.0	10YR4/2	10YR6/3	
第23図-8		SD06	弥生土器	壺口縁部	14.6	-	-	-	0.65	0.95	10YR5/3	10YR6/3	
第24図-9		SD07①・肩部	弥生土器	壺口縁部	26.2	-	-	-	0.65	1.05	5YR6/6	7.5YR5/4	
第24図-10		SD07①	弥生土器	器台口縁部	-	-	18.2	-	0.45	0.65	7.5YR5/4	5YR5/4	赤彩あり
第24図-11		SD07①・肩部	弥生土器	甕	18.0	24.2	4.8	28.5	0.5	1.3	10YR5/2	5YR5/3	
第24図-12		SD07①	弥生土器	甕	15.6	18.8	-	-	0.55	0.7	7.5YR4/2	7.5YR6/4	
第24図-13		SD07①・肩部	弥生土器	甕口縁部	14.4	-	-	-	0.55	0.6	10YR5/3	10YR5/2	
第24図-14		SD07①・肩部	弥生土器	甕口縁部	15.8	-	-	-	0.6	0.85	10YR5/3	7.5YR4/2	
第24図-15		SD07①・肩部	弥生土器	甕口縁部	17.0	-	-	-	0.6	0.65	7.5YR4/2	10YR5/3	
第24図-16		SD07①・肩部	弥生土器	高坏坏部	17.0	-	-	-	0.4	0.65	7.5YR5/4	7.5YR4/2	漆及び赤彩あり
第24図-17		SD07①・肩部	弥生土器	壺胴部	-	10.9	-	-	0.5	0.6	10YR5/2	10YR5/3	
第24図-18		SD07②・肩部	弥生土器	壺口縁部	25.0	-	-	-	0.7	1.2	10YR5/2	7.5YR6/4	
第24図-19		SD07②・肩部	弥生土器	甕口縁部	18.4	16.4	-	-	0.6	1.05	10YR5/2	10YR3/1	
第24図-20		SD07②	弥生土器	壺口縁部	11.2	-	-	-	0.45	0.8	10YR5/2	10YR5/2	
第24図-21		SD07②	弥生土器	壺口縁部	11.0	-	-	-	0.4	0.7	7.5YR5/3	2.5YR5/2	
第24図-22		SD07②	弥生土器	壺口縁部	13.0	-	-	-	0.5	0.8	10YR5/2	7.5YR5/2	
第24図-23		SD07②	弥生土器	壺口縁部	13.2	-	-	-	0.75	0.8	10YR5/3	10YR5/2	
第24図-24		SD07②	弥生土器	壺口縁部	12.8	-	-	-	0.45	0.65	7.5YR5/3	10YR5/2	
第25図-25		SD07・床面②	弥生土器	器台	17.4	-	-	-	0.7	1.0	10YR5/2	10YR5/3	
第25図-26	SX03	弥生土器	小型甕	6.7	10.1	2.9	8.3	0.35	1.1	10YR5/2	10YR5/2		
第25図-27	包含層	弥生土器	甕口縁部	17.0	-	-	-	0.45	0.5	7.5YR5/3	2.5YR4/1		
第25図-28	包含層	弥生土器	壺	-	22.4	5.0	-	0.4	1.5	7.5YR5/3	10YR5/2		
第25図-29	SD08	弥生土器	甕口縁部	25.0	-	-	-	0.5	0.75	10YR6/3	10YR5/2		
第25図-30	土器溜まり	弥生土器	小型壺胴部	-	13.0	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/3	2.5YR5/4		
第25図-31	土器溜まり	弥生土器	高坏脚部	-	-	12.6	-	0.65	0.8	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第25図-32	SD02	弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.4	0.95	5YR5/4	7.5YR6/3		
第25図-33	SD05	弥生土器	無頭台付鉢	9.9	-	6.0	-	0.4	1.3	10YR3/2	10YR6/3		
第25図-34	SD03・床面	弥生土器	壺	14.2	19.2	-	-	0.55	0.8	10YR5/2	10YR6/2		
第26図-35	SD08	弥生土器	甕	20.0	18.6	-	-	0.45	0.6	7.5YR5/3	7.5YR6/3		
第26図-36	SD08	弥生土器	壺	11.0	17.8	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/2	5YR6/6		
第26図-37	SD08	弥生土器	壺胴部	-	29.0	-	-	0.55	0.8	10YR5/2	5YR5/4	赤彩あり	
第26図-38	SD08	弥生土器	甕	15.8	22.8	-	-	0.4	1.1	7.5YR5/3	10YR5/2		
第26図-39	SD08	弥生土器	甕	24.0	20.4	-	-	0.45	0.65	10YR5/2	10YR4/2		
第26図-40	SD08	弥生土器	壺口縁部	16.5	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR5/3	7.5YR6/4		
第26図-41	SD08	弥生土器	甕口縁部	14.8	-	-	-	0.15	0.4	7.5YR4/2	2.5YR5/6		
第26図-42	SD08	弥生土器	壺口縁部	16.6	-	-	-	0.5	1.2	7.5YR5/3	5YR6/4		
第26図-43	SD08	弥生土器	甕	16.4	14.0	5.0	13.3	0.35	0.7	7.5YR5/3	5YR6/4		
第27図-44	SD08	弥生土器	器台坏部	-	-	26.6	-	0.7	1.45	10YR6/3	10YR6/3		
第27図-45	SD08	弥生土器	高坏坏部	25.0	-	-	-	0.5	1.35	10YR5/2	7.5YR6/4		
第27図-46	SD08	弥生土器	高坏脚部	-	-	16.2	-	0.45	0.9	10YR4/2	7.5YR5/2		
第27図-47	SD08	弥生土器	高坏脚部	-	-	13.6	-	0.5	1.0	7.5YR5/3	10YR5/2		
第27図-48	SD08	弥生土器	壺底部	-	-	7.6	-	4.5	2.1	10YR4/2	10YR5/2		
第27図-49	SK01・肩部	弥生土器	鉢?	-	-	-	-	0.5	0.8	10YR4/2	7.5YR5/2		
第27図-50	SK01・肩部	弥生土器	甕口縁部	23.0	15.8	-	-	0.5	0.6	10YR6/3	10YR6/3		
第27図-51	SK01・肩部	弥生土器	甕口縁部	20.0	18.0	-	-	0.4	0.5	7.5YR5/3	7.5YR5/2		
第27図-52	SK01・肩部	弥生土器	甕	21.0	18.2	-	-	0.6	0.8	10YR5/2	10YR4/2		
第27図-53	SK01・肩部	弥生土器	甕	18.0	12.9	-	-	0.45	0.65	10YR5/2	7.5YR5/3		
第27図-54	SK01・肩部	弥生土器	甕	15.0	13.0	-	-	0.3	0.5	10YR5/2	7.5YR5/3		
第27図-55	SK01・肩部	弥生土器	甕	15.8	20.0	-	-	0.4	0.8	10YR4/2	7.5YR5/2		
第28図-56	SK01・肩部	弥生土器	甕	21.0	21.8	-	-	0.3	0.6	10YR5/2	10YR5/2		

表 2. 土器観察表②

報告書番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)						色調		備考	
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	器高	器厚		(内)	(外)		
									最小	最大				
第28図-57	C-2	SK01・肩部	弥生土器	甗	16.4	18.8	-	-	0.4	0.7	10YR5/2	7.5YR5/2		
第28図-58		SK01・肩部	弥生土器	長頸壺	9.2	-	-	-	0.4	0.6	10YR4/2	2.5YR5/4	赤彩あり	
第28図-59		SK01・南	弥生土器	甗口縁部	21.0	15.0	-	-	0.4	0.6	10YR5/2	7.5YR5/3		
第28図-60		SK01・床面	弥生土器	甗口縁部	17.0	12.8	-	-	0.5	0.5	10YR4/2	7.5YR5/2		
第28図-61		SK01・床面	弥生土器	甗	14.0	12.4	-	-	0.3	0.7	10YR4/2	7.5YR5/2		
第28図-62		SK01・床面	弥生土器	甗	19.0	21.9	-	-	0.5	0.75	10YR5/2	10YR5/3		
第28図-63		SK01	弥生土器	甗	19.0	13.0	-	-	0.6	0.7	7.5YR5/3	7.5YR5/3	口縁部に赤彩あり	
第28図-64		SK01	弥生土器	鉢	15.0	12.4	-	-	0.4	0.6	10YR5/2	10YR5/2		
第28図-65		SK05	弥生土器	壺	-	37.8	-	-	0.6	0.85	10YR4/2	7.5YR5/2		
第29図-66		SK05	弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.45	0.65	7.5YR6/3	7.5YR5/3		
第29図-67		SK05	弥生土器	壺	14.0	16.7	-	-	0.55	0.9	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第29図-68		SK05	弥生土器	甗	18.0	18.0	-	-	0.35	0.55	10YR6/3	7.5YR6/3		
第29図-69		SK05	弥生土器	甗	22.0	22.6	-	-	0.4	1.0	7.5YR5/2	7.5YR5/3		
第29図-70		SK05	弥生土器	甗	19.4	19.9	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第30図-71		SP04	土師器	高坏	17.0	-	-	-	0.4	0.75	10YR6/3	10YR7/2		
第30図-72		D-1	土器溜まり	弥生土器	壺口縁部	13.0	-	-	-	0.4	0.5	10YR5/2	10YR6/3	
第30図-73			土器溜まり	弥生土器	壺	15.5	21.6	-	-	0.45	0.85	10YR5/2	10YR4/1	
第30図-74			土器溜まり	弥生土器	甗	13.6	13.2	-	-	0.5	0.6	7.5YR4/2	7.5YR5/3	
第30図-75			土器溜まり	弥生土器	小型甗	11.6	11.0	3.4	9.6	0.2	1.2	10YR5/3	10YR6/3	
第30図-76			土器溜まり	弥生土器	小型壺	5.2	8.8	3.6	6.65	0.35	0.95	10YR5/2	10YR6/2	古墳?
第30図-77	土器溜まり		弥生土器	壺口縁部	-	-	-	-	0.7	1.0	7.5YR6/4	7.5YR6/4		
第30図-78	土器溜まり		弥生土器	埴胴部	-	-	-	3.55	0.35	0.7	10YR3/2	10YR6/3		
第30図-79	土器溜まり		土師器	小型甗	8.3	7.8	3.45	6.3	0.4	1.4	7.5YR5/3	7.5YR4/2		
第30図-80	土器溜まり		弥生土器	長頸壺	15.8	22.0	-	-	0.45	0.95	10YR5/2	10YR6/3		
第30図-81	土器溜まり		弥生土器	長頸壺	13.3	16.4	5.0	26.9	0.35	1.7	10YR5/2	10YR5/2		
第31図-82	土器溜まり		弥生土器	壺口縁部	20.5	-	-	-	0.6	0.9	10YR5/2	10YR6/3		
第31図-83	土器溜まり		弥生土器	壺口縁部	14.0	-	-	-	0.5	1.0	7.5YR5/4	10YR6/3		
第31図-84	土器溜まり		弥生土器	高坏脚部	-	4.0	-	-	0.35	2.1	5YR5/4	7.5YR6/4		
第31図-85	土器溜まり		弥生土器	壺口縁部	13.0	-	-	-	0.55	0.8	10YR6/3	10YR5/2	記号文	
第31図-86	土器溜まり		弥生土器	高坏脚部	-	-	-	-	0.4	2.6	10YR6/3	10YR7/3		
第31図-87	土器溜まり		弥生土器	高坏脚部	-	-	12.5	-	0.35	0.9	10YR5/3	10YR6/3		
第31図-88	土器溜まり		弥生土器	高坏脚部	-	-	16.2	-	0.35	0.6	7.5YR6/4	7.5YR6/4		
第31図-89	土器溜まり		弥生土器	高坏	28.2	-	19.9	27.7	0.45	1.65	5YR5/4	2.5YR5/6	古墳?	
第31図-90	SD14・15		土師器	皿	8.0	-	-	-	0.4	0.7	7.5YR5/4	10YR7/3		
第31図-91	SX01		弥生土器	高坏脚部	-	5.2	-	-	0.4	1.0	10YR3/1	7.5YR6/3		
第32図-92	包含層	土師器	皿	9.4	-	5.0	1.5	0.4	0.5	10YR6/3	10YR7/2			
第32図-93	包含層	弥生土器	壺口縁部	21.0	-	-	-	0.8	0.95	7.5YR5/3	10YR5/2			
第32図-94	包含層	弥生土器	壺口縁部	21.0	-	-	-	0.75	0.95	7.5YR4/2	10YR5/2			
第32図-95	包含層	弥生土器	高坏坏部	-	-	30.0	-	0.45	1.0	2.5YR5/6	2.5YR5/4			
第32図-96	包含層	弥生土器	高坏坏部	28.2	-	-	-	0.35	0.9	10YR6/3	10YR5/2			
第32図-97	包含層	弥生土器	甗	12.6	13.8	-	-	0.55	0.6	7.5YR5/3	10YR5/2			
第32図-98	包含層	弥生土器	甗口縁部	20.6	-	-	-	0.4	0.8	2.5YR5/3	5YR5/4			
第32図-99	包含層	弥生土器	甗口縁部	15.8	-	-	-	0.45	1.0	7.5YR4/2	10YR5/3			
第32図-100	包含層	弥生土器	甗口縁部	15.7	-	-	-	0.5	0.8	10YR5/2	10YR5/3			
第32図-101	包含層	弥生土器	壺口縁部	13.6	-	-	-	0.65	0.7	10YR5/2	10YR5/3			
第32図-102	包含層	弥生土器	壺口縁部	13.0	-	-	-	0.65	0.8	7.5YR5/3	7.5YR6/3			
第32図-103	包含層	弥生土器	蓋	10.6	-	-	2.8	0.4	0.6	10YR6/2	10YR7/2			
第32図-104	包含層	弥生土器	台付鉢	-	-	10.0	-	0.4	1.0	10YR5/2	10YR5/2	小型台付鉢?		
第32図-105	包含層	弥生土器	高坏脚部	-	-	9.3	-	0.5	1.5	10YR5/3	7.5YR5/3			
第32図-106	包含層	弥生土器	高坏脚部	-	-	10.2	-	0.3	1.0	7.5YR6/3	7.5YR6/3			
第32図-107	包含層	弥生土器	甗底部	-	-	1.6	-	0.55	0.8	7.5YR5/4	7.5YR5/4			
第33図-108	谷部タチワリ	弥生土器	壺口縁部	22.0	-	-	-	0.4	1.05	7.5YR5/3	7.5YR6/3			
第33図-109	谷部タチワリ	弥生土器	壺口縁部	14.9	-	-	-	0.45	0.9	10YR5/2	10YR7/3			
第33図-110	谷部タチワリ	弥生土器	壺口縁部	13.8	10.5	-	-	0.45	0.75	7.5YR4/2	10YR4/1			
第33図-111	谷部タチワリ	弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.45	0.9	10YR5/2	10YR5/2			
第33図-112	谷部タチワリ	弥生土器	甗	16.6	18.45	-	-	0.5	1.15	10YR5/3	5YR5/3			

表 2. 土器観察表③

報告書番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)						色調		備考	
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	器高	器厚		(内)	(外)		
									最小	最大				
第33図-113	D-1	谷部タチワリ	弥生土器	壺口縁部	13.2	-	-	-	0.4	0.9	5YR6/4	10YR5/2		
第33図-114		谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	16.0	-	-	-	0.35	0.75	7.5YR6/3	10YR2/1		
第33図-115		谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	16.6	-	-	-	0.3	1.1	7.5YR6/3	10YR6/3		
第33図-116		谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	16.0	-	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/3	7.5YR5/2		
第33図-117		谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	15.0	-	-	-	0.4	0.9	10YR5/2	10YR5/2		
第33図-118		谷部タチワリ	弥生土器	壺口縁部	26.6	-	-	-	0.6	0.9	7.5YR5/2	10YR5/2		
第33図-119		谷部タチワリ	弥生土器	台付鉢	12.0	16.4	-	-	0.35	1.0	10YR5/2	7.5YR5/2		
第33図-120		谷部タチワリ	弥生土器	器台脚部	-	5.0	-	-	0.45	0.95	10YR5/2	7.5YR5/3		
第33図-121		谷部タチワリ	弥生土器	高坏脚部	-	-	-	-	0.45	1.3	5YR5/4	5YR5/6		
第34図-122		谷部タチワリ	土師器	甕口縁部	9.6	-	-	-	0.4	0.7	10YR6/3	7.5YR5/2	布留系土器	
第34図-123		谷部タチワリ	土師器	甕	13.0	18.0	-	-	0.25	0.6	10YR5/3	5YR6/4	布留系土器	
第34図-124		谷部タチワリ	弥生土器	高坏坏部	14.2	-	-	-	0.3	1.65	10YR5/3	10YR6/3		
第34図-125		谷部タチワリ	弥生土器	壺底部	-	-	7.0	-	0.45	1.6	10YR5/3	10YR6/3		
第34図-126		谷部タチワリ	弥生土器	壺底部	-	-	5.0	-	0.5	1.1	10YR5/3	10YR6/3		
第34図-127		谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	19.0	-	-	-	0.35	0.7	7.5YR5/3	10YR6/3		
第34図-128		D-2	SD01	土師器	甕	19.2	17.1	-	-	0.7	1.1	7.5YR5/3	10YR5/3	
第34図-129			SD01	弥生土器	坏	14.9	-	-	-	0.25	0.5	7.5YR4/2	7.5YR5/2	把手付
第34図-130			SD02	弥生土器	甕	-	-	19.4	-	0.5	2.8	7.5YR5/2	7.5YR5/3	
第34図-131			SD02	弥生土器	甕	29.0	25.3	-	-	0.5	0.65	10YR5/2	7.5YR3/1	
第34図-132	SD02		珠洲	摺鉢底部	20.6	18.1	-	-	0.35	0.55	10YR5/2	7.5YR4/1		
第35図-133	SK04		弥生土器	甕口縁部	29.8	-	-	-	0.4	0.8	2.5YR5/6	5YR5/4		
第35図-134	SK02		弥生土器	壺	12.8	15.0	-	-	0.35	0.65	7.5YR5/3	10YR6/3	把手付, 口縁部に赤彩	
第35図-135	SK04		弥生土器	高坏坏部	27.6	-	-	-	0.4	0.7	2.5YR5/6	5YR5/4		
第35図-136	SK06		弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.5	0.95	7.5YR5/3	10YR7/3		
第35図-137	SK07		珠洲	甕	47.0	47.8	13.0	-	0.35	1.8	7.5YR5/11	10YR5/1		
第36図-138	SK08		弥生土器	甕口縁部	21.4	-	-	-	0.5	0.8	2.5YR5/4	7.5YR5/2		
第36図-139	SK08		弥生土器	甕口縁部	17.8	-	-	-	0.6	0.8	5YR6/4	7.5YR6/3		
第36図-140	SK08		弥生土器	甕	16.4	14.9	-	-	0.5	0.7	10YR5/2	10YR6/3		
第36図-141	SK11		弥生土器	甕	15.8	13.4	-	-	0.4	0.7	10YR5/2	10YR3/1		
第36図-142	SK11		弥生土器	甕	16.8	14.0	-	-	0.45	0.85	10YR4/2	7.5YR5/3		
第36図-143	SP43		弥生土器	壺口縁部	12.4	-	-	-	0.5	0.6	10YR6/3	2.5Y6/2		
第36図-144	SP58		弥生土器	甕口縁部	18.4	-	-	-	0.4	0.8	10YR6/2	10YR5/2		
第36図-145	SP58		弥生土器	台付鉢脚部	-	-	7.0	-	0.5	1.2	10YR6/2	7.5YR6/3		
第36図-146	SP58		弥生土器	壺	-	-	30.0	-	1.3	1.85	7.5YR6/3	7.5YR6/3		
第36図-147	SX01		弥生土器	裝飾壺	18.5	-	-	-	0.45	1.3	5YR5/4	5YR5/4	赤彩あり	
第36図-148	SX01		弥生土器	甕	17.8	13.9	-	-	0.25	0.6	7.5YR5/3	7.5YR4/2		
第37図-149	SX01		土師器	皿	7.8	-	2.8	1.6	0.4	0.6	10YR6/2	2.5Y6/2		
第37図-150	SX01		弥生土器	甕口縁部	13.8	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR4/2	7.5YR6/4		
第37図-151	SX01		弥生土器	甕口縁部	18.2	-	-	-	0.4	0.9	5YR5/3	5YR5/3		
第37図-152	SX01		弥生土器	高坏坏部	25.2	-	-	-	0.3	1.9	10YR5/2	10YR6/2		
第37図-153	SX01		弥生土器	甕	23.4	24.5	7.2	35.65	0.55	0.8	10YR5/2	10YR5/2		
第38図-154	包含層		弥生土器	甕	21.6	22.6	-	-	0.5	0.6	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第38図-155	包含層		弥生土器	高坏坏部	15.0	-	-	-	0.4	0.7	7.5YR5/4	5YR5/4		
第38図-156	包含層		弥生土器	器台脚部	-	-	-	-	0.55	0.75	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第38図-157	SD01	弥生土器	甕口縁部	14.0	-	-	-	0.3	0.95	2.5Y5/2	10YR6/2			
第38図-158	SD01	弥生土器	甕口縁部	28.0	-	-	-	0.5	1.0	10YR5/3	10YR6/3			
第38図-159	SD01	弥生土器	壺口縁部	23.8	-	-	-	0.85	2.1	10YR6/3	10YR6/3	古墳?		
第39図-160	SD02	弥生土器	甕口縁部	19.1	-	-	-	0.5	0.75	10YR5/3	7.5YR5/3			
第39図-161	SD02	弥生土器	甕口縁部	17.6	-	-	-	0.7	1.0	10YR5/2	7.5YR4/2			
第39図-162	SD02	弥生土器	甕口縁部	12.5	-	-	-	0.4	0.75	10YR6/2	7.5YR5/3			
第39図-163	SD02	弥生土器	壺口縁部	20.0	-	-	-	0.4	0.8	7.5YR5/4	7.5YR5/4			
第39図-164	SD02	弥生土器	甕口縁部	17.7	-	-	-	0.35	0.9	10YR6/3	10YR5/3			
第39図-165	SD02	弥生土器	壺口縁部	16.8	-	-	-	0.4	1.0	7.5YR5/3	7.5YR4/2			
第39図-166	SD02	弥生土器	甕口縁部	13.2	12.4	-	-	0.5	0.8	2.5Y6/3	10YR5/2			
第39図-167	SD02	弥生土器	壺口縁部	13.8	-	-	-	0.35	0.9	7.5YR5/3	10YR6/3			
第39図-168	SD02	弥生土器	壺口縁部	10.6	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR5/3	10YR5/3			

表 2. 土器観察表④

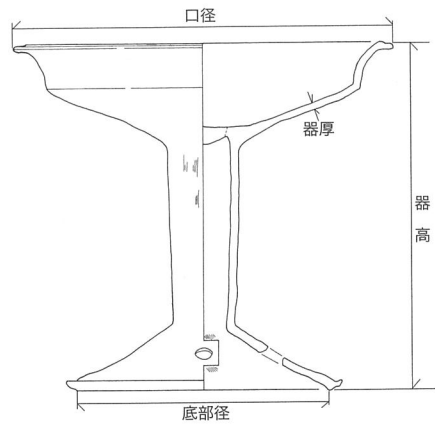
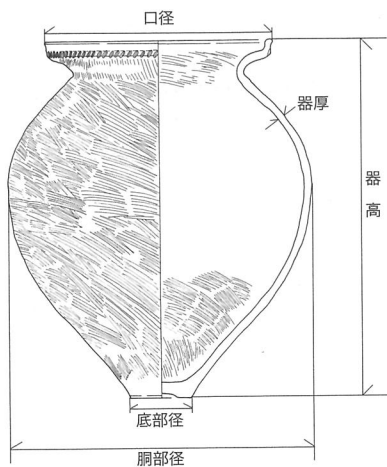
報告書番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)						色調		備考
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	器高	器厚		(内)	(外)	
									最小	最大			
第39図-169		SD02	弥生土器	甕	10.5	11.7	-	-	0.4	0.6	10YR5/3	10YR6/2	
第39図-170		SD02	弥生土器	高坏坏部	21.3	-	-	-	0.7	1.5	5YR5/6	7.5YR6/4	
第39図-171		SD02	弥生土器	高坏坏部	27.8	-	-	-	0.7	1.0	7.5YR5/3	2.5Y5/2	
第39図-172		SD02	弥生土器	長頸壺口縁部	7.2	-	-	-	0.55	1.0	7.5YR6/2	7.5YR5/3	
第39図-173		SD02	弥生土器	開脚高坏坏部	4.4	-	-	-	0.5	0.8	10YR6/2	10YR6/3	
第39図-174		SD02	弥生土器	鉢	12.4	13.4	-	-	0.4	0.6	10YR5/3	10YR6/3	
第39図-175		SD02	弥生土器	蓋	-	-	4.6	-	0.5	1.6	7.5YR4/3	10YR4/2	
第39図-176		SD02	弥生土器	壺胴部	-	-	-	-	0.4	0.7	7.5YR5/4	7.5YR6/4	
第39図-177		SD02	弥生土器	蓋	-	-	-	-	0.7	1.1	7.5YR5/4	7.5YR4/2	
第39図-178		SD02	弥生土器	高坏脚部	-	-	15.0	-	0.5	0.8	10YR6/3	7.5YR5/4	
第39図-179		SD02	弥生土器	蓋	-	-	-	-	0.7	1.2	10YR5/3	7.5YR5/4	
第39図-180		SD02	弥生土器	台付鉢脚部	-	-	10.0	-	0.4	0.9	10YR6/3	2.5YR5/4	
第40図-181		SD02	須恵器	壺口縁部	13.4	-	-	-	0.3	0.55	2.5Y5/1	10YR4/1	
第40図-182		SD05	弥生土器	甕もしくは壺口縁部	19.4	-	-	-	0.45	0.6	10YR6/2	7.5YR5/2	
第40図-183		SD05	弥生土器	蓋?	-	-	11.5	-	0.4	0.65	10YR5/2	10YR4/1	
第40図-184		SD05	弥生土器	長頸壺	19.6	-	-	-	0.4	1.25	7.5YR4/2	2.5Y6/2	
第40図-185		SD08	弥生土器	甕	18.0	16.9	-	-	0.65	0.85	10YR5/2	10YR6/3	
第40図-186		SD09	弥生土器	甕もしくは壺底部	-	-	5.4	-	0.6	1.2	7.5YR4/2	10YR4/1	
第40図-187		SD09	弥生土器	壺底部	-	-	6.4	-	0.65	1.4	10YR5/2	10YR5/3	
第40図-188		SD11	弥生土器	高坏脚部	-	-	13.2	-	0.65	0.95	10YR5/2	10YR5/2	
第40図-189		SK02	弥生土器	甕口縁部	17.9	-	-	-	0.25	0.55	7.5YR4/2	7.5YR3/1	
第40図-190		SK02	弥生土器	甕口縁部	14.9	-	-	-	0.4	0.85	10YR7/2	2.5Y4/1	
第40図-191		SK02	弥生土器	甕口縁部	15.2	-	-	-	0.55	0.75	10YR5/2	10YR5/2	
第40図-192		SK02	土師器	甕	14.7	21.0	-	-	0.35	0.9	10YR6/3	5YR5/3	埋納土器
第41図-193		X100Y150	弥生土器	甕口縁部	13.0	-	-	-	0.4	0.6	10YR5/2	10YR6/3	
第41図-194		SD02	弥生土器	器台脚部	-	-	-	-	0.6	1.05	10YR6/2	10YR6/2	
第41図-195		X75Y150	弥生土器	高坏脚部	-	-	3.8	-	0.6	1.2	7.5YR2/1	10YR5/2	
第41図-196	E-1	SP22	弥生土器	甕口縁部	15.0	-	-	-	0.6	1.0	10YR5/2	7.5YR6/3	
第41図-197		SP12	弥生土器	甕口縁部	15.0	-	-	-	0.55	0.7	7.5YR6/4	7.5YR5/3	
第41図-198		SD04・SP06の上面	弥生土器	高坏脚部	-	-	17.6	-	0.6	0.8	10YR5/2	10YR6/3	SD04・SP06の上面
第41図-199		SP19	弥生土器	甕胴部	-	22.6	-	-	0.35	0.55	10YR5/2	10YR5/2	
第41図-200		X200Y145	弥生土器	甕	19.8	18.5	-	-	0.4	0.9	10YR4/2	10YR4/1	
第41図-201		X185Y145	弥生土器	甕口縁部	19.6	-	-	-	0.4	1.05	10YR6/2	10YR6/3	
第41図-202		X200Y145	弥生土器	甕	17.6	16.45	-	-	0.35	0.65	10YR3/1	10YR5/3	
第41図-203		X185Y145	弥生土器	壺口縁部	20.0	-	-	-	0.8	1.15	10YR6/2	10YR5/3	
第41図-204		X185Y145	弥生土器	鉢	19.0	17.3	-	-	0.35	0.8	5YR4/4	7.5YR6/3	
第41図-205		X200Y145	弥生土器	壺口縁部	29.2	-	-	-	1.2	2.0	7.5YR4/2	10YR6/3	
第41図-206		X200Y145	弥生土器	甕	24.7	31.3	-	-	0.45	1.05	10YR5/3	7.5YR6/3	
第42図-207		X190Y145	弥生土器	壺口縁部	15.4	-	-	-	1.0	1.15	10YR7/3	10YR6/4	
第42図-208		X185Y145	弥生土器	壺口縁部	13.3	-	-	-	0.2	0.65	7.5YR6/4	7.5YR5/3	
第42図-209		X200Y145	弥生土器	壺口縁部	12.4	-	-	-	0.45	0.8	2.5Y4/1	7.5YR5/3	
第42図-210		X200Y145	弥生土器	壺口縁部	18.2	-	-	-	0.6	0.9	7.5YR4/3	7.5YR4/2	
第42図-211		X185Y145	弥生土器	壺口縁部	13.3	-	-	-	0.35	0.65	10YR6/3	10YR5/2	
第42図-212		X200Y145	弥生土器	甕口縁部	16.6	-	-	-	0.7	1.0	10YR4/1	10YR3/1	
第42図-213		X180Y145	弥生土器	把手付坏	9.7	-	-	-	0.1	0.65	7.5YR5/3	7.5YR6/3	
第42図-214		X160Y145	弥生土器	壺口縁部	19.6	-	-	-	0.6	1.1	10YR5/3	5YR5/4	
第42図-215		X180Y145	弥生土器	埴	-	7.3	-	-	0.5	0.8	10YR5/3	2.5Y5/2	
第42図-216		X205Y145	弥生土器	鉢	13.2	13.5	5.8	8.4	0.4	0.9	5YR4/4	5YR5/4	表面全面に赤彩
第42図-217		X200Y145	弥生土器	鉢	17.8	18.7	-	-	0.9	1.0	10YR5/2	10YR5/2	
第42図-218		X185Y145	弥生土器	埴	-	9.7	-	-	0.5	0.7	7.5YR4/2	10YR6/2	
第42図-219		X200Y145	弥生土器	高坏坏部	25.8	-	-	-	0.3	0.6	7.5YR4/2	10YR4/2	
第42図-220		X185Y145	弥生土器	高坏坏部	20.8	-	-	-	0.25	1.05	7.5YR4/3	10YR6/3	
第42図-221		X200Y145	弥生土器	高坏坏部	24.6	-	-	-	0.6	0.9	7.5YR5/4	7.5YR5/3	
第42図-222		X200Y145	弥生土器	甕底部	-	-	4.0	-	0.9	1.4	7.5YR4/2	10YR5/2	穿孔あり
第42図-223		X185Y145	弥生土器	高坏脚部	-	-	11.6	-	0.4	1.7	2.5Y5/2	10YR6/2	
第42図-224		X190Y145	弥生土器	高坏脚部	-	-	9.0	-	0.5	1.7	7.5YR6/4	10YR6/3	

表 2. 土器観察表⑤

報告書番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)						色調		備考	
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	器高	器厚		(内)	(外)		
									最小	最大				
第42図-225	E-1	X180Y145	弥生土器	高坏脚部	-	-	-	-	0.7	1.0	7.5YR6/4	7.5YR6/4		
第42図-226		X180Y145	弥生土器	高坏脚部	-	-	12.2	-	0.5	0.6	5YR4/4	5YR5/6		
第42図-227		X185Y145	弥生土器	高坏脚部	-	-	9.7	-	0.4	0.8	2.5YR5/4	7.5YR5/3		
第43図-228	E-2	SD01	弥生土器	壺口縁部	15.0	-	-	-	0.55	0.65	7.5YR5/4	10YR5/3		
第43図-229		SD02	弥生土器	壺口縁部	24.4	-	-	-	0.5	0.6	10YR6/3	10YR5/3		
第43図-230		SD02	弥生土器	甕口縁部	15.5	-	-	-	0.5	0.65	10YR5/3	10YR5/3		
第43図-231		SD02	弥生土器	壺口縁部	12.7	-	-	-	0.5	0.65	10YR5/3	10YR4/2		
第43図-232		SD02	弥生土器	甕	18.0	16.9	-	-	0.6	0.75	7.5YR5/3	10YR5/3		
第43図-233		SD02	弥生土器	甕口縁部	23.6	-	-	-	0.5	1.1	7.5YR4/3	10YR6/3		
第43図-234		SD02	弥生土器	台付鉢	11.8	15.3	-	-	0.4	0.8	10YR5/2	7.5YR6/3		
第43図-235		SD02	弥生土器	高坏坏部	26.0	-	-	-	0.4	0.7	10YR6/3	7.5YR4/2		
第43図-236		SD03	弥生土器	甕	16.0	17.45	-	-	0.2	0.75	10YR5/3	7.5YR6/3		
第43図-237		SD03	弥生土器	高坏脚部	-	-	-	-	0.5	1.05	7.5YR5/3	10YR6/3		
第43図-238		SD03	弥生土器	鉢	12.4	-	-	-	0.3	0.45	7.5YR5/3	7YR5/3		
第43図-239		SK01	弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.35	0.6	10YR5/2	10YR4/1		
第44図-240		E-2	SK02	弥生土器	甕口縁部	18.0	-	-	-	0.55	0.8	10YR5/3	7.5YR5/3	
第44図-241			SP03	弥生土器	壺口縁部	21.0	-	-	-	0.65	0.8	10YR5/3	10YR6/3	
第44図-242			SP03	弥生土器	甕口縁部	20.0	-	-	-	0.25	0.5	10YR6/3	10YR6/2	
第44図-243			X130Y115	弥生土器	甕	14.0	17.0	-	-	0.4	0.6	10YR5/3	10YR5/3	
第44図-244			X130Y115	弥生土器	壺口縁部	16.0	-	-	-	0.55	0.75	7.5YR5/4	7.5YR4/2	
第44図-245			X130Y115	弥生土器	台付鉢脚部	-	-	7.2	-	0.3	1.4	7.5YR5/3	10YR5/3	
第44図-246			X130Y110	弥生土器	甕もしくは壺底部	-	-	8.0	-	0.8	2.8	10YR4/2	10YR5/3	
第44図-247			トレンチ	弥生土器	甕口縁部	20.0	-	-	-	0.5	0.75	10YR5/3	10YR6/3	試掘坑東
第44図-248			X130Y135	弥生土器	壺口縁部	15.0	-	-	-	0.4	0.85	7.5YR5/4	7.5YR3/1	
第44図-249			自然河道	弥生土器	甕口縁部	18.7	-	-	-	0.4	0.95	10YR5/2	10YR3/1	
第44図-250			X130Y120	弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.4	0.95	10YR5/3	10YR6/3	
第44図-251	X130Y135		弥生土器	甕口縁部	18.0	-	-	-	0.4	0.6	10YR5/3	7.5YR4/2		
第44図-252	X130Y130		弥生土器	蓋	9.2	-	-	3.8	0.55	0.8	10YR6/3	10YR6/3		
第44図-253	トレンチ		弥生土器	高坏	32.1	-	-	-	0.45	1.25	7.5YR5/3	5YR6/4		
第44図-254	X130Y140		弥生土器	高坏脚部	-	-	21.2	-	0.25	1.1	10YR5/2	7.5YR5/3		
第44図-255	X130Y130		弥生土器	高坏脚部	-	-	13.8	-	0.5	1.0	10YR5/2	5YR5/4		
第44図-256	X130Y125		弥生土器	高坏脚部	-	-	24.0	-	0.6	1.2	10YR6/4	2.5YR5/4		
第45図-257	E-3	SD06	須恵器	壺口縁部	9.8	-	-	-	0.6	0.8	10YR6/1	10YR6/1		
第45図-258		SD06	須恵器	坏	10.2	-	5.5	3.7	0.2	0.7	2.5Y5/1	2.5Y6/1		
第45図-259		SD10	弥生土器	甕口縁部	29.2	-	-	-	0.5	0.8	10YR4/2	10YR3/1		
第45図-260		SD10	弥生土器	壺口縁部	11.0	-	-	-	0.4	0.7	10YR5/3	10YR5/2		
第45図-261		SD07	弥生土器	甕口縁部	17.6	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR5/3	7.5YR4/2		
第45図-262		SD07	弥生土器	鉢	13.6	14.2	-	-	0.4	0.6	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第45図-263		SD10	弥生土器	甕口縁部	17.0	-	-	-	0.4	0.6	10YR4/2	10YR2/1		
第45図-264		SD11	弥生土器	壺口縁部	14.4	-	-	-	0.4	0.9	7.5YR5/2	7.5YR4/2		
第45図-265		SD11	弥生土器	壺口縁部	-	-	-	-	0.7	1.3	10YR4/2	7.5YR5/2		
第45図-266		SD12・床面	弥生土器	甕口縁部	23.0	-	-	-	0.3	1.2	10YR5/3	7.5YR4/3		
第45図-267		SD12・床面	弥生土器	壺	9.6	16.6	-	20.6	0.4	0.85	7.5YR6/2	7.5YR5/3	古墳?	
第45図-268		SD12	弥生土器	壺口縁部	12.8	-	-	-	0.6	1.3	10YR4/2	10YR3/2		
第45図-269		SD12・中間	弥生土器	埴	9.4	9.4	-	8.8	0.35	0.85	10YR5/2	10YR5/2	古墳?	
第45図-270		SD13	弥生土器	壺口縁部	12.0	-	-	-	0.4	1.1	2.5Y4/1	7.5YR4/3		
第45図-271		自然河道	弥生土器	小型壺	-	7.0	3.4	-	0.4	0.9	10YR6/3	10YR6/2		
第45図-272		SD12	弥生土器	高坏坏部	17.8	-	7.6	4.1	0.5	0.7	10YR4/2	10YR3/5		
第45図-273		SD12	弥生土器	甕口縁部	18.4	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR4/3	10YR3/1		
第45図-274		SD12	弥生土器	甕口縁部	16.4	-	-	-	0.4	0.6	10YR4/1	10YR3/1		
第45図-275		SD12	弥生土器	甕口縁部	23.8	-	-	-	0.4	0.7	10YR3/1	10YR3/1		
第45図-276		SD12	土師器	埴	12.6	-	2.5	7.8	0.2	0.6	7.5YR4/2	10YR5/2		
第46図-277		SK01・中間	弥生土器	壺	-	17.2	3.8	-	0.6	0.9	10YR4/2	10YR5/2	古墳?	
第46図-278		SK01	弥生土器	壺	16.6	24.2	-	-	0.6	0.9	10YR4/2	10YR3/1	古墳?	
第46図-279		SK01	弥生土器	壺	16.0	-	-	-	0.4	0.6	7.5YR5/2	7.5YR4/3		
第46図-280		包含層	弥生土器	甕口縁部	18.6	-	-	-	0.4	1.3	7.5YR4/2	2.5YR4/1		

表 2. 土器観察表⑥

報告書番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)					色調		備考	
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	器高	器厚		(内)		(外)
									最小	最大			
第46図-281	E-3	包含層	弥生土器	甕口縁部	16.4	-	-	-	0.5	0.9	10YR4/2	7.5YR3/2	
第46図-282		包含層	弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.7	0.9	10YR5/3	10YR5/2	
第46図-283		包含層	弥生土器	高坏もしくは器台	-	-	24.0	-	0.45	1.1	7.5YR3/1	7.5YR5/3	口縁内面炭化物付着
第46図-284		包含層	弥生土器	甕口縁部	28.8	-	-	-	0.6	1.1	7.5YR5/3	7.5YR4/3	
第46図-285		包含層	弥生土器	高坏脚部	-	4.8	-	-	0.8	2.4	10YR5/2	2.5YR6/2	
第46図-286		包含層	弥生土器	高坏脚部	-	-	19.2	-	0.55	1.0	10YR5/3	10YR5/3	
第47図-287	E-4	SD01	弥生土器	甕口縁部	16.3	-	-	-	0.5	0.8	10YR5/3	7.5YR4/2	
第47図-288		SD01	弥生土器	甕口縁部	15.0	-	-	-	0.55	0.7	10YR5/2	7.5YR5/3	
第47図-289		SD01	弥生土器	甕口縁部	15.2	-	-	-	0.6	1.1	7.5YR5/3	10YR4/2	
第47図-290		SD01	弥生土器	甕口縁部	16.8	-	-	-	0.55	1.2	2.5Y6/3	10YR5/3	
第47図-291		SD01	弥生土器	甕口縁部	17.5	-	-	-	0.4	0.9	10YR5/3	10YR6/3	
第47図-292		SD01	弥生土器	甕口縁部	15.8	-	-	-	0.6	0.9	10YR5/2	7.5YR4/2	
第47図-293		SD01	弥生土器	甕口縁部	15.0	-	-	-	0.45	1.2	10YR5/3	10YR4/1	
第47図-294		SD01	弥生土器	甕口縁部	16.0	-	-	-	0.35	0.7	10YR5/2	10YR5/2	
第47図-295		SD01	弥生土器	甕口縁部	14.4	-	-	-	0.4	0.75	10YR5/2	10YR5/2	
第47図-296		SD01	弥生土器	甕口縁部	20.6	-	-	-	0.5	1.1	7.5YR5/3	10YR6/3	
第47図-297		SD01・床面	弥生土器	甕口縁部	16.2	20.3	-	-	0.4	0.7	2.5YR5/1	10YR4/1	
第47図-298		SD01	弥生土器	甕口縁部	15.6	20.9	-	-	0.5	1.1	10YR5/2	10YR3/1	
第47図-299		SD01	弥生土器	甕口縁部	16.4	20.0	-	-	0.35	0.7	7.5YR6/4	7.5YR4/3	
第48図-300		SD01	弥生土器	甕口縁部	19.1	-	-	-	0.4	0.8	7.5YR5/3	10YR6/3	
第48図-301		SD01	弥生土器	甕口縁部	18.2	-	-	-	0.5	1.0	10YR5/3	10YR6/3	
第48図-302		SD01・床面	弥生土器	甕	20.0	-	-	-	0.4	0.6	7.5YR4/3	7.5YR5/4	
第48図-303		SD01	弥生土器	甕	18.2	25.7	-	-	0.5	1.5	10YR5/2	7.5YR4/1	
第48図-304		SD01	弥生土器	壺	12.0	13.3	-	-	0.35	0.65	7.5YR5/3	7.5YR6/4	
第48図-305		SD01	弥生土器	甕	17.5	24.4	-	29.0	0.45	0.9	7.5YR5/1	7.5YR4/1	
第48図-306		SD01	弥生土器	壺口縁部	12.8	-	-	-	0.55	0.9	10YR6/3	7.5YR6/3	
第48図-307		SD01	弥生土器	甕	13.2	-	3.8	13.25	0.35	0.5	7.5YR5/2	7.5YR4/1	
第49図-308		SD01	弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.8	2.0	10YR6/3	10YR6/3	
第49図-309		SD01	弥生土器	壺口縁部	23.0	-	-	-	0.85	1.2	10YR5/2	10YR6/3	
第49図-310		SD01	弥生土器	壺底部	-	23.5	3.9	-	0.5	1.3	10YR5/2	10YR5/3	
第49図-311		SD01	弥生土器	壺底部	-	-	9.2	-	0.8	1.5	7.5YR5/3	10YR5/2	
第49図-312		SD01	弥生土器	壺底部	-	-	6.6	-	0.6	1.25	10YR5/3	10YR5/3	
第50図-313		SD01	弥生土器	高坏	17.2	-	14.0	15.1	0.4	0.85	7.5YR5/3	10YR5/2	
第50図-314		SD01	弥生土器	高坏坏部	15.8	-	-	-	0.3	0.7	10YR5/2	7.5YR6/4	
第50図-315		SD01	弥生土器	高坏坏部	15.2	-	-	-	0.4	0.5	2.5YR5/1	7.5YR5/2	
第50図-316		SD01	弥生土器	高坏坏部	14.2	-	-	-	0.3	0.9	10YR5/2	7.5YR4/1	
第50図-317		SD01	弥生土器	高坏坏部	14.6	-	-	-	0.45	0.5	10YR5/3	10YR6/3	
第50図-318		SD01	弥生土器	高坏坏部	17.0	-	-	-	0.25	0.75	7.5YR5/2	7.5YR4/1	
第50図-319		SD01	弥生土器	高坏坏部	16.0	-	-	-	0.4	0.95	10YR4/2	7.5YR4/2	
第50図-320		SD01	弥生土器	高坏坏部	17.0	-	-	-	0.3	0.65	10YR5/2	7.5YR4/2	
第50図-321		SD01	弥生土器	高坏坏部	15.0	-	-	-	0.25	0.85	7.5YR5/3	2.5YR6/6	
第50図-322		SD01	弥生土器	高坏脚部	-	-	-	-	0.5	0.65	10YR6/3	10YR5/3	
第50図-323		SD01	弥生土器	高坏脚部	-	-	-	-	0.75	1.15	7.5YR5/3	10YR5/2	
第50図-324		SD01	弥生土器	高坏脚部	-	-	-	-	0.45	0.8	10YR4/2	10YR6/3	
第50図-325		SD01	弥生土器	高坏脚部	-	-	12.2	-	0.5	1.0	10YR6/2	10YR5/2	
第50図-326		SD01	弥生土器	高坏脚部	-	-	9.0	-	0.45	1.3	7.5YR6/3	7.5YR5/2	
第50図-327		SD01	弥生土器	高坏脚部	-	-	11.0	-	0.5	0.85	7.5YR4/2	7.5YR6/3	
第51図-328		SD01	弥生土器	小型甕	8.9	11.0	5.7	10.55	0.55	1.1	10YR5/2	5YR5/3	
第51図-329	SD01	弥生土器	埴	9.7	5.8	-	6.9	0.4	0.8	10YR5/2	10YR6/3		
第51図-330	SD01	弥生土器	小型壺胴部	-	10.0	-	-	0.15	0.7	10YR6/2	10YR6/3		
第51図-331	SD01	弥生土器	壺口縁部	9.0	10.9	-	-	0.4	0.6	10YR5/2	10YR6/3		
第51図-332	SD01・床面	弥生土器	蓋	-	-	-	-	0.6	1.2	10YR5/2	10YR5/2		
第51図-333	SD01	弥生土器	器台脚部	-	-	10.2	-	0.45	1.0	10YR5/3	10YR6/3		
第51図-334	SD01	弥生土器	鉢	13.8	-	5.75	5.3	0.4	0.9	7.5YR5/3	7.5YR5/4		
第51図-335	SD01	弥生土器	長頸台付壺	-	15.3	7.6	-	0.5	1.0	10YR7/2	10YR7/2		
第51図-336	SD02・床面	弥生土器	壺	13.0	19.0	-	-	0.5	0.65	7.5YR5/3	10YR6/3		
第51図-337	SD02・床面	弥生土器	壺底部	-	16.8	6.0	-	0.55	0.7	10YR5/2	10YR5/2		
第51図-338	SK02・床面	弥生土器	甕	-	16.2	7.0	-	0.35	1.6	7.5YR6/4	10YR6/3		



※ 法量測定基準

※ 器種分類の基準

- ・甕……口縁部径及び胴部径がほぼ同じか、もしくは口縁部の方が胴部に比べて大きい土器。
- ・壺……口縁部径が胴部径よりも小さい土器。

3. その他の出土遺物

1) 石製品

・環状石器 (第 52 図 1)

C-2 区 SK01 床面より出土した直径 126.0mm、厚さ 42.0mm の環状石器である。欠損している半分は SK01 では出土しなかった。凝灰岩系の石材を敲打することにより円形状に加工し、削りにより平らな面を成形し円盤状にしたものとみられる。中心は両側穿孔で貫通している。環状石斧の可能性も考えられるが、周囲を刃として加工していないため、凹み石の一種とみられる。

・砥石 (第 52 図 2)

D-2 区 SX01 の最下層から出土した現存最大長 130.5mm、厚さ 25.5mm の砥石である。石材は安山岩系である。中央部に製品を磨く際の凹みが確認できる。凹みがある面は加工することによって平らな面になっている。石材が軟質のため、製作最終工程の際に使用された砥石とみられる。

・敲き石 (第 52 図 3 ~ 5)

敲打痕が確認できた石製品を敲き石とした。3 は C-2 区 SP07 から出土した現存最大長 103.5mm、幅 53.5mm の敲き石である。石材は砂岩系もしくは凝灰岩系の比較的軟質の石材である。全体に敲打もしくは擦痕が確認できる。敲打や削りにより成形したものと考えられる。4・5 は両側に敲打痕がみられる凝灰岩系の敲き石である。3 とは異なり、擦痕は確認できない。4 は最大長 96.5mm、幅 49.0mm、5 は最大長 107.5mm、幅 54.0mm で、4 は C-2 区 SK01 から、5 は D-2 区 SX01 から出土した。



・石刀（第 52 図 6）

C-3 区表土掘削時に出土した石刀である。敲打により成形し、削り加工で最終成形を行っている。刃部は特に丁寧に擦っている。現存最大長 87.5mm、幅 34.5mm で、石材はやや硬質の砂岩系とみられ、表面には鉄分とみられる付着物がある。時期は縄文時代晩期の石刀とみられるが、表土からの出土ということもあり、明確にはわからない。

・有溝石製品（第 53 図 7）

C-2 区包含層より出土した石製品である。現存最大長 62.5mm 現存最大幅 16.5mm、厚さ 14.5mm である。石材は蛇紋岩とみられ、両側より擦り切りを行っている。管玉等の製作過程のものともみられる。

・磨製石斧（第 53 図 8～11）

いずれも小形の磨製石斧である。8 は C-2 区 SD08 出土で、現存最大長 40.5mm、現存最大幅 24.5mm 厚さ 15.5mm で、若干厚めの片刃磨製石斧である。9 は C-1 区表土からの出土で、最大長 47.5mm、最大幅 32.0mm、厚さ 5.0mm と薄めの片刃磨製石斧である。10 は 9 と同じく C-1 区表土からの出土で、現存最大長 30.0mm、現存最大幅 19.5mm、厚さ 5.0mm とかなり小形の磨製石斧である。刃部は欠損している。全面に擦痕がみられる。11 は D-1 区 SD14・15 出土で、現存最大長 27.0mm、現存最大幅 16.5mm、厚さ 11.0mm と 10 と同様、かなり小形の磨製石斧である。

・翡翠製石製品（第 53 図 12）

D-1 区土器溜まりより出土した翡翠製の石製品である。グリーンタフのチップと混在して出土した。現存最大長 14.0mm、厚さ 4mm とかなり小さい。両面及び側面を加工し円盤状に成形している。2 連の穿孔がみられるが、片側からの穿孔部分は貫通していない。半分は欠損しているが、一端に切り込みがみられ、塊状石製品とみられる。

以上が石製品であるが、この他に翡翠の原石なども出土した。

2) 土製品

・土錘（第 53 図 13・14）

3 点の土錘が出土し、比較的残りの良い物を図示した。13 は E-1 区 SP16 出土で、最大長 40.5mm、最大幅 32.5mm の寸胴な土錘である。14 は C-2 区 SD08 出土で、最大長 40.5mm、最大幅 34.5mm の若干胴部が膨らむ土錘である。

・不明土製品（第 53 図 15）

C-2 区 SK01 の肩部より出土した不明土製品である。用途は不明である。

3) 木製品

・下駄（第 53 図 16）

D-1 区の井戸状遺構などから箸や曲げ物の底板などが出土した。いずれも時期は中世以降の木製品とみられ、弥生時代に属する木製品は出土しなかった。

16 は C-1 区 SD07 ④の埋土から出土した下駄である。現存最大長 218.0mm、現存最大幅 82.0mm で材は広葉樹とみられる。差し歯は欠損しており、周囲からも出土しなかった。SD07 が埋積す

る際に混入した物と考えられる。

#### 4) その他

##### ・古銭（第 53 図 17・18）

その他の遺物としては図示した「開眼通寶」や「元佑通寶」などの古銭や、近世以降のキセルなどが出土した。

#### 4. 特殊石製品（第 54 図）

##### 1) 出土状況

D-1 区と D-2 区にかかる自然河道もしくは谷部とみられる箇所肩部より出土した。谷部に対し断ち割りを入れ、層序の確認を行ったところ、基本的に第 1 層に表土・床土、第 2 層に粘土層、第 3 層に砂質層、第 4 層が黒褐色の粘土層、第 5 層が地山である。谷部の埋積土は基本的に砂質層の第 3 層である。（第 13 図）この石製品が出土した地点では、第 3 層に弥生時代後期から古墳時代前期の土器群（第 30 図 72～81・第 31 図 87）が、また、この第 3 層直下、第 4 層より弥生時代後期の土器群（第 31 図 82～86・88・89）が出土した。石製品は第 4 層の土器群とほぼ同じ位置とみられる谷の落ち際で出土した。石製品を取り上げる前に出土地点の周辺の遺構検出などを行ったが、他に関連するような遺物・遺構は検出しなかった。

##### 2) 形状及び加工・施文

石製品の外見は、丸みを帯びた三角形に近い平面形で、一見すると二枚貝に似た形状となっている。類例が見あたらないため、仮に三角形の頂点を下方、割り抜かれた面を上とし、容器状の遺物として取り扱うことにした。

石材は広義の蛇紋岩であり、法量は縦 13.8cm・横 17.1cm・高さ 7.0cm・最大厚 1.9cm・最小厚 0.8cm・重量 918.7g である。

口縁部両側面には瘤状の突起が彫り出され、背面には幅 2mm 弱の凹線により、中央に縦の直線、左側には矢印、右側は三角形に似た文様が施されている。また、内外面ともに、口縁部付近には漆とみられる付着物が一部残存している。

成形方法としては、大まかな形を造り出し、全体を丁寧な研磨により成形したものであろう。表面には若干の敲打痕も観察できる。口縁部側面の瘤状突起や凹線などは、擦切技法を用いて施文したものとみられる。

加工工具の識別は、肉眼観察では識別が困難であるが、凹線の観察から、幅約 2mm 弱の先端部が鋭利ではない加工工具の使用痕が識別できる。加工工具の素材については、硬度 3 前後の蛇紋岩より硬質な石英等の石材・鉄器・骨角器等が推定できる。いずれにせよ、全体の丁寧な仕上げや割り抜きも含め、加工には長時間を要したものと考えられる。

##### 3) 年代

石製品そのものの年代に関しては、文様や形態等、縄文時代の遺物に類似する点が多い。しか

し、現在のところ類例が見あたらず、遺物単独での時期比定は困難であることから、現時点では出土状況を重視し、遺物の埋没時期を推測することに留めたい。

出土状況については、①標高 1m 前後の沖積低地に位置する高島 A 遺跡の周辺では、これまで明確な縄文時代集落跡は確認されておらず、今回の調査でも、前身となる縄文時代の集落の存在は確認されていない。②出土地点の河道跡は遺構機能時も流れが緩やかで、重量のある石製品が流れ込んだとは考えられず、また、石製品の表面にも流れ込みの際に生じる磨耗がみられない。③出土層位は弥生時代後期に当たり、下部層の上限は弥生時代後期前半であり、上部層では無遺物間層堆積後に古墳時代の土器が投棄されている。

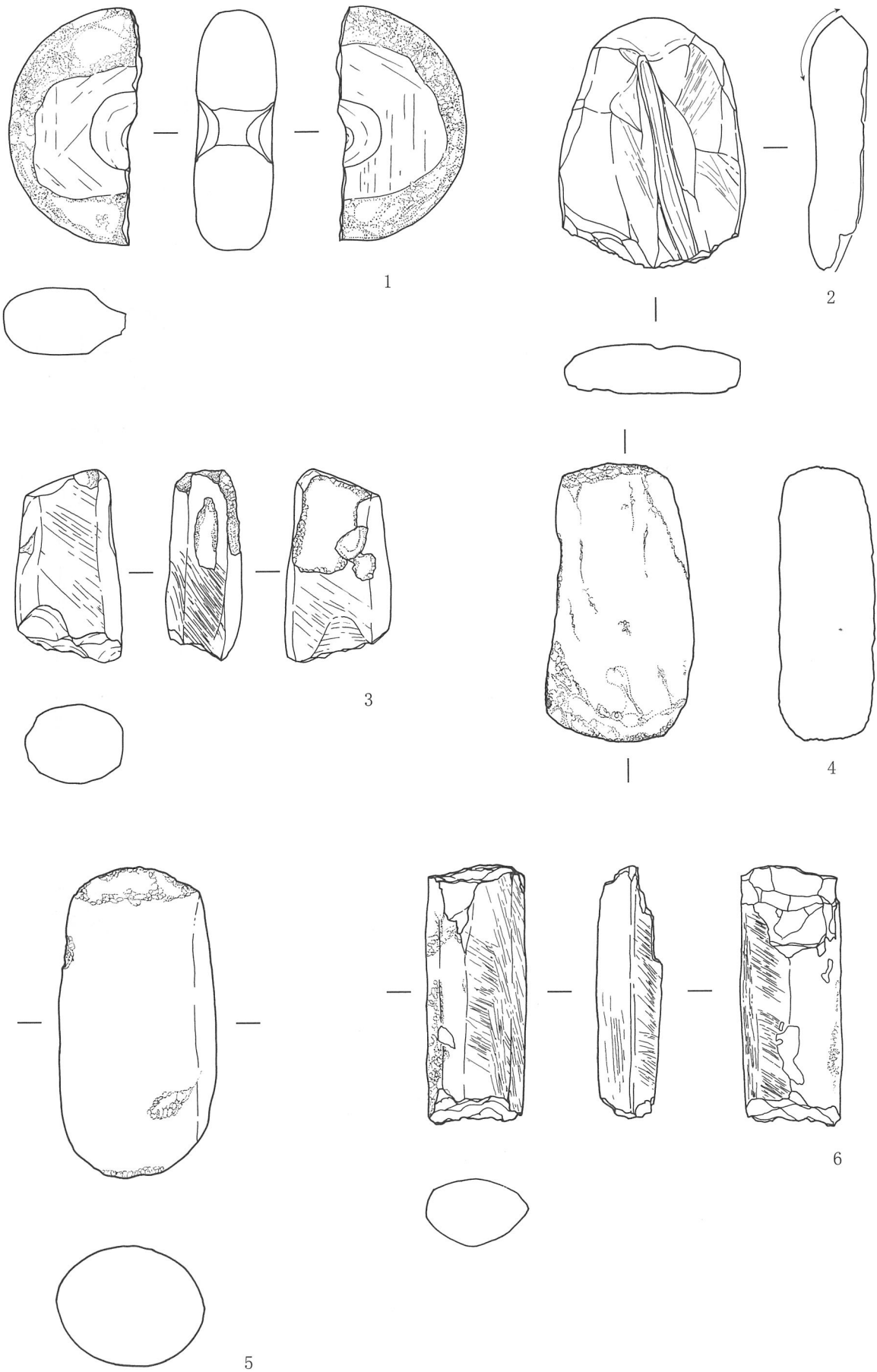
以上 3 点から、この石製品は、弥生時代後期前半から古墳時代前期以前に、出土地点の周囲から谷（河道）に投棄されたものと考えられる。

#### 4) 考察

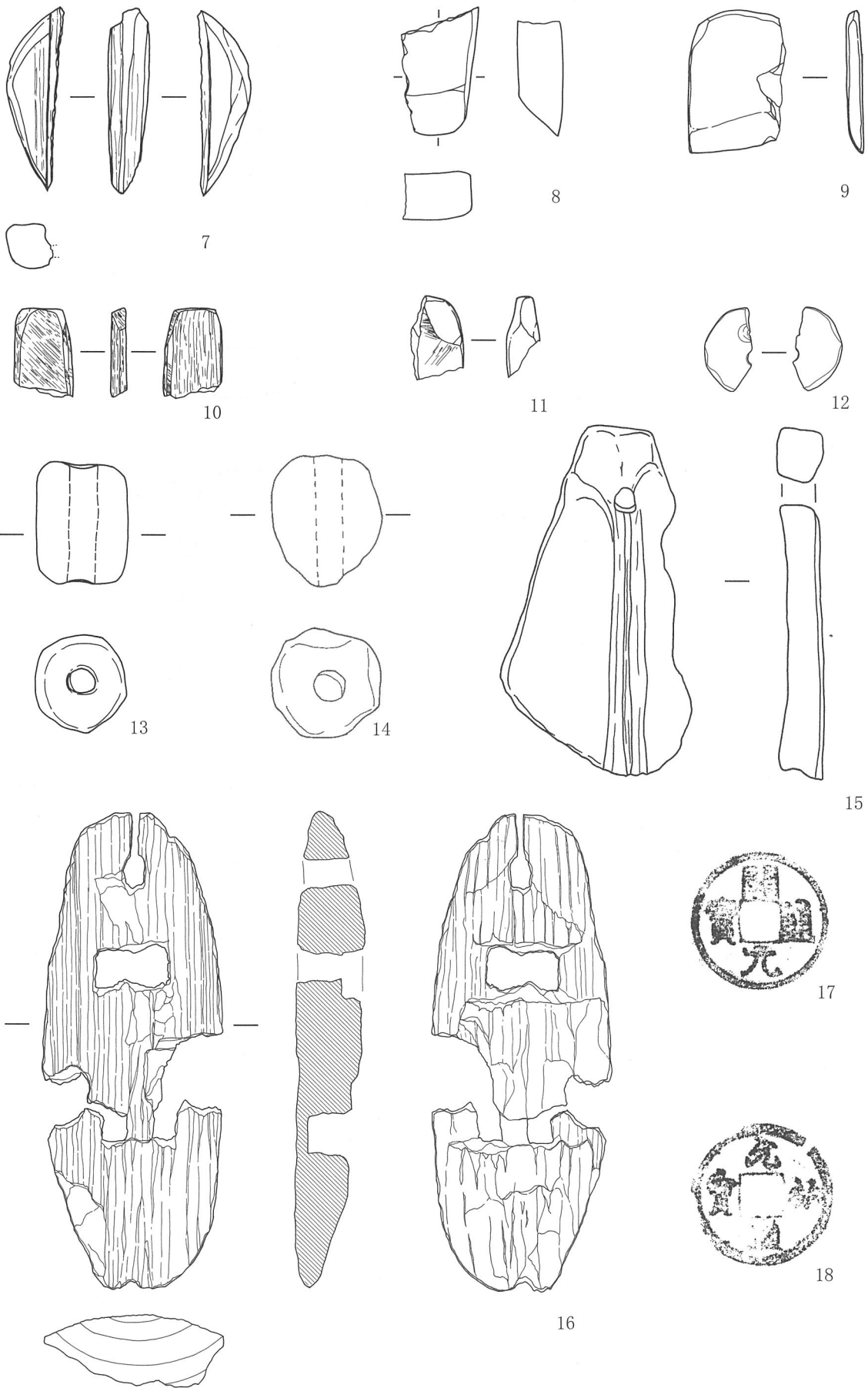
特殊石製品は、今回の調査での出土遺物の中で特異な雰囲気醸し出している。蛇紋岩の加工技術自体は、縄文時代前期の玦状耳飾にみられるとおり、かなり古い時代から存在し、瘤状突起などの装飾は、東日本の縄文時代晩期の土器の文様にも類似している。しかし、蛇紋岩の塊を割り抜き成形するという技法は、現在のところ縄文時代の遺物にはみられない。その点から考えると古墳時代の中・後期にかけて東日本地域にみられる特徴的な石枕は、その一面に窪みを持たせるといふ点では、比較の対象として挙げられよう。しかし、出土状況を重視すると、弥生時代後期に投棄された可能性が最も高いことは先述の通りである。

石製品は、その形状から容器として用いられたものと考えられる。特異な装飾などから、やはり祭祀的な側面についての検討を避けることはできないが、弥生時代の祭祀具とは、いわゆる農耕祭祀と総称される銅鏡・銅鐸を代表とする青銅器や武器形・鳥形等の木製品、これらを模した石製品・土製品等が主体となっている。従って、この石製品は一般的に知られる弥生時代の遺物の尺度からは、評価することが困難である。

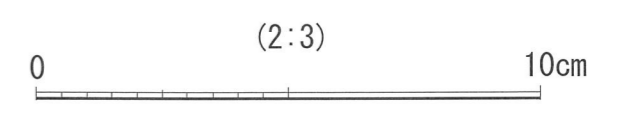
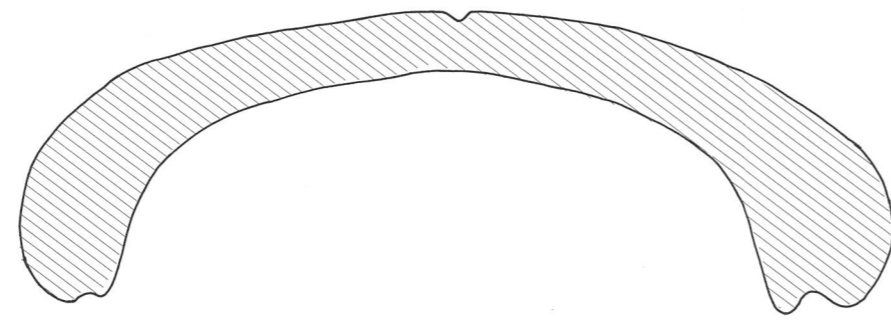
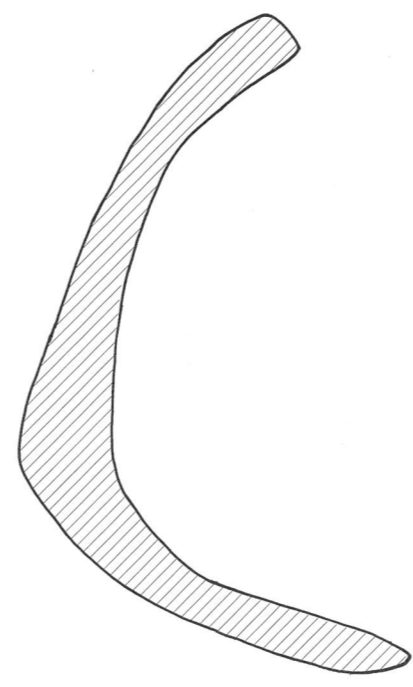
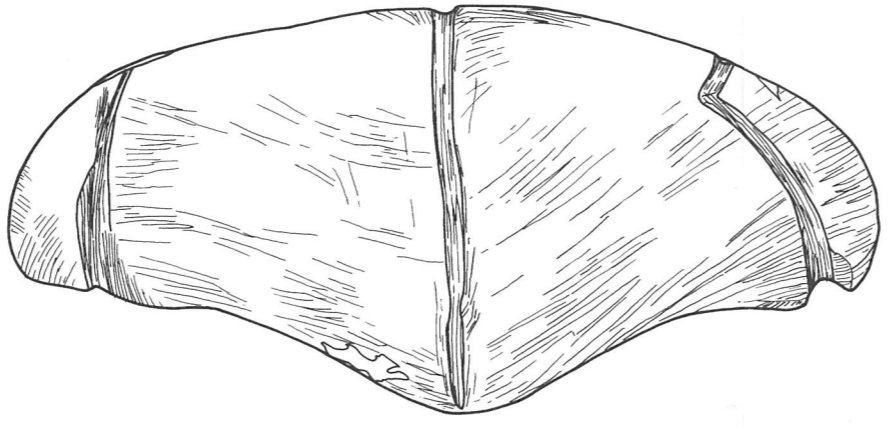
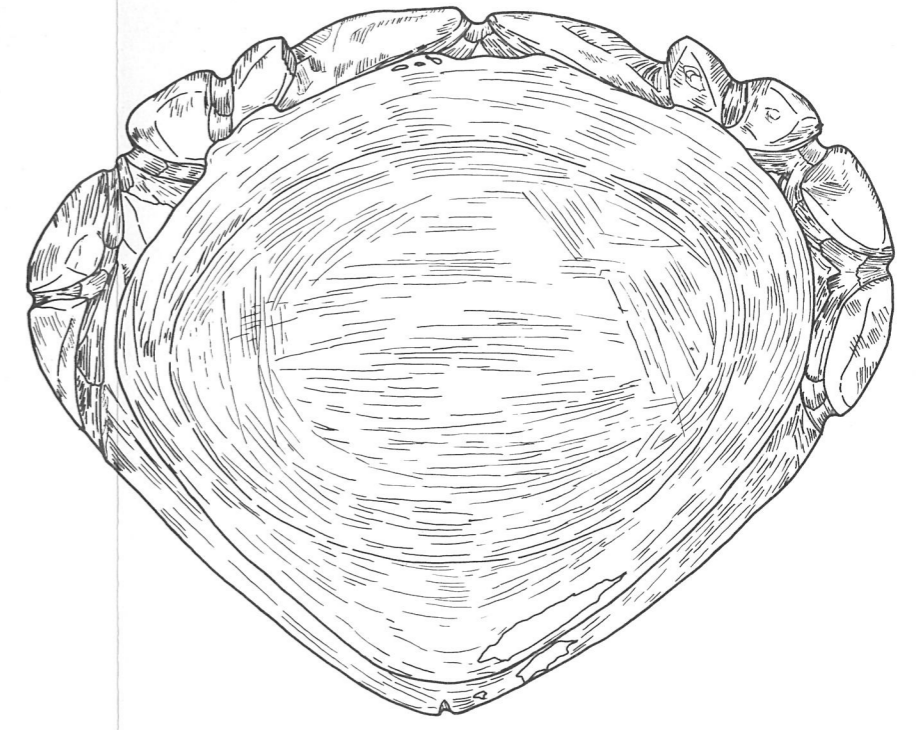
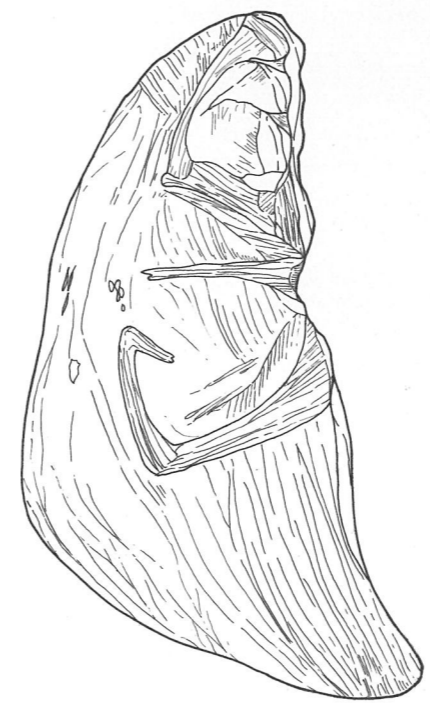
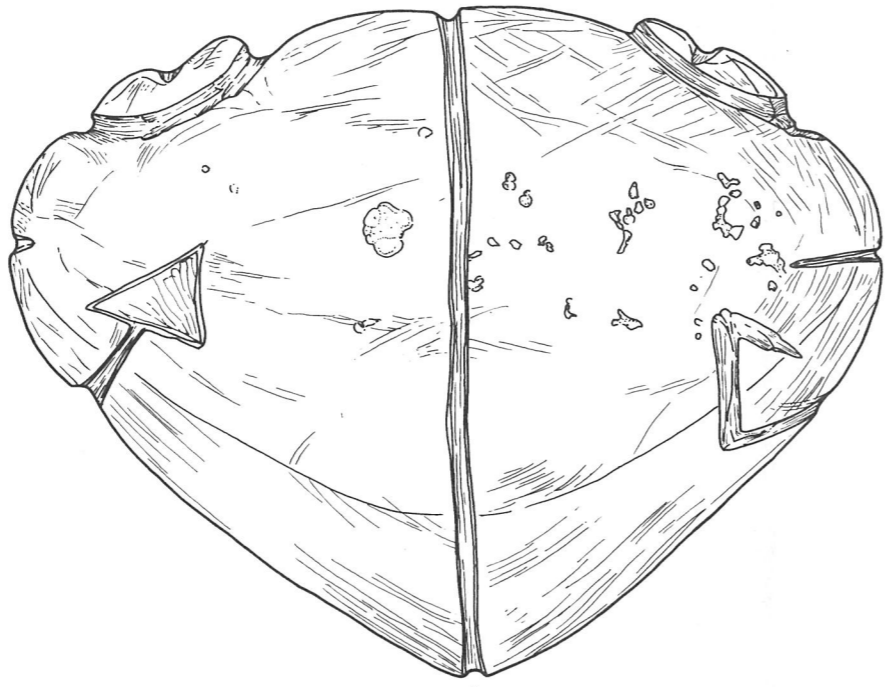
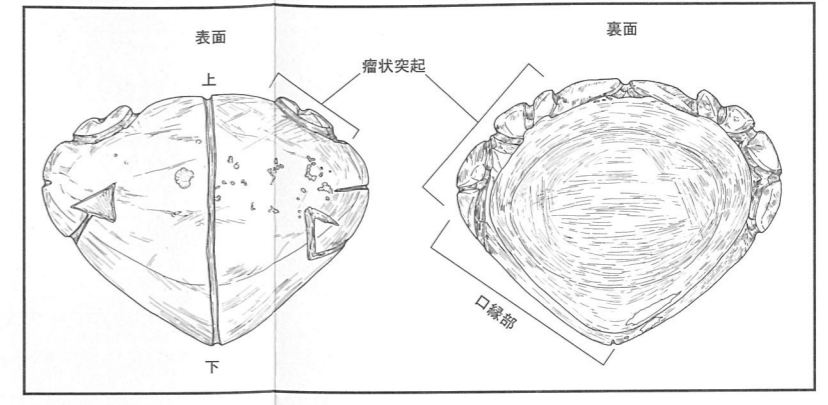
結論として、現時点では類例がないため、用途・性格を特定することはできない。ただ、鳥取県・青谷上寺池遺跡でも蛇紋岩製の異形石製品や銅鐸形石製品の出土が報告されており、特異な形状の蛇紋岩製品が弥生時代祭祀具の一角に存在する可能性を示唆している。今後の調査研究によって遺跡の性格とともに遺物の持つ意味を解明していきたい。



第 52 図 石製品 (S=1/3)



第 53 图 石製品・土製品・木製品・古銭 (7 ~ 11・13・14:S=1/3, 12・15・17・18:S=1/1, 16:S=1/4)



第 54 図 特殊石製品 (S=2/3)

## V 理化学分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高島A遺跡（富山県射水市鏡宮所在）は、射水平野の中央部に位置する。射水平野は縄文海進の最盛期には全域が海域であったが、海退と砂堤の形成により縄文時代後期～晩期には広範囲にわたり潟湖となる。その後は土砂の流入等により急速に潟が縮小していったと考えられている（藤井, 2000）。本遺跡では、弥生時代以降、遺物や遺構など人間活動の痕跡が認められることから、この時期にはすでに安定した微高地が形成されていたものと推定される。

今回は、1. ボーリング調査による遺跡内基本層序の確認、2. ボーリング試料を用いた弥生時代以前の古環境、3. 遺構埋積物を対象とした古環境、4. 石製品内容物、の4項目について調査する。また、調査手法として、手動によるボーリング調査、珪藻分析、花粉分析（イネ属同定含む）、植物珪酸体分析、微細物分析を用いる。

### 1. ボーリング調査

#### (1) 分析地点

調査地点は図 55 に示す 6 地点である。地形やトレンチ断面の結果を考慮し、遺物包含層が厚く堆積していると思われる、谷状地形の延長線上を中心に選定して実施する。

#### (2) 手法

ボーリングは、トーマス型サンプラーを用いて行った。この機材は、試料採取量が少なく（直径 2cm）、試料が多少攪乱された状態で採取されるという欠点をもつが、砂質な堆積物においても手動で掘削が可能のため、今回の調査地域においては適すると判断した。現地にて採取した試料は、層相観察を行ったあと、分析用試料として 5-10cm 単位で分割・保存する。

#### (3) 結果

結果を図 56 に、試料の状態を図版 1 に示す。調査の結果、標高 0m 前後に青灰色の砂質シルト～砂層が分布し、これが基底となる。場所によっては灰色～褐灰色となるが、これは地下水位の影響等で酸化を受けているためと思われる。ただし、3 地点や 4 地点では、地山の標高が他の地点に比べて 50cm 高い。その上には遺物包含層となる土壌化した暗灰～黒灰色の粘土質層が堆積する。ただし、2 地点は中世以降の溝の延長線上にある点や、土質などから中世の溝の覆土にあたると思われる。また 5 地点は断面で確認された谷状遺構の延長線上にあるため、覆土に相当する粘土層が厚く堆積する。標高 1m 前後には、現在の「耕作土」が 30cm 前後の厚さでみられる。過去の発掘調査所見によれば、調査地点の標高は 0.9-1.3m と平坦で、標高差はほとんどない。遺構確認面までの深度は浅く、ほ場整備や現在の耕作によって遺物包含層が削平されるなどの影響を受けている。基本層序は I 層（現耕作土）、II 層（中世遺構確認面 黄褐色粘土など）、III 層（弥生時代～古代遺物包含層 黒色粘土など）、IV 層（弥生時代～中世遺構確認面 黄灰色粘土など）、V 層（灰黄色粘土 地山）となる（新湊市教育委員会, 2002）。今回のボーリング調

査結果と比較すると、地山の青灰色砂層はV層より下位に相当し、黒灰～褐灰色粘土がⅢ層に、現耕土がⅠ層にあたると思われる。

## 2. 分析試料

弥生時代の遺構が構築される以前の古環境を把握するために、5地点で行ったボーリング試料を用いる。珪藻分析3点（試料番号2、3、6）、花粉分析1点（試料番号3）をそれぞれ実施する。これらは遺構との層位関係から、弥生時代中・後期以前と思われるが、弥生時代から極端にさかのぼることはないと推測される。

また、遺構が構築された弥生時代中期～古墳時代の古環境を推定する目的で、遺構覆土を対象とした調査を実施する。C-1区SX03では珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析各1点（試料番号6）を分析する。D-2区SX01は、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析を各1点（上層）分析する。D-1区流路では、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析を各1点（試料番号4）分析する。E-4区SD01では、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を各1点（試料番号A-A' ;1）分析する。E-4区SD04では、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を各1点（試料番号A-A' ;2）分析する。石製品内容物の検討は、遺物上面の覆土1点を分析する。なお、花粉分析に関しては、イネ属同定も併せて実施する。

## 3. 分析方法

### (1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか(1998)、KrAmmer(1992)、KrAmmer & LAngé-BertAlot(1986, 1988, 1991A, 1991b)などを参照した。

同定結果は、海水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境を解析するにあたって、淡水生種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性はAsAi & WAtAnAbe(1995)の環境指標種を参考とする。

### (2) 花粉分析・イネ属同定

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による



有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9:濃硫酸 1 の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（TAx）について同定・計数する。結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

なお、イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚の状況・粒径などを考慮して、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類した。

### (3) 植物珪酸体分析

湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡ししやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

### (4) 微細物分析

SX01 上層 (200cc)、石製品内容物 (150cc)、D-1 流路の 4 層 (50cc) の各試料を水に一晩浸した後、0.5mm 目の篩を通して水洗し、残渣を粒径別にシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や木材、炭化材を抽出する。種実遺体の形態的特徴を、所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川, 1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか, 2000）等と比較し、種類を同定し個数を求める。炭化材、不明炭化物、高師小僧は、70°C 48 時間乾燥後の重量を求める。分析後の種実遺体等は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

## 4. 結果

### (1) 珪藻分析

結果を表 3、図 57 に示す。また、珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表 4 に示す。5 地点の試料番号 2、SD01、SD04 の各試料では珪藻化石の産出が少なかったが、それ以外の 5 試

料からは比較的多く産出する。また、完形殻の出現率は、50%以下の試料が多い。産出分類群数は、合計で 46 属 112 分類群である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

ボーリング試料の 5 地点では、珪藻化石が産出した試料番号 3 と 6 では群集が異なる。試料番号 3 は、水生珪藻が約 60% と多産し、これに次いで陸生珪藻が約 30%、淡水生種～汽水生種が約 10% 産出する。主な産出種は、淡水～汽水生種の *RhopAlodiA gibberulA*、流水不定性の *SynedrA ulnA*、陸生珪藻 B 群であり沼沢湿地付着生種群でもある *EunotiA prAeruptA vAr. bidens*、それに陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *HAntzschia Amphioxys* である。試料番号 6 は、多産するものではなく、淡水～汽水生種の *RhopAlodiA gibberulA*、好流水性の *CA loneis bAcillum*、*PIA coneis elginensis vAr. neglectA*、*PinnulAriA mesoleptA*、*PIA coneis elginensis*、それに陸生珪藻 B 群の *PinnulAriA subcApitAtA* が産出する。なお、珪藻化石の少なかった試料番号 2 は、第三紀絶滅種を含む海水生種、水生珪藻、陸生珪藻等が少量産出したのみである。

C-1 区 SX03 は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が約 70%、陸生珪藻が約 30% 産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩嫌塩性種、真 + 好酸性種、流水不定性種が多産する。主な産出種は、流水性で中～下流性河川指標種群の *Meridion circulAe vAr. constrictum*、流水不定性で好酸性の *EunotiA bilunAris*、*EunotiA minor vAr. minor*、*EunotiA cf. subArcuAtoides*、陸生珪藻 B 群であり沼沢湿地付着生種群でもある *EunotiA prAeruptA vAr. bidens* である。このうち、*EunotiA minor vAr. minor* は、沼沢湿地付着生種群でもある。

D-2 区 SX01 の上層は、水生珪藻が約 85% と優占する。淡水性種の生態性は、貧塩不定性種と貧塩嫌塩性種、pH 不定性種、流水不定性種と真 + 好止水性種が多産する。主要種は、貧塩嫌塩性で好止水性の *FrAgilAriA bicApitAtA* が約 30% と優占し、好流水性の *GomphonemA cf. helveticum*、流水不定性の *GomphonemA pArvulum*、沼沢湿地付着生種群の *EunotiA minor vAr. minor* が約 10% 産出する。これに次いで沼沢湿地付着生種群の *EunotiA incisA* を伴う。

D-1 区流路の試料番号 4 は、水生珪藻が約 60%、第三紀絶滅種を含む海水生種が約 20%、陸生珪藻が約 15% 産出する。多産するものではなく、海水浮遊性の *ThAlAssionemA nitzschoides*、第三紀絶滅種の *Actinocyclus ingens*、淡水～汽水生種の *RhopAlodiA gibberulA*、流水性で中～下流性河川指標種群の *Meridion circulAe vAr. constrictum*、*Rhoicosphenia AbbreviAtA*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *EunotiA minor vAr. minor*、それに陸生珪藻 B 群であり沼沢湿地付着生種群でもある *EunotiA prAeruptA vAr. bidens* 等が産出する。

E-4 区の SD01 と SD04 は、珪藻化石の産出が少ない。保存の悪い水生珪藻、沼沢湿地付着生種群、および第三紀絶滅種を含む海水生種が少量産出したのみである。

## (2) 花粉分析・イネ属同定

結果を表 5、図 58 に示す。全ての試料から比較的多くの花粉化石が検出されるが、保存状態は悪い。また草本花粉と木本花粉の割合は、ほぼ同率もしくは草本花粉の方が高い。

木本花粉をみると、全体的にスギ属とハンノキ属の割合が高い。この中でもスギ属は5地点の試料番号3で高く、ハンノキ属はE4区SD04と5地点の試料番号3で低い。その他、マツ属、ブナ属、コナラ亜属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属などがみられる。

草本花粉をみると、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の割合が高い。この中でもE4区SD04では、ヨモギ属の割合が特に高い。その他、ガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、サンショウモなど水生植物の花粉化石も少量みられる。

イネ属花粉は、5地点の試料番号3を除く試料から検出される。イネ科全体に対するイネ属の割合は3%~60%以上とばらつきが見られる。特にE-4のSD01で多産するが、これは植物珪酸体分析の結果と調和的である。

### (3) 植物珪酸体分析

結果を表6、図59に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

C-1区のSD07ではヨシ属の産出が顕著に目立ち、クマザサ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども検出される。D-1区の流路では、検出量が少なく、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族などがわずかに認められるに過ぎない。D-1区のSX01ではヨシ属の産出が目立ち、クマザサ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども検出される。また、栽培植物であるイネ属も認められる。この中には、籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列といった珪化組織片も見られる。E4区のSD01とSD04では、いずれもヨシ属の産出が目立ち、クマザサ属などが検出される。この中でもSD01ではイネ属の産出がめだち、短細胞列も見られる。

### (4) 微細物分析

結果を表5に示す。D-1区SX01からは、草本4分類群(オモダカ科、イネ、カヤツリグサ科、イボクサ)118個の種実が検出され、栽培植物のイネの胚乳が3個、穎が110個確認された。その他に、木材、炭化材、木材組織が認められない種類、部位共に不明の炭化物、昆虫、高師小僧(褐鉄鉱)、土器などが確認された。一方、D-1区流路や、石製品の覆土からは、同定可能な種実の検出は認められなかった。検出された種実の遺存状態は、栽培植物のイネが炭化している以外は、比較的良好である。以下に、同定された種実の形態的特徴などを記す。

#### ・オモダカ科 (AlismAtAceAe)

種子が検出された。淡褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1.5mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

#### ・イネ (Oryza sativa L.) イネ科イネ属

胚乳と穎(果)が検出された。炭化しており黒色を呈す。長楕円形でやや偏平。長さ4.5~6.5mm、幅2~3mm、厚さ1.5mm程度。胚乳は一端に胚が脱落した凹部があり、表面はやや平滑で、2~3本の縦溝がみられる。表面に穎が付着している個体が1個みられた。穎は基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が規則的に縦列する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。黒褐色、三稜状倒卵体。長さ 2.7mm、径 1.8mm 程度。頂部の柱頭部分はやや伸び、断面は三角形。基部は切形で基部から伸びる逆刺のある髭状の腕が残る個体もみられる。果皮はやや厚く、表面には微細な網目模様がある。

・イボクサ (Aneilema keiskei Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。淡灰褐色、半横長楕円形。径 2.2mm 程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

## 5. 考察

### (1) 弥生時代以前の古環境

5 地点で行った珪藻分析の結果、試料番号 3、6 で珪藻化石が多く産出する。下位の試料番号 6 は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産し、流水性種を伴うことから、流水の影響のある沼沢湿地のような堆積環境が示唆される。一方試料番号 3 は化石の保存が極めて悪く、複数の生態性を示す種類が混在し、殻が丈夫で化石として残りやすい種類が多産する。このことから、検出された化石は河川の氾濫によってもたらされた二次的なもので、当時の堆積環境を反映しているとはいえない。本遺跡の立地からすると、かつては氾濫や湿地化など、河川の影響を頻繁に受けるような状況であったと推測される。その後、流路変更などによって微高地が形成されると水の影響が少なくなり、人が生活できる環境へと変化したと考えられる。5 地点における珪藻化石群集は、このような徐々に離水していく過程を表しているといえる。また、遺物包含層や遺構覆土は、かつての氾濫堆積物が母材となり、これらが土壌化したり再堆積したりして形成されており、これらの母材となった堆積物の群集を反映しているともいえる。

縄文時代の射水平野に分布する遺跡や十二瀬で行われた花粉分析結果 (安田, 1982A, b; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 1999; 山崎, 1999 など) をみると、ハンノキ属をはじめとした低湿地林を形成する種類が多産する。また、弥生時代以降草本類の割合が急増する傾向が認められるが、これは水田など低地の開発に伴い、低地林が切りひらかれ、草地が増加したためと考えられている。今回の花粉分析結果では、弥生時代以前とされる 5 地点の試料番号 3 において、すでに草本類が多産する傾向がみられる。このことから、5 地点の堆積物は弥生時代頃と考えられ、検出されている遺構の時代観と大きな差はないと考えられる。したがって、5 地点の花粉分析結果は、遺構覆土の結果と併せて次項で検討することにする。このように、5 地点の堆積物と遺構覆土との花粉化石群集は類似するが、イネ属花粉が検出されないなどの違いがみられ、これが遺構の時代観よりもやや古いことを反映していると思われる。

### (2) 遺構の埋積過程

C-1 区 SX03 の珪藻化石群集は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産し、中～下流性河川指標種群を含む流水性種を伴う。また、陸生珪藻 B 群の *Eunotia praerupta* var. *bidens*

も多産するが、他に陸生珪藻を多く伴わないこと、沼沢湿地付着生種群でもあることから、湿地を指標していると思われる。これらのことから、流水の影響を受ける沼沢地のような湿潤な堆積環境であったと推測される。

D-2区SX01の珪藻化石群集は、好止水性のFrAgilAriA bicApitAtAが多産し、沼沢湿地付着生種群を多産する流水不定性種や流水性種を少量伴っていた。このことから、当時ある程度の水深がある水域が存在していたと推測され、SX01が井戸と考えられていることと調和的である。ただし、本遺跡周辺は地下水位が高いので、廃絶後にある程度埋積が進んでも、水溜まりのような状態が維持されたと考えられることから、必ずしもこれが機能時の状態を反映しているとはいえない。

D-1区の流路の珪藻化石群集は、第三紀絶滅種を含む海水生種や中～下流性河川指標種群を含む流水性種、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種など様々な堆積環境を示す珪藻化石が産出する。また、化石の保存状態も悪かった。このことから、流路の埋積物には生育環境の異なる珪藻化石が二次的に混入したと考えられ、流路内の水域環境を反映しているとは言い難い。前項でも述べたように、遺構内の覆土は、地山である氾濫堆積物が二次的に堆積したものと考えられることから、母材の影響を強くうけているものと思われる。

E-4区のSD01とSD04からは珪藻化石の産出が少なく、珪藻化石群集から堆積環境について検討することは困難である。ただし、種類構成をみると、D-1区の流路のように、様々な生態性をもつ珪藻が混在していることから、地山である氾濫堆積物が二次的に堆積したものと考えられ、母材となった堆積物の影響を強くうけているものと思われる。

### (3) 弥生時代頃の古植生

木本類の花粉組成をみると、先述した過去の事例と同様にハンノキ属やスギ属が多産しており、本遺跡周辺にはハンノキやスギの湿地林が分布していたと考えられる。なお、スギは現在では山間部にその分布が限られているが、富山県入善町には低地にスギの天然林が存在しており、富山県魚津市の海底からはスギの埋没林が検出されている。また、北陸地方の各遺跡からはスギの木製品や自然木が多数検出されていることから、かつては低地にスギが多く生育していたと考えられている（鈴木, 2002 など）。また、マツ属、ブナ属、コナラ亜属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属の種類は、丘陵上や丘陵縁辺部などを中心に生育していたと思われる。

一方草本花粉をみると、イネ科をはじめ、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科、キク亜科等開けた草地を好むものが多い。また、オモダカ属、ガマ属、ミズアオイ属、イボクサ属、コオホネ属、サンショウモ等水生植物の花粉化石も検出される。その他、植物珪酸体からはヨシ属が、種実遺体からはオモダカ属やイボクサといった水生植物が検出される。このことから、本遺跡周辺で当時開発が進んだ地域では、草地が中心であったと推測される。特に、検出される水生植物は水田雑草として普通にみられる種類であることから（現在は農薬の影響で激減している）、水田開発に伴って生じた草地を中心に生育していたと思われる。

栽培植物であるイネ（属）は、種実遺体、植物珪酸体、花粉化石で検出されるが、特にSX01

では多量の炭化した穎の破片が検出される。SX01からは、穎に由来する植物珪酸体も検出されるが、これも多産する穎の破片の一部とみられる。これらは当時の残渣が遺構内に投棄されたものと考えられる。さらに、イネ属の花粉化石や植物珪酸体は、割合の差はあるがほとんどの遺構から検出されており、当時の栽培・利用が示唆される。分析対象とした遺構の中でも、SD01はイネ属花粉、イネ属植物珪酸体ともに高率であることから、水田に伴う水利施設であったか、もしくは水田域から導水されていたことが推測される。しかし、現在の水田に関するイネ属花粉の調査(中村, 1980)や、水田遺構におけるイネ属植物珪酸体の分布(辻本・田中, 2000)等をみると、いずれも同一層位における組成のばらつきが大きいのが特徴である。したがって、1点の試料を対象とした分析では断定することは難しく、平面的に複数分析し傾向を捉えるなどの調査が今後望まれる。

#### (4) 石製品内容物の検討

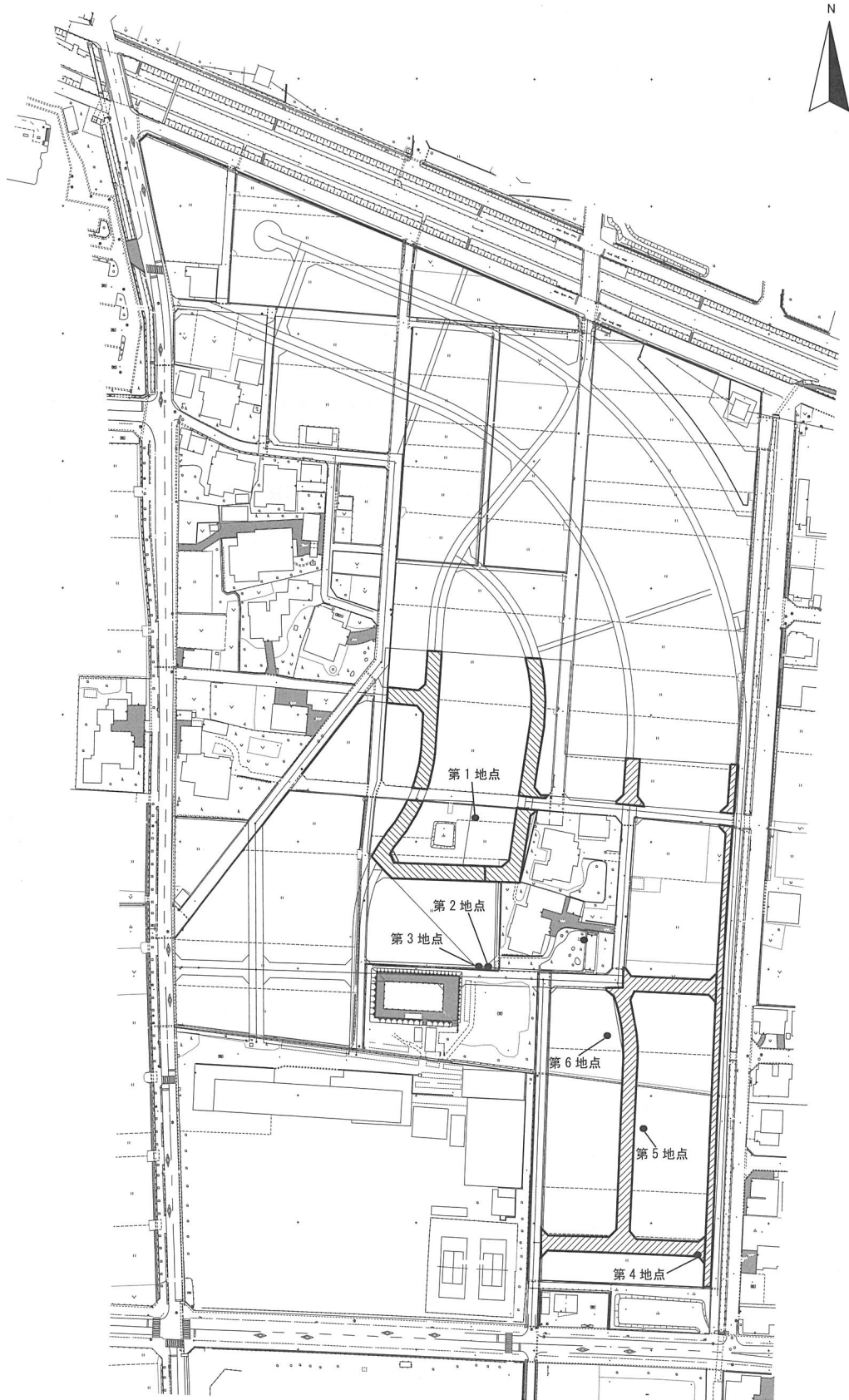
本分析では塗膜片が検出されることが想定されたため、分析中に頻繁に確認し、また洗い出し作業も通常より振動や水流を押さえるなどして注意深く抽出を試みた。しかし、覆土中からは炭化材が微量検出されたのみであり、塗膜片などは検出されなかった。

#### 引用文献

- ・安藤 一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- ・AsAi, K. & WAtAnAbe, T., 1995, StAtistic ClAssificAtion of Epilithic DiAtom Species into Three EcologicAl Groups relAting to OrgAnic WAter Pollution(2) SAprophilous And sAproxenous tAxA. DiAtom, 10, 35-47.
- ・藤井 昭二, 2000, 大地の記憶—富山の自然史, 桂書房, 197p.
- ・原口 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- ・伊藤 良永・堀内 誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- ・石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- ・小杉 正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- ・近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- ・KrAmmer, K., 1992, PINNULARIA. eine MonogrAphie der europAischen TAxA. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER, 353p.
- ・KrAmmer, K. & LAnge-BertAlot, H., 1986, BAcillAriophyceAe. 1. Teil: NAviculAceAe. In: SuesswAsserflorA von MitteleuropA. BAnd2/1. GustAv Fischer Verlag, 876p.
- ・KrAmmer, K. & LAnge-BertAlot, H., 1988, BAcillAriophyceAe. 2. Teil: EpithemiAceAe, BAcillAriAceAe, SurirellAceAe. In: SuesswAsserflorA von MitteleuropA. BAnd2/2. GustAv

Fischer Verlag, 536p.

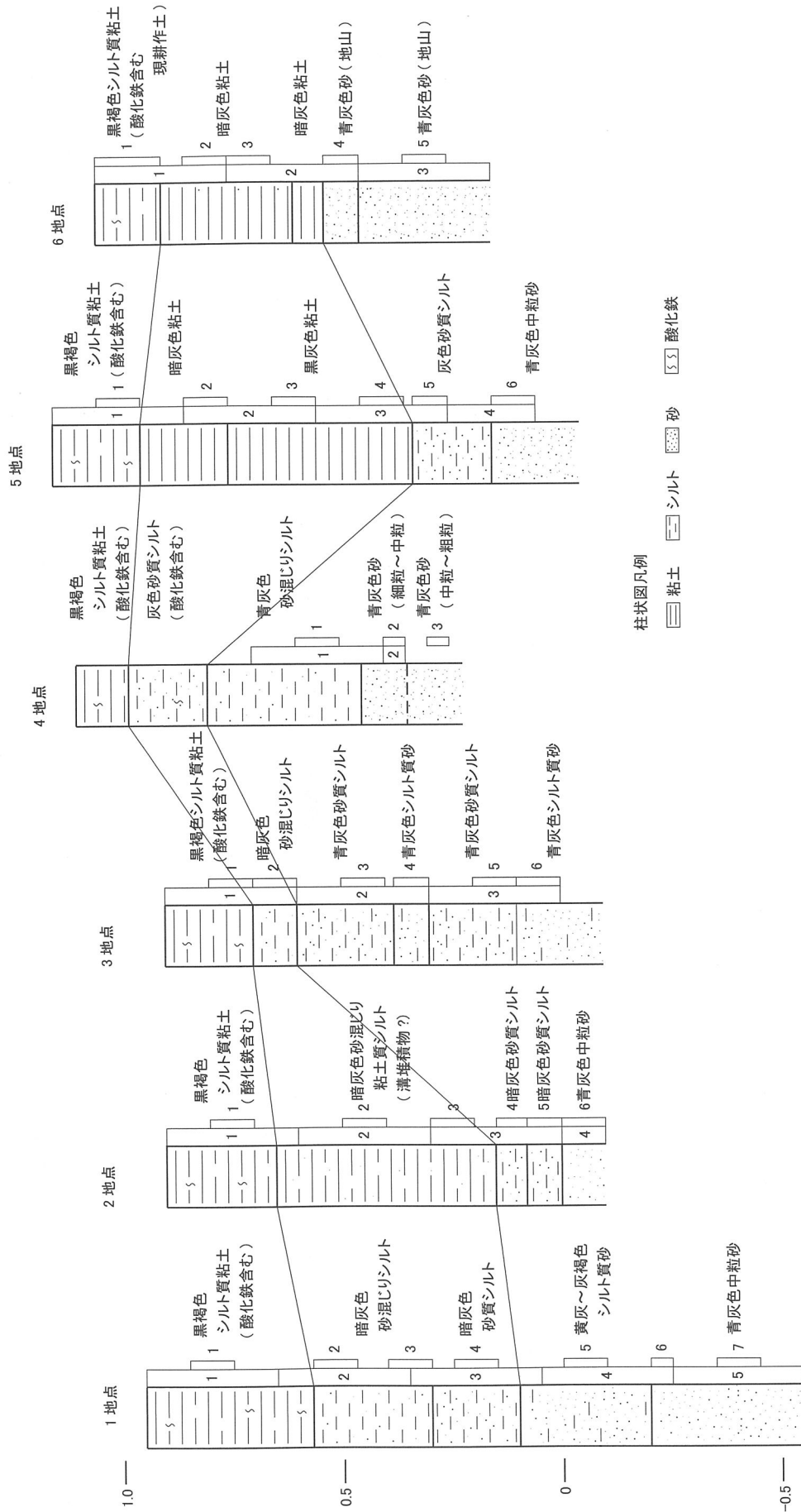
- KrAmmer, K. & Lange-BertAlot, H., 1991A, BAcillAriophyceAe. 3. Teil: CentrAlces, FrAgilA riAceAe, EunotiAceAe. In: SuesswAsserflorA von MitteleuropA. BAnd2/3. GustAv Fischer Verlag, 230p.
- KrAmmer, K. & Lange-BertAlot, H., 1991b, BAcillAriophyceAe. 4. Teil: AchnAnthAceAe, Kritische ErgAenzungen zu NAviculA (LineolAtAe) und GomphonemA. In: SuesswAsserflorA von MitteleuropA. BAnd2/4. GustAv Fischer Verlag, 248p.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, 187-193.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究. 考古学・美術史の自然科学的研究, 古文化財編集委員会編, 日本学術振興会, 185-204.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 布目沢東遺跡自然科学分析報告. 大門町埋蔵文化財調査報告第7集 大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1) —布目沢東遺跡・布目沢西遺跡—, 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会, 81-118.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1999, 下村加茂遺跡の古環境復元. 富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告. 下村教育委員会, 55-62
- 鈴木三男, 2002, 日本人と木の文化. 八坂書房, 255p.
- 新湊市教育委員会, 2002, 富山市新湊市 市内遺跡試掘調査報告. 新湊市鏡宮地区土地地区画整理事業に伴う高島A遺跡試掘調査, 新湊市教育委員会, 1-50.
- 辻本 崇夫・田中 義文, 2000, 川田条里遺跡 D2 地区第6水田面の微化石分析. 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 47, 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 10 長野市内その8 川田条里遺跡 第3分冊(自然科学 総論編), 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター, 152-157.
- Witkowski, A., & Lange-BertAlot, H. & Metzeltin, D., 2000, IconogrAphiA DiAtomologica 7. DiAtom florA of MArine coAst I. A. R. G. GAntner Verlag K. G., 881p
- 山崎 雅恵, 1999, 下村加茂遺跡泥土の花粉分析. 富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告. 下村教育委員会, 63-67
- 安田 喜憲, 1982A, 花粉分析. 大門町埋蔵文化財報告第5集 小泉遺跡 —県道改修工事に伴う調査—, 大門町教育委員会, 48-62.
- 安田 喜憲, 1982b, 花粉分析からみた富山湾沿岸の縄文前期の遺跡 —ナラ林文化と環日本海文化圏—. 大門町埋蔵文化財報告第5集 小泉遺跡 —県道改修工事に伴う調査—, 大門町教育委員会, 99-108.



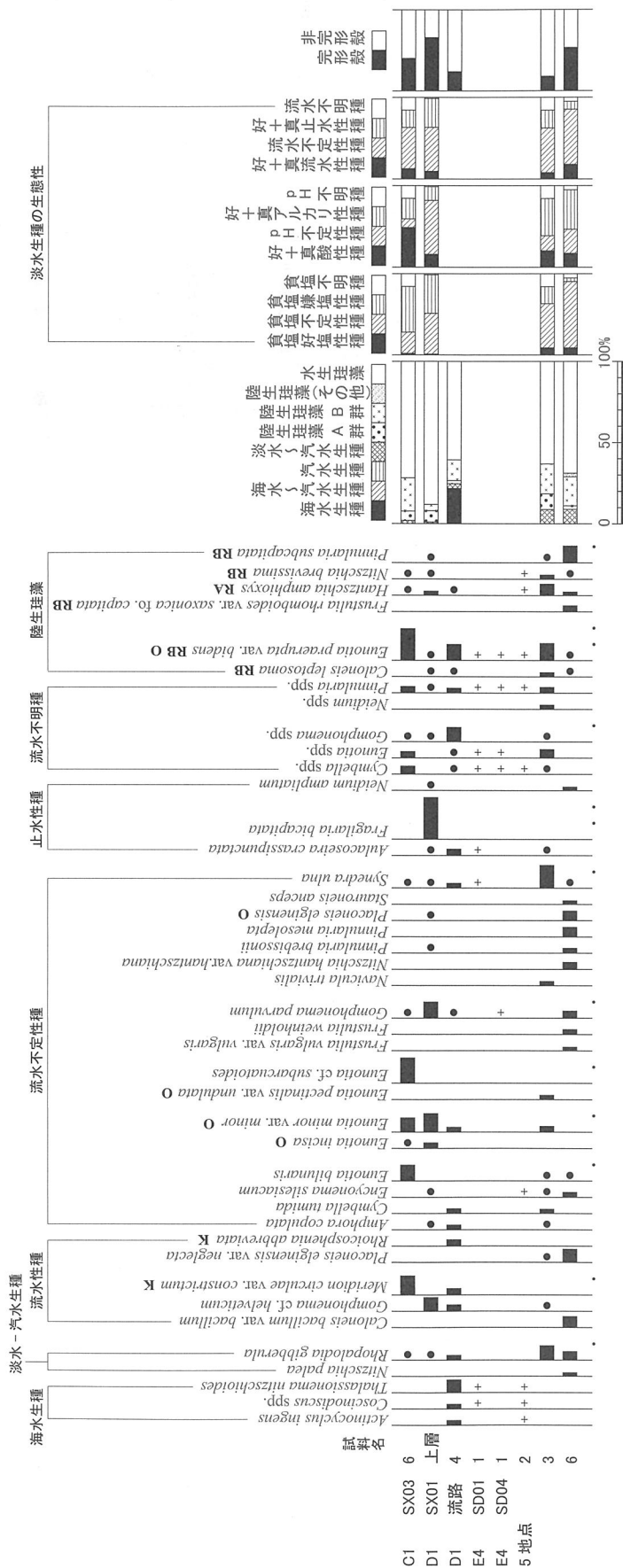
第 55 図 ボーリング調査地点



標高 (m)



第56図 ボーリング調査地点の柱状図



海水-汽水-淡水生産産出率・各種産出率は全体基數、淡水生産種の生態性の比率は淡水生産種の合計を基數として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環状指標種群  
 K 中〜下流性河川指標種 O 沼沢湿地付着種 (安藤, 1990)  
 R 陸生珪藻 (R.A.A.群, R.B.B.群, R.I.未区分、伊藤・堀内, 1991)

第57図 主要珪藻化石群集の層位分布

表 3. 珪藻分析結果①

種 類	生態性			環境 指標種	C1	D1	D1	E4	E4	5地点		
	塩分	pH	流水		SX03	SX01	流路	SD01	SD04	2	3	6
Actinocyclus ingens Rattray	Euh				-	-	3	-	-	1	-	-
Actinocyclus senarius (Ehr.)Ehrenberg	Euh			A	-	-	1	-	-	1	-	-
Biddulphia spp.	Euh				-	-	1	-	-	-	-	-
Coscinodiscus marginatus Ehrenberg	Euh				-	-	1	-	-	-	-	-
Coscinodiscus spp.	Euh				-	-	3	3	-	2	-	-
Grammatophora spp.	Euh				-	-	1	-	-	-	-	-
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	-	-	2	-	-	-	-	-
Stephanopyxis spp.	Euh				-	-	1	-	-	-	-	-
Synedra jouseana Scheshukova	Euh				-	-	-	1	-	1	-	-
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A,B	-	-	8	4	-	3	-	-
Thalassiosira spp.	Euh				-	-	1	-	-	-	-	-
Thalassiothrix spp.	Euh				-	-	-	-	-	1	-	-
Delphineis surirella (Ehr.)G.Andrews	Euh-Meh				-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula gregaria Donkin	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	3
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		2	2	3	-	-	-	10	7
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	2	-
Achnantheidium minutissimum (Kuetz.)Czarn.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1
Amphora copulata (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	3	-	-	-	1	-
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	4	-	-	-	-	-	-
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	1
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1	4	1	-	-	1	-
Aulacoseira crenulata (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	2	-
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	1	-	-	-	-	-
Aulacoseira italica var. valida (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	1	-	-	-	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve var. bacillum	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	9
Caloneis lauta Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	2	1	-	-	-	3	2
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve var. silicula	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	2	-
Cocconeis euglypta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-
Cocconeis lineata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	-	-	-	-	-
Cocconeis placentula Ehr. var. placentula	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	2	2	-	-	-	-	-
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-	-	-
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1	-	-	-	-	-	-
Craticula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	1	-	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		-	-	2	-	-	-	-	-
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella tumida (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	3	-	-	-	3	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	2	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		5	-	1	1	1	1	1	-
Cymboplectra naviculiformis (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O	-	4	-	-	-	-	-	-
Diademesis contenta (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	2	-	-	-	-	1	-
Diatoma tenuis Agardh	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	-	-	-	-	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	2	-	-	-	1	2	4
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		1	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	ind		10	-	-	-	-	-	1	2
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi		-	-	2	-	-	-	-	-
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	-	2	-	-	2	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	7	-	-	-	-	-	-
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow var. minor	Ogh-hob	ind	ind	O,T	9	23	3	-	-	-	4	-
Eunotia monodon var. asiatica Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	ind		-	3	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	3	-
Eunotia praeurupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	2	-	-	-	2	-
Eunotia praeurupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	20	1	10	3	3	2	12	1
Eunotia cf. subarcuatoidea Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind		16	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	-	1	1	1	-	6	-
Fragilaria bicapitata A.Mayer	Ogh-hob	ind	l-bi		-	52	-	-	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Peterson var. vaucheriae	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	1	-	-	-	-	-
Fragilariforma exigua (Grun.)D.M.Williams & Round	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1	-	-	-	-	-	-
Frustulia rhomboides var. saxonica fo. capitata (A.Mayer)Hust.	Ogh-unk	unk	unk	RB	-	-	-	-	-	-	-	5
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni var. vulgaris	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	3
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	4
Gomphonema olivaceoides (Hust.)J.R.Carter et Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	1	-	-	-	2	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	2	-	-	-	-	2	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	2	-	-	-	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	1	2	-	-	-	-	-	1
Gomphonema cf. helveticum Brun	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	17	4	-	-	-	2	-
Gomphonema inaequilongum (H.Kobayasi)H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph		-	-	1	-	-	-	-	-
Gomphonema parvulum (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	20	1	-	1	-	-	6
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	3	-	-	-	-	-	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema vastum Hustedt	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema vibrio Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	9	-	-	-	1	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	5	1	-	-	1	8	3
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	1	1	-	-	-	1	-
Melosira varians Agardh var. varians	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	1	-	-	-	-	-	-
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	12	-	4	-	-	-	-	-
Navicula ariensis Okuno	Ogh-ind	ac-il	ind		1	2	-	-	-	-	-	-
Navicula placenta fo. obtusa Meister	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	1	-

表 3. 珪藻分析結果②

種 類	生態性			環境 指標種	C1	D1	D1	E4	E4	5地点			
	塩分	pH	流水		SX03	SX01 上層	流路	SD01	SD04	1	2	3	6
*Navicula pseudanglica Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	2
Navicula rhynchocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula trivialis Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	3	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	1	1	2	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	1	-	-	-	-	-	-	3
Neidium apiculatum Reimer	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-	-
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	3	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	1	-	-	-	1	3	1	-
Nitzschia frustulum (Kuetz.) Grunow var.frustulum	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia hantzschiana (Kuetz.)Grunow var.hantzschiana	Ogh-ind	al-bi	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	6
Nitzschia paleacea (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia solgensis Cleve-Euler	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia brauniana (Grun.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	4
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens var. decrescens (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	2	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	2	-	-	-	-	1	1	-
Pinnularia interrupta W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	8
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia silvatica Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	4	-	-	-	-	-	1	14
Pinnularia subcapitata var. paucistriata (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Pinnularia substatomophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1	-	-	-	-	-	1	1
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	1	3	5	1	3	4	-	-
Placoneis elginensis (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	4	-	-	-	-	-	-	8
Placoneis elginensis var. neglecta (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	1	11	-
Reimeria sinuata (W.Greg.)Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	1	-	-	-	-	-	1
Rhoicosphenia abbreviata (C.Agardh)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	4	-	-	-	-	-	-
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	1
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	3
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	-	-	-	-	-	-	1
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	-	-	-	-	-	1	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	4	-	-	-	-	-
Staurosira construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Synedra ulna (Nitzsch)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	3	3	1	-	-	-	16	1
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	1	1	-	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	22	8	0	9	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	1	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					2	2	3	0	0	0	10	12	-
淡水生種					101	201	77	16	7	14	104	123	-
珪藻化石総数					103	203	102	24	7	24	114	135	-

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性      pH: 水素イオン濃度に対する適応性      C.R.: 流水に対する適応性  
 Euh: 海水生種      al-bi: 真アルカリ性種      l-bi: 真止水性種  
 Euh-Meh: 海水生種-汽水生種      al-il: 好アルカリ性種      l-ph: 好止水性種  
 Ogh-Meh: 淡水-汽水生種      ind: pH不定性種      ind: 流水不定性種  
 Ogh-hil: 貧塩好塩性種      ac-il: 好酸性種      r-ph: 好流水性種  
 Ogh-ind: 貧塩不定性種      ac-bi: 真酸性種      r-bi: 真流水性種  
 Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種      unk: pH不明種      unk: 流水不明種  
 Ogh-unk: 貧塩不明種

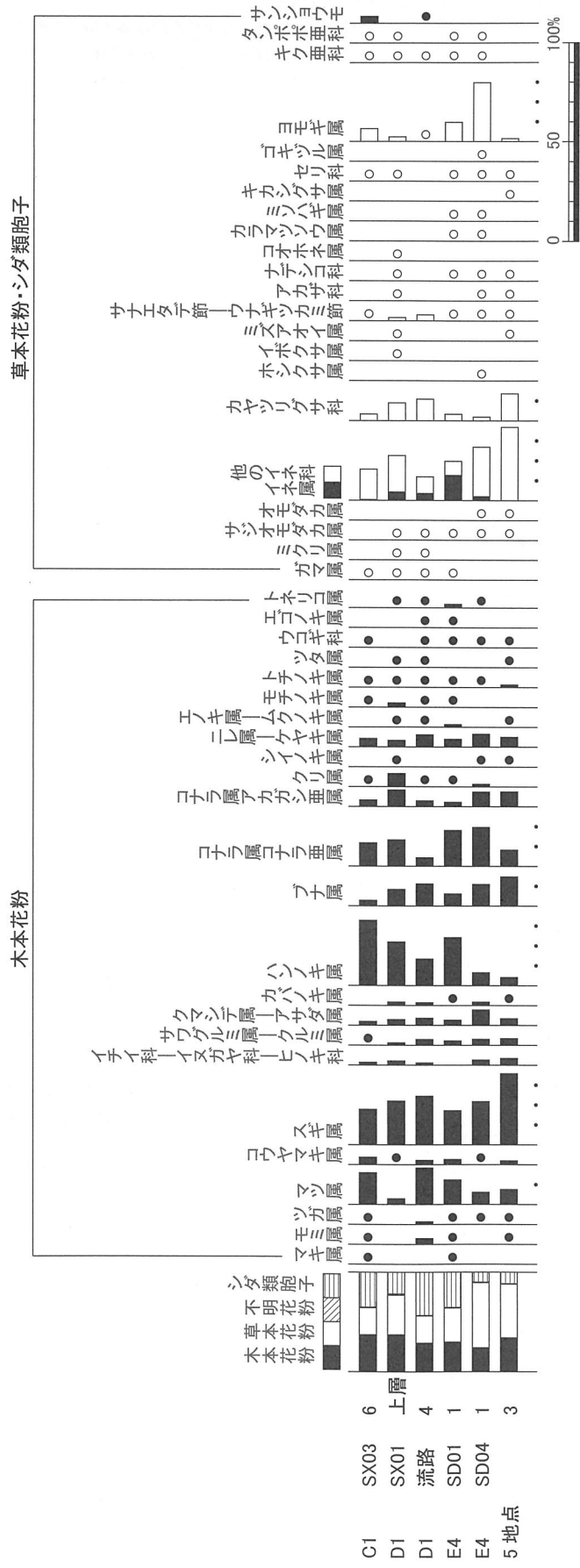
環境指標種群

A: 外洋指標種, B: 内湾指標種 (小杉, 1988)  
 K: 中～下流性河川指標種, M: 湖沼浮遊性種, O: 沼沢湿地付着生種 (安藤, 1990)  
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)  
 R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

表 4. 珪藻化石の生態性区分および環境指標群

		塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0～30.0‰に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0～0.5‰に生育する種
淡水生種	貧塩性種(淡水生種)	塩分濃度0.5‰以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH Hustedt(1937-38)による	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流水 Hustedt(1937-38)による	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種

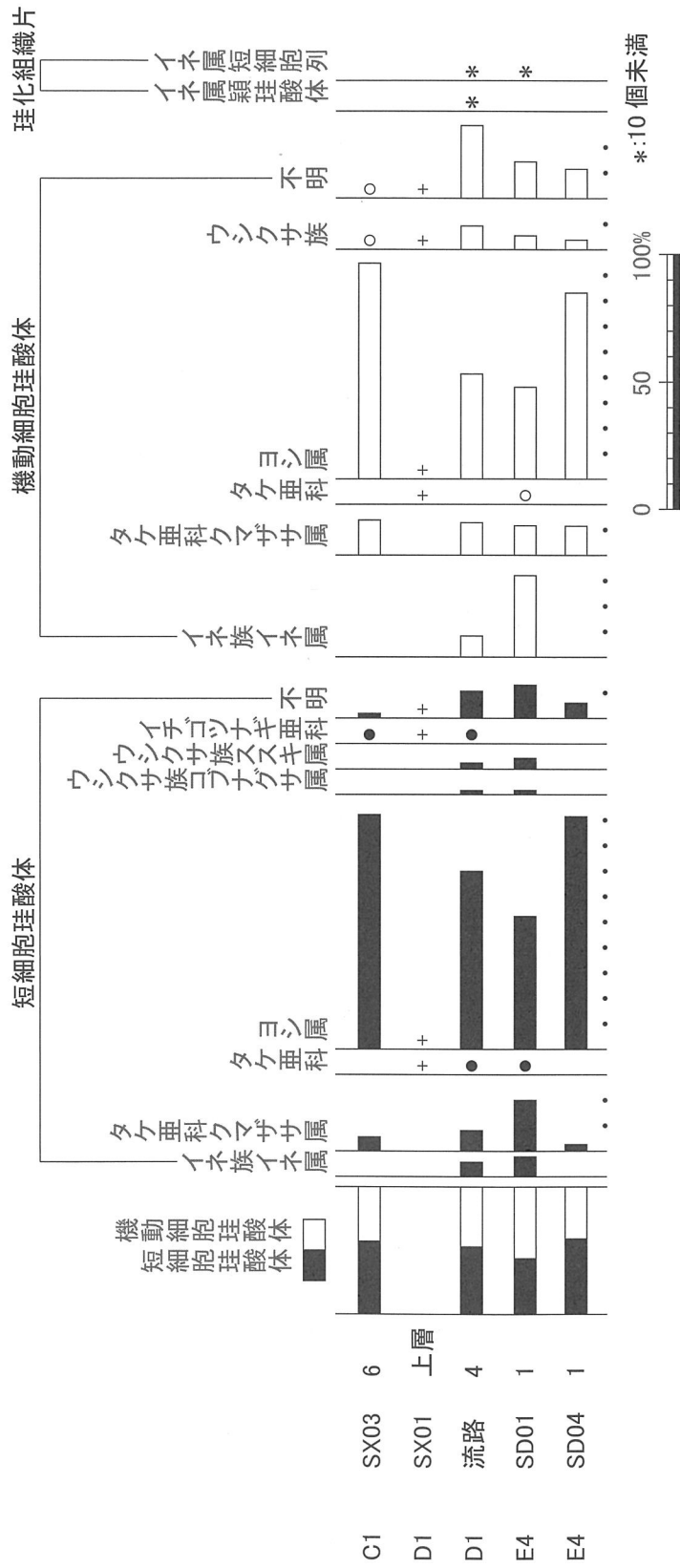
主に海水域での指標種群(小杉,1988による)	
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群(B)	塩分濃度35～26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35～12‰の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12～4‰の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35～26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26～5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群(E1)	30～12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12～2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20～2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群(安藤,1990による)	
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中～下流性河川指標種群(K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群(P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群(伊藤・堀内,1991による)	
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの



第 58 図 花粉化石群集層位分布

表 5. 花粉分析・イネ属同定結果

種 類	SX03	SX01	流路	SD01	SD04	3
	試料番号 6	上層	4	1	1	
木本花粉						
マキ属	2	-	-	1	-	-
モミ属	1	-	8	1	-	1
ツガ属	1	-	4	2	1	2
トウヒ属	-	-	1	-	-	1
マツ属単維管束亜属	-	-	5	-	-	1
マツ属複維管束亜属	1	2	12	7	5	14
マツ属(亜属不明)	33	5	34	21	9	9
コウヤマキ属	8	2	6	6	1	6
スギ属	38	53	68	39	50	114
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	5	3	-	6	11
サワグルミ属	-	-	-	-	1	1
クルミ属	2	3	8	5	6	10
クマシデ属-アサダ属	4	7	10	6	18	11
ハシバミ属	-	-	-	1	1	-
カバノキ属	-	4	4	2	4	3
ハンノキ属	70	53	37	55	15	13
ブナ属	6	20	31	14	25	47
コナラ属コナラ亜属	25	32	12	41	45	26
コナラ属アカガシ亜属	7	20	8	5	17	24
クリ属	1	16	1	1	3	-
シイノキ属	-	1	-	-	1	1
ニレ属-ケヤキ属	9	8	17	9	15	16
エノキ属-ムクノキ属	-	1	1	3	-	1
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	1
ウルシ属	-	1	-	-	-	-
モチノキ属	1	5	1	1	-	-
トチノキ属	1	1	2	1	1	4
ブドウ属	-	-	-	-	3	-
ツタ属	-	1	1	-	-	1
シナノキ属	-	-	1	-	-	-
グミ属	-	1	-	-	1	-
ウコギ科	1	-	1	2	1	1
エゴノキ属	-	-	2	1	-	-
トネリコ属	-	1	1	4	1	-
草本花粉						
ガマ属	1	3	5	2	-	-
ミクリ属	-	2	2	-	-	-
サジモモダカ属	-	3	1	1	2	1
オモダカ属	-	-	-	-	1	1
イネ属	2	27	34	96	19	0
他のイネ科	87	118	81	54	237	344
カヤツリグサ科	19	57	104	25	18	127
ホシクサ属	-	-	-	-	1	-
イボクサ属	-	1	-	-	-	-
ツユクサ属	-	-	-	-	2	-
ミズアオイ属	-	1	-	-	-	4
クワ科	-	7	-	-	-	3
サナエタデ節-ウナギツカミ節	5	10	29	3	3	6
アカザ科	-	6	-	-	1	2
ナデシコ科	-	1	-	1	6	1
コオホネ属	-	1	-	-	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	1	1	-
キンボウゲ科	-	-	1	-	-	-
アブラナ科	-	1	-	-	-	1
バラ科	-	-	-	-	2	-
ソラマメ属	-	-	-	-	35	-
マメ科	-	-	-	-	4	-
フウロソウ属	-	-	-	-	1	-
ミノハギ属	-	-	-	1	2	-
キカシグサ属	-	-	-	-	-	1
セリ科	1	4	-	1	4	2
ヒルガオ属	-	-	-	-	1	-
シソ科	-	-	-	-	-	1
オミナエシ属	1	-	-	-	-	-
ゴキツル属	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属	37	15	7	74	285	14
キク亜科	2	2	2	1	1	-
タンポポ亜科	1	1	-	1	1	-
不明花粉	4	8	3	5	6	3
シダ類胞子						
ヒカゲノカズラ属	1	-	-	1	-	-
ゼンマイ属	2	-	1	5	-	-
イノモトソウ属	-	-	3	-	-	4
サンショウモ	20	-	1	-	-	-
他のシダ類胞子	178	142	415	265	97	104
合 計						
木本花粉	214	242	279	228	230	319
草本花粉	156	260	266	261	628	508
不明花粉	4	8	3	5	6	3
シダ類胞子	201	142	420	271	97	108
総計(不明を除く)	571	644	965	760	955	935



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は100個未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の産状を\*で示す。

第59図 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状



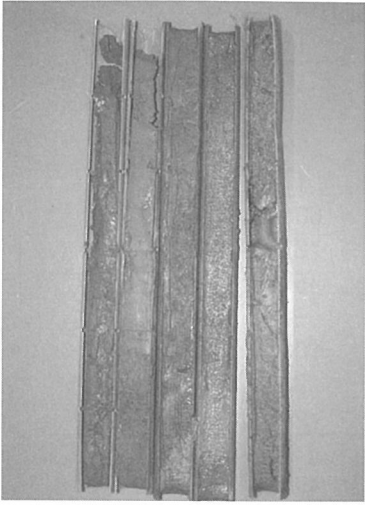
表 6. 植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	C1	D1	D1	E4	E4
		SX03	SX01	流路	SD01	SD04
		6	上層	4	1	1
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属		-	-	7	9	-
タケ亜科クマザサ属		9	-	10	23	4
タケ亜科		-	4	1	1	-
ヨシ属		152	24	86	60	138
ウシクサ族コブナグサ属		-	-	2	2	-
ウシクサ族ススキ属		-	-	3	5	-
イチゴツナギ亜科		1	4	1	-	-
不明キビ型		3	4	11	10	7
不明ヒゲシバ型		-	4	-	3	-
不明ダンチク型		-	6	2	2	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属		-	-	9	47	-
タケ亜科クマザサ属		17	-	14	17	12
タケ亜科		-	3	-	1	-
ヨシ属		104	4	45	53	76
ウシクサ族		1	2	10	8	4
不明		1	6	31	21	12
合 計						
イネ科葉部短細胞珪酸体		165	46	123	115	151
イネ科葉身機動細胞珪酸体		123	15	109	147	104
総 計		288	61	232	262	255
珪化組織片						
イネ属穎珪酸体		-	-	10	-	-
イネ属短細胞列		-	-	5	1	-

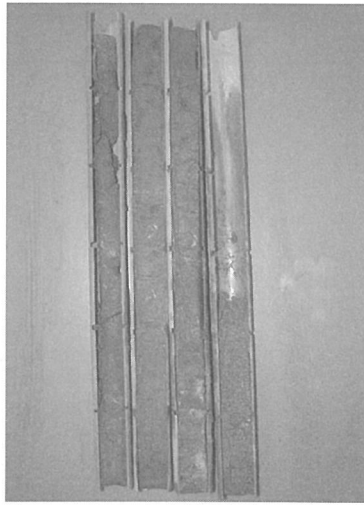
表 7. 微細物分析結果

地点・遺構	分析量	種類名	部位	個数または乾燥重量	備考
D1 SX01 上層	200cc (293.8g)	オモダカ科	種子	3	
		イネ	胚乳	3	炭化,1個穎付着
			穎	110	炭化
			カヤツリグサ科	果実	1
		イボクサ	種子	1	
		木材		>20	
		炭化材		1.1g	
		不明炭化物		<0.1g	
		昆虫		18	
		高師小僧		0.7g	
		土器		1	
D1 流路 4	50cc (293.8g)	炭化材		<0.1g	
		昆虫		4	
		高師小僧		<0.1g	
石製品の覆土	150cc	炭化材		<0.1g	

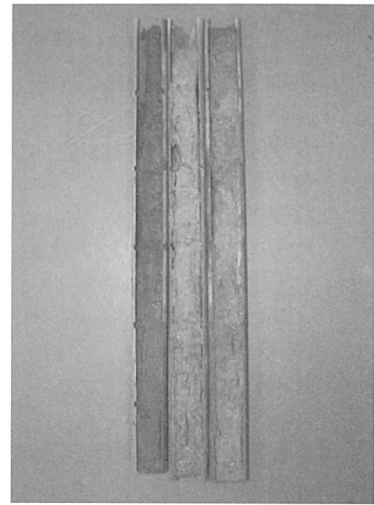
図版1 ボーリング試料



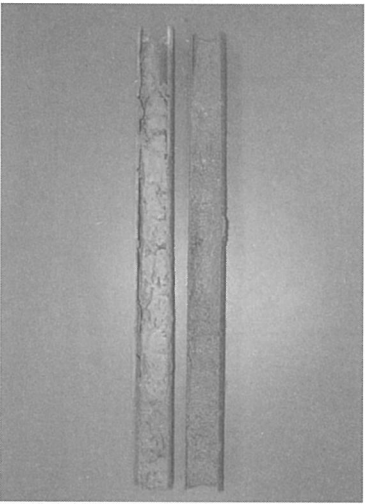
1 地点



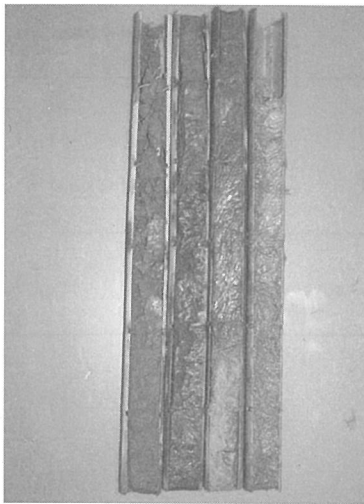
2 地点



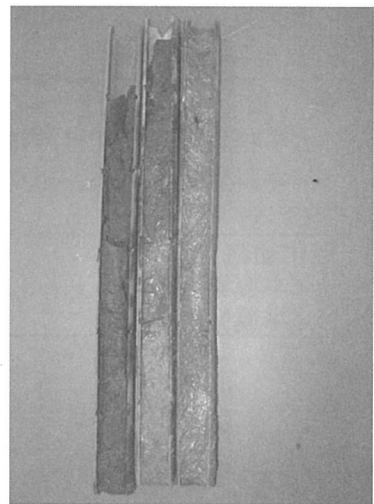
3 地点



4 地点



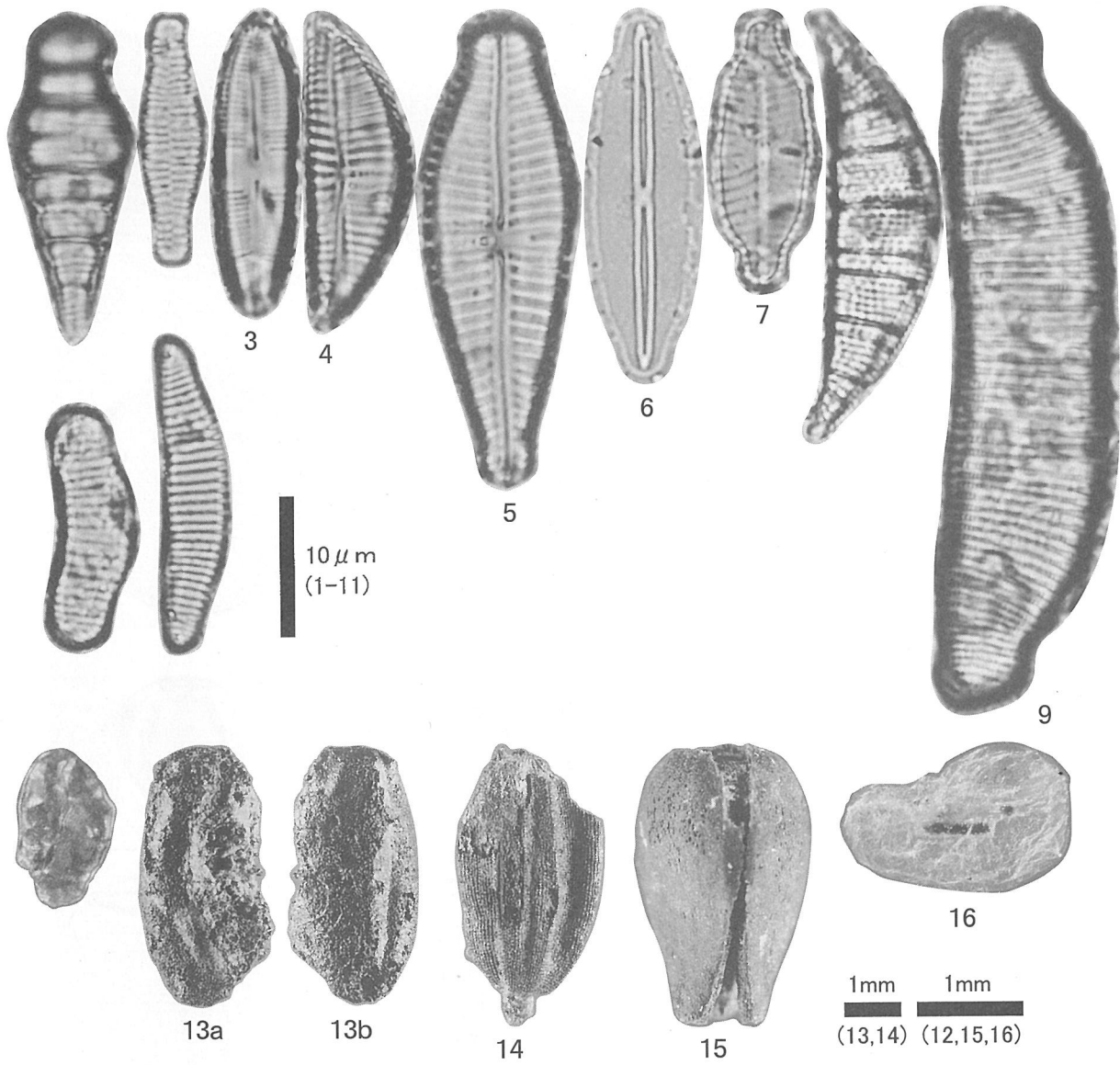
5 地点



6 地点

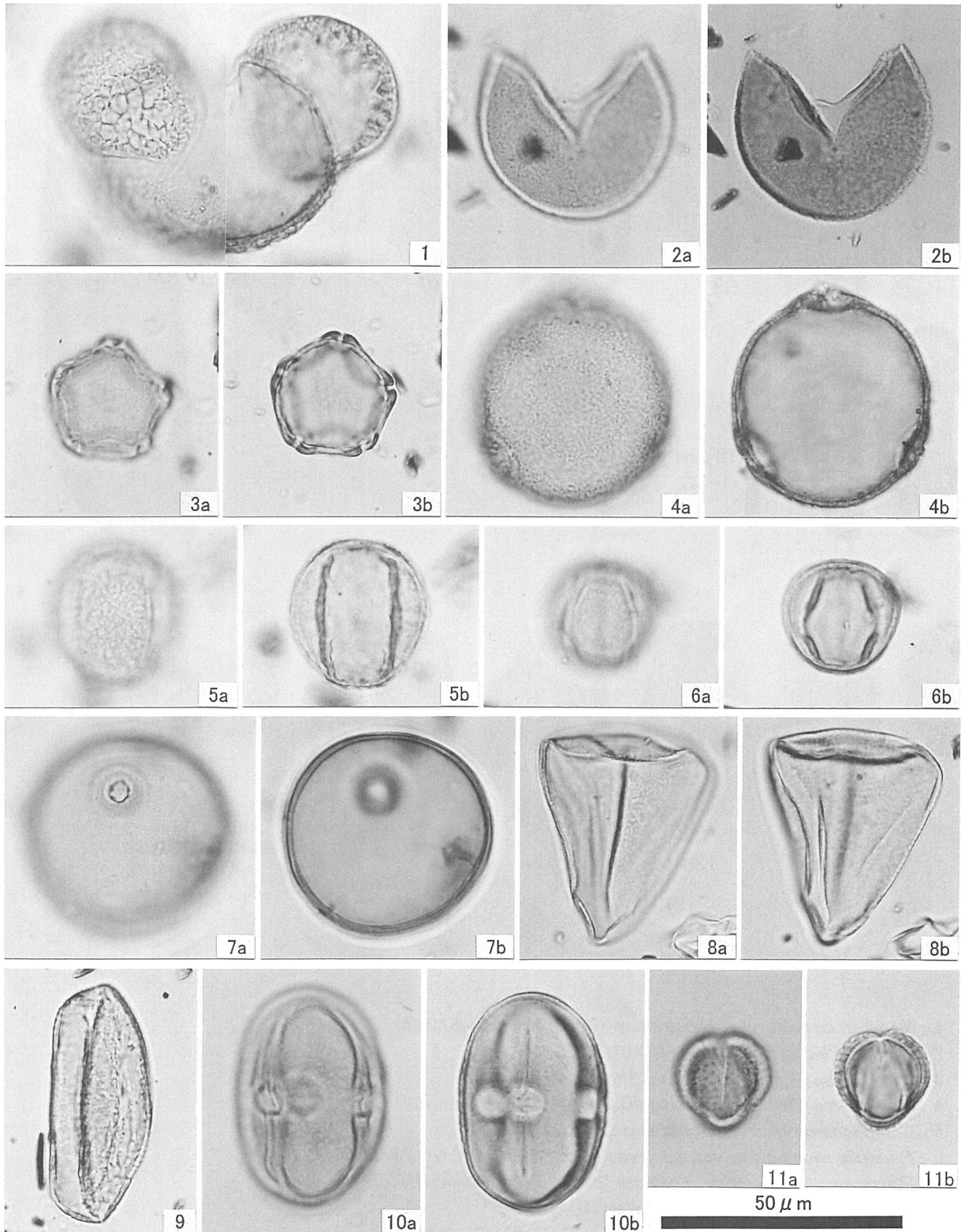
試料の長さは 30cm。左側が最上部で、順に深度が深くなる。

図版2 珪藻化石・種実遺体



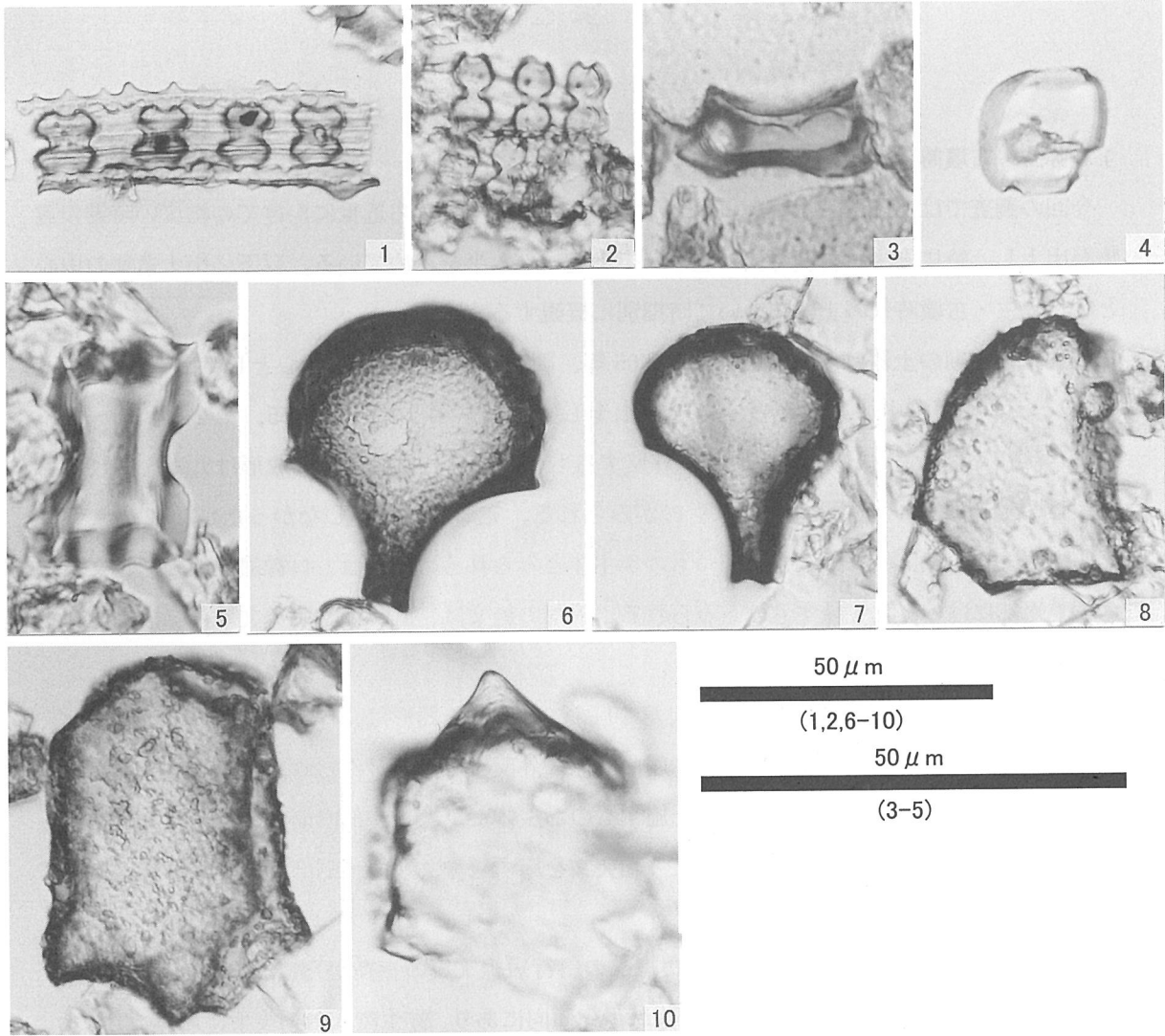
1. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck(SX03;6)
2. *Fragilaria bicapitata* A.Mayer(SX01;上層)
3. *Caloneis bacillum* (Grun.)Cleve(5地点;6)
4. *Encyonema silesiacum* (Bleisch)D.G.Mann(5地点;6)
5. *Gomphonema* cf. *helveticum* Brun(SX01;上層)
6. *Frustulia rhomboides* var. *saxonica* fo. *capitata* (A.Mayer)Hustedt(5地点;6)
7. *Placoneis elginensis* var. *neglecta* (Krass.)H.Kobayasi(5地点;6)
8. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller(5地点;6)
9. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow(SX03;6)
10. *Eunotia praerupta* Ehrenberg(流路;4)
11. *Eunotia minor* (Kuetz.)Grunow var. *minor*(SX03;6)
12. オモダカ科 種子(SX01;上層)
13. イネ 胚乳(SX01;上層)
14. イネ 穎・胚乳(SX01;上層)
15. カヤツリグサ科 果実(SX01;上層)
16. イボクサ 種子(SX01;上層)

図版3 花粉化石



- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属(5地点;3) | 2. スギ属(5地点;3)     |
| 3. ハンノキ属(5地点;3)     | 4. ブナ属(5地点;3)     |
| 5. コナラ亜属(5地点;3)     | 6. アカガシ亜属(5地点;3)  |
| 7. イネ科(5地点;3)       | 8. カヤツリグサ科(5地点;3) |
| 9. ミズアオイ属(5地点;3)    | 10. ソラマメ属(SD04;1) |
| 11. ヨモギ属(SD04;1)    |                   |

図版 4 植物珪酸体



- |                         |                          |
|-------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞列(SX01;上層)     | 2. イネ属短細胞列(SD01;1)       |
| 3. クマザサ属短細胞珪酸体(SD01;1)  | 4. ヨシ属短細胞珪酸体(SX03;6)     |
| 5. コブナグサ属短細胞珪酸体(SD01;1) | 6. イネ属機動細胞珪酸体(SX01;上層)   |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(SD01;1)   | 8. クマザサ属機動細胞珪酸体(SX01;上層) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体(SX03;6)   | 10. イネ属穎珪酸体(SX01;上層)     |

## VI まとめ

### 1. 弥生・古墳時代の土器について

今回の調査では、土器・石製品・木製品等、弥生時代中期から近世にかけての幅広い時期の遺物が出土し、特に弥生・古墳時代の土器が出土遺物の大半を占めている。以下、出土遺物の中心となる弥生・古墳時代の土器について時期別に概観する。

弥生時代中期の土器は、C-2区SK01・SK05等、調査対象地の北側を中心として出土している。SK01では、甕類を中心に細頸壺・鉢等が出土している（第27図49～55、第28図56～62・64）。甕類の器形は、口縁部が緩やかに外反するものが多く、口縁端部の成形は丸みを帯びるもの、強いナデによって面取りを行うものがみられる。完形品は出土しなかったが、62のように胴部中位よりやや上位に最大径をもつものが主体とみられる。施文は、口縁部内面の羽状文が目立ち、端部には刻み目を施すものもみられる。胴部の施文は、直線文や刺突文等の櫛描文を施す49・58以外は無文である。

SK05も甕類が主体となる（第28図65、第29図66～70）。器形は、口径と胴部径がほぼ等しく、胴部中位に最大径をもち、口縁部がやや屈曲気味に外反するものがみられる。施文は、口縁部内面に羽状文を施し、口縁端部に刻み目を施すものが主体だが、口縁部内面に斜行短線文を施すものも存在する。また、胴部上位に直線文・刺突文を施す甕や、頸部・胴部の境に直線文・波状文を施す大型壺も含まれている。

SK05出土土器群は、胴部の櫛描文や口縁部の斜行短線文等の存在から、SK01出土土器群よりやや古い様相を示すが、両者ともに櫛描文は退化傾向にあり、弥生時代中期後葉に比定できよう。

弥生時代後期の土器は、C・D区を中心に調査区全体で出土している。出土量は土器全体の7割近くを占めるが、大部分が自然河道や包含層出土であり、遺構単位でのまとまりに欠ける。

C-1区ではSD07から、口縁端部下端に刺突文を施す受口状口縁甕（第23図1、第24図11）が、包含層から肩部を直線文・刺突文を施す甕（第25図28）が出土している。また、D-1区自然河道では面取りした口縁端部に凹線を施す甕（第33図115、第34図127）が、D-2区SK02では丹後系の把手付壺（第35図134）がそれぞれ出土しており、後期前半に比定できる遺物が一定量含まれている。しかしながら、全体的には有段口縁甕や棒状脚の高坏等が目立ち、後期後半の資料が主体となっている。

古墳時代の土器は、D-1・E-4区を中心に出土している。D-1区では、谷（自然河道）の上層で布留系の甕（第34図122・123）が出土した。E-4区SD01では、甕・高坏が多量に出土している。甕類はすべて口縁部が緩やかに外反する「く」字状口縁甕で占められ、内外面ともにハケまたはナデ調整を施すものが主体となる。高坏は、口縁部が直線的に外反し、脚裾部が強く屈曲して広がる畿内系のものが主体である。その他、口縁部が短く直線的に立ち上がる大型壺（第49図308）や小型丸底壺（第51図329）等が出土しており、古墳時代前期に比定できよう。

## 2. 遺構

今回の調査では、溝・土坑・柱穴・井戸・自然河道等の遺構を検出した。過去に行われたほ場整備時の削平等の影響もあり、弥生時代から近世の遺構を同一面で検出したことや、遺構内への新旧遺物の混入が多いことから、帰属時期が明確な遺構は少ない。ただし、出土遺物の時期を考慮すれば、大半の遺構が弥生・古墳時代に収まるものと考えられる。

特徴的な遺構としては、まずC-1区SD04、C-2区SD02、C-3区SD01が挙げられる。これらは同一の遺構とみられ、E-1区では後世の攪乱により溝の存在が確認できないが、C-1区北部からC-3区南端部にかけて緩い弧状に伸びている。各調査区とも、この溝から北側では遺構・遺物量が激減し、平成14年度の試掘調査でも遺構空白地が確認されている。

出土遺物が少ないため、遺構の存続時期は明確ではないが、C-2区SD02出土の長頸壺（第25図32）の存在から、弥生時代後期後半頃に年代の一端を推定できる。調査区の関係から、現時点では部分的な確認に留まっているが、集落内外の区画としての性格が想定できる。

次にE区で検出したL字状に屈曲する溝状遺構が挙げられる。遺構全体を検出できたものはないが、方形の区画を呈していたものと推定できる。また、確認できる範囲では、E-1区SD08、E-4区SD01②・SD02のように溝が全周しないものが存在する。

これらの遺構を方形区画として捉えた場合、E-4区SD01では一辺約5m、同SD02では一辺約6m、E-3区SD06では一辺13m以上と推定できる。区画同士は切り合い関係をもたず、それぞれ主軸方向が北から30～40°前後西に傾く同一方位をとる傾向がある。また、E-3区SD06とSK01、E-4区SD01②とSK01、同SD02とSK02等、溝の一辺に並行する形で、土器を1・2個体出土する土坑が伴うものもみられる。E-4区SD02では弥生時代中期後半の土器が、E-1区SD02、E-4区SD01②では弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器が出土している。E-3区SD06は流れ込みとみられる遺物しか出土していないが、隣接するSK01との関係から古墳時代前期と推定できる。

周辺遺跡での類例を概観すると、弥生時代の例としては、E-4区の南東約100mに位置する平成9年度調査区で検出されたSX01（6.6×4.6m、中期後半）、射水市布目沢北遺跡の方形周溝墓群（終末期）、高岡市中曾根西遺跡のSZ01（5.2×4.2m、後期）及びSZ02（5.7×5.2m、後期）、高岡市石塚遺跡きぼう地区のSZ04（一辺12m以上、中期後半）等が挙げられる。古墳時代の例としては、射水市二口油免遺跡1号墳（一辺19.0m、前期）、高岡市石塚遺跡きぼう地区のSZ01（一辺23.5m、前期）及びSZ03（一辺26.5m、前期）、同遺跡都市計画道路地区のSZ08（一辺14.0m、前期）等が挙げられる。高島A遺跡、布目沢北遺跡、中曾根西遺跡の例は四隅が切れるタイプで、二口油免遺跡、石塚遺跡の例は溝が全周するタイプである。それぞれ規模・形態・時期等は様々であるが、弥生時代に属する遺構は方形周溝墓、古墳時代に属する遺構は方墳として捉えられている。

今回検出したE区の区画群では、区画遺構が集中し、区画同士が切り合いをもたず遺構のあり方に一定の方向性が伺われる。また、周辺部に方形の溝が廻る平地式建物の検出例が存在しない

こと、近接する平成9年度調査区に方形周溝墓が存在することから、一帯を墓域と推定し、E-1区SD02、E-4区SD01②・SD02等を方形周溝墓、E-3区SD06を方墳として位置づけておく。

### 3. まとめ

今回の調査成果を概観しまとめとしたい。

高島A遺跡では弥生時代中期後半から遺構の形成が確認できる。中期後半にはE-4区以南やC-2区等で遺跡が確認できるが、散発的であり遺構群としてのまとまりは確認できない。弥生時代後期になると、遺物量が飛躍的に増加し、分布範囲も全調査区に広がる。D区の谷（自然河道）から出土した特殊石製品は、当期に埋没したものと考えられる。また、部分的な確認ではあるが、遺構・遺物分布範囲の北限付近に東西方向の溝が出現し、集落域の北限を区画するようになる。古墳時代前期にはD・E区へ遺構・遺物分布の中心が移るが、前代から継続して遺物量も豊富である。E区では、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけて、方形周溝墓や方墳とみられる溝状遺構が存在しており、集落の存続期間を通した墓域の存在が推定できる。

時期によって遺構・遺物の多寡はあるが、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、中心地を移動させながら集落が存続した状況が推定できる。古墳時代中期以降には集落は一旦廃絶する。その後、中世期にD区において再び遺構が形成され、近世以降に鏡宮の枝村として高島集落が成立し、今日に至っている。高島A遺跡の周辺部には作道遺跡、朴木A遺跡、朴木C遺跡、松木遺跡、松木中鹿遺跡、津幡江遺跡、中曽根遺跡、中曽根西遺跡等弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が集中している。

現在富山新港となっている古放生津潟は、かつては南側に大きく広がり、潟の外縁部には広大な低湿地帯を形成していたと考えられている。高島A遺跡をはじめとする周辺遺跡群は、潟の南西部外縁に形成された自然堤防帯等の微高地上に集落を営み、周囲の低湿地を水田として利用していたものであろう。また、当地は古来より放生津潟や、潟に流入する中・小河川を利用した水上交通の便にも恵まれた地域である。こうした水稻耕作に適した地形的条件や、水上交通の結節点という利便性が、高島A遺跡及び周辺遺跡群が一帯に展開する要因となったものと考えられる。

同様の立地環境は、日本海側の弥生・古墳時代集落にも普遍的にみられる。県内ではいまだ調査例は少ないが、今後の調査によって、沖積低地における集落の変遷や地域の拠点集落の状況等が少しずつ明らかにされていくであろう。

参考文献；

- ・富山地学会他 1966 「放生津潟周辺の地学的研究 第三集」 富山新港資料調査編 II-3
- ・石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡 I』
- ・吉岡康暢 1990 『日本海域の土器・陶磁器編 [古代編]』 六興出版
- ・藤井昭二他 1992 『北陸の丘陵と平野』 アーバンクボタ No. 31



- ・大門町教育委員会 1992 『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2) - 布目沢北遺跡第3次調査 -』  
大門町埋蔵文化財発掘調査報告第8集
- ・金沢市教育委員会 1996 『西念・南新保 IV』 金沢市文化財紀要 119
- ・新湊市教育委員会 2000 「富山県新湊市高島A遺跡発掘調査概要」
- ・新宅輝久 2000 「北陸における弥生時代集落の群構成 - 下老子笹川遺跡との比較から -」『富山考古学研究』第3号
- ・高橋浩二 2000 『古墳出現期における越中の土器様相 - 弥生時代後期から古墳時代前期前半の  
編年的位置づけ -』「庄内式土器研究」XXII
- ・高岡市教育委員会 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』 高岡市埋蔵文化財調査報告第7冊
- ・(財)鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3』 鳥取県教育文化財団調査報告書72
- ・長瀬 出 2002 「富山県における弥生集落の展開」『富山考古学研究』第5号
- ・高橋浩二 2002 「北近畿系統の土器と山陰系統の土器」『富山大学人文学部紀要』第37号
- ・新湊市教育委員会 2003 『富山県新湊市市内遺跡試掘調査報告書』
- ・小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡 I』
- ・高岡市教育委員会 2003 『石塚遺跡調査概報 VI- 介護老人保健施設「きぼう」建設に伴う調査 -』  
高岡市埋蔵文化財調査概報第54冊
- ・富山市教育委員会 2004 『富山市打出遺跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告 138
- ・高岡市教育委員会 2005 『中曽根西遺跡調査報告』 高岡市埋蔵文化財調査報告第13冊
- ・大門町教育委員会 2005 『二口油免遺跡発掘調査報告(4)』大門町埋蔵文化財調査報告第23集